THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附録號

第廿六年 第九號

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

王堂 田中喜一先生著

新刊

二宮尊德の新研究

本書は二宮尊德の同情ある說明者にして同時に森嚴なる審判者なり

自由思想家たる著者は報德教の謳歌者に非ず。著者は此書に依りて實驗理想主義の見地より二宮尊德の學說と經綸とを觀察し、研究し批判して是れまで纔かに報德教を通じて知られたるものよりも更に大にして深き二宮尊德を世上に宣傳し鼓吹せむと欲する者也。

洋布頗美本
全一册
正價九十錢
送料金八錢

緒論‖生活觀‖慾望論‖修養說‖經綸策‖結論……

袖珍

豐太閤

山路愛山先生著

此書著者會心の著にして自賛して英雄經と云ふ。

此書を見ずして亦豐公と其時代の人物及形勢を語る可らず。

本書は信長時代秀吉時代家康時代に渉り精叙したれば精細なる豐太閤論にて亦戰國時代の武家興亡史なり

袖珍八百五十頁函入頗美本
正價壹圓貳拾錢　送料八錢

發行所　東京市京橋區南槇町十八番地　振替東京四八六四　電話京橋二四六三　廣文堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

銷夏の好伴侶

後藤宙外新作

小説 盲鬪

●鰭崎英朋口畫
●野生司香雪裝畫

（新刊）

菊判全一冊
裝釘頗優美
定價金八拾錢
郵稅金八錢

『盲鬪』一篇、宙外氏最近の勞作、最新の試み也。文壇未拓の新領土に躍進して、人生の一大哀史を茲に提供す。美しき戀物語にして、一面時代と思潮との交渉記、人間苦鬪錄とも見るべし

世評の一斑

『國民新聞』宙外氏の新たに起稿したる悲劇長篇小說なり時代を明治十年頃に採りて時代の影響が地方に及ぼせる悲慘なる出來事を例の緻密なる筆致に描寫し人情の葛藤あり家庭ノ衝突あり人生の姿を寫し人情の機微を捉へて舞臺も廣く凡てに作者の老熟を思はしむるもの也

『讀賣新聞』時は明治十年頃にして著者得意の筆は宛も一幅の繪卷物として當時の狀態を鮮しく眼前に展開せられたるの感あり又三十年前の農村事情を知るべき點に於て此の篇の如き一種ノ社會的歷史小說とも云ふを得べきか

『日本新聞』剛欲爺の期待ト結果の大きな矛盾そこに深い重い人生の味がある、殊に全篇に亙つた情緒ノ寂びが滴る許りであつたのは嬉しい

『新小說』維新前後過度時代の遷り變りを經とし、地方中產家の家庭を緯とし深秘なる信仰や、新舊思想の衝突や、戀物語のとり〳〵に人生の哀史を描くところ著者が得意の舞臺にして、讀む者をして知らず知らず全卷を通讀せしめ……………又著者の小說は家庭に入れて毫末も向上の趣味を害ふなき事を保證す

發行元 東京市通油町二 振替二二四二 水野書店

青年飛躍の秋來る

中學世界

九月一日發行　第拾壹號　正價貳拾錢　郵税貳錢

■順境の修養　文學博士　市村瓚次郎

■日本の政體　法學博士　美濃部達吉

■楠公義學の眞相　文學博士　久米邦武

◎海の英國　佐藤大佐

◎畫趣の須磨明石　黑頭巾

◎日本アルプスの山嶽美　志賀重昂

◎時評　笹川臨風

◎千曲川スケッチ　島崎藤村

◎不思議土耳古國　小松文學士

◎一高首席入學者受驗譚

●四高騷擾史

●韓海捕鯨記　河岡潮風

●世界一周航海記

●夢の不可思議　水野葉舟

●山岳物語　吉江孤雁

●風雲兒高杉晉作　兒玉花外

■梶原景時の逆櫓　理學博士　鶴田賢次

■細菌繁殖の奇觀　農學博士　澤村眞

■飛行界第一人ライト兄弟成功譚　押川春浪

東京本町　博文館

最新刊

乃木將軍眞筆 爾靈山之詩挿入

故陸軍步兵中尉 猪熊敬一郎君著

鐵血

菊判洋裝總クロース
金文字箱入美本
口繪寫眞版及攻圍
軍活動地圖挿入

正價金壹圓

郵税 内地金八錢
臺、朝、清金三十錢

湧血肉躍

本書は著者が不治の病を得て相州茅ヶ崎にあり死の目睫に迫るを見つゝ南山旅順奉天戰役の陣中日記を基として其夫人に口授せるもの也、旅順攻圍軍の如何に壯烈にして慘絶なりしか『戰爭にあらずして彼我の虐殺なり』と評せられ『鐵血山を覆ふて山形改まる』と歌はれたる前古未曾有の劇戰には全滅聯隊の旗手として苦戰奮闘史に奉天戰に於ける左翼軍の大迂回、背面攻擊、猛將ミスチエンコ及其騎兵團の活動、陣中生活の珍談等凡てありのまゝを詳述し、加ふるに著者は副官代理として戰陣中記錄論功の事に執掌せしを以て記する所根柢あり、併も他の小說的戰記に見る能はざる深刻精透を備へ興味と確實を兼備せる唯一の戰記として江湖の清鑑を仰ぐ。

發行

東京神田區北神保町三

明治出版社

振替東京三九三四

元帥陸軍大將 公爵 大山巖閣下題字
伯爵 黑木爲楨閣下題字

菊判 價九十五錢
頗美本 郵稅金八錢

陸軍騎兵大尉
由上治三郎君著

鐵蹄夜話

本書は日露開戰の劈頭より戰爭の終熄に至るまで十有八ヶ月間具に辛慘を嘗め劍電彈雨の間に活動せし歷戰將校の手に成れる戰爭物語り也。閑談快語あり苦慮焦心あり當年の光景見るが如し。著者は本書に依れる收入を軍人後援會(癈兵院)に寄附し、以て名譽の傷痍者を慰むべきを命じ、本書の發行を本館に許可せられたるもの也。

好評三版

文學博士 三宅雪嶺先生序
文學士 横山健堂先生著(黑頭巾氏)

新人國記

(定價貳圓貳拾錢)
特價壹圓八拾錢
九月三十日限

東京神田小川町
敬文館
(振替一二三三六)

中央公論



第二十六年第九號
秋期大附錄號
第二百七十號

内閣の更迭

（一）

近時天候平を得ずして、猛風暴雨屢々至る、而かも政界の雲脚は、更に之より急なるものあり、讀者が本誌を閲讀せらるゝときは、或は已に新内閣成立の後ならんも知るべからず

吾人の聞知する所によれば、去る七月二十七日の臨時閣議中、桂公は參内して至尊に咫尺し、由來の政績經過を申奏し、民心を新たにするが爲めに、近く骸骨を乞ひ奉つるの意衷なるを披陳し、若し後任に就て垂問を賜はゞ、敢て西園寺侯を推薦すべき事まで奏上したるが、此間最も注目すべきは、政黨の信望の遙かに曩昔に異なる事、並びに已れ假令現職を辭し奉つるも、前回の如く病の故に非ざるを以て、

大政に就て御下問あらば、何時にても卑見を奉答すべき事を以てせる點にして、而して歸來閣議の席上に此の事實を報道したりといふ、閣僚の内、素より心中不服のものあらんも『省務は諸君請ふ之を視よ、高級政治に至ては僕敢て自から當らん』と喝せる桂公に對して、誰か一異言を挾さむ可けんや、況んや此の場合言ふ可くんば言ふべき寺内陸相在らざりしをや、

桂公が始めて辭職の意あることを明言せしは實に此の時なるべし、此の事諮まりて辭表提出と傳へらるゝや、兼て早晩其の事あるを豫期せし世人も、今更らしく愕然たりしが如し

西園寺侯が自から專斷敢決することは、猶ほ桂公の如し、思ふに公侯の間には、情意投合以上に此の事夙くより疏通し居しなるべし、而して原松田の兩氏は、侯より其の機微を漏らし告げられしならん遮莫、此の内閣更迭は、如何なる印象を國民に與ふべきや、吾人は主として此の方面を觀察せざる可らず

（二）

桂公は、其の初度の内閣組織以來、頗ぶる多くの成績を擧げ得たり、政事家としての理想よりいへば、素より伊藤公より低調の點あるも、其の技倆に至ては寧ろ其の上にあり、山縣公、西園寺侯に比すれば懸隔迥然たり、餘子（松方、大隈、黒田の侯伯等）は乃ち碌々言ふに足らざるのみ、看よ日露訂交を犧牲として日英同盟を結び、日本の地位をして磐石の如くならしめたりしが如き、遂に露國と開戰したりしが如き、又太だ壯烈にして而して甚だ淺薄なる輿論を顧慮せずして、强ひて媾和を成立せしめたりしが

如き、鐵道國有の計畫を立てゝ、次の西園寺内閣に實行せしめたりしが如き、英斷頗ぶる稱すべきものあり、其の子爵より伯爵、侯爵となり、大勳位となれる素より不次に非ずとす、既にして西園寺内閣の財政を攝理するに堪えず、中外の信用大に減じて、其の公債價格の如き、八十圓臺を支えずして七十圓臺に陷込み、實業界の愁訴囂然として、侯の竟に冠を掛くるに至るや、玆に第二次の内閣を組織して再び其の技能を發揮したり

吾人の領會する所によれば、公は此の第二次内閣を組織するに當り、昵近の幕僚と密議を重ね、公債の價格恢復、事業繰延、韓國併合、條約改正、社會政策の實行等を以て政綱と定め、鋭意其の遂成を期せしが如し、事業繰延は財政整理上第一着の急務にして、公は各方面の異論を排して之を敢行し、公債償還基金制を確實にし、國有鐵道特別會計法を定め、且つ非增租非募債を聲言して以て財政の基礎を安固にせんことを努めたりしが、效果空しからず、中外の信用頓に高まりて、現に公債價格の如き、豫想通り恢復するを得たるのみならず、更に低利借換の機會をも作るに至れり

韓國の併合は、伊藤、曾禰の兩統監之に反對し、甚だしきは寺内伯すら始めは逡巡したりしも、獨り公のみ始終一貫其の方針を替えず、竟に去年八月を以て之を斷行し得、且つ寺内伯の沈勇にして周匝なる手段に由り、豫期以上の效果を收むるに至れり、其の侯爵より昇りて公爵となり、位人臣を極むるも、斷じて過當ならずとす

條約改正は、英米獨佛皆共に完成し、他は暫定條約を以て事に妨げなきを致し、唯だ西班牙、葡萄牙

とは、無條約國たるの餘儀なきに至りしと雖も、西班牙は我との貿易關係稀薄にして素より言ふに足らず、葡萄牙に至ては未だ其の新政府を承認するに至らざるに於て、改正交渉を開くに由なし、而して共に實際に些の不便あらず、即ち條約改正の事業も、略々大成したりと稱するも必らずしも誣言ならざらん

全國の河川を調査して根本的治水策を立てしが如き、東京市をして電車市有を實行せしめたるが如き、公は以て其の所謂社會政策の實行と看做すといふ

果して然らば、公は今にして初心を點檢して、微笑を禁ずる能はざるものあるべし、況んや三たび日英同盟を申ね、露國との懸案また近く解決せられたりといふをや、公は應さに自から以て功成り名遂げたるものと做すや論莫からん

(三)

桂公より視れば、政權を政友會に渡すこともまた德の一ならずんばあらず、政友會が今自から政權を握るの地位に立つは、實に一個の愚策也、然れども妥協に次ぐに妥協を以てし、竟に情意投合と稱して桂内閣を援助する三年、其の間盲從の惡名を享けたるも、隱忍して敢て動かざりしは他なし、一に政權を獲んが爲にして、地方人の相率ゐて政友會に入れるも、亦其の政權を獲るに由て幾多の利便を得んと欲するのみ、若し今にして政權の地位に立つ能はざらん乎、黨内に不平多くして地方の人心また漸く離叛し、厖然たる大黨も今日一角を崩され、明日また一隅を奪はるゝの掛念なきに非ず、單に此の點よりい

へば、政友會は眞實の是非利害を考量するに遑なく、何物を犧牲としても必らず政權を握らざる可らず、是れ西園寺侯及び原氏等が、敢て內閣を引受くるの餘儀なきに至りし所以ならざらんや、即ち政友會の事情斯の如きに方つて、自から進んで其の地位を政友會に讓るは、啻に政友會に酬ゆる所以に止まらず、又能く政友會をして好意を懷かしむる所以にして、世もまた多く桂公の德量を稱すべし

且つ政友會は、自個の內閣の下に於て、今秋の府縣會議員選擧と、明初夏の總選擧とを行はんことを希望するなるべし、斯くして益々黨勢擴張に便せんとすることは、殆んど彼等の大志望なりと稱するも可也、桂公既に貴族院の改選に於て絕大なる勝利を占めたる以上、總選擧を政友會の手に委するも、亦一の宏懷ならざらんや

殊に眼前には、軍備問題あり、必らずしも至難の案件ならずとするも、其の攝理鹽梅を謬らば、內は軍人の憤怨を招き、外は國民の誹謗を受くるに止まらず、甚だしきは則ち外國の感情をも損すべき虞なきにあらず、生中に手を之に觸るゝよりは、飄然として去つて閑雲野鶴に伴ふは、豈智者の事ならずや

或は桂公の去るべき理由の明白ならざるを難ずるものあり、然り、功成り名遂げて赤松子に隨つて學び、若くは美姬と寶貨とを載せて五湖に浮ぶが如きは、東洋流の豪傑型なるも、斷じて立憲政治家の本色に非ず、桂公の政策は未だ甚だしく輿論の反對を受けず、之を立憲的にいふも、貴族院には絕對の多數を控へ、衆議院には多數を制する政友會と情意投合して其の援助を受け、且つ中央俱樂部の直參派を有す、素より引退の必要あることなき也、然れども政治の要は民心をして倦まざらしむるにあり、而し

て民心の漸く桂公を去りて、更らに新らしきを思ふの切なる、到底蔽ふ可らざるものあり、桂公自身また頗ぶる政治に倦みて荒める色あること、吾人の既に數月前に評せし所とす、民心全く離れ、形勢悉く禁ずるに至て始めて去るは、是れ刀盡き矢折れて後に已む也、斷じて智者の事に非ず、第一次西園寺內閣の引退を以て非立憲的と爲さゞる以上、今に方つて桂公の去るを咎むるの理ある可らざる也

（四）

桂公の去る、洵に其の機會を得たり、唯だ早くより世間に其の祕密を看破せられ、此の兩月來新聞紙上日として內閣更迭の記事を見ざるなく、人心をして益々離叛せしめたるは、聊か拙なりとせざる可らず、是れ抑もまた政治に荒める一兆乎、吾人頗ぶる之を惜む

公の政績や誠に多し、伊藤公も全く及ばざる也、況んや山縣公をや、又況んや松方伯、大隈伯、黑田伯をや、明治十八年以來內閣の首班に立てるもの、其の技倆と成績とに於て、桂公實に其の第一位を占む、公今や退隱するに方つて、位人臣を極むるに止まらず、天爵としても政治家中の隨一なる定評を受く、時代の寵兒として誰か能く公の右に出る者ぞ

然りと雖も公の失政として吾人の僂指すべきものまた少からず、條約改正に由て稅權を恢復し得たるは宜きも、關稅率を過度に高め、甚だしきは國民生活に缺く可らざる食品類の價格を昂騰せしめたるは其の一也、外債の利拂ひに外人の信用を繫がんと欲して、常に在外正貨の蓄積に重きを置くの過度なるより、內に於ける流通貨幣を過豊ならしめて以て物價の騰貴を助け、且つ兌換制度の妙作用を妨止して、

益々貿易の均衡を喪へるは其の二也、社會政策を實施すと標榜しながら、物價を低廉ならしめて以て國民の生活を安易ならしむることを計らず、徒らに有價證劵の價格のみを高めんと欲して、國家經綸の基線に觸るゝに至らず、財政上に於て本末輕重を謬まれるが如きは其の三也、此の三大失政は、苟くも眞に識慮あるものゝ歎惜を禁ぜざる所とす、但だ茲に之を切論するは、幾んど死屍に鞭つの感あるを以て、吾人は姑らく之を爲さずと雖も、次の內閣を戒むるが爲めには、他日之を詳說する所有らんと欲す

（五）

桂公の去るの大に機宜を得たる丈け其れ丈け、西園寺侯の起つは甚だしく時を得ざるが如し、但だ政友會のためには、乃ち今敢て出でざるを得ざるべき乎、若し然らば侯は政友會に殉ずること、猶ほ西鄉南洲先生の私學校黨に於けるが如き也、吾人は其の行を賢ならずとするも、然かも其の志を壯として悲まざる能はざる也

惟ふに侯の斯の地位は、却つて心あるものゝ同情を惹くこと多かるべき乎、貴族院には幾んど一の味方を有せず、桂公が衆議院に於て若し政友會の援助を得ずんば、更らに諸種の方略を以て黨內を攪亂し、由て以て多數を制せんとするが如き機略と便宜とは、侯や素より之を貴族院に有せざる也、乃ち絕對に桂公の好意に縋るにあらざれば、到底貴族院を操縱する能はざる也、陸海軍方面また又然り、侯や至尊の御親誼を辱ふすると、或は桂公に優さると雖も、政界に在ては却つて甚だ梗塞せらるゝに似たり、夫れ名利に恬淡にして物に執著せず、惡戰苦鬪を好まざる侯にして、今乃ち敢て斯の如き地位に陷ゐる、

而して其の志一に政友會のためにするに在りとせば、天下如何ぞ多く之に同情せざらんや

故に侯にして唯だ至誠事に當るのみ、成敗利鈍の如きは逆め睹る所にあらずとせば、汎く天下の同情を吸集して、或は形勢の變化を來すと意料の外に出んもまた測るべからず、玆に於てか吾人は敢て忠言を勸む、侯たるもの唯だ至誠を以て公平に大政を運行せよ、政友會の私情の如きは、努めて之を抑へて以て恣睢ならむしる勿れ

殊に桂内閣の第三大失政は、斷じて根本より之を更改せよ、斯くして眞に國民の生活を安易ならしむるの方針を執らば、假令株式市場に出頭し沒頭する投機師、及び投機師然たる有象無象の怨望を受くるも、淳良なる多數國民のめたには乃ち謳歌されん、而して識慮あるものよりは、眞に經綸の要を得たりとして賞讃せらるべし、而して政治家の能事は乃ち玆に存せずや

或は陸海軍擴張問題のため、新内閣の甚だしき難局に立つを危ぶむものあり、然れども陸軍の擴張案には、差當り多くの費額を要するなく、海軍の擴張は、少くも一年の延期を爲すことを得べし、吾人の領會する所によれば、陸海軍今日の要望を其のまゝに容るゝとするも、少くも今一ヶ年間は財政の現狀を維持するを得べく、卽時增税を斷行するの要あらず、西園寺侯にして若し前度の如く、僅かに一年半内外にして其の地位を抛つの決意ならば、而して政友會にして、單に明初夏の總選擧を自家の手に於て行ふを以て滿足せば、增税の如きは之を阻みて可也、之を阻みて内閣を明渡し、以て來るべき增税案の死命を制するに足る便宜の地位に立つも難からずとす、陸海軍擴張案素より平淡なる案件にあらずと雖

も、また太だしく危惧するにも及ばざるのみ

西園寺侯にして若し至誠事に方り、桂内閣の三大失政を矯むるの外、尚ほ今日の鐵道電話事業に於けるハイカラ方針を一變し、質實なる主義を以て紊れたる運賃系統を糺し、主として産業の發達に資するに力めば、世を裨益すること少ならざらん、若し然らずして、彼の地方人を釣る餌とせし鐵道港灣の建設のみに淫するが如きあらば、民心は直ちに去つて而して前回以上の慘死を免がれざるべし、是れ西園寺侯及び政友會の先輩等が、切に戒心すべき所とす

（六）

遠慮なくいへば、西園寺侯の新内閣は、一年若くは一年半にして覆沒すべし、永くも二年を超ゆることは斷じて無し、果して然らば太く短く善政を行ふべし、山賊的に太く短く惡政を取てせば、政友會の信望は全く地を拂はん、短時間に善政を行ふて國民をして忘るゝこと能はざらしむるは、是れ政友會をして益々盛ならしむる所以に非ずや

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

或る人問て曰く、西園寺内閣覆沒の後を承くるものは桂公乎、答て曰く公や位已に人臣を極めて、而して功成り名遂げ、其の政治家たる資格超然として羣を拔く、豈再び出てゝ内閣の班に列せんや、自からは元老となりて、恰かも政治家の審判者の如き地位に立ち、以て其の末路を完くすることを期圖すべし、元帥の地位に立つは公素より辭せず、三たび總理大臣たるは、斷じて公の志に非ざる也

然らば則ち何人か西園寺侯に代りて更に後の内閣を組織するものぞ、曰く寺内伯是れ也、侯や伯や、更る〲桂公の指導によりて政局に當らん、然り、吾人は斯く觀測す、思ふに最も難局に當るものは夫れ寺内伯乎、而して政局の分野、黨派の離合、大に紛擾して而して後天下大に定まるに至らん乎

總督政治の成功

俗論の非難を受くること少からざりし朝鮮に於ける總督政治は、實際に於て著々成功を收めつゝあり、事實は何物よりも雄辯也、請ふ切に事實を看よ

朝鮮人等は、第一に司法の公正無私なるに信服せり、某富豪曾て一美妾を蓄ふ、郡守之を奪ひ、更に其の財を掠めんとす、富豪以爲らく、妾を失へるは惜むべしと雖も奈何ともすべからず、唯だ財を奪はるゝに至ては、祖業全く廢し、一門また飢死を免がれず、是れ此の死活問題、力を極めて爭はざるべからずと、之を我が裁判所に出訴せるに、審問極めて公平にして、竟に總督府に稟申して郡守の褫職懲罰を求めしのみならず、其の奪はれたりし妾と財とを併せ還附したりしを以て、富豪全く無事なるを得、鄉閭の之を傳聞するもの、擧げて法官の公平直良を稱し、相謳ふて曰く、此の良法官あり、生民始めて安しと、爾來人民の寃枉に泣けるもの皆伸ぶるを得、生業大に平らかなりといふ、幾百年間郡守にすら生殺與奪の權力を握られ、生命財産の安全を得ざりしもの、茲に至てか儼乎たる保障を受く、人民如

何ぞ隨喜せざらんや、惟ふに彼等が生命財產の安全を保障せらるゝことを自覺する結果は、漸くにして勤勉活動の民となり、能く家を興し產を積むに至らん乎。新附國の文化是より大に看るべきもの有らん

總督府の道路を開修するや、單に町村と國道又は鐵道との聯絡を保たしむるに止めず、耕種收穫をも便するため、畝圃を通じて日夕の來往と車馬の運搬とに便す、此が爲め耕稼の業大に進まんとするに止まらず、道路を開修するに、人民に課するに一日金三十錢の割合を以てし、金納又は夫役を許して、寸毫だも其の規を紊れることなし、從前は金納又は夫役を許せるも、夫役一日の定め必らずしも一日に止まらず、三十錢の金納また必らずしも三十錢に止まらず、總て郡守の意のまゝにして、多くは郡守の私腹を肥せしに過ぎざりしも、總督政治には寸分も然るが如きとなく、一び制令を公布するや、一毫も私する所あらず、玆に於てか彼等新政治の信に悅服し、手を額にして相慶すといふ

李家統治の下に在ては、良買は實に深く藏して空しきが如きを示すに汲々たりき、然る所以は他なし、郡守及び中央政府よりの誅求度なく、僅かに十萬の資財あるも、尙ほ十五萬乃至二十萬を藏するものと看做されて、苛斂到らざる所なかりしを以て也、一事は萬事也、故に商工勤めず、其日稼ぎの土方と雖も怠惰性を成し、僅かに一日の賃錢を得れば、晏臥悠遊するのみ、財を蓄へ產を積み、又は生活を昂上せしむるが如き希望は毛頭も生ずるとなし、斯の如きは啻だ財產に止まらず、生命と雖もまた郡守若くは中央官吏の意のまゝに奪はるゝを以て、自暴自棄の極、品性彌よ下りて殆んど移す可らざるに至らんとせり、三千年の歷史を有するに拘らず、人民生活の劣等なる、禽奔し獸走する蠻族と多く異ならざる

は之がためのみ、政治學者の所謂怖るべき惡政極度の結果は、世界中唯だ朝鮮ありしのみ、然るに今や總督政治布かれ、其の司法は能く平等に人民の生命財產の安全を保障し、制令悉く信あり、李家の惡政治に亡びんとしたりし人民は、茲に於てか蘇息せざらんとするも得べからず、誰かまた總督政治に不平不滿を懷くものあらんや

俗論家は、曾て警察の即決裁判を罵るに惡口の極度を以てしたりき、去れど山間僻陬に住む貧窶の民如何ぞ都會に出てゝ正式に司法官の裁判を受くる餘裕あらん、然かも其の餘裕なきを以て裁定を仰がざらん乎、正理あるも屈するの外なく、寃を蒙りて泣かざるを得ざるべし、茲に於てか如何なる山間僻陬にも在る警察官代りて或る種の事件を裁決す、民の便とする論を俟たざるに非ずや、況んや警察官の常識を以てする判決、また多く公平正直なるをや

吾人はまた憲兵を主とする警察が、巧みに守備隊との連繋を保ちて、幾んど行渉らざる所なく、今や如何なる僻遠の地にても安全に旅行せられ、且つ種痘其の他の衞生事項が、從前よりも能く行はるゝと聞て、統治の效果の空しからざるを推定し得

滿洲に於て、居留邦人の彼の淸民を凌轢する甚だし、彼の國巡警が屢々不軌の行動に出づる、必らずしも其の無智の故のみにあらず、又實に居留邦人の倨傲に憤慨する結果のみ、朝鮮に於ては、由來本邦人の朝鮮人を苛虐せる、更に之よりも甚だしきあり、現に京城の大路に於て、朝鮮人の人力車夫を撃つにステッキを以てし、傲然として其の賃錢を拂はざるものすら屢々之ありき、今や合邦の後、彼等朝鮮

人も亦邦人と齊しく、　陛下の赤子として、　陛下の恩澤に浴する我が同胞となれるを以て、總督府は屢々令を下して以て苛虐凌轢を禁じ、一視同仁の主義を以て新附の生民に臨むに至り、竟に元の居留地に現存せる居留民團をも廢止して、以て彼我の垣牆を撤せんとす、已に斯の心あり、朝鮮人の悦服し心服する、素より其の所のみ

吾人はまた總督府が治民の要道に一隻眼を點じたるを祝す、朝鮮人は惡政治の苛斂誅求に壓迫せられて、寸毫も積蓄の心あらざるために、米麥を收穫すれば直ちに飽食し、既に盡れば草根木皮を喰ふに至る、故に其の草根木皮を啖ふや、必らずしも凶歉の故に非ず、實に積蓄の心なきがため也、玆に於て總督府は所在に倉庫を設け、人民に慫慂するに又倉庫建設を以てして、米麥の蓄積を勸め、其の資力の程度に應じては、米麥菽粟を混用して常食と爲すと、猶ほ母國の農夫の如くならしめんとを期すといへり、蓋し斯くして漸く勤勉積蓄の淳風良俗に導かんと欲するなるべし、先づ生民の生活を安んずるを主とし、根本的に民風を立てんとす、洵に治化の體を得たりと謂べし

總督政治が京城の天地にのみ止まりて文物典章の燦然たるを衒はず、直ちに生民に直接して徳化を及ぼし、三家村裏の窮民をも、亦悉く我が　聖天子の惠光に浴せしめんとするは、吾人の悦ばざるを得ざる所とす、朝鮮素より野心に富める狡客と邪人なきに非ず、然かも其の得意の姦計を以て民を蠱惑し得ざるものは、烝々たる生民が能く我が德化に綏服する結果ならずや

朝鮮の土地甚だ廣く、其の戶口また一千餘萬に上る、洵に庬たる我が領域也、之をして能く王化に沾

はしめて、以て其の利源を開發するを得ば、我が同盟國の印度の如く、我が一の寶庫たるべき乎、吾人は今敢て總督政治の第一初頭の成功を承認して、更に益々其の奮勵を促がし、以て彌よ有終の成果を收めしめんとす、微衷實に茲に在り、淳良なる國民の意圖また然らん、而して是れ天地の化育を賛襄する所以ならずや

公論

大久保利通論

池邊吉太郎

勝田孫彌君が書いた「大久保利通傳」三卷を通讀して、大久保といふ人についていろ〳〵感じた事がある。それをザッとお話して見ませう。

一體私は傳を讀むよりも大久保の日記を讀みたかつた。勝田君は借りて來て持て居るから、見に來いと幾度言つたか知れぬのに、とう〳〵行かずに仕舞つた。殘念でたまらぬ。今でも隨分委しく日記をつける人があるかも知れんが、昔の人の根氣よく日記をつけるには驚く。大久保のも此傳記中の處々に拔萃して挾んである。それを見ると可なりによくつけてあるやうである。聞けば木戸のも可なりにあるらしい。其日記は、其日自分で爲た事が書いてある。言つた事が書いてある。又時としては其爲た事言つた事についての自分の腹の中の說明が無いでもない。そんな點は非常に面白い。それから他人の自分の言動に對して答へた事の概略が書いてある事がある。又直接自分に關係が無くても、間接に關係ある、世の中の事を委しく書いてある事もある。大久保のやうな大政治家の日記になれば、それが一般に傳はつてゐないやうな、珍らしい、面白い事が多く含まれて居る。其頃若し非常によい新聞があつても、到底も探り得なかつたやうな事が載つてある。新聞以上の大新聞が含まれて居る。歷史以上の眞

歴史だ。實は私の希望を有りの儘にいへば、其遺族の人さへ不承知でなくば、又遺族の人に勸めても、日記を其儘に出版して欲しいのである。それから又其出版する人が、相當な人に尋ねて、若し加へ得べくば、それに解釋見たやうなものを加へる。そして讀み易からしむる。或は其中に自分の意見を書き加へてもよろしい。つまり日記を骨にして其れに肉を附ける。岩倉公のが多田といふ人の手でコンナ風に拵えられて居るそうだが、惜い事に公にされてない。それに又日記の外に本人の他人に送つた書簡類を集めらるゝ丈け集めて出版する事も必要だ。さういふ事にすると、讀むものには非常に有益だらうと私は思ふ。もう大久保の時代を去ること餘程遠く、ゼネレーションが一轉びも二轉びも轉んで居るんだから、秘密にせねばならぬやうな事も大概無からう。若しあつたらそれ丈けを拔いて置けばよい。大久保ほどの人だから、手紙を貰つた人は大抵保存してゐるに違ひない。尋ね廻つて集めて見たら隨分澤山あるんだらうと思ふ。此傳記の中にも處々に出てゐるが、岩倉公爵家あたりには澤山あるらしい。どんな細かいものでもよろしい。年月を追うて日記に配して編輯する。斷簡零墨でもよろしい。斷簡零墨の中に却て非常に面白いものが見え相だと私は思ふ。詰り日記並びに書簡集の出版が熱心に希望さるゝのである。其骨折りは大きくなくて讀者に益を與ふること必らず非常に多いと思ふ。此傳記を書いた勝田君は私の知合である、友人である。西郷傳を書いて大久保傳に及んだ。大久保傳を書きかゝつた頃から知つて居る。之は又非常に骨を折つたものだ。多分十四五年以上も骨を折つたらうと思ふ。今日出來て居る維新以來の人物の傳記としては、此傳記などは完全に近いものだらうと私は信じて居る。若しか之に加ふるに今話したものが更らに出版になつたならば、互ひに照し合して大久保を傳ふる上には遺憾なきものが出來るだらうと思ふ。傳記を讀んで一番初めに浮んだ考は先づそれである。あれ程の人物だから之を後世に傳へやうとするのは、大久保の崇拜者若くは友人、親戚などの情から最

もな事だ。のみならず又有益な事である。であるからして世間でも此事を希望して、さういふ事の出來るやうに仕向けたらよからうと思ふ。

大久保といふ人は徹頭徹尾政治家である。一大政治家である。嘗て伊藤公の傳記を一寸見た時にもさう思ふたが、あの維新の變亂に際して最も多く力を振うたもの、又維新の原動力として働いたものは言ふまでもなく兵力である。それが一のレボリユウシヨンを仕遂げたのだ。文久年間まではさうでもなかつたが、元治から慶應にかけての四五年間といふものは國事に心を用ゐて居る人々が、主として重きを置いて居つたものは、詰る處暴力である、兵力である。勿論これでなくてはレボリユウシヨンは出來ぬ。結局其暴力兵力の代表者として西鄕はあんなに大きく成つた。其頃の何人でも此力を度外視する譯に行かぬ。それで自分に其力を用て動く。且其頃の國事に奔走するものは殆んど武士の階級から出た。百姓町人から出たのは曉天の星も同樣極めて寥々たるものだ。伊藤は曉天の星の一つで農家から振ひ立つたが、然し家柄はよくて、子供の時分から武家に奉公して居る。だから矢張り武士から出たといつてもよい。大久保も無論武士の階級から出た。武士で無ければ國事に奔走が出來ぬといふ有樣だつた。處で、其武士の家から出た伊藤も大久保も何故自ら兵隊にならなかつたか。伊藤の傳を讀んだ時もさう思つたが、大久保の時も矢張りさう思つた。自分自ら兵隊を指揮して驚天動地の大運動を何故しなかつたか。どうも其人の生れつきといひますか、趣味の上から政治の事が餘りに早くから分つて居つて、其方が得意で、身體も心も始終其方に突込んで居るから、兵隊になるといふ動機が其人の身體の上に起らなかつたからだらうと思はれるが或は兵力を使ふ方で、自ら兵隊となることを屑とせぬといふ氣前も見へて居る。そこが大久保である。徹頭徹尾政治家大政治家たる所以は其邊からも起ると私は思ふ。

驚くべきことは、大久保といふ人は、若い中から政治の上に心を用ゐて居つた事、力を用ゐて居つた事だ。

若い中から悉く實行だ。無論二十臺からだ。御維新の時は確か三十七か八であつたでせうか、其れより十年も、もそつと前から政治上の運動をやり出した。其の相棒は西郷であつた。西郷は徹頭徹尾軍人だが、決してタゞの軍人ではない、時としては大久保も及ばぬ一種の政治家だ。其西郷と同町内に生れて竹馬の友である。子供の中から議論もしたらうし、喧嘩もしたらうし、又一所に飲食ひもし、泣きもし笑ひもしたに違ひない。無論其初めは國の政治ではない。薩州といふ州の政治だ。即ち封建時代の一大名の領内の政治ではあるが、然し其領地のコセ／＼した政治は無論大久保等の眼に入らない。あの一州一藩を提げて日本の爲めになるやうにしようといふのが主もなる目的である。だから一州の政治といつても一國の政治に關した事ばかりやつた。彼等に最も幸であつたのは、あの時分には齊彬公即ち後に順聖公と申した、あゝいふエライ人が薩摩の君主に生れて居られた事である。鹿兒島の豪傑はあの人に養はれたというてよいか、又あの人を押し立てたというてよいか、何れにしても水魚の關係だ。みんなあの人の爲めには生命を抛つて熱心にやつて居る。然るに當時あの齊彬公の國主にならうとするのを妨げやうとした連中があつた。而してあの人の異母弟たる久光公を立てやうとして居た。鹿兒島では其爲めに内亂が起らんとした位である。國主となられた後も妨害だらけだ。西郷も大久保も皆無論順聖公派で、其反對の奴等を奸黨と罵つて居る。奸黨を切つて禍根を除かうとした事もある。大久保も主動者の一人ではあつたが、西郷は其れ以上に、熱心であつた。これは實行も實行、大實行だ。がそれは順聖公が此事を知つて自ら止められた。處が彼等の爲めに非常に幸にして同時に非常に不幸であつた事は、順聖公は國主にはなられたが、若死をされた事である。萬延元年の井伊掃部頭の櫻田門の變を聞いて江戸參覲の途中から引返されたとあるから、死なれたのは多分文久年間でせう。これは彼等にとつて非常な不幸だ。殆んど天地が引くり覆つたやうなものだ。此人によつて仕事をしやうとした

今迄の唯一の希望の標的が無くなつた。西郷は最も順聖公の知遇を受けて眞先に其代表者として、安政戊午に水戸越前あたりと十三代將軍の繼嗣一件に運動して、井伊と鬪つて居るだけに、爲に非常に落膽して居る。處で、早速に此處で大久保の特性が現はれて居る事がある。大久保は失望してゐない。失望は勿論したらうがガッカリしてゐない。之れがあの人の一生を通じての著しい特徴だ。いくらグリハマになつても、其爲めにガッカリして頓挫するやうな事がない。もうどんな事があつても、何とか盛り返して來て、其時分に最善と思はるゝ手段を以て、着々事實の上にそれを仕遂げて行く。二十代から政治をやる人は世の中に乏しくない。今でもある。が一敗二敗て挫折せぬ人は少ない。脚も腰も達者て居ながら、三十四十になつて却つて仕方のない人となつた人の實例もいくらでもある。處が大久保はどうあつてもさうでない。順聖公が死なれて子が無かつた。此子の無かつた事についてもいろ〳〵な説がある。所謂姦黨の手て子供が出來ぬやうにしたとか、出來ても蚤世するやうにしたとか、いろ〳〵エライ疑がある。實際さうであつたかも知れない。順聖公も我慢して、島津家の爲めに久光公の子の忠義公を嗣子として立て、そして久光公が後見人といふ事にした。處で大久保は直に其久光公に眼をかけた。これは一寸出來られぬ藝當である。其前日まては奸黨〳〵といつた奴等に押し立てられた久光公だ。隨分恨みもあつたらうし、腹も立つたらう。且つ又久光公の若い時はどうも餘りよい評判ばかりてはなかつた。本ばかり讀んて氣六つかしい偏屈家だといふ風にいはれて居つた。最後まて餘程癖のあつた人てあるから、其頃薩摩て評判のよくなかつたのも無理はない。其れにも拘らず大久保は之を押し立てゝ仕事をしやうとした。どうも若い人には不似合な、何處までも思慮の實地を離れぬ人だ。又實地上それを外にして鹿兒島て仕事の仕樣がなかつたのだ。さア其爲めには意見書も書いた。又お附きの人に意志を傳へて貰ふにも骨を折つた。畢竟するに國の事、日本の事に、薩摩をどういふ具合に役

立てるか。大久保はそれを考へてゐる。大久保は久光公に取り入るまで其間二年もかゝつたと私は記憶して居る。初めは梨の飛礫、何の手應へもない。それにも挫折せず、とう／＼久光公に大久保の何物たるかを知らしめた。又同時に大久保の腹の中にも久光公の人物を諒解することが出來た。無論久光公は一種の人傑だ。齊彬公が死ぬ時に後事を頼むと遺言して居る。大久保も齊彬公が遺言する位だから一種の人傑だらうと腹の底では思つて居つたに違ひない。がいよ／＼自分で諒解する迄に、熱心に秘密運動をやつて居る。其根氣のよさといつたら何ともいへない。そしてとう／＼役人に用ひられて上京のお伴を命ぜらるゝといふ段取になつた。久光公は矢張り齊彬公の遺志を繼いで薩摩を提げて文久元年か二年頃から公武合體の運動を初められた。もう其れ以來ずうと大久保は政治家だ。強ち明治の初年になつて政治家になつた譯ではない。假りに文久の初年から大久保が政治家を初めたとすれば明治十一年に死ぬまで前後十八年の間、傍目も觸らずやり續けた。それが何時も／＼實行ばかり。勢を得て居ると得て居らぬとを問はない。どんな變化に出逢つても、どんな困難の場合にも其時に最善と信ずる手段を以て必らず實行して居る。

處でもう一つ私が大いに驚くべき點と思ふのは、一體政治家には自分の腹の底に、善かれ惡しかれ、經綸といはうか、或は主義目的といはうか、さういふものが初めから出來上つて居るものだ。そいつが政治行動の生命だ。處が大久保には、自分獨りで考へた主義方針といふものは、どうも見當らない。尊王、討幕、開國進取、遷都、廢藩置縣、西洋の文物採用、皆自己の發明ではない。而して其時分の交友とか藩公とかの說で、最善と思ふものを深思熟慮の上で之を執つて、從つて堅くそれを守るといふ、執着力の強い性質である。政事家で其生命の主義方針がないと云へば不都合だが、大久保の樣だと不都合でないばかりでない、寧ろ將に將たりて、政治家以上で、帝王流だ。少々ゑらい過る位だ。それで我見に囚れないで、選んで善に從ふ事が始

終出來る。それも後入齋では仕方がないが、大久保のは堅忍不拔、一度思ひ極めた事は非常な執着力を以てそいつを實行する。西郷も似寄の點があつて、帝王流て押し通して居るが、一寸西郷の叶はぬ處は、其非常な執着力で、一口にいへば非常な意地張りな點だ。此點は岩倉に似寄の點が有る樣ですが、大久保のは尙一層て餘り意地を張り過ぎて少し困ると思はるゝ位だ。長所が短所さ。明哲身を保つといふ樣な處は、薬にしたくも無い。多分議論でもしたら仕樣のない人で有たらうと思はれる。勿論言葉は穩やかてあつたに違ひない。幕府から見れば陪臣。天朝から見れば陪々臣。又薩摩に於ても大久保の下も無論あるが上も澤山にある。一つ間違へば拔打といふ時代だ。言語動作は餘程謹愼てあつたてせう。意地が强ければ强い程謹愼でなければ差障りが出て來る。で何處までも謹愼、何處までも溫良恭謙の態度でやつたに違ひがない。が、腹の中には折れても曲らぬ一物がギラ〳〵して居たらう。ギラ〳〵して居れば目に立つていよ〳〵始末にいけぬが、大久保は多分其上を殆んど光澤消しにして居たらう。意地の强いといふ特色は、昔にも多くあるかも知れないが、近世の日本には大久保に及ぶものは一寸見當らない。類品は多少ある。今の世の中にもある。然し强さ加減の程度に至つては大久保に及ぶものは到底ない。尤も大久保と同時代には世界に大政治家の輩出した時代てあるから、外國には大久保と同程度位の意地張りの政治家があつたやうてもある。業の上では大久保よりも大きな業をやつた奴はある。が業の大小を論外に置いて程度丈けをいへば、意地張りさ加減は大久保以上てなからうと思ふ。どうも其點は怖いやうな政治家だ。

それで以て京都へ出て朝廷と幕府との間にノサバリ出た。いよ〳〵之から仕事を初めるといふ場合に大久保は久光公の代表者だ。久光公の代表者は即ち薩、日、隅の代表者だ。之れは久光公の信用を得た結果である。尤も藩内ても多少の競爭者はあつたやうてある。けれども殆んど角力にはならなかつたらしい。第一大久保

の方で餘り氣にもならなかつたらしい。氣になつても相手にせずに濟んだやうである。西郷については何時も〳〵久光公に對して執成役だ。西郷といふ人はなか〳〵エライ。滅法界勇氣の强い人だ。殆んど天成の大勇だ。智慧もあつたし、又行屆いて情に篤い人であつて、仁愛といふやうな要素も餘程備つた人だ。然し其根本は勇氣といふものが際立つて働いたやうに見える人だ。からして是も長處が短處で、雄放な點でどうも衝突が多い。勿論同じく謹愼はしてゐた。が動もすれば謹愼が負けて雄放が勝つ。而して久光公とも早速の衝突が起つた。順聖公に服して居たやうに服して居ないからだ。其爲めに島流しにもなつた。が其執成役は何時も大久保だ。本來大久保は西郷に兄事して居た樣だ。年齡も西郷の方が三つか四つ上だし、出身も西郷の方が早い。其兄分たる西郷を如何にしても救はざるを得ない譯だが、其實大久保は此頃に至つて又如何にしても西郷の力に信賴せざるを得なかつた、其爲にも亦之を救ふて働かさねばならなかつた。何故なれば、文久の末頃まで、暴力兵力を以て自らレボリユーションを起す必要は見なかつたが、外ではモー既に起しかゝつた者がある。長州人は既に元治元年に至つて外には攘夷内にはレボリユーションを起し來つた。此時代となつて、何をするにしても自らも暴力兵力を備へて置かねばならぬ。自ら此力を持たぬ大久保がどうして此力の權化たる西郷を救ひ且推し立てずに居られませう。此頃の大久保と西郷とは長所と長所とを以て抱き合つて居た。側から見ても、後から見ても、心持の好さゝうな間柄だ。而して二人が或は交る〳〵或は相共に薩州の勢を京攝に代表して居た。此二人が明治六年の征韓論から明治十年までの間に、短處と短處とでぶつかつて、兩方衝突して刺違ひて死んだと同じになつたのは、何といふ因果な事でせう。尤も二人は文久二年頃に一度刺違ひて死なうとした事がある。それは西郷が例の雄放で以て久光公の勘氣に觸れて島流しになるのを、大久保が救はふとして救ふ事が出來なかつた。大久保が甚く之を殘念がつて、大阪邊りで刺違ひて死なうと言

ひ出した。大久保の日記には『決断を申込む云々』とある。しかし其時は西郷が平氣で、そんな事は下らない。後を頼むから一人で働いてくれ、己れは甘んじて島流しになつて行くといつて別れた。處が終ひには丸で異つた境遇と原因から兩人が本當に刺違ひて死ぬことになつた。あれは實に悲慘な事だ。兩人の不幸にして併せて日本の不幸であつた。

そこで御維新の一件だ。あそこの處を讀んで、著しく私の感じたのは、大久保の意地張りと西郷の勇氣と即ち長所と長所とが殘る處なくよく出て居るといふ事の外に、あの革命運動には、非常によく西洋新舶來の文明の利器の應用された一件である。こいつがなかつたならば、長州人も無論元治年間から慶應にかけての幕府征討軍に抵抗は出來はせぬ。消極的には或は踏張つたかも知れないが、積極的に京都のクーデターを行うて、さうして鳥羽伏見の戰爭をおつ初めることは出來はせぬ。あの動機はどうしてゝ新舶來の利器のお陰だ。薩摩といふ國は――長州も矢張りさうだが尾張とか或は伊勢とか、或は丹波丹後とか、或は少し遠方になるが備前備中とかいふ程度の所とは違ふ。後者のやうな位置にあれば京都で大活劇をやるに、些か都合がよいかも知れぬが、それですらなか〳〵六つかしい。況んやあの僻遠な土地である。薩摩は日本の果てだ。それで以てあの兵隊を持出す。尤も兵隊の數は二千か三千足らずだ。其れに勝てぬのだから幕府もザマはない。が然し其二三千の兵隊でも昔の帆船で送つた日には到底間に合はない。大名の歩く道筋をやつて來ては猶さら間尺に合はない。あれは全く蒸汽船のお陰だ。もうあの頃は兵隊があつちこつちに動く時代だから二三千の兵隊は帆掛船で送つても餘り目に附かなかつたかも知れぬ。がそれでは時機に間に合はない。恐らく蒸汽船が無かつたら私はあの運動は出來なかつたらうと思ふ。蒸汽船が日本の御維新をしたといへるかも知れない、と私は思ふ。勿論幕府でも盛んに蒸汽船を用ゐて居つた。勝安房守の力で蒸汽船を一番多く用ひたのは矢張、幕府だ。で蒸汽船と蒸汽船の戰爭になり得

べきてあつたが、幕府は薩長の兵隊が蒸汽船て上つて來るのを知らなかつたから仕方がない。帆掛船て上つて居たら、いくら呑氣な幕府ても途中てキットやつ付けて居た、そして薩長はブク〳〵だ。それから新式の調練、兵隊の訓練などについても、薩長が最も早くやり出した爲め、又薩長共異人と一度眞劍てやつて居る經驗によつて、頗る善く文明式を呑込んて居たやうだ、攘夷の經驗が討幕に役に立つた。而して薩長の其頃の訓練が今日の陸海軍の基礎になつて居るから、藩閥などゝいうて向ふの奴が威張つても、それ丈けの因縁がないてもない。しかしそれならば日本の製造業の随一ともなつて居る紡績業なども、薩摩が維新前に機械を輸入して來て運轉を始めて、日本ての其元祖てあるに相違ないから、紡績業の藩閥て威張らなくてはならぬ譯だが、それは誰も許さぬ。閑話休題、兎も角も西洋の文明利器應用ては、薩摩は其第一の及第合格者てあつた。而して外國留學生派遣には、大久保がイニシヤチイブを執つて居る。是はえらいが順聖公のお蔭てもある。此人は横文字が讀めたやうだ。自分て書れた英文は何時か展覧會に出て居た事がある。此順聖公は開國論者だ。それて西洋の文物採用に就ては西郷も大久保も皆順聖公のお蔭を蒙つて居る。攘夷と討幕ては長州が先登第一だが、開國進取ては長州よりも薩摩の方が少々先輩の様だ。何をいつても第一は矢張り人間だ。人間が人間のお蔭を蒙つて人間の仕事をする。次第〳〵にそれが成長して行く丈けだ。然し大久保の意地張りの繼承者は今に至るまて殆んど無い。今後も何時あるか一寸分らない。

慶應二年の頃いよ〳〵長州との討幕密約が出來上つた。坂本龍馬が媒酌人て、中岡愼太郎などいふ人が介添人てある。初めは薩摩の黒田清隆が之を聞いた。そして西郷、大保久が領いて木戸が上京をした。其時の約束は、薩州が先二千の兵隊を京都に繰り込う、而してそれを二手に分けて一手て大阪を抑えておいて時機を見計つて長州を呼上せやう、戰端を開かう、幕府を打倒さう。一口にいへばさういふ相談が出來上つて丁

つたそ。れが慶應二年の正月て、其盟約に關係の覺書を木戸がしたのは坂本龍馬あての其手紙の中に見えて居る。それは確か正月の二十七日の日付てはなかつたか。そして其後一時は、西郷なり大久保なりが代る〴〵鹿兒島に歸つて久光公に承知して貰つて、用金の支度やら兵隊の調練やら國の方でも準備をする　代る〴〵歸國し、又代る〴〵上京して其時機を窺つて居る。其間慶喜公は一生懸命て二度目の長州征伐の準備をして居らるゝ。長州を征伐しないと幕府の威信に關するといふのだが、名義は勿論元治元年、京都に攻入つた朝敵だから寛典の御處置は宜しくない、是非叩き付けるといふ譯。此二度目の長州征伐が幕府の倒るゝ基となつたといふが、勿論それには相違ない。但征伐しなくてもモー助からぬ事にはなつて居た。扨この二度目の征伐が慶應二年六月の七日に勅許になつて、長州人は防長一團（ひとかたまり）になつて盛んに抵抗する。勿論朝敵だ、今の山縣公初め其時は賊將だ。然るに其時巳に薩州が此長賊と同盟して了つて居ることは外では誰も知らなかつたに相違がない。それだから薩州にも長州を攻めに行けといふ幕府の命令が出た。薩摩でも一寸困つたらしい。が大久保先生ちつとも困らない。其時大久保は京都にゐた。時の將軍は十四代將軍家茂公だ。板倉何守といふ御老中が朝敵たる長州を攻めに行けといふ事を命ずる。さうすると岩下左次右衛門、木場傳内などいふ薩摩武士が進み出て、長州征伐は宜しくないと言ひ切る。薩州で斯ういふ事をいふのには勿論他に多少の因縁はある。初度の長州征伐の時、西郷は薩州の軍賦役て征討總督尾張大納言に付いて行つて、主として寛典論をして、尾張大納言と長州との間に往來して、寛典て以て一たび事を纒めて居る。それが慶喜公の御氣に入らなかつた。『尾州が芋を喰ひ過ぎて困る。芋の銘は大島とやら申候』といふ手紙を長岡良之助即ち長岡護美公にも遣つて居らるゝ。其手紙は長岡家に殘つて居ます。大島といふのは西郷の事だ。此大島と銘ずる芋を慶喜公も少々たべて見られたら、どんな味はひを公に與へたらう。一寸私はさう考えた事がある。元

來此芋は、齊彬公の時代には、慶喜公の畑の物てあつた。それを慶喜公は喰はず嫌てとう／＼敵にして仕舞はれた。それで此時も薩摩ては兵隊は出しませんとキッパリ言ひ切る。さうすると幕府の方から、箇程の大事を在京の重役名義を以て申し出るは如何はしい。薩摩守の名義で申出ろ。斯ういふのだ。すると岩下、木場の兩人は其翌日直ぐ出頭して薩摩守の名義で同じ謝絶狀を差出した。板倉閣老はこれは餘り早い。其方等は國許に取合せをせずに勝手にやつたのであらうといふ。イヤ取合せる必要は御座いませんと言切る。さうすると板倉閣老は大久保を呼びにやつて長州を討てといふことを話す。此時大久保は醉の眞似をした。御征伐と仰しやるか。薩州何の罪あつて御征伐を蒙る。致方は御座らん、御相手仕る、と白を切つて居る。板倉閣老も之には狼狽して話はとう／＼オヂャンになつた。其頃海舟さんが幕府の用で京都に往來した時に、「そんなに馬鹿にしなくてもよかつたぢやないか」と大久保に言つたといふ話てある。其時勝は薩長の討幕同盟密約を知つて居たかどうか。これも一寸面白い疑問だ。此密約の媒酌人は勝の門人坂本龍馬だ。其龍馬が勝に打明けずに居たかどうだか。其龍馬が此媒介一件て京攝を密々往來して居たのを、勝と一心同體の大阪城代大久保左近將監(一翁)は捕縛の機會を有しながら見逃して居る。幕府方の此人々は此頃からモー幕府を拋出して居る樣にも見へる。此時勝が京都で大久保に與へた書面にもアリ／＼と其意味が見へぬでも無い。福澤先生の瘦我慢論も尤もだが勝等の此あきらめの早いのも確に一說が有ませう。それて大久保が薩摩の代表者て此頃京都に來て居る間といふものは、勝等の一派を別として、幕府の役人達は既に隱然一大敵國視して居た筈だ。幕府にも他の一種の人物が居つた。慶喜公の秘書官とも策士ともいふべき原市之進といふのがある。これは水戸の人て漢學者だ。こいつが何時も／＼大久保の裏を掻く。此人などが此頃の大久保の當面の政敵とても見られませうか。エライ人物てあつたに違ひない。

十四代將軍が慶應二年の七月に死なれた。幕府の方てはいくらやつても何時も負けばかりて長州の方の戰爭の片が附かない。で將軍死んで喪中であるといふ口實で撥を合せやうとする。いゝ口實さ。然しそれ丈けでは撥が合ひかねて、有力な諸侯を集めて、長州の處分について意見を訊くといふ事になる。同時に兵庫開港の問題――これは其年の十二月かに是非開港するといふ約束になつて居る。あそこ丈けは京都の方で異論があつて延期して來たのだが、いよ／＼約束の期限が切迫して來て居る――それについても意見を訊かうといふのだ。大諸侯の會合て此兩問題を極めて兎に角一段落をつけやうとするのだ。島津久光公が第一に召さるゝ。山内容堂公、松平春嶽公なども無論召された。けれども中々おいそれとは出て來られぬ。さうすると、其場合に大久保は直ぐに長州赦免論をする。のみならず、當時十四代將軍の跡繼は慶喜公といふことになつて居つたが、慶喜公は德川家の跡繼はするが、征夷大將軍の跡繼は出來ぬと辭退されて居る。これは當時の大勢の上からさういつたものでせう。處で大久保はそれてよろしいてはないかといふ論だ。さうさして置いて、國事は總て大諸侯で決しやう。先づ長州の赦免が第一だ。兵庫開港は外國人から迫られてやるやうではいけない。こちらて相當の時機を見てやる。先づ長州を赦免しろといふ一點張りて、何處までも意地張る。其頃何か事があれば大久保の馳け附ける處は近衞公、山階宮。幕府方の相談する所は二條攝政、尹宮といふ事になつてゐた。そこで兩方から闕下の大運動が初まる。勤王黨の運動者は大久保の一人舞臺だ。意地を張つて／＼張り拔く。もうその頃（慶應二年）から運動上では京都の實權の半分を大久保が握つて居たのである。

いよ／＼薩摩が幕府を打倒さう、兵力で以て幕府をやつつけて了はふといふ決心をしたのは何時頃か。又其勢力家中で誰が其事を發意したか。私には明白に分らない。勿論順聖公は尊王といふ事に移つて居つた。今日からいへば薩摩は尊王攘夷でなくて尊王開國に近

い考を持つて居つた。開國といふ事は左程明白に書き物などの上にあらはれて居ることが少いが、尊王は間違がない。又順聖公の其趣意を受けて、久光公が大尊王論者。しかし其尊王の仕方は、幕府と共に仕様といふので、公武合體といふ事になつて居る。それて此行懸りからして、到底も久光公が討幕の發意をされたらうとは思はれない。或は其討幕決心の付いたのは、薩摩で最後ては無かつたらうか。次に西郷はどうだ。斯人は元治元年の蛤門の變てはあの通り會津桑名と共に長州の攘夷的レボリユーションを討ちめくつて居て、公武合體の急先鋒を勤めて居る。長州人が一時薩賊會奸と唱えた其目的物の一は、西郷をも指さゝるを得なかつたらう。そして尊王急進黨たる諸國の浪人には始めから慕はれながら、頭の中の水が一合足らぬ奴等では仕様がないといつて、隨分永い間沈着論をやつて居た。元治元年から慶應元年にかけて、長州寛典主義て押貫ひたのも、長州と共に討幕の決心を持つて居たからの事とは思はれない。腹の底をぶち割つて見たらば、只長州人の一時の過失をさう極論痛罵せんてもよい、日本の國狀はそんな事して居る時でない、といふのみて有つたらう。間違ふか知らぬが、私はさう思ふ。それから小松帶刀といふ人はどうだ。斯人は家老の家柄て、其思想の純粋な癖の無い健やかな性質の人てあつたらうと思はれるが、國事に關する其意見が何時も通つて、且之を貫徹せんと心掛けた人とも思はれないから、此人が最初に大事を思ひついたとも考へられない。何れ西郷と大久保あたりて、慶應元年中に大に決心したものと思はれるがよく分らない。而して其年の暮坂本龍馬の周旋て、其翌春長州と同盟したといふ事が、始めて兵力を以て幕府を打倒さうと決心した事の明かな證據となつて居る。而して盟約の内容がいよ〳〵二年を經て慶應三年の暮に事實となつた時、慶喜公初め會津桑名が沸え湯を呑まされた。殊に會津桑名は切歯して薩摩の權變術略に五臟を引き釣つた。そこて鳥羽伏見の開戰、引續いて明治二年また東北の戰爭をやつて、まだ腹が癒えないから明治十年の西南の役には會津人

が大に西郷征伐に骨を折つた。曾て會津の秋月胤永といふ老先生が慶應年間の事を論じて、會津が京都守護職であつた時、會津中將に賜つた先帝の宸翰寫を取出して、涙を流して薩摩人の權謀術略を攻撃されたのを見聞した事があります。舊幕の人達は長州人よりも薩州人が憎ひ且恨めしい。西郷などは之を甘受する外はありますまい。そこで薩州がどうしていよ／＼幕府を見放すことになつたかといふ、其動機はつまり今存生して居らるゝ徳川公爵、其頃徳川方で一番賢明な人として、日本の國命を負擔するに堪ゆる人と見込まれた慶喜公に、事實の上で愛措をつかしたいふのが本でせう。其慶喜公は齊彬公の存命の頃、十三代將軍が死なれぬ前から、十四代將軍に推されて、薩摩では熱心に盡力した。西郷は齊彬公を代表して運動した。が井伊掃部頭にやられて終とう／＼十四代將軍を紀州から迎へて押し立てられた。そして薩摩や水戸の一橋黨は散々な目に逢つた。西郷なども追放された。越前も大失敗て、春嶽公は隱居を命ぜられて、橋本左内は殺された。そんな因縁のある慶喜公に對して、薩摩は餘程長く同情を寄せた。公武合體論は要するに京都一橋合體論であつた。其慶喜公に愛措をつかすに至つたのは、つまり一口に言へば、慶喜公が十三代將軍の輔佐役となられた後、どうしても因循姑息な幕府の俗吏の俗論を制し切れないで、天下の慶喜公となり損ねて、やはり徳川の慶喜公となられたからでせう。さう見る外はない。嘗て山縣公の話を私が聞いたことがある、明治元年にいよ／＼西郷が江戸城を受取ることになつて芝の増上寺か何か確かあの邊に陣取つてゐた。そこへ京都から山縣が來て西郷を訪ねた。いろ／＼な話の末に西郷がいふには「世の中といふものは實に分らんものであります。御承知の通り私は若い時には順聖公を押し立てるが爲めに、久光公即ち島津三郎の肉を喫はん位に憎んで居ました。然るに豈に圖らんや、今日は久光公の名代となつて此兵隊を率ゐて居る。そして敵は誰かといふに、嘗ては順聖公の命を奉じて其人の爲めに生命を捨てんとし、半分は捨てかゝつた慶喜公であ

る。」といふのは西郷の述懐誌として歴史の材料となりませう。それて西郷がどうして何時慶喜公を敵視する事となつたかは、西郷自身の述懐が既に此通りてある以上、下手な論斷を下さないて、不得要領として置いて宜しからう。が大久保に就てはさうは往かぬ。大久保は何でも要領を得ねば已まぬ人だから、こちらも論斷に要領を得たい。私が思ふには、大久保は薩摩人中て一番政治上には眼が明るい。そして又一番頭腦の冷かな人だ。始めから公武合體論には不安心てあつて、又始めから慶喜公には餘り心を打込んて居なかつた。別に確乎たる意見が無い間だけは、勢ひに從つて公武合體論にも慶喜公崇拜論にもなつて居たらうが、いよ〳〵徳川ては仕方がない、慶喜公でもやり切れない、といふ一段となつては、其見解は薩摩人中で誰よりも大久保が先きにつけたてなかつたかと思ひます。從て薩摩の全力を擧げての幕府征伐の決心をつけたのも或は誰よりも大久保が先きてなかつたかとも思はれる。其發意者が外にあつたとしても、之を聞た時には、必ず一議にも及ばず、大久保は討幕に對して大贊成をしたらうと察せられる。幕府の仕樣のないといふ事は日本の眼の明いた政治家のみならず、外國人さへも其時は認めて居つた。元來武力で立つて居る幕府である。其幕府が長防二國を相手にしてどうしても遣り切れない。向ける兵隊は皆ボク〳〵折れたり、クザ〳〵挫けたりする。もう仕樣がない。そして外交上の交渉談判を持込めば一として自ら極め得ない。京都へ持つて行つて朝廷で決を採らうとする。實力も無ければ實權もない。さういふ奴を相手にしても仕方が無いと、外國人ては英人が最初に眼をつけた。そして薩摩の實力實權を認め出した。パークスがプリンス、ローヤル以下三隻の軍艦を引張つて薩摩に行つたのは千八百六十七年即ち慶應元年だ。其時薩摩に對して殆んど國と國との交際見たやうな事を初めて居る。祝砲を放つたり、乾杯辭を交換したりして、久光公忠義公父子に面會して居る。さういふ有樣てあるからして、大久保の烱眼て第一に幕府を見放したといふ事は少しも怪むに足ら

んことだと私は思ふ。英人の書き物には、幕府を倒して朝廷を立てなくては日本の國が立たぬと書いたものもあつて、それが大久保の日記に寫し入れられて居るさうだ。そんなものを見ては、大久保たるものが益々大決心をせざるを得ない場合に遭遇して居つたに違ひない。

そこで其大決心を起して、扨自分の地位を顧れば、薩摩は事をやるに實によい境遇地位に居つた。兵略的てこそ遠隔で不便な地位であつたけれども、政治的には殆ど日本一といふ地位に居つた。此好境遇好地位は初めから策略を回らして作つたものでない。實に偶然に得たのだ。といふのは外ではない。公武合體の遣り繰きから薩摩が京都に据り込んでゐた事だ。そして前にも言つた通りに、大久保の運動で以て、一橋、桑名、會津などに對立して、意地張れば、實權の半分位は占むる事になつて居た。極めて事をなし易い地位だ。此地位を利用して行つたから、大久保は討幕といふ幕に時勢を持ち込むのに、立功立言共に順風に帆を揚げて行つた。そして最上最優の名義がある。それは禁闕擁護だ。一死を以て禁闕を擁護する。將來の日本の運命も分らない時に當つて、薩摩の勤王の素志を貫くのに何の時を待たう。若も京都で私を營むものあり、私の權勢を維持せんとして、敢て帝權を侵すものがあれば承知せん、容赦はせぬ。かう言へば、モー直に討幕の段取に持込める譯でせう。誠に正しい、誠に大きい。これで以て久光公の許しも得たらう、又諸藩にも當つたらう、更に又これで以て京都の朝廷の公卿達に說き廻つたのである。而して長州に對しても京都の事は確に引受けた、と明かに言ひ得たては有りませんか。恰も此時の薩摩の地位は、將棊の盤面でいへば、飛車で美事に成り込んで居る。さうして相手方の駒は此方側の隅の方へ來て全力を擧げても攻めあぐんで、二手や三手では詰みッこ無い。此方側の隅とは外ではない。長州だ。長州は坐つた儘て幕府の勢力を吸ひ附けて居る。此形勢は偶然に出來たので、作つたのてはない。作つたとすれば、久光公が作られたので、大久保が作

つたのてない。大久保も其所になると仕合せな人だ。只然し仕合せな地位境遇を旨く利用したのは大久保の力に相違ない。意地張りの根柢鞏固なりといふべしだ。そして其頃大久保の後半生を託した岩倉公との知遇が結ばれて居る。公と逢つたのは多分慶應二年の末てあつたらうと思はれる。初め岩倉公と大久保と逢つた時には大久保の意見がずつと進んで居つたやうだ。岩倉公は「草間鳴蟲」「三事策」などいふ自筆の意見書を大久保に送つて、始めて大久保に面會を求められたさうだが、此意見書の主旨は矢張り公武合體論だ。矢張り德川の勢力を左程まで度外視してゐなかつた樣だ。勿論大諸侯によつて帝權を恢復しなくてはいけぬといふ趣意てはあるけれども、公武合體の埒内を出てゝはゐない。處が大久保の打明話を聽くと、いよ〳〵幕府を打倒さう。兵力て以てやッつけて了はうといふ事てある。岩倉公も之には驚いたてせう。然し驚いたと共に喜んだてせう。岩倉は豪傑だ。豪傑といふ點からいへは、岩倉公は豪傑の上に乘つかつて居る豪傑だ。勿論階級制度のお蔭もあらうが、なか〳〵容易ならぬ人物だ。て其頃から岩倉さんは一も二も大久保〳〵となつた。實にいゝ運動の相棒を大久保は見つけ出した。朝廷向の事は蟄居中ながら岩倉が一切引受けることになつた。だから其頃から大久保は近衞、賀陽宮などに行く必要がなくなつて、後には近衞、賀陽宮などを踏落して居る。そして傍には中山、正親町三條、中御門などいふ有爲の公卿を結び附けた。さうして餘程反對があつたに拘らず此三公卿を其時の朝廷の議奏職といふやうな重要な地位に推薦運動して、それが成功した。慶應三年十月十四日いよ〳〵討幕の密勅を乞ひ請けた時には、此三卿が副署して居らるゝ。恰度後醍醐天皇が北條を打滅ぼすの綸旨を勤王の諸侯に賜つた時の格だ。そしていよ〳〵同年十二月九日のクーデターを行ふといふ事になつた。此クーデターの筋書を悉く立てたものは岩倉と大久保だ。が岩倉は蟄居中だから、まア大久保の一人舞臺で、其勢力を絶頂まで揮つたといつてもよからう。君も此頃大久保に頗る氣になる政敵

があつたとすれば、誰だらう。或は新たに土佐から飛び出して來た後藤象次郎を擧げる外は有りますまい。此時の後藤さんは隨分えらい物であつたてせう。坂本龍馬も土佐人だから、其時後藤と一所になつて又土佐論の手傳をして居る。土佐論は寧ろ不思議だ。アレは吉田東洋といふ人があつて、あの人の學問識見があゝいふ風にあらはれて來たのですか、善くは知りませんが、既に慶應三年の秋から、上下兩院を開いて萬機を公論に決するといふ事を堂々と京都で主張して居る。さういふ事は其頃の薩長の豪傑連も誰も夢にも考へてゐない。形は似てゐるが、只賢明な大諸侯を集めて事を決する位の事しか考へてゐない。後藤は無論薩長が連合して居ることは知つて居た筈である。坂本が言はなかつたにしても、臭ひは嗅いて居た筈である。山内容堂公も同樣である。多分薩長の尻馬に乗るのが厭だといふのであつたてせう。兎に角斯ういふ別論を起して來た。此論が討幕實行とこんがらかつて邪魔になりはせぬか、どうかといふ事は、大久保も考へたらう。

其頃は大久保がいよ〳〵討幕の實行の時機を何時に選ばうか、又當面のいろ〳〵な事件の切り捌き具合を其時機に如何にして吻合せしめんか、と此れについて餘程苦慮したらうと思はれる。片方の長州では兎角薩摩の同盟が當てになるかならぬかを心配して居る。品川彌二郎を代表者として薩邸に潜まして居る。山縣も樣子窺ひのため遣つて來る。薩摩は權變に富んで危いといふ事を思つてゐた。私は嘗て品川の話で聞いた事がある。其時日は確とは分りませんが多分慶應三年の初め頃の事であつたらうと思ふ。大久保は一面には意地を張り拔いて、長州赦免論で以て、一橋、會津、桑名などの論に對して鍔元で叩き合つて居る。其中に十四代將軍が死なれて、それから又不幸にして孝明天皇も慶應二年十二月廿五日に崩御になつて、世の中がガラりと變つたと思はれた時代が一つあつた。或は非常な失望、或は非常な騷亂の豫想かなんかで人心大動搖の時代が一つあつたのである。其時代に大久保は今言つた樣に一面には幕府へ對して意地を張り拔きつゝ、一

面には、もう實行の時ではなからうか、いよ〳〵兵隊を繰り込んで長州兵を呼び寄せてやつてはどうか、といふ考を起しはしなかつたか。品川のあの話が其時代の事をいつたのではなかつたかと思はれる。恰度其時西郷が國に居つた。大久保はいよ〳〵決心したらしく、西郷と相談するといつて國へ歸つて行つた。品川は胸をドキつかして待つてゐた。處が大久保が悄々歸つて來た。大久保がいふには、どうも西郷が折合つて呉れない。西郷の意見では、兎も角も一橋〳〵といつて長い間天下から囑望された其一橋が徳川の跡を取つた今日である。どういふ事を一橋公がやらるゝかは天下の諸侯皆囑目して居る。此時代に事を初めるのは利益ではない。一橋は如何なる人傑でも遣り損じるのは明瞭だ。其やりしくじつた時期を待たうといふ意見だと大久保が語つた、といふ事だ。これは確に慶應三年の初頃の事と私は思ふ。或は大久保が西郷の名を藉りて長州方の逸るのを抑へたのではないかとも想像されるが、然し長州がいくら焦つた處て大久保のあの時の勢力ては自分で之を抑へ兼ねるといふ事もあるまい。矢張り私はあすこで大久保が一寸大決心をしたものと思ふ。そして西郷の深謀遠慮に抑へられて其意見に同意したものと思ふ。ソコになると西郷もなか〳〵尋常の鼠でない、軍人一點張り、勇氣一點張りの男でない。雄材大略、天下の重さを一身に荷ふ丈けの資格が十分ある。西郷の西郷たる所以がこゝにも現はれて居らうと思ふ。大久保先生も此場では西郷に一本やられて居る。

話があとに回りますが、長州善後問題及兵庫開港問題のため、召れた諸侯達は、中々一寸出て來なかつたが、とう〳〵慶應三年の三月か四月かに出て來る事になつた。島津久光公が勿論旗頭だ。私が思ふのに、西郷の大擧決行尙早論の結果で、かう成行く事となつたのて有らう。それて久光公は西郷をお伴としてお出になる。越前の松平公、土佐の山内公、宇和島の伊達公も出られる。主として此四人だ。其時は久光公は單刀直入に長州をお助けなさいといふ論を主張された。大久保の從前の主張丸出して、薩長同盟の方針が明かに暴

露して居る。が左なくては天下の勢ひは仕方がない、二度目の長州征伐の駄目な事は明かだから、其他の諸侯も異議はない。然し慶喜公はなか／＼決しない。四諸侯の主張が行はるゝが如く行はれざるが如く、極めて養え切らずに居つたが、とう／＼慶喜公の意見が行はれて、四諸侯の意見は行はれない。久光公は折角自ら出られたが、公武合體と同樣、こゝでも又失敗だ。然し此失敗は西郷も大久保も無論豫期した失敗だ。もう腕でなくてはいけぬ。口先ばかりでは何にもならぬ。空名だけでも實權は猶慶喜公にある。いくら意地を張つて、主張を立てゝ、幾度之と議論しても所詮は無駄だ。碁の兩劫にひつかゝつて居るやうなものだ。大局に打勝つには大に手を變えて行くより外はない。斯ういふ事がもう分り切つてゐた。此會議に失敗された時には、久光公も最早いよ／＼討幕の決心をされたと思はれる。恰度其時だ、山縣が長州から薩摩の樣子を伺ひに來たのが慶應三年五月だから……。西郷も大久保もいよ／＼決心の決行といふ場合に臨みかゝつて、同盟國の長州に疑はれて居てはたまらんから、山縣を久光公に引き會はせた。さうすると、久光公はもう大決心したといふやうな事をいはれたので山縣も安心して歸つた樣子が其「さみだれ日記」に見へてある。さうして今度は久光公の方から大久保を長州に使に遣られた。而ても其年の秋になつて八月か九月だ。いよ／＼大仕事の初まる少し前だ。これで薩長同盟がいよ／＼固まつたてせう。此傳記の中にも大久保の日記から長いものを引用して、其時の交際談判の筋道が明白に分るやうにしてある。其頃まで長州には高杉晋作が生きて居はしませんか。が主として大久保と折衝したのは木戸である。で大久保が行つたについて長州の御前會議が開かれる。忠正公が其頃の藩公で、後の元徳公と親子並んで御臨席になる。桂(木戸)以下の主もなる家臣がズラリと居並ぶ。廣澤も居たでせう。其處へ大久保が出て問答する。「愈々薩摩では兵隊を京都に繰り込むとにいたしました。今度は長州からも一所に兵隊を入れて下さりたい。日頃の決心を行ふ時機が漸く到着した。三郎

の決心も此通である。實はこれまで貴方では長々と德川勢を引受けられて非常の御盡力であつた。今度は薩摩一手丈けで京都で引受けてやるべきでありますが、何分皇運の隆否に關する神洲の一大事で有りますから思ふに任せませせぬ。どうぞ長州の兵隊も出して下さい。」という樣な事を言つてそれから其手順なり策略なりについての相談が初まる。大久保の日記に大要の筋書だけではあるが、大久保と木戸との間の極デリケートな駈引の具合が窺はれるやうにも思ふ。其時は實は薩摩一手でもゝ往けたてせう、少くも薩摩人は其自信を持て居たてせう、けれども長州人の腹の底には、薩摩が前に言つた樣な京都に於けるよい地位と境遇を利用して、天子を挾んで諸侯に令するといふ樣な事を獨でやつては、長州が馬鹿を見るといふ掛念がある。其時木戸が斯ういふ事を言うて居る。かゝる大事件を行ふについては最もわるい結果が起つた場合も想像しなくてはならぬと思ふ。幕府が佛蘭西と結んで居ることは明かである。一寸挿んで申しますが、此事は元より西郷も大久保も承知の事て、勝の記錄の中にも載つて居る。那翁三世が例の手を日本に出したのだ。佛蘭西は其頃メキスコ征伐を遣りしくじつて、外で何か帝國的功業を擧げなければ第二帝政が持てなくなつて居る。て佛蘭西人は小栗上野介などゝ相談して幕府を助けやうといひ出して居る。小栗も幕府の豪傑て、佛蘭西の力を藉りて薩長以下の大諸侯の始末にいけぬのを叩きつけて、今一度德川て日本を統一しようといふ政策をとつた。薩摩人が英國に結んだのも其反抗の意味だ。長州も聊か英國に依つて居た。其頃の日本の有樣では外國の勢力を藉りねばならぬ程、內爭に疲れてゐた。氣の毒にも幕府で小栗などのやうな考を起したのも強ち無理てない。又薩摩人も長州人も少々英人に頭を下げた。が幸にしてとう〳〵英人の力を藉りる處まで行かなかつたのは日本の爲めに喜ぶべきだ。只內々に武器の世話、蒸汽船買入の世話などにはなつたらうが、兵力は藉りてない。西郷が大久保に與へた手紙によつて此間の消息が分る。それは慶應三年の春てもありますか。

パークスが大阪に來た時に、西郷は久光公の代理として訪問に行つて居る。其時の話の模樣を大久保に報導して居る。要するに佛蘭西人があゝする、斯うすると、橫濱邊で幕府に取入つて商權壟斷をして居る事を話して、英人に氣を揉せて置いて、それで外交的に政治的に英人から佛蘭西を牽制して貰ひたい主旨で、聊か申し込んだ其本意は只牽制して貰へば足れり。討幕の爲めに英人が力を惜まぬ態度を示せば佛蘭西は多分動くまい。それで滿足だといふ譯。其時確かサトー氏が通譯をしたが、サトーは或は兵力の援助が必要でないかといふ意味のことをいうた。それには自分(西郷)は、國內の事にお前さん達の助けを受けては甚だ赤面だ、というて斷つたと書いてある。これで日本も少々助かつて居る。兵力を借りるまでに至らぬとしても、若か下手な事を澤山にやられたらば、それが因緣となつてドレだけ維新後の日本の國權に祟つたか分らぬ。日本武士は本來國辱の何物なるかを心得て居る。今の國際法の第一義は、自然に日本武士の氣象氣慨の中に存する事となつて居る。これは封建時代に、自國の領分の事については、外の藩の干涉は一切御免蒙るといふ封建法に本づいて居るてゞ有りませう。が此封建法を國際法に活用して勝を取つて居る事は古い所にもある。寬永年間の島原騷動の時、亂民は宗教上の信仰から手向ふのだからなか／＼手剛い。其時長崎に居つた和蘭人が船を廻して來て叛人を砲擊してやらうかといひ出した。そこで之を賴むか否かと問題となつて、御名代老中松平伊豆守の本陣で攻圍軍諸將の會議が開かれた。其時細川越中守は內亂鎭定に外國の助けを藉るのは國辱だといつて、謝絕論を建てゝ、それに決して居る。尤も當然の事だ。幕府の末政、勝一派が江戶城を引渡して、小栗上野に慶喜公が直接に免職を言渡されたのも、國辱に代へられぬといふのでせう。今日慶喜公に御尋ねしたら、さう答へらるゝに相違ない。今日は誰だつてあんな事のいけない事を知つて居る。

て話が元に戾つて、木戶は大久保に向つて、若し幕府が佛蘭西の力を藉りて爭ふやうな事があれば、どう

いふ變化が起らぬとも限らない。其時には禁裏は御動座の必要が起るかも知れない。そこで何處へお連れ申すかと問うた。薩州を第二の京都にしはせんか、それでは長州は堪らないとの疑念の掩ふ可らざるものがある。大久保は其れに答へて大阪の積りですといふた。これは當座の答へでなくて、京都の軍略會議でさう決して居たものと見へる。若も大阪が梗塞して行かれぬ事なれば、丹波丹後の方へ天子を奉じて逃げるといふ策もあつたらしい。建武中興の時の楠木正成ほど謀策が積んて居たかどうか、まだ善くは知りませんが、中々以て後鳥羽天皇の北條御征伐の時の比では無い。そして大阪御動座の議は、場合により一轉して、海路て長州にも薩州にも奉迎し得る譯となるから、長州にも異議がなかつたてせう。木戸は一座の面々を見渡して何か外に御質問になる事がないかといふ。誰もない。毛利公は御決心の程敬服の至り、疲れては居るが兵隊を差出して、驥尾に附してやりませうといふ事をいはれる。そこで大久保には刀を呉れるか何かして饗した。

それでいよ〳〵實行の幕。

しかしあの十二月九日のクーデターの一件は、私は大久保傳中に入るよりも、半分以上岩倉並に西郷の傳中に入るべきものと信じて居る。建設的と共に破壞的に暴力兵力が働くのだから、其力の代表者が目立ちて見える。而して原動力の一本家たる岩倉公は其頃蟄居してゐたから表面には出てゐない。が其動力としての大膽不敵な度胸は、寧ろ凄じい位だ。尤も岩倉公も心配性てもある。大に心配された樣子も見える。それに又大久保の心配は一通りや二通りでなかつたやうだ。もうあつちにもこつちにも大擧の手筈手配の約束をして居る。處が其約束が思ふやうに行かない。薩摩の中にさへ注文の一致しない分子がある。幸に久光公が動かれなかつたからよかつたが、それでも差支が先々で起る。それを一々論破し或は宥め賺して歩く。其任務は一切大久保の負擔だ。朝廷から討幕の密勅を乞ふにも、中山や正親町三條（嵯峨侯）や中御門やが其奏請の決心をさるゝになか〳〵手間が取れる。根本の決心は

出來て居ても「腐れても鯛」といはふか或は鯨といはふか、大きなヅウタイの德川をやるには、薩長といふ懷刀だけでは心細く思はれる、躊躇される。一々之を說落すのは非常の苦心だ。岩倉も盛んにやつたが、大久保は一方ならぬ心配だ。折角說き落すことは說き落した公卿達に對して、會津、桑名若くは新選組の近藤勇などからは暗殺の手が廻つて來る恐れがある。それも保護しなくてはならぬ。そんな世話やら心配やらはみんな大久保の一手引受けだ。其間に前に一寸言つた後藤象次郎の運動の手が大に廻つて來た。アレは不思議なコインシデントだ。一方には討幕の密勅が十月十四日に薩長に向て降つた。そして一方には土佐論の運動の結果、慶喜公の政權返上の上書が出る、其上書の日附も同じく十月の十四日だ。處て土州人と薩州人との交りは長い。西鄕などは何時も土佐に飛び込んで行く。容堂公とも板垣とも仲が善い。此年の春久光公にお伴をして上つた時も一足先きに薩摩を出て容堂公を引出して居る。薩摩の相棒として賴んで居る。容堂公といふ方は、其頃の諸侯中に餘程の切れ物であつたでせう。どうしても味方に賴みたい。大久保はそれ程とも思は無かつた樣だが、西鄕と同論にはなつて居る。それで土佐とも調子を合せ無くてはならぬが、どうも其土佐が他と合奏的にゆかぬ。容堂公は此時も上京はされたが、やがて病氣といつて引込んだ。又やがて後藤が上下兩院設立、政體改革、といふ大議論（西鄕の手紙の中に大議論とやつてる）を持出て來た。一體、前に述べた長州への使節としては、西鄕が行く事の約束になつて居たのを、此土州の大議論に引つかゝつて延引した、といつて山縣あての書面を持たせて、村田新八を一度ことわりに遣つて居る。大議論の大議論たる所以は、此ても分る。ソコで西鄕が何と應答したかといふと、其時一議に及ばず「イヤこれは公平な論である」といつて上下兩院論に贊成した、と土州側の說を傳聞した事がありますが、其結果でも有りますか、藩士の間には此時政體改革同盟密約とでも云ふ可きものが書き物になつて居る。大久保は果して心底か

ら之に同意てあつたてせうか、これが亦一寸疑問だ。西郷は大ザッパて大呑込に呑込のいゝ人だから、且土州との親交因縁を持つて居る人だから、譯もなく同意したてせうが、其時の土州の論ては上院は諸侯て組織して、慶喜公を其議長としようといふのだから、薩長の討幕密約と薩土の政體改革密約とは、此點に至つて兩立せぬもので有るから、上下兩院制は兎も角、差當つて此點に於て大久保はどう有つても同意が出來ぬ筈だ。土州は此點に於て一種の佐幕論て、そして此點を以て一寸薩長討幕密約の裏を掻かうとして居る。此意味に於て後藤は大久保の政敵て有つた。それを大久保が西郷と共にどうして容れたかといふに、土州論を實行して慶喜公を上院議長とするには、順序として先慶喜公をして政權返上をやらせねばならぬ、道中だけの道づれにはなれる。それて同意てせう。土州の大議論に引つかゝらないで、却つて土州を引つかけて、時局一段落の手傳ひをさせてる。ゑらい權略さ。權略その圖に中つて討幕密勅降下と政權返上々奏を十月十四日に同時發現といふコインシデントを造り出した。權略も此の位よく圖に中れば首尾は上々だ。大久保は中山以下の議奏公卿に論じ込んて、即日慶喜公の『政權返上被聞屆』といふ勅旨を出してもらつて、……日付は其翌十五日てせう……、二條城に大爆裂彈を投げ込んて置いて、そのまゝ西郷と手を引合つて、京都の留守には僅々八百の兵隊を吉井幸輔に預け置いて、跡をも見ないて鹿兒島に歸つた。いゝ度胸さ。そして忠義公を押立てゝ、錦の御旗を懷ろにして、三千の兵隊をいよ〳〵京都に繰込む。其時の京都出發が十月の末か十一月の初めてす。京都繰込みは長州兵と三田尻て一處になつて、十一月の二十何日かてせう。隨分神速。これが前に言つた蒸氣船のお蔭。

十二月九日のクーデターて王政復古の發令、明治の天地が開闢となる。そのクーデターの手段は勿論薩長兵の禁門守護、……毛利大膳大夫官位復舊も此時てせう……、そして其夜の御前大會議て土佐の一種の佐幕論が退治せらる、……たしか容堂公は其前夜あたり上

京した……、今の西園寺侯も此席には列してませう、容堂公が中々抗論されて、岩倉大久保も持餘して、たしか淺野長勳公が仲裁をする。容堂公もとう〳〵我慢されて、後藤も陣を引いた。西郷はわざとだか何だか座をはづした樣ですが、大久保は大久保流で、こゝでも岩倉を助けて意地張つて、政敵退治に一歩も假さなかつた。それで土佐は一時明治進運の落伍者となつたが、あとで又西郷に引出される。岩倉公が又薩長に餘り跋扈されるのを危んで。容堂公と土佐人を引き、又肥前の閑叟公を引き、肥前の豪傑も引張つて、御一新後やがて薩長土肥の政府の樣になつたですが、明治六年の征韓論でバラ〳〵と落ちた。其頃橫綱大關の地位になつてた西郷も落ちた。

大分話を端折りましたが、餘り長くなるから、大飛びに飛んで、征韓論で西郷が落ちて、大久保のいよいよ一人舞臺となつた時代の事を話しませう。大久保といふ人は何時も自ら政權の中心點を作つて、何時も其中心に坐り込んでゐる。しかし自我心は無い……と云はふか、或は自ら謙抑すると云はふか、自分が及はぬと思ふ時は、主動的に自ら中心點から退いて、自分より、えらいと見る人を、自身が大骨を折て中心點に据える。威はあり信はあつて、服せられはする人だが、どうも人望が無い、無いではないが、西郷には及ばなかつた。其西郷の人望がどうして左樣大きかつたかに付て下手な解説をすれば又長くなるから止めますが。明治創業の政府で政權中心點造作のためには、大久保も西郷の人望に訴えぬ譯に行かなかつた。それで明治四年に岩倉を勅使として大久保も付いて往つて、其頃薩摩藩の大參事で居た西郷を引張り出した。其頃の西郷の人望は日本を支配して居たでせう。此時大久保が西郷を推立てた主もなる考は、中央集權の基礎を作るためと申して宜しいでせうが、其中央集權といふ事は大久保の頭を放れない大問題だ。それも其筈で、如何に維新といつても王政復古といつても、又藩籍は奉還したといつても諸侯はまだ其儘ソックリ藩知事で居然として居る。中央はどうも薄弱である。故に四年に西郷

を引張り出すと同時に廢藩置縣が行はれた。それは西郷の人望に依つてといふよりも、西郷の武力によつて行はれたのだ。一體廢藩置縣は誰が考へ出したか、之れは隨分異論が多い。が其本は長州側にあつたには相違ない。が實行の本尊は西郷だ。プツ／＼いへば手間暇は入らぬ、片端から踏み潰す、といふ勢ひは西郷の力でなくては一寸出にくい。若も西郷が薩藩本位論か何かで、不同意でも有れば、モーいけぬ。其時西郷を説きに行つたのは今の山縣公だ。木戸は必ず同意すると井上侯が受合つて、山縣公は少々胸をドキつかして西郷の處に行つたらしいが、案ずるより産むが安い、西郷は只一言、「よろしう御座いませう。木戸さんさへ御同意なら」と答へた丈けださうだ。山縣さんは此れ程の大事件だから、今少し熟考してからお答へなさいと言ひたかつたが、ナニセあの西郷といふ事だからと思つて默つて居つたといふ事を話された筆記が有りませう。いよ／＼明治御業政府は西郷の横綱土俵入りとなつた。そして中央集權が西郷の身に權化權現した。

こゝ迄は大久保も本願成就だから異論の有り様がない。只此廢藩置縣の實行が西郷にも大久保にも別に一世一代の困難な事情を惹き起した事を一寸挿んで申しますが、といふのは此廢藩置縣には久光公腹の中で大不平だ。久光公は矢張り封建論者だ、少くも階級制度維持論者だ。大勢には抵抗することが出來んから、默つて居るものゝ、腹の中では大不平だ。ともすれば西郷と大久保の攻撃が出る。殊に西郷は奥羽平定後、草鞋がけで藩廳を踏にじつて、藩政改革をやつて、藩主を侮蔑した、といふ憎しみもあつて、それも一時に破裂して來て、廢藩置縣後、久光公の代理人がわざ／＼攻撃のため上京した。仕方がないから、西郷は明治五年(岩倉大使歐米巡遊中)に西南巡幸を申請して自ら供をさせて、久光公を宥めらるゝ手段をとつた。處が豈圖らんや、久光公はちつとも宥められない。舊臣たる西郷と大久保とを御信用あつては如何と存じます。彼等は私に對して不忠で御座る。私に不忠な西郷大久保が朝廷に對して忠義な譯が御座りませぬ。斯ういふ論

法で以て拜謁の時に激しく直奏されたといふ事を聞いた。事實とすれば西郷大久保共に定めて恐縮したてせう。尤も西郷大久保ばかりてなく、三條公も岩倉公も久光公には惱まされた。積極的に其意思を事實にする事が出來ぬので、後は消極的に其意思を支持して居られたと見へますが、薩摩には御一新前後に實に上にも下にも不思議程、種々な人傑が出たものであります。西郷も大久保も此時分は只久光公の鋒を避けて、逃げ廻つて居る外は無つたでせう。

明治四年から二年間。即ち六年の征韓論の破裂までは西郷の一人舞臺だ。明治四年の廢藩置縣が行はれると、間もなく岩倉大使の歐米派遣となつたから、ます〱左樣なつた。大隈さんの話によると、その歐米派遣は俺が發議して俺が行く積りであつたといはれて居るが、どういふ譯か其大隈さんは行かない。大久保は行てもよし、行かなくてもよしといふ態度てあつたらしい。大久保は此時參議になつてない。即ち中心點を讓つて居る。そして大藏卿專任だ。此時の官制は三條、岩倉は大臣、其下に參議を一人置く積りになつて居た。而して西郷を引張り出して一人參議とする筈であつたが、西郷は謙遜して木戸を推し立てんとした。處が木戸はどうあつても承知しない。據り所なく、それぢや御一所にやりませうといふので西郷と木戸が參議になつて、同時に肥前と土州から一人づゝといふので大隈と板垣、都合四人參議になつた。そして大久保は大藏卿だ。尤も其頃の大藏卿は今の大藏大臣とは違ふ。內務省もなく、農商務省もなく、遞信省もない時代だから大藏卿は皆此等の實權を握つて居る。然し閣議には列しない。斯ういふ地位に居つた。そしてどういふハヂミになつたか木戸と共に歐米視察の副使になつて出かけることになつた。後になつて伊藤さんなどは政權に聊か遠かると直に歐米巡回をした。それで此がその一大先例であつて、西郷を一人ぼつちにして、政事家が總てストライキをやつた樣にも思へますが、意味はあながち左樣でも無つたらしい。本當に歐米を視察して、今後の日本をどうするかの參考にするといふのが

主意であつて、條約改正といふ問題にも關係がある。改正の期限は其翌年かに迫つて居る。實はあの不完全な不對等條約即ち國辱條約の改正期を勘違ひして、此期限て向ふから改正を促ると共に又もや日本が大いぢめにいぢめ拔かるゝ。それては堪らない。こつちから出向つて行つた方がよいといふ意味がある樣だ。そんな事だから此時の此國書なども今から見れば議論すべき缺點がある。條約は改正しなくてはならぬ。然し維新日尚淺く、國内の制度文物の整はざる今日に於て改正するのは困る。日本の制度文物を改めてから改正したい。其れについて大使をやるから商議を求めるといふ意味になつて居る。これは餘程の缺點でせう。自分て自國の制度文物を改正するに外國の商議を求める必要はありはせないのだ。

て、大久保がいよ／＼やつて行くことになつたが、行く時には大久保は餘程心配であつたらしい。行つた後て自分が造り立てた西鄕中心の政府がどうなるか、心配で／＼堪らなかつたらしい。西鄕に預けて行くから西鄕がやつて行くだらうと安心の出來る大久保でない。世話する限りは世話して行きたい。西鄕は大ザッパな所がある。何も彼も一口で呑み込む。その一例が又ある。それは大久保のゐない後大藏を引受けるものは時の大藏大輔井上馨だ。けれども井上は大久保の行くのを喜ばない。あなた殘つてゐて下さいといふ。井上ばかりでなく大久保の行くのを止めたものは大分あつたやうだ。井上はあなたのゐない後は誰も相談相手がないといふ。大久保は西鄕に相談しろと答へる。いや西鄕を相談相手にしてもよければよろしい、となつた。西鄕の大藏主任といふのは一寸おつだて。が西鄕先生譯もなく引受けたらしい。それで大久保は自分さう仕は仕たが、今發つまでも心配して居る。岩倉にやつた其手紙の中にも『西鄕の大藏係りは何かとゴテツクべきは眼前に見え透き候』とある。見え透くのを見え透かしながら、已に西鄕が引受けてる以上、自分は出て行かねばならなかつた。實は征韓論の破裂を待たずして其時から西鄕と大久保とは互に遠慮し合ふやうに

なつてゐた。大久保は細かい。西郷は無頓着だ。日本を丸呑にするといふ量見だ。朝鮮までも呑む積りだつた。その呑込み具合が、却つて大久保に呑込めないで、心配は堪へないで出ていつた。それで内々心を牽されて居たからでせう、外國に行つては存外に國際政治に氣が入つてない。第一に米國に行つた。時の米國公使吉田清成は早速實地に條約改正を初めたらよからうといふ論をした。どうしたか直にそれに動かされて談判をやらうとしたが、全權委任狀を持つてゐない。それて委任狀を貰ふため伊藤を連れてわざ／＼日本まで歸つて來た。これは明治五年の初めだが、こりや大久保にしては輕率でせう。馬場辰猪、尾崎三郎などいふ連中が當時倫敦でそれを聞いて、そんな事で行けるものて無いといふので、それを止める爲に米國に出懸けて居る。日本でもなか／＼ゴチヤつく。大使が行つたのは條約改正實行の爲めてないといふ事で、時の外務卿副島さんが頑張る。然し兎も角も米國々務卿と話を仕始めてるからといつて、委任狀を貰つて出て行つたが、やはり本當の談判にはならなかつた。こんな事で一マゴツキ、マゴツイた。そしてマゴツキながら歐洲に廻つて行つた。まア今の人の回覽、視察と變つた事はない。隨分エライ人にも逢つて居る。ビスマークだのチエールだのにも逢つて居る。ビスマークとの話は傳記の中にも出て居る。流石ビスマークだ。思ひ切つた事をいつて居る。國際公法といふものは屁の糟でもない——まサカ屁の糟ともいはなかつたが、——詰らんもんだ、仕樣のないものだ。强國は自分の便宜の時には國際公法を楯にとつて弱國に當るが、自分で都合のわるい時は兵力を以て國際公法に換へる。斯ういふ形勢の下に永く普魯西は苦んだ。自分はどうかして斯ういふ境遇から脫して、反對に國際公法を利用するやうな地位に立ちたいと少年時代から肝に銘じてゐた。其結果て漸く獨逸帝國が出來た。お前さん達も將來日本を負擔する身體であれば此事をよく諒解しておきなさい。同時に言つて置くが（コヽてビスマーク先生一寸外交をやつて居る）、さうして出來上つたから獨逸帝國

は苦勞人だ。日本でも苦しい時は御相談相手になりませう。などゝいつて居る、一寸なんとか言つてやりたい處でせうが、之に對して大久保がどういふ話をしたが分らない。まア近頃の歐米視察と同じやうに見物をする、御馳走を喰べる。遊びもしたんてせう。尤も大久保といふ人は嚴格な人だから、馬鹿遊びなどはせずに出來る丈け調査などもしたんてせう。

そんな事をして居る間に、本國の方てはなか〱六つかしい問題が持上つて居る。樺太の境界問題、臺灣の生蕃が琉球人を殺したから其處分問題、朝鮮はどうあつても此儘に投つておく譯に行かんといふ問題、此三つの外交問題か本國政府の解決を要する場合となつて居る。又大久保等は國を出る時に、いろ〱心配して其結果留守の政府を束縛して、留守中は一切改革しない、人も變へないといふ事にして居るのに、西郷はそんな事に無頓着に變へた。政權の中心點が膨脹して、後藤象次郎も江藤新平も參議になつて居る。まア殆んど西郷内閣が出來上つて居る。そして江藤は長州藩閥攻擊を始めて、其代表者の井上に對して激烈な開戰をやつて居る。參議兼司法卿てあつたから、ピシ〱と司法權を振り廻して其頃起りかゝつた政治的腐敗征伐を名として、金權力を振り廻す方面を當り散らしてゐる。本來韓非子の刑名學者てあるのに、佛國法學を加味して日本の司法權確立論を立て、裁判所構成組織の國費支出を求めて、大藏省に拒絕されて、もう井上との確執は非常なものだ。それやこれやの事情があるからてせう。大久保と木戸が巡回中呼び返されて、早く歸ることになつた。明治六年の初めに大久保は直ぐに歸ることにした。木戸は直ぐに歸らずに露西亞を見て歸ることにした。それて大久保は明治六年の五月二十七日に歸朝して居る。處が其の少し前、即ち五月の五日に井上と澁澤は大藏は持てませんといふ建白書を出して辭職して仕舞つた。果して大藏がゴテツキ出來た。西郷は構さんて無い。大久保も歸つて見て、どうもかうも手がつけられなかつたらしい。尤も井上澁澤の跡は大隈が引受て、大藏事務總裁て技倆を現したが、あれ

は西郷がア、したか、大久保か、何時か大隈さんに聞て見ませう。兎に角大久保は五月二十七日に歸つて來たが、征韓論の破裂は十月二十三日だから、其迄の間は六ケ月ある。此間大久保は殆んど何もしてゐない。少くも九月十三日岩倉の歸るまでは何もしてゐない。其時一人で國務を負擔してゐた西郷は大久保と刎頸の友達ぢや無いか。且二年前に大久保が引張出して、政權の中心に立たしたのぢや無いか。歸つたならば早速に、留守中はどうであつたか、向ふの見聞はどうであつたかと、互に手を執つて、話し合ひもし、論じ合ひもして、今後の一定の經綸も立てなくはならぬ筈だがソレがない。何でも西郷が屡々大久保を尋ねたらしく書いてあるが、どういふ話をしたか一向分らない。歸り早々から西郷と大久保との間には大きな隔てが出來上つて居る。そしていよ／＼西郷が獨り日本政府の主人公になつて、……太政大臣は三條公だが……、大久保は外遊二年の間にすつかり政權の中心點から不思議に追ひやられて、入るべき餘地が無くなつてゐたものらしい。當時に起つて居る總ての難問題についての解決なども、西郷は大久保に計つたか。内々意見の交換はしても、合はなかつたか、どうか。それで大久保は呼びつけられたから早く歸つて來たが、用が無い。溫泉などに行つて居る。溫泉も近い所ではなく有馬の溫泉へ行つて居る。

九月十三日に岩倉が歸つて來ると共に、又大久保の舞臺になつた、そして其結果は大久保の一人舞臺になつた。矢張り大久保には岩倉が合ひ性だ。大久保岩倉といつてよいか、岩倉大久保といつてよいか、二人出合は無ければ芝居は打てない。もう西郷大久保でも、大久保西郷でもいけない。そこで何で其時西郷と大久保との間にさういふ隔てが出來上つたか。西郷は一言も其說明をした事が無く、大久保も同樣だ。と思ひます。誰か聞いた人が有るか無いか。恐らく無からう。或は閻羅大王樣が地獄の法廷に呼び出して問ふても二人共だんまりだらう。說はいろ／＼聞かぬでも有りませんが、皆揣摩臆測ばかりの樣だ。どうして西郷の方

で、イヤもう酷い目に會つた。不得手な問題を引受けて弱つた。君が歸つて來て呉れたので重荷を卸した。之れからやつて貰ひたい。と何故斯ういはなかつたらう。西郷の方から斯ういはなければ、大久保の方からは話しにくい。斯ういふ風になれば極めて安全だつた。けれどもどうも西郷にそれが出來ぬ事情があつたでせう。といふのはあつちにもこつちにも約束がしてある。若し、大久保に政權を渡せば、其約束の後尻が結ばらないといふ事があつたでせう。又それは新歸朝後の大久保の意見が變つて居たからでせう。若し左程意見が變つてゐなければ西郷が、お前の留守中に斯うなつた、と打明話をして大久保もハテ困つた。然し何とかしやう。けれども俺一人では困る。相變らずお前も立てゝ貰ひたい、二人で何とかしやうといふやうな事も出來る筈だが、斯ういふ相談が出來られぬ程、意見の相違が甚しかつたものと見える。そして其相違の最も激しいのが征韓論だ。あれは言ふまでもなく朝鮮がわるい。日本の王政復古、並に明治新政府を認めぬといふのみならず、國使に無禮を加へて居る。つまり其時の朝鮮は馬鹿だ。馬鹿といつてよいか、丸で無教育の兒供といつてよいか、箸にも棒にもかゝらぬものであつた。それを大人らしく見ない日本も、其時は大人らしく見得る地位でない。向ふを一國と見て居る。德川幕府が聘問使節を往來せしめて、國書を交換してる間柄の續きですからナ。其朝鮮が明治新政府に恥辱を與へた。どうかしなくてはいかんといふのが征韓論で、其の最初の廟議は大久保の歸つた後に開かれてる。が無論大久保は出て居ない。其廟議の原案は副島外務卿の提出でせうが、先居留民保護を名として若干の兵隊を差向けやうといふのだ。西郷はそれは手順が違ふ。直ぐ兵隊を差向けるといふのは激動の本だ。又名義も十分でない。兎も角も今一應使節を出すべきだ。そして其使節には自分を遣つて貰ひたいといふのだ。其の自分を遣つて貰ひたいといふことには副島初め異議はあるが、其外の事は大抵西郷の論に一致した。太政大臣の三條公も同意した。處が西郷が自分で使節に行かうと

いふのは、朝鮮人は多分自分を殺すだらう。其日本使節を殺したといふので問罪の征伐を初めるといふ段取にしたいのだ。それで自分で殺されに行く役を引受けるといふのだ。そして種々な情實、並に種々な理由で、西郷自身行くといふのを止める人々を、自ら運動して、合掌せぬばかりにして、さう言てくれるなと頼んで廻つてる。事實上の一國の宰相が、こんな事を發意し、且實行に着手したといふ前例は、或は希臘羅馬あたりの古英雄傳中にはあるかも知れぬが、餘り多くは無からう。今の歐米の政治家には無論ない。洋行前の大久保て有つても、之を聞て、又西郷が例の癖を出した、といつて困つたてせう。況んや此時は新式ハイカラ式の大藏卿大久保利通になつて居るのです。然るに西郷は依然たる薩藩西郷吉之助だ。參議とか、陸軍大將とか、近衛都督とか、そんな肩書を背負つても、それが何でもない。あれは死ぬる迄西郷吉之助で死んだ人だ。その一吉之助たる薩摩武士の武士道の上からいへば、國の爲めに仕事をする時は、何時でも生命を投げ出してかゝるが常だ。何時でも生命懸けだ。その生命が役に立つ、國のために大きな役に立つ、武士の本望本願、此上の事は無い。だから西郷が國のためと信じて朝鮮に殺されに行くといふ事は、西郷吉之助の意見としては、何でもない、當り前の事だ。止める者は愚か痴かだ。が、外國人などには餘程説明を加へなければ分らぬかも知らぬ。日本武士道を知る事になつた今日では分りますかどうだか。さて之に對する大久保の反對意見は、岩倉に賴まれ、木戸に推されて、參議に復籍して後、改めて此事件が十月十四日の正院（內閣）の議に上つた時の意見書に見えてます。それには七ヶ條の反對理由を擧げたものだ。財政上の理由もあれば、民政上の理由もある。が要するに凡て政治的で、又國際上の日本の地位論で、日本の國辱は獨り朝鮮からばかり受けて居るてない。まだ對等條約の出來ぬから、列國からも總て侮辱されて居るといふ事もある。又わざ〳〵日本使節が殺されに行つて殺されねば、朝鮮の問罪理由が具はらぬ事、その事が既に征韓の不條

理を示す。といふ理詰めの論も有る樣です。之に對して打明けて西鄕に說明させたならば、何と言ひますか、御維新後政體こそは改つたけれども人心は改らない。相變らず遊惰だ。其上奢侈になつた。國は此儘ては腐る。戰爭といふ一の下劑をかけて腹の中の毒を下して了ふ。そして初めて新日本の基礎が出來る。とさういふ風にても立言するてせう。大隈さんは、前に述べた久光公の西鄕不忠論にひどく心を痛めて、それて西鄕が早く死にたいといふ決心をして、征韓論を幸ひに死處を造らうとしたのだ、と西鄕發意論をして居られる樣ですが、それも有つたか知れません。推測の中ては穿つてる樣に思はれます。がア、一途に推し詰まつたのは、私はやはり陸軍に對する約束の末と思ひます。役に立つ戰をさせてやるといふ約束の末てせう。

さらぬだに一の人望の本尊が、武士的犧牲に自らなつて、豐太閤以後の朝鮮征伐をやつて、戰をさせやうといふのてす。門下の桐野篠原は勿論、陸軍が吹き破る程の元氣を振ひ興して、此時其本尊の壇下に集つた其勢ひは想像されませう。軍隊の中には山縣といふ長州出身の勢力家もゐる。之れは別派てあるが其時これも矢張り西鄕の下に統率されて居たことは爭はれない。山縣さへも俺ア兵隊だから戰さをしろといはれゝば戰をする丈けだといつた相だ。主張はしないが、戰はやらうといふ。以て勢ひを知る可した。此勢ひを代表した西鄕の征韓論は非常に强勢なるものてあつた事は亦想像がつきませう。大抵はそれに從はなくてはならぬ事になつてゐた。西鄕內閣の人々は、從ふ處てない。同じく熱心な主張者だ。主張の內情はいろ〳〵有らうが、それは何てもよい。三條公も同意で、八月中に廟議は決して西鄕の使節も極つて居た。然し大久保は反對だ。又折りが有れば誰に向つても反對を公言することを憚らなかつたと見へる。岩倉公は九月十三日に歸朝されて、此形勢を見て、之てはいけぬ。何とかせねばならんといふので大久保を迎へにやつた。實は西鄕と大久保の意見の相違の甚いのを餘り知らないて、何とかなるものと思つて居られたらしい。大久保は岩倉

公の歸朝のお迎へにも出ずに矢張り有馬に引込んで居つた。岩倉の呼び出しによつて、出て來た。コヽで岩倉公の問ひに應じて自説を述べたらう。此時岩倉は直ぐ大久保に同意したかどうかよく分らない、初めは多分折衷説位に雙方折り合ふ積りであつたらう、又折り合せ得ると思つたんでせう。それで大久保を呼んで盡力させ自分も盡力する積りであつたらしい。處がいよいよやつて見ると大久保は一歩も讓らない。頑强な反對説を立てた。よくそれを聞くと岩倉も矢張り段々大久保の方に同意であつたらしい。只最初は西郷に遠慮して、又折合説實行のため、大久保に同意だといはれなかつたやうだ。木戸は岩倉よりも先きに歸つて居つたが、これは本當の病氣で引籠つて居る。が、論は全然征韓論反對だ。此人は大久保以上の新式參議木戸孝允となつて歸朝してる。それで反對の程度をいへば、大久保に優るとも劣らぬ位の反對論だ。然るに岩倉は先づ内心反對の表面調和論を持ち出した。三條公も西郷に同意しなくてはならぬので同意したが、いろ〳〵岩倉公と論じて見ると、早まつた、といふ風に思はれて、ソロ〳〵岩倉の調和論に傾いて來た。木戸大反對であるといふ事が分ると共に、伊藤、井上、それから一種不思議な現象だが薩摩の黑田清隆も皆反對論を立てた。さうして兩派がハッキリ分るゝといふ現象を呈して來た。名は三條内閣でも實は西郷内閣であるが、其閣員たる大隈、大木などは激烈な反對論ではないが、根柢のある贊成論者でもない。之を別にして、此確然と二派に分れたのを調和するといふ事がなか〳〵困難になつて來た。そこで大久保の第一に考へた事は、之は自分では六つかしい。岩倉は自分に調和なり、西郷を論破するなりせよといふが、調和は好まない、さて論破が六つかしい。第一西郷と爭ふのが難義だ。之は木戸を出して貰ひたい。木戸が自分と同程度の反對論者なことを知つて居るから是非起たせようといふ注文だ。私にはさう見へる。が木戸は病體で、且つ木戸本人は此場合大久保でなければならぬと腹の底から思つて居る。それに長州人が暴論をすれば己れが抑える

が、薩人だから大久保が抑え役だ、といふ樣な一種デリケートな薩長關係論も有つたらう。大久保が木戸を起たせようとする熱心よりも、木戸が大久保てなければならぬと思ふ信念の方が餘程強い。それて大久保もとう／＼出やうと決心したものらしい。出やうと決心はしたもの丶なか／＼出ない。出た所て三條公は西鄕に同意して居る。又岩倉の腹の中がどうだかよく分らない、やはり調和論て居らる丶。西鄕がなか／＼調和するものかとこう考へると、自分が出て西鄕に當る外はない、と決心はしたもの丶、なか／＼出られない。勝負ヵ氣になる。負ける位なら始から出ぬ分のことだ、といふんでせう。が岩倉の議力によつて三條公も早まつたといふ考になつて、既に決して居る廟議の實行を延ばせやうといふ事に同意した事の分つた時、見込は付かないながら、とう／＼出て參議を拜命した。其時は何處までも自分て爭はうといふ例の意地張が初まつた所てせう。さうして十月十四日の閣議が開かれた。片方には西鄕、副島、板垣、後藤、江藤ソックリ出て居る。片方は殆んど大久保一人だ。さうして爭論が初まつた。十四日にはとう／＼決しない。そして十五日になつた。然るに十五日には西鄕はモー閣議に出ない。そして自分の說が行はれなければ自分は辭職して直ぐ歸る、と忽ち決心の色を見ぜた。此色を見たばかりて、直に動かされて、三條公は岩倉公と閣議中に別席て二人協議して、又あと返りして、西鄕が朝鮮に行くといふ事に極めて仕舞つた。此時の岩倉の考はどうてあつたか、よく分らぬ。やはり調和論が腹の中から去らぬから、三條と共に動いたのでせう。然るに今度は大久保が承知しない。翌々十月の十七日に辭表を出した。そしてそれと同時に三條と岩倉に宛て丶頗る猛烈な手紙を出した。私には異論がありますが、事の極つた上は詮ないから、今更ら異論は申しませんといふやうな事を書いた。辭表の文句も私ては參議が勤らんから辭するといふので、病氣とか何とかいふのではない。且つ國はどう成行くか分らない、自分は自ら進んで一兵卒となつて死ぬ迄だ、といふ樣な意味も其手紙には書

添へてある。とう〱破裂して仕舞つた。勢ひと云ひますか、何といひますか、マサカ大久保も自分で造り立てた政權の中心點から放り出されて、それが悔やしいから西鄉と喧嘩する、といふ樣な事の有る筈が無い。やはり意見の相違が本で、性質若くは特性の相違が此處に至つて破裂した。大サッパで、大呑込で、圖拔けた勇氣と、歷史に比類の少い意地張と、極端と極端で衝突したから猛烈だ。なんても極端に行けば、長所も短所となり易い。だから短所と短所と衝突したといふ。けれども長所と長所と衝突したといつても同じ事だ。さて其破裂の火花の散るのは一瞬間だ。があとは元の天地晴明といふ譯にはどうしても行かぬ。いくら豪傑でも人間は人間。此場合に又おの〱特性を示してる。十九日の朝に三條公は心配の餘り卒倒した。大病だ。そこで大久保は直に手を出して、三條內閣即ち西鄉內閣を覆して、岩倉內閣即ち大久保內閣を造つた。其迅速さが亦目にも留らぬ。實に際鋭い。どんな場合にも其性を失はないて、自分て其機に復政權の中心點を造り立てる。これが大久保の特性て特色でせう。息の根が止まらぬ間は其手も出る。十九日の夜黑田が大久保を訪うて、どうだと尋ねた。すると大久保は致し方が無い。が一つ秘策があるといつた。それは聞きたいと黑田が乘り出した。其秘策は大久保の日記にもこれこれと明かに見えてゐない。が察する所、吉井友實が宮內省に居る、その吉井に說いて陛下に內奏して、三條公を逃げさせぬやうにしたい、又三條公の病中岩倉公に太政大臣攝理を命ぜられたいといふ事であつたでせう。黑田も勿論大贊成だ。が此秘策實行には大久保も餘程心配であつたものと見えて、其晚直ぐに黑田に手紙をやつて居る。若し吉井に少しでも懸念の色があれば斷じて行はぬやうにして吳れとある。然るに吉井も之に同意して實行したらしい。翌廿日には病氣御見舞として三條公の邸に御臨幸になつて居る。そして病氣は大事にせよ、大事にして國事の爲めに盡して吳れよとの勅旨が出て居る。同時に岩倉公が太政大臣假攝の勅旨を拜した。翌日から岩倉が出て難局を捌く。もう

調和でない、大久保の主張丸出しの捌きだ。其場になつては西郷は全くの無爲だ。何にもせぬ。只運命の連れて行く處へ連れて行かるゝ。其處が亦西郷の特色で、三度も島流しに遇つて、默つて流さるゝ時と同じ特性特色を示してる。岩倉や大久保の方には此場合に西郷が何か働きはしないか、働けばどういふ手を出すかといふ事に心を配つた。或は西郷が自ら參內伏奏して直訴するといふ手が出ぬに限らぬ。で宮內省の德大寺さんに岩倉から手紙を出して、其防禦線を張つてる樣です。徹頭徹尾政治家だ。岩倉もだ。私共も明治十年前後に、大久保は奸物だ、岩倉は大奸物だなどゝ、子供ながら聞いて覺へてます。今傳記を讀んで見ると、こゝいらが奸物といふ名の起つた所以だらうと思ふ外は無い。つまり天皇の聰明を雍閉する君側の奸といふのだ。桐野、篠原などいふ人達は、之を感付いた丈でも憤激せざるを得なかつたでせう。こんな事をする奴等だから、刺客をやつて西郷を刺殺しも仕兼ぬと、心から思つたかも知れませんよ。十年の西南の內亂の伏因は此邊に最も多い。實は此時西郷は參內直訴などいふ手のある事は思ひもよらなかつた。却つて副島以下同論の同參議に誘はれて、二十二日には岩倉假攝太政大臣の所へ行つて膝詰の談判を試みてる。もう餘波を打たせて居るに過ぎぬ。岩倉公は自分は征韓論に不同意だと此時言ひ切る。御論はさうであつても、既決の廟議である、あなたは三條公の代理として之を實行しなくてはならぬと江藤參議が息捲く。岩倉は拙者三條公の代理でも、意見までも代表しはせぬ。忝くも陛下の御命令によつて當職を執る以上、意見を包藏する譯に行かぬ。諸君の意見と共に、之を併せ奏して御裁可を仰ぐと斯ういふ。西郷は默つて歸つた。そして直ぐに辭表だ。あとの四人も辭表だ。岩倉公は此に至つて、復聊か心配的調和論の餘波を打たせた。が此處でも又大久保は特色を出して居る。早速辭表を取次いで、早速免官あつて然る可し、左なくては却つて本人達のためにならぬと論じた。矢張り大久保の意見が行はれて西郷は陸軍大將の名義丈けて、免官になつた。

サアこゝで又私は更に大久保の大特性大特色を認めぬ譯にゆかぬ。一體政治家といふものは武人の權力を酷く怖がるものだが、大久保はさうで無い。征韓論の破裂は、結局意見の相違が本だと歸納する外はないてすから、其衝突は政敵對抗の行爲である。軍人、殊に天下隨一の人望を持つて居る大軍人を政敵として、友誼も友情も拋ち、又その上半生の相互の關係歷史も拋ち、其結果、天下を敵とするの恐れ有るも憚らず、斷然として排斥して、文治內閣を自己中心的に建立して、屹立するといふ其政治家的骨格の構造のしたゝかな事といつたら無い。大久保は到底政治家として軍人輩の下に立つことは肯せない。又餘談ですが、明治八年の臺灣征伐の時に、之れは日本と支那との爭だといつて英佛共局外中立をやつて船も人も借さない。それて政府は弱つたが、臺灣征討都督西鄉從道が承知せぬ。おれは勅命て行くんだから政府の意見がどうあらうと行くといつて行く。大西鄉に困らぬ大久保が一寸小西鄉に弱らせられて、其跡を追つかけて九州に行つたが、旅館に泊つて居る所に故野津大將の兄所謂大野津、即ち野津鎭雄といふ人がやつて來た。此人は薩摩の一代表軍人てあつたが、大久保に向つて『今度もまた因循てゴワンすか』とやつた。すると大久保は膝を立て直して『何じやッチ、七左衞どん』(何だと、七左衞門)とやつた。大野津は默つてしまつた。それを傍て聞いて居つた大迫大尉、即ち今の大將が、『上には上があるものだ』と今に語るさうだ。大久保の對軍人的地步は是だ。私は此點に於ては大久保をゑらいと思はざるを得ぬ。但西鄉に對してはあの通りやりはやつたが、あとはうまくゆかぬ。自己中心の文治內閣が、生命に代へてもやり拔うとした其內政經綸動搖して、やはり人心を纏めるために事を外に求めて、すぐ其翌年の臺灣征伐をやつたのだから、對外無爲主義もめちや／＼だ。これは西鄉が祟つたと云はうか、大久保の意地張が大久保自らに祟つたといはうか。木戸は此めちや／＼に不同意て、長州に歸臥する。大切な政權中心點が大に傾く。仕方がないから、伊藤井上の骨折て八年の大阪會議をや

つて、木戸の氣に入る文治的文明的制度組織建立を條件として復歸してもらひ、板垣等にも返つてもらつた、がやがて又破れて政權中心點が傾く。大久保としては、私は六年以後隨分の不出來と思ふ、見るに足り擧るに足るものが少いと思ふ。それに七年の佐賀の江藤の内亂、とう／＼又十年の西南の大亂でせう。いゝ事は一つも無い。何が國のために成つた、日本のために成つた。成つたものがあつたとしても、あの大久保の功としては少ない。隱然たる政敵の木戸も死、生來の唯一政友即ち生來の唯一大政敵となつた西郷も死、其跡でいよ／＼自己中心内閣が政權を獨占して、伊藤、大隈、武人としては山縣小西郷大山などを使つて大にやつたら、まだ十一年に死んだ時が四十八の大久保だから、廿年が五十七、三十年が六十七、或は大にしくじつたかも知れぬが、うまくいつたら隨分善く日本を造り出したかも知れぬ。が天はそれを許さなかつた。二大政敵が大政變を起して、刺違へて死んだ。そして互に大悲劇中の二主人公となつた。大詩人の大劇詩で二人を歌つてもらひたい。

最後に又更に重ねて言ひたい。大悲劇だが、どうしても大久保の大特色はあすこにより顯はれて居ない。そして私は又大久保の政治家としての本領を武權制馭並に軍人驅使といふ事にして見たい。其意地張も此に至つて最大上乘で無いでも無い。何處でも戰勝國の武人の勢力は强い。之は强ち外國との戰勝とは限らない。内亂鎭定なども非常の勢力の本となる。武人の勢力あるものはなか／＼政治家の注文に欲らない。政治家は多くは持てあます。ビスマークと雖も持て餘した。ビスマークは之を抑へつけるのに、倫敦タイムスの彼の有名な巴里通信員ブロウヰッツを利用して居る。獨逸はあの通り佛蘭西をやつけて五十億フランの償金をとつて、それて再興させぬ積りてあつたが、佛國はチエールの政策によつて案外早く恢復した。てモルトケと維廉一世と內々相談して今一度佛蘭西を叩きつける計畫をやつた。處がビスマークの政治眼から見れば、それは歐洲大局のため獨逸帝國のため宜しくない。然しどう

もそれを抑ふる手段がない。止むを得ず自分の親近の人を使つてブロウヰッに帝と其參謀總長との密謀を打明け、之をタイムスに掲げさせた。それて歐洲政局は大にどよめいた。そして皇帝もモルトケもとう〱手が出なくなつた。之はビスマーク一流の解決法だ。大久保一流はそんなのてない。ビスマークに比して一層も二層も男性的だ。ゑらいと言はざるを得ない。假りに山縣さんが支那を今一度叩くといひ出して、……山縣さんはソンな事を言はぬ、又山縣さんは西鄕てない……。それを誰がどう抑へるか。そんな事を考へて見ても分る。大久保以後、日本には大久保なしだ。帝國は大きくなつたが、人物は小さくなつてる。憲法政治て皆一同にゑらくなる外はない。(完)

時局縱論

福本日南

政機轉變

我國の政界には昨今又々政機轉變の時期が來たらしい。此際社會一般の有様を觀察すれば誠に奇異の感に堪へぬのてある。古今政機轉變の時期に際する毎に、何れの國に於ても人心は昻騰する。それは昻騰せざるを得ないのてある。何となれば其際まて政權を維持する當路の人々及び之に同意見の人士は政機一轉の爲めに自家の政權乃至政策を停止せなければならぬ事になる。それて此等の人々は何れも憤慨せざるを得ぬ。又一方に於ける政權の繼承者は多年の抱負を實行するは此れより以後にあると思ふのてあるから何れも欣喜雀

躍する。それて此際に於ける一國の人心は水際立つて昂騰するのである。

我國政權の授受は明確なる旗幟の下に實行せられざるが故に、歐米諸國の如く、しかく著しきものはないけれども、それてもいよ〳〵轉變の時期となれば多少人心の激搖を見て來たのてある。近い處ていつても此前西園寺內閣の成立する時は如何てあつたか。瘦せても枯れても日本第一の大政黨を提げる內閣が出來るといふのてあるから、政友會及び政友會に謳歌する人民は之より多少の新政を見るてあらうと勇み立つたてはないか。又現桂內閣の西園寺內閣に代つて再現するに當つても假令其主張は空算用にあつたにもせよ、一種の財政策を提げて、之を以て財政を整へ並びに一國の經濟を優進すると觸れ込まれたから、兎も角も天下の實業家は足を爪立てゝ其成立を待つたのてある。然るに今回の政機轉變については一般の有樣は如何てあるか。讓らんとするもの、引受けんとするもの孰れも少しも氣が乘らぬ。讓るもの丶氣がないのはまア無理もないとして、引受けんとするものは今少し世人の觀望を惹きつける旗色を見せさうなものではないか。而かも其內閣は立憲政治の下に生れたる大政黨を土臺にする內閣といふのてはないか。して見れば其大政黨の大政策を實行して國利民福を圖るのは此時てはないか。然るにも拘らず其大政黨及び之を統率する諸首領輩の態度を御覽なさい。いかにも煮え切らぬ笑止な狀態てはないか。恰かも馬鹿息子に家督相續をさする其時の狀態に酷似するてはないか。總別物は初めにある。初一歩の歩き出しにある。千里の名馬は其初め勒を脫せんとするの勢ありといふてはないか。處が今度の新內閣の名馬は一里は愚か一町二町の道程に上らない前から已に道草を喰ひ出してゐるてはないか。欠をする。涎を垂らす。其癖食好みは盛んにする。秣は上等の葉、食物は精好の小麥てなければ食はぬと御託をつく。而して其馬は千里は愚か百里の外にもないてはないか。一般社會は之に對して驚いてゐるのか失望してゐるのか何等の痛痒をも感ずる狀態もない。恰かも隣の客舍

に旅客の出入を見るが如く、今朝出て行く客人も、今夜來到する旅客も、我々とは痛痒相關せぬといつたやうな様で空嘯いてゐるのである。斯くの如き狀態は此帝國の爲めに慶すべきであらうか悲しむべきであらうか。詰りは政治といふものは無意義であるといふ事をあらはしてゐるではないか。希臘羅馬の昔より今日に至るまで國の零落した歷史を問うたならば、デカタンスの初まりは何時も此種の容色をなして居る。笑談ぢやない。此帝國は上御一人の國でもなければ又政治家の國でもない。上御一人と下國民とを包含した國である。此親愛なる我國を斯様な狀態に陷れて恬としてゐる呆痴(うつけ)があらうか。何と考へても吾々には理解が出來ぬ。願はくは此內閣を引受ける處の西園寺侯及び其提挈せらるゝ政友會の諸君は國の存在と未來とに顧みて本當に一骨折つて見たらどうであらう。惟ふに曖昧が曖昧であるから、家督相續をする迄には御家風の訓示を承らねばならぬといふ事もあらう。それを承るなとはいはぬ。さりながら諸君は兎も角も立憲政下の産物として世にあらはれ、嘘にも憲政有終の美を濟すと二言目にはいふ人々ではないか。全體物は呉れられる迄は人の物である。その呉れる人は呉れんとするに臨んで恩を被せたり又其物の取扱法をいろ〳〵説明したがるものである。然しながら已に貰ひ受けた以上は、物は即ち我物ではないか。我取扱法を以て之を取扱ふに何の遠慮が入らう。諸君にしてオム、デタ即ち國士の考があるならば、受取つた以上之から己れの政策でやると、一キバリキバツて呉れまいか。頭に怖れ尾に恐るゝは俗吏小人の事にして國士の爲すべき事でない。こゝ一番の奮發を希望する。若し萬一それが出來ぬといふ事になれば、其下には如何なる意味がブラ下るか。即ち最初から無政策のオッポルトンであつたといふ事に落るではないか。之に反して諸君にして一奮發せらるゝといふ事なら其主張は少々間違つても天下の人心は翕然として之に動くことを疑はぬ。此處其岐れ目であらうと思ふ。右に行かるゝか左に行かるゝか。北、大山道。西、小田原道の道標は今諸君の前にあると思

ふ。それから現内閣の隠退せざる以前に其置土産たる

濟生會

について伺つて置きたい事がある。抑々至上が内帑の百五十萬圓を出して濟生資金に賜つた其有難き思召は申すも愚かであるが、此深遠の思召は確かに立國の根本義に接觸するものであると拜察さるゝ。全體國民が相集つて國家を成し、政府を立て、多くの國費を負擔して其國の秩序を維持する所以のものは何ぞやと顧れば、其第一の要求は生存の權利を維持せようといふのではないか。擴めて之をいへば非常なる租税を負擔して陸海軍を立て警察を置き、憲兵までも備へるといふのは、根本は即ち生存の權利を維持するにあるのである。然るに同じ國民中にも生來不幸なものがある。それは家世繼續の貧乏人である。此種の人民の不幸は生れ落ちると共に否運の中にあるものである。同じ日本人であるから相當の教育を受ければ御多分には洩れぬ相當の人間になるべきである。然るに其教育を受くべき資本を親は有せないのである。從て無智にして成長した爲めに此等の貧民の唯一なる資本といへば體力即ち腕力である。其體力の堪ゆる限り、腕力の許す限りに於て各種の事業に勞働して其口をも糊し、又一家をも支へるのであるが、凡そ體力腕力には限度がある。いかに其等の輩が順良な性質を有し、又勤勉に働いても六十四五以上七十歳前後ともなれば、最早壯丁と伍して同一の働をなし、同一の賃銀を受くることは不可能となるのである。もう一歩進めば最早到底働くことが出來んといふ事になる。此時に方つて彼は如何にして其生存を維持するか、彼は形影相弔する外一物も其生を支ふるものがない。實に哀々たるものではないか。吾人國を立て、政府を設け、稱して一國といふ以上は、此等の精勤なる國民の末路丈けは何とかして救助してやつてこそ、初めて國の價はあらうではないか。それを措いて省みないといふ位なら、[illegible]として多くの租税を貢いで、國で候などといつて之を維持する必要はない位のものであらう。尤も此間には誤解の生じ易い問

題である。以上の如く述べ來れば總ての貧民の老齢に傾いたものは皆救はねばならぬといふ疑問は直ちに此下に生ずるであらうが、それは同じ貧民の老齢者にも、自ら二種類ある。即ち其一は精勤者の末路にして、他の一は、惰け者のそれである。そんな惰け者は自業自得であるから、それまで構ふ譯には行かぬ。若し此種のものまでも保護しなければならぬといへば、それこそ保護政策の弊に堪へぬ。一國下層の人を擧げて働くが損といふまでに陷らしむる。我々のいふのは此種のものではない。即ち上の第一種に屬するものである。此等に對して我々は日頃氣の毒に思ふのは日々の新聞にあらはるゝ所の或は身投げ或は首縊り、或は鐵道往生等の中には、いかにも立派な人の末路にして同情に堪へない連中が多い。かゝる輩を見殺しにして之を顧みぬといふ事は人道の上から、又一國を立てゝゐる上からして傍觀するに忍びない事ではないか。彼の英國の自由黨内閣が非常な困難を押し切つて、オールド、エーヂ、ペンションを實行したのを御覽なさい。初年の豫算では大抵六千萬圓位であつたのが最後の豫算では八千萬圓以上に上つて居る。此政策を實行する自由黨の苦心は想像するに餘りある。然しながら其困難を排して而して現在の保護を加へる處に、實は立國の名譽が托宿するのである。謂ふ所の王道は此中に存するではないか。日本に於ても是れ丈けは何とかして實行したいのである。畏れ多い事ながら陛下の思召は此邊にあらせらるゝ事であらうと思ふ。國家財政の困難なる此種の養老法其ものは之を實行する事が出來ないまでも、切めては貧民の病の爲めに仕事に從事することの出來ないもの丈けにても救ひたいとの思召であらうと推察する。延喜の帝は我知らず。明治天皇の聖明なる今更ら感佩する外はない。されば政府の當局たるものは有効に此思召を奉戴する所以を計らねばならぬではないか。我々は此御下賜金に關する詔勅を議會の中にて奉讀したる際、しかく考へた。此渥き思召に添はんと欲せば第一に國家は此救濟資金を國家自身に備へるがいゝ。一千萬圓乃至二千萬圓の基金を第一に備へて

而して其他の資金を民間に求める。かくして半官半民の事業としたならば初めて聖旨に添ふことが出來やうと思ふ。それて吾々は當時議會に於て此議を建てやうとした。然るに當局に謳歌する所の大政黨は當局に立派なる成案かあるかの如く稱し、之に關しては政府も聖旨を空しくせざることを明言せるが故に、當局のなす所に任して置いて吳れ、といふことてあつた。それて危いと思つたが、其儘に默過した。政府は之に對し其後如何なる擧に出てたかといふに國家の事業とはせずして之を一の社會的事業となし、盛んに其資金を募集した。果して之によつて陛下の聖旨を空しくせざるならば我々も決して之をわるいとはいはん。さりながら今日までの出來榮は如何てあるか。當局は盛んに其成功を自賛して現在已に一千八百萬圓以上の申込を受け、尙今後募集し殘れる十一縣のそれを加へたなら、確かに三千萬圓に達するてあらうといふ。それにして悉く集れば年々百萬圓以上の救濟資金が出生するといふ事てある。計算は如何にも結構てある。然し其實は如何てあるか。今二十餘道府縣に割當てたものと、官吏の月俸から醵出したもの、それに御下賜金を加へて二千萬圓てある。他の未收の十一縣のそれが五百萬圓と稱せらるゝ。其五百萬圓それが全然集つた所て二千五六百萬圓てないか。餘り小さい事まて立入るのは小煩さいけれども現在二十餘道府縣に課して得た所のものが千六百萬餘圓てはないか。其中に東京、横濱、大阪、兵庫の四府縣の分を除けば、殘る所のものは僅か四百五十萬足らずてある。二十縣以上にして僅々此金額てある。其二十餘縣と同時に募集し得られざりし他の十一縣て如何にして五百萬といふ金が出て來るか。前者の率に從へば百萬圓位のものてあらう。すれば總體のものを合して二千萬圓以上に過ぎない。然しそれも一時に集つて來たものならば百萬圓の利子を得ないまでも六七十萬圓のそれを收むるに難からぬ。處が聲のみは大であれども、今實際現金の集つたものは御下賜金の百五十萬圓を土臺にして併せて三百萬圓に過ぎぬといふてはないか。三百萬圓の利子を全然入るとし

ても年六七萬圓の外には出ぬ。假りに十萬圓ありとしても、四十五の道府縣に割り附れば、一縣に配附する所のものは、約二千圓位のものである。二千圓の資金を以て、一府縣百萬内外の人の中にゐる、貧民に施藥するとしてどの位の影響があらう。バラバラと降つた夕立雨は、一寸の深さも地に入らざれども、それでも其の白雨の過ぐるところは一寸濕り氣位はある。二千圓を數十萬の頭にふりかけて施さるゝ所の藥劑は、二三萬人に過ぎぬ。夕立雨のそれのまた幾十分位のものてあらう。孟子の所謂、仁心仁聞あつて澤、民に蒙らずといふのは此等の事ではないか。之れて聖旨が貫徹しやうか。國家の義務が立つだらうか。一國の國政を司つてともかくも民命を其手に握る人は斯樣な事で滿足せらるゝてあらうか。笑談ぢやない。我々は斯くの如きものを目して國民の友といふことは出來ぬ。又陛下に忠なるものといふ事も出來ぬ。今は此連中の葬式時期が來たらしい。一日も早く此葬式の實行せられんことを希望する。我々と雖も同國人だ。之ても同胞の一人だ。其際にはお線香の一本位は立てやうと思ふ。

それから話は少し横道に入るが、昨今の新聞といふ新聞の感心することに、我々は一向感心しない事がある。我々は少しく自身を疑ひ出した。我々は世人と感本感素を異にしてゐるかを疑ひ出した。其一つを擧げれば、チト無遠慮であるかも知らねども、畏き邊りにて千鳥の狩獵を掛りの官僚にお命じになつた。其お命じになつた御事情の程は元より詳にせぬ。さりながら多分千鳥を召し上らうと思召すからそれを進めれと仰せられたのてあらう。畏き邊りの供御にはどれ位の量を進めらるゝか知らぬが、掛りの狩獵官は取るも取つた。七百八十餘羽を捕らひ來つたといふのが新聞に出て、而して諸新聞は皆一齊に賞讃してゐる。まさか七百餘羽が供御に進めらるゝてもなからうてはないか。斯くの如くして千鳥を狩獵せられたなら、年を出てずして、あの可愛さ、優しさ、小さい羽衣公子はやがて撲滅せらるゝに至るてあらう。斯くの如きは決して畏きあたりの思召てはなからうと信ずる。

夏苧ひく海上潟の沖津洲に
友を悲しみ千鳥鳴くらん

とてもいひ度なる。我々は千鳥の爲めに寧ろ悲むに堪へぬ。新聞記者の感本感素は如何なる理由の下にさう動くのであるか。憮然として言ふ所を知らぬ。（八月十八日）

遊戲と眞劍

文學博士　三宅雄二郎

近來文藝家の間に、眞劍若くは眞劍勝負といふ語の行はる。固より擊劍に基づきし語なるべく、擊劍に在りても概ね型を主にし、眞劍勝負の珍しかりしに、擊劍に最も緣遠き文藝に於てさる語の使用せらるゝ、聊か奇なりとすべし。眞劍勝負に臨みて目瞬せず、顏色變ぜずといふを、大勇の表象とし、三十七八年役激烈なる海戰を報告するに宛も平日の演習の如しといふ語を以てし、沈着を形容する有樣なりしに、夢にも死を決すべく見えざる場合、却て眞劍なれといふは何ぞ、普通に遊戲視する者の遊戲に非ずして實に眞劍なること、今更心附きし事ならず、遊戲とし樂むは藝の拙なる間にして、漸く巧を加ふると共に、快樂よりも苦痛たらざるやの屢次疑はれたり。初段に井目風鈴なる笊連は、戲謔百出、一時間に二三番、一晝夜に數十番に至るあるも、初段以上なるは容易に手を下さず、五六段なるは一局に數日を費し、本因坊の位置を爭ふが如き、血を吐きて死せし例さへあり。花にても、茶にても、箏三味線にても、藝の妙ならんことを望めば、往々眞劍勝負の心得を以てせざるを得ざりき。聲の低き綱太夫は强ひて劇場に聲を振り上げ、呼吸器を損し

て死せしと傳へらる。藝の妙なるは遊戯ならずして眞劍なること、略ぼ知れ渡りぬ。

德川時代戯作者は、文字通に解せば戯に作りしとすべきも、果して戯に作りしや、或は額より汗を流し、時に病氣を招きしよなきや。支那の學者が傳奇小說類を作るや、戯に作りしと斷はるの習はしにて、我國にても然りしが、中に戯なるもあれど、或は戯ならずして戯と言へりしもあらん。昔々春秋は中井履軒の作と知らるゝが、履軒は戯作として署名するだに欲せず、人に問はるれば戯作なりと答へたらんが、或は意外に心血を注ぎし所あるやも測り難たし。戯作の語あるを以て盡く戯に作りしとするは、餘りに文字の末に拘泥せるなり、春水の梅暦、種彦の田舍源氏の如きも、恐らく苦心慘澹たりしあるべし。

今日の文藝家の立場よりして、尾崎紅葉の作は多く遊戯に屬すと見らるゝも、紅葉自ら遊戯を以て居りしや否や、構想の間、行文の間、進まんとして得ず、退かんとして得ず、爲に頗る煩悶せしことなきや、全身の力を筆紙に注ぐこと、俄に類を今の作家に求め得ざるに非ずや。坪内逍遙は紅葉の如く小說を以て立たんとせず、孰れかと言へば戯に作りしならんも、嘗て小說を新聞に連載せし頃、苦心の餘り腦を病み靜養を餘儀なくせられぬ。如何に遊戯の心得にて作るものも、或る點に於て多少苦心するの免るべきに非ず。巧拙は天分に因り、努力にて如何ともし難きあるも、何様の作も醉餘の散步然たる心得にて成らざるべく、戯作は事實に於て苦作少からじ。

今の謂ゆる眞劍は此等と意義を異にせざるに非ず、前代の戯作者は、假令構想行文に苦心せしにせよ、染物屋が色模樣に苦心すると同じき苦心にして、人生の究極を問ふが如き全く之れ無く、唯だ社會の表面に現はれし所を描きしに過ぎず、苦心なりとも氣樂なる苦心といふべし。今の謂ゆる眞劍は單に構想行文の間に苦心するの類ならず、人生の究極を尋ね、動もすれば社會の革命を捲き起す種となるべきもの、徒らに文字を弄ぶと同じに語るべからず。巧なるを求むるよりも、

社會を包める幾多の皮を剝ぎ、其眞相を明にせんと欲し、爲に或は批難を蒙るべく、迫害を蒙るべく、場合に依り牢獄にも入れらるべし、之を憚り言を左右にするは、眞劍と稱し難し。己れに降りかゝる一切の災難を無視し、眞を眞とし、假を假とし、茲に初めて眞劍の心得を認むべし、云々。今日眞劍をいふものは、說く所盡く一致するに非ざれど、少くも或る一部の主張は此の如し。

今日は今日の意義あり、今日の眞劍は前代の作家が知らざる所とするも、要するに思想の傾向を異にするに止まり、作に對する心理的狀態に於て大なる差あるべきに非ず。迫害といはゞ徳川時代の方今日よりも多し。今は發賣禁止を命ぜらるゝ位の事、手錠を嵌められず、容易に獄に入れられず、未だ春水の位置にて春水ほど窘められたるあらず。而も假に今の眞劍は前代の眞劍より眞劍なりとし、眞劍が何處迄文藝に利益ありやとの問題に就き、自らに對すると人に對するとに別ちて考ふべし。眞劍を尊ぶも常に眞劍の覺悟にて居るべきか、又は或る最も肝要なる場合に眞劍にして他は遊戲同樣に爲し居るべきか、戰爭は眞劍の大仕掛なる者なるが、決勝點は殆ど瞬間に存し、之に先んじて必ずしも全力を注ぐを要せず、日本海々戰は皇國の興廢の決する所と言はれし程にして、敵も味方も幾月間かの準備を積みしが、勝敗の決せしは三十分以內に在り、眞に眞劍とすべきは其間にして、後に水雷を以て追ひしは、眞劍は眞劍にせよ、面白半分ならざりしとせず。凡そ眞劍に臨みて全身の力を發揮せざるべからず、全身の力を發揮するは久しきに續かず、平時餘裕を蓄へ、最も肝要なる場合を選びて全力を注ぐに若かず、斷えず眞劍の覺悟にて居らんには、或は疲勞して肝要なる場合に全力を注ぐに堪へざるが如き無しとせず。眞劍の心得を忘れざるも、多く遊戲的に取扱ひ、餘力を殘し置くの利益あるに非ずや。

又自ら眞劍にする比例に於て人の感動するやも疑問に屬す。自ら感ぜずんば人を感ぜしむる能はざるか、自ら感ずれば却て人を感ぜしむる能はざるか、判斷區々

にして一定せず。ジデローは言へりき、俳優に觀客の感動を欲せば、飽く迄自ら冷靜にすべし、自ら感動すれば動作亂れ、人をして感動せしむるを得ずと。エドキン・ブースは俳優ブースの子、兄弟三人俳優となり、末弟ジョンは南軍に屬し、平和克復後大統領リンコルンを劇場に暗殺し、仲なるエドキンは優名を全國に轟かし、英國及び獨國にも技倆を稱せられたるが、曾て「悪人の復讎」を演ぜし時、場所といひ、己れの役といひ、如何にも適當し、自ら全く劇中の人と化し、涙流れ、口籠り、眞に感動し、我乍ら生涯斯く迄巧妙の境に入りしこと無しと考へて場を退きしに、棧敷に在りし孃が馳せ來りて言へりしやう、今日は何とて彼の如く拙なりしか、實に劇と爲らざりしと。孃は平生最も批評に長ずるを以て稱され居りしに、斯く言ひ出でしより、父も頗る當惑せしとの事なり。小說なり、詩なり、劇と違ひ、此類を以て推し難きも、幾分か相ひ似たる所なきに非ず。擊劍の型に巧にして卑怯未練なるは、常に眞劍勝負を以て戒めざるべからざるも、愈々眞劍勝負に臨む場合には少しも平日と異ならざるやう注意を與へざるべからず。文藝に從事しつゝ、自ら文藝を輕んじ、遊戲三昧とする人々に向ひ、眞劍勝負の必要なるを說くの適當なるも、眞劍は文藝の極意なりと限らず、常に眞劍の心得あり乍ら、綽々として餘裕あるの望まし。

治水事業と港灣改築事業

土木局長 法學博士　水野練太郎

治水事業といふのは、主として河川の改修をいふのであるが、それは即ち河水が氾濫して、土地人民に水

害の及ぶのを防ぐ主旨からてある。勿論河水改修の事は從來からも遣つて來たのであるが、治水計畫の根本策は昨年に至て初めて立てたのである。先づ全國て主要なる河川の改修を國の直轄事業として遣らうといふのであるが、然しながら國の直轄事業として改修しやうといふ主もなる河川の數も實は非常に多いのである。其數は六十五河川あるから、かゝる多數の川を一時に改修することは殆んど出來ない。てこれを二期に分けて遣る。第一期と第二期とに分けて遣るのである。

此六十五河川を選んだ標準は其河川の利害關係最も重大であつて、其貫流する土地の面積の廣きもの……即ち流域十方里以上のものを選んだのである。そして其中ても最も緊急のものから先きに着手するといふので、第一期計畫には六十五河川の中から二十河川を取ることにした。二十河川とは、利根川、信濃川、淀川、木曾川、北上川、御物川、最上川、岩木川、荒川、富士川、加古川、高梁川、揖斐川、吉野川、遠賀川、綠川、阿賀川、九頭龍川、庄川、神通川をいふのてあつて、之が第一期計畫に入れられた。此等の川は今年度からして十八ヶ年内に改修して了はふといふので、其費用は其川の改修費、其砂防費、又は調査費等を合せて一億八千萬圓に近い。其方針に從て本年から著々調査に從事して、十八ヶ年間を期して必らず改修することになつて居る。第一期河川は日本の中ても所謂大川てあつて、今日ては最も水害の原因をなして居る。之を改修すれば水害の大部分は救助することが出來るものと思ふ。そして第一期河川の改修が出來た後て、初めて第二期河川改修に移る積りて、十八年後に於ては更らに計畫を立てゝやるのてあつて、今日に於てはまだ何等確定した案がない。

港灣の方は從來未だ何等の確定的の計畫を立てたものが無い。只時々必要に臨んて築港をして來た。之も國が直接にやつたのは極めて僅かて、多くは地方の計畫に任せて居つた。國が直接にやつたのは横濱、神戸、近くは關門海峽と敦賀位のものてある。其中て、横濱と神戸とは今日ては大藏省が税關工事の一部として、

築港計畫のホンの一部分をやりつゝある。關門海峽の整理は主として內務省の經營であるが、昨年から掛り初め、繼續費ではないが約千二百萬圓の經費を見積つてある。敦賀は浦鹽斯德との接續を保つ爲めの應急工事として防波堤費、浚渫費等八十萬圓の小規模ではあるが、數年前から取り掛つて居る。其他の港灣は今日では地方で修築してゐる。其中で主もなるものは四日市で、大阪の如きは大阪市で仕事を初めて國から補助を與へて居る。長崎、鹿兒島は縣の事業として、國の補助を仰いで居る。斯くの如く港灣事業については未だ確定的の方針が無い。然し漸次貿易が發達し、海外との交通が頻繁となるに從て、どうしても港灣は改築擴張しなくてはならぬから、內務省は數年前から大體の計畫は立て、之に從て着々調査の步を進めて居るのである。

隨想錄

金子筑水

一

精神上の要求のために、肉體上の要求は無視された時代が有つた。靈的要求のために、肉的要求は犧牲にされた時代が有つた。現代は恰も其の反對の途を步いてゐるやうにも見える。永い間無視された肉體上の要求が次第に强まつてきた。靈的要求とか精神的要求とかは、畢竟空想で、肉の要求、此の身體(からだ)の要求のみが、ひとり眞實なもの丶やうに考へられてきた。パンと水、直接の衣食住、其れがすべてだといふやうな考さへ强い。近代の自然科學は、人間を他の自然物と同一列に

引下げてしまつた。我々は他の劣等動物と同じ生活を多少巧にやつて行くに過ぎない。平凡生活が我々の一生だ。藻掻いたとて苦んだとて、どうも致方が無いと。斯んな風な思想さへ強まつてきた。

　けれども人間は、其れだけてはどうしても滿足することが出來ない。其れだけては人間の生活てない、物足りない、つまらない、どこかにモッと人間らしい生活が無くてはならないとさういふ中心からの警告に基いて、靈肉一元又は身心一如といふやうな思想が起こつてきた。肉を離れた靈、此の身體を無視した精神、そんなものはすべて空想だ。此の赤裸々のからだが、我々の唯一の生命だ。肉がやがて靈て、からだがやがて精神てある。見よ、戀とは、此の目、此の肉、此の心臟の動作てないか。力とは、此の筋肉、此の骨格のエネルギーてないか。此の眼光の閃きを見よ、此の皮膚から放たれる動物電氣を見よ、そこに活きた靈が閃き、そこに活きた精神が動いてゐる。裸體百貫の身體が、其のまゝやがて活きた靈魂てはないかと。如何にもおもしろい見かただ。鋭い觀察だ。肉の作用を離れた靈を認めず、官能生活を離れた精神生活を認めないところに此の觀察の力が有る。すべてを具體的にコンクリートに摑んだところに、此の思想の長所が有る。けれども惜いことに此の種の思想は、人間の眞要求が何てあるかを示してゐない。又それを示すことは、此の種類の思想に取つては、極めて六ッかしい。

　そこから靈肉調和又は心身一致といふやうな思想が起こつてきた。靈の要求が、肉の要求を無視するやうてあつてはならぬ。肉の要求がおのづから靈の要求に合するところに心身の調和が見られる。此の目、此の口、此の筋肉の要求は、おのづから我が精神の要求てあり、所謂精神上の要求は、其の中にすべて肉體上及官能上の要求を含んだものでなければならないと。巧な考へかただ。至極公平な觀察だ。けれども、此の觀察は、まだ肉と靈とを離して考へてゐる、精神活動と肉體作用とを別々なものに考へてゐる。別々な離れ々々なものが、互に並行して、調和し一致するといふ

は、至難な理想でないか。

そこで我等は前の靈肉一元身心一如觀に還つて、もう一度其の間の關係を正しく考へて見たい。此の目、此の口、此の皮膚、此の筋肉のさま〴〵な官能生活が、さま〴〵な有樣に複合され、さま〴〵な狀態に統一されて、そこに我々の精神活動が成立つごとく、我々の靈的要求又は精神的要求は、官能生活のすべての要求が、複雜に結合され統一されたもの、肉體のすべての要求が、一層高い進化の階段に進んだものではないか。肉の醇化、それがやがて靈の生活ではないか。たゞ其の進化には、微妙な複雜な幾多の階段が有ることを忘れてはならぬ。斯ういふ風に考へて、初めて靈肉には不離の關係が有り、而も靈の要求は、肉の要求の一層高い階段に進んだものであることが知れる。靈の要求と肉の要求と、絕對に並行してゐるやうに考へるは、所謂靈肉調和の愚論に過ぎない。

二

文學者、學者、宗敎家、敎育者、さういふ社會は、普通の世間からは、餘程一種特別な人間の種類に數へられてゐる。煩激な實際界から遠ざかり、生死の間に一身を託するやうな現實界から遠ざかつて、何となく雲を摑むやうな世界に、仙人めいた氣狂ひぢみたサークルを造つてゐるが、此の一種特別な人間の種類だと考へられてゐる。普通の世間からは、此の一種特別な社會はだん〴〵敬して遠けられ、だん〴〵繼子扱ひにされる氣味が有る。此の頃は、文科志望の學生は、全國を通じて、年一年に減つて行くといふ噂がある。文學士といへば、若い式部連には鼻摘みだといふ評判さへ有る。特別な事情が無いかぎり、父兄が進んで其の子弟を學者や小說家や宗敎家に仕立てやうとする者は殆ど無い。勿論此の社會に金力が無い爵位が無い、それが普通の世間から嫌はれる表面の理由で有らうが、此の表面の理由の外に、まだ〳〵深い內面の理由が有る。文學者や敎育者や學者や、其の人物性行が甚しく普通の人と違つてゐる。何となく愚圖々々してゐる、テキパキした所が無い、男らしくない、賴もしさうな

意氣に缺けてゐる。或はイヤに心配性てあつたり、或はイヤに地墮落てあつたり。それて名譽心や虚榮心は至つて敏捷て、絶えずイラ〳〵して、絶えず愚痴をこぼしてゐるが、此の社會の通弊だ。到底實際界に立つことが出來ない不具者、現實界に立つて、はてな意氣に滿ちた活動を遂げることが出來ない無能者、一トロに相手にしくい話せない人間、それが此の一種特別な社會だと考へられてゐる。

こゝに文學者や宗教家や學者が考へなければならない問題が潜んてゐる。文藝や宗教や學術に、一種特別な技能、才幹、天稟、人才が必要てあるは言ふまでもない。普通の世間が瞰んてゐる所は、此等特別な天稟才能の餘弊に過ぎないとしても、文藝や學術にたづさはる者は、いづれ純粋の實際界の人とは、さま〳〵に違つた特別な天稟や才能を備へた者てなくてはならぬ。さういふ意味に於て、學者や文藝家や教育家が、他の社會の人と區別されるは當然て、其の區別が却つて彼等學者や文藝家の傲りてあつても差支ない。

けれども、文藝家や學者や思想家は、全人としては不具な者、眞の男子たる意氣を缺いた者、實際界の不具者、現實界の落伍者といふやうな非難を、果たして甘んじて受くべき資格の者てあらうか。さういふ風な特別な人品性格が、彼等學者や文藝家の本領てあらうか。我等は深い疑を持つてゐる。活きた現實の世界に於て、眞劔になつて働くことの出來ないやうな人間が、果たして現實の眞を深く味ふことが出來るてあらうか。實際界に立つて、本氣に男子の意氣を示し得ないやうな人間が、果たして眞に人間生活を解することが出來やうか。全人として甚しく缺けてゐる不具者が、どうして全人を理解することが出來やうか。文藝の進歩や學術の發達を望むはよい。けれども、其の根抵に刷新進歩が無ければ、如何に表面の進歩や發達を望んだとて、何の甲斐もない。我等は先づ此の内面の事情に深い注意を拂はなければならぬと思ふ。

三

自然力の强大を描いた文藝、人間の運命を司つてゐ

る不可思議力の絶對を寫した文藝、宿命的勢力に飜弄されて行く人間のあはれを描いた文藝、それが最近兩三年來の文藝及思想の重な傾向であつたとも言へやう。自然力の壓迫を受けた主觀のじゆつなさ。そんな風に概括することが出來るかも知れない。此の種類の傾向は、勿論近代思潮の特質ではあるが、特にロシア文藝と深い關係が有り、又東洋古來の消極的精神と一致して、其の間におのづから何等か深い關係が潜んでゐるやうに考へられる。同じ近代文藝でも、ドイツとかノルエーとかイギリスの文藝になると、自然力の壓迫を寫しながらも、其の自然力に抵抗して行く人間の力を描いたものが多い。自然力に抵抗し、又は之れを征服して行くところに、深いトラジデーが有り、又そこに人間の生活が有るといふやうな感じが強い。彼れ此れ比較して、其の間に奇妙なコントラストが有るやうに思ふ。侵略的な積極的なゼルマン民族の意氣、靜止的な消極的な東洋民族の特質、其等が文藝にも深い關係が有るのではないか。それにしても我文藝は、將來孰れの方面へ進んで行くか。此の點から觀察して、眞に意味深い現象ではないか。

東京市政の片影

田川大吉郎

記者足下

御尋ねの趣は善く諒承した、それには僕も固より多大の名譽を感じ、責任を感じ、興味を感じて居る、然し乍ら談何ぞ容易ならんやで、殊の外疑懼に堪へず、どうぞ此度は御免を被りたいものと、再三退陣を試みかけたる揚げ句、強ひて枯腸を絞つて、此小見を申た

げる。

◎先づ東京市は極めて非難の多い所である、其非難は大要之を二つに分ける事が出來る、一、其事業（若くは計畫）に屬するものと、二、其人物に關するものとの二つである、或は此二つは、到底する所一つかも知れない、事業の成敗は、要するに人物の有無である、其一は其二に含まれて居るものかとも想はれる、世上には現に左樣に考へて隨分際どく突つ込んでかゝる人も有る樣である、けれども僕は竊に信ずる所あつて、此二つの分類を立て、而して其第二人物に關する非難は、一切を擧げて彼の蒼に附し、今其第一事業に屬するものゝみに就て申上げる。

◎其事業に屬する非難の重なるものは、道路の敗頽が一つである、下水の不備が二つである、家屋の建築に歐洲式の制限なく、高低參差、各人の自由に任せて、近世都市の體容を損じつゝあることが三つである、更に東京市としての一定したる輪廓がなく、其膨脹と設備が動もすれば將來の禍患を殘し相な野趣其儘に放任されつゝあることが四つである、又、市街地と住居地と、若くは工場區と學校區と、それらの必須なる區劃の定められて無いことが五つである、尙其外にもあらうが、僕は凡て此五つを以て、近年屢々見る非難の重なるものと解して居る、一言以て之を蔽へば、東京市を一足飛びに歐洲式近世的の都市に作り上げよと謂ふのである、善く分つて居る、僕もそれは異ぼ異存は無い。

◎そこで此から其二三に就て申上げるが、先づ道路から。

東京市の道路は凡そ二百萬坪かと覺えて居る、此面積を隅から隅までアスファルトで舗き詰めるとすれば、一坪當り二十圓として總計四千萬圓である、而してアスファルトは今日の場合、先づ世界の最善の舗道資料である、左すれば四千萬圓かけさへすれば、東京市の道路は世界の最善の道路に爲すことが出來るのである、其費用は大して驚くべき程でも無いては無いか、況んやそれは隅から隅までアスファルトで舗き詰めた

場合の事である、東京市を如何に西洋風の近世式美都にしやうとて、其道路を隅から隅までアスフアルト舗にする必要は無い、僕の料る所では、アスフアルト、煉瓦、ターマガダムの類を適宜に利用して、凡そ一千五百餘萬圓乃至二千萬圓の範圍で、東京市の道路は世界の大市に略ぼ遜色なき程度に築成し得らるゝと思ふのである、故に僕は東京市の道路改良を以て、さしたる難事とは思ふて居ない、但、下水工事の未だ成らざる先に、其大規模の改良を企つるか否やは別の問題である、そこで下水に移る。

市の歩道は凡そ二十七八萬坪の豫想である、一坪當り七八圓かければ(別に二三圓の附帶の物入がある)混凝土若くばアスフアルトの施工が出來る、市は目下其費用の三分の一を地主等に負擔せしめて、之を改良しやうと計畫して居る、市民に其氣持に爲り進まする樣、十分の奬勵を願ふ。

◎下水の改良工事は本年から着手の運びに爲つた、遲かつたには相違ないが、それにしても既に着手の運びに爲つたからは、之を督勵して成功させていたゞきたい、而して其事業の衝には僕が乏しきを承けて居る、それは凡そ十二三年かゝる積りである、いくら急いでも十年より短縮することは出來ない、僕はそこで少くとも其十年の辛抱を市民諸君に求めるのである、特に彼の紛々たる批評家諸君に求めるのである、左すれば道路の改良は、要するに其後とせねばならぬ、勿論、其以前にも少小の規模、或限られたる範圍の改良は出來もしよう、僕もそれは爲したいと希望して居る、東京市は決してそれを躊躇はしない、けれども其所謂道路改良工事なるものの大端は、どうしても之を下水改良工事の後に讓らねばならぬと云ふ理趣の存する所は、今日、之を大方の承認を請ひ置かねばならぬと信ずる、甚だ遺憾ながら僕は此く思ふて居る、

或はそれを手緩しと思ふ人は、所謂近世式下水工事を十年ならずして完成し得る見込があるか、而して其下水工事の途中に道路改良工事を起す餘地があるか、道路改良工事と下水改良工事とを、經濟上よりも、工

事上よりも、若くは市民の商賣、交通、生活上よりも、之を駢び進ましめて相牴觸せざらしむる方法工夫があるか、それらを示されねはならぬ、僕は、果して其途あらば之を示されんことを願ふ、同時に僕は其人をすゝめて、其局に當られんことを願ふのである、此より東京市の境域に移る。

◎建築の制限、言ひ換ゆれば建築法の制定も今日の須要なる問題の一つである、然しそれは拔きにして、直に東京市域の問題に移ると、僕は大なる東京市を作るに二つの輪廓があると思ふて居る、其一つは東京府の三多摩郡を神奈川縣に復屬せしめ、其餘の五郡を一切市に併せて、後東京市を作るのである、斯くすれば東京市は、東は千葉縣に境し、北は埼玉縣に接し、西南は神奈川縣に接して、いよ〳〵袤大な區域となる、其二は品川、澁谷より巣鴨、上野に到る鐵道院の電車を通じて市郡の境を劃り、東は中川筋に至るのである、斯くすれば王子は市の以外になるから、別に工夫をして王子をも市に列せしむる、僕は前者を大東京市と曰ひ、後者を中東京市と曰ふ、但、中東京市と曰つても、現在の市よりは廣きこと數等、現在の市でさへ廣きに過ぐると嘆じて居る人には、あまり大膽なる計畫であるかも知れない、況んや大東京市に於てをや、或は馬鹿々々しくて沙汰の限りて無いと評せらるゝ方があるかも知れない、然し僕は之を歐米大都の近年の趨勢に視、近く之を我國に於ける都制案、千代田縣設置、東京市特別制等の稍々複雜なる希望主張等に併せ考へて、之を以て必らずしも架空ならざる一案と信じて居るのである、其中東京市の如きは、世人の之を歡迎すると否とに拘はらず、既に已に避け難き目前必至の事實と爲つて居る、勢の自然なる、最早何人も防ぎ得まいかと信ずるのである。

前者にすれば東京市の總面積は二十七方里に超ゑる、後者にすれば八方里餘である、後者は現狀に對し約六割七分の擴張である。

前者の外、東京市の中心より左右前後へ各七哩半の圓線を描いての說もある、左すれば二十二方里餘の

廣さに爲るが、僕は此說を採る位なら、寧ろ第一の說を採るべしと思ふのだ。

◎但、以上は東京市の輪廓である、既に大なる東京市を作るからは（中東京市を作るにしても）必らず之が中心市區を作らねばならぬ、それに就ては世上に種々の說があるが、僕はそれを異ぼ今日の丸の内と假定して居る、其丸の内は現に三菱氏の掩有する所て、三菱氏はそこに頗る凝つた建物を建てつゝある、それが相當に出來上つた日には、丸の内は、東洋隨一の大都の中心市場として、何不足なき、外觀內容を整備するに至るてあらうと僕は樂しんで之を期待し竊に三菱氏に感謝して居る、進んで今の內務省大藏省等の位置も、政府は他に之を移轉するの方針と謂ふから、果して然らば、其跡地は誰の有に歸するか、歸しないかに拘はらず、僕はそこの建築を必らず三菱氏のそれに平衡たらしめて、彼の一帶の地を、所謂東京市の目貫の地區と爲すならば、大都市の新市街の規模は、これて以て萬々不足は無からうと思ふのてある。

これて前項の一二の問題を省略して、築港の問題に移る。

◎世間は存外何とも言はれぬが、僕は東京灣の築港を、東京市の繁榮に最大の關係ある重要事業と思ふて居る、而して其位地如何は、大切の問題てあるが、同時に、何れの位地にせよ、築港が出來れば、東京市の商勢に多少の變化があるに相違ない、のみならず前に言つた丸の內の中心市場にも幾分の影響はある、僕は今それを如何とも斷言しないけれど、兎に角其多少の影響あることだけはこゝに附言して置く。

◎そこで其築港の必要なる所以てあるが、僕は、其理由を最も直截に、橫濱港の擴張不能の原因に置く、此は勿論其半面の理由て、同時に他の半面の理由を東京市自身の必要に置く。

橫濱港の改良工事は、御承知の通り明年度完成の豫定である、それて其岸壁の總延長は九百五十一間てある、橫濱港は其一間々口に一千噸の荷役を爲す豫想てある、左すれば九百五十一間の岸壁は悉く能く活動し

て、起工者の目的通りに達したとしても、其總荷役は九十五萬一千噸である、それが横濱港の荷役能力の總てゞある、横濱港はそれ以上の荷役を爲すことは出來ないのである、出來ない設計に爲つて居る、出來ない規模（天然の）に爲つて居る、即ち横濱港は、最善の力を盡しても、其荷役能力は精々九十五萬噸に止まると視なければならぬ、ザッと積つて一百萬噸以下と視なければならぬ。

東京朝日新聞は先日横濱税關長（？）の談話を掲げた、それに據ると、横濱港は目下一間三百噸の荷役を爲しつゝある樣である、一間三百噸で、二分の一しか働かない（今日に於て）故に横濱の築港は目下に於て僅に十三萬五千噸の荷役を爲しつゝあるに過ぎない、果して然らば此は非常の差である、税關長は之を以て岸壁利用の不馴の原因に歸して居るけれど、それにしても一千噸の豫想能力に對して僅に三百噸とは、隨分心細い次第である、此狀態に徴すれば、將來百萬噸の荷役は少しく疑惧せざるを得ない。

◎横濱港は現に百三十萬噸の外國貿易品を呑吐して居る、而して其外に二百萬噸の内國貿易品を出入せしめて居る、然るに其岸壁の總能力は百萬噸以下だとすれば、横濱港の設備の到底其總貨物を出入するに足らない點は、殊に明白であらう、其餘弊を受けるものが即ち我東京市であるのだ、現に東京市は著るしく其餘弊を承けて居る、今日東京市の物價の高い原因は一つはこゝに在る、論より證據、横濱より東京への貨物は、今日總て艀に由つて輸送されて居る、（總てと概論しても差支へは有るまい、何となれば京濱間の貨物で汽車便に由るものは、今日殆んど無い、僅に有つても九牛の一毛に過ぎないから）東京市は其艀輸送の運賃を總ての品に課せられて居る、而して其艀運賃が如何程高く着いて居るかは、天下殆んと知らざる者なし（假に表を示す）東京市民にして之を知らぬ筈は無い、或は石炭を門司より横濱に送り、横濱より東京に送るのに門司より横濱への方廉にして、横濱より東京の方反つ

て不廉なりといふ一事を以ても、其全班を推すべきてある。

◎東京灣に築港すれば、此等の損失の大部分は苦も無く回復せらるゝ譯に爲る、郵船會社は曾て之が爲に、築港前と、築港後と、即ち横濱受の現在と、東京受の將來との、輸送費の大小輕重を對較して公表したことがある、之を藉れば左の如くである、即ち其得失利害は最も明瞭てある。（こゝには其外國貨物に關する表のみを掲げる）

外國貨物單價（輸送）表

	名稱	內譯	小計
現在横濱着船	横濱にて本船より艀積移費	、一二〇	
	同本船税關間艀賃	、二二〇	
	同艀より税關內へ陸揚費	、一二〇	
	同税關より艀に積移費	、一二〇	
	横濱税關より東京まて艀賃	、七五〇	
	横濱税關より東京まて艀賃	、七五〇	
	同艀運送海上保險料（一噸二百圓の平均價格に對し平均百圓に付十五錢の割）	、三〇〇	
	東京にて陸揚費	、一〇〇	
	本船噸税賦課	、〇二五	
	東京横濱間運送日數に對する荷物延滯損失見積（一噸二百圓の平均價格に對し一週間の爲替日歩三錢の割）	、四二〇	
	以上艀にて接積小計（甲）		二、一七五
將來東京着	本船々費	、〇六五	
	本船噸税の賦課	、〇二五	
	港税	、〇七〇	
	本船より陸揚費	、一〇〇	
	横濱寄港本港揚小計（乙）		、二六〇
	本船々費	、〇六五	
	本船噸税賦課	、〇二五	
	港税	、〇七〇	
	本船より艀に積移費	、一二〇	
	本船市內間艀賃	、三〇〇	
	市內陸揚費	、一〇〇	
	横濱寄港本港艀取小計（丙）		、六八〇
	本港々費	、〇一七	
	本船噸税賦課	、〇二五	
	港税	、〇七〇	
	本船より陸揚費	、一〇〇	
	直航本港揚小計（丁）		、二一二
	本船々費	、〇一七	
	本船噸税賦課	、〇二五	
	港税	、〇七〇	

船	
本船より艀に積移費	、一二〇
本港市內間の艀賃	、三〇〇
市內陸揚費	、一〇〇
直航本港艀取小計(戊)	、六三〇

以上現在の甲に對し、將來の乙丙丁戊は皆それ〴〵假定の場合を異にするから費用にも相違があるので、こゝには便宜上丙の場合を普通の場合と假定して勘定すれば、現在の二圓十七錢五厘に對し將來の六十八錢て、一噸當り一圓四十九錢五厘だけ低廉に爲る、即ち東京灣の築港をすれば、其利益は最少に見積つても、一噸當り一圓四十九錢五厘だけ東京市民の得に爲る勘定てある、それだけ東京市の物價が廉く爲る勘定てある、唯それ築港が出來ないから、東京市の物價はそれだけ高く、東京市民はそれだけ損をして居る勘定てある。

◎尙內國貨物の場合は、一噸當り少くも五十錢七厘以上、多ければ九十四錢、築港の利益になる勘定てある。

以上內外貨物を通算し、東京市民の今日は、一年少くも約三百萬圓以上の損をして居る、築港さへすれば東京市はそれだけ得をする勘定てある。

◎去り乍ら其築港事業は期年にして出來上るものではない、少くも矢張十年はかゝるてあらう、故に其損得は、十年先の場合を想像せねばならぬ、五十五年に於る東京への外國貨物は三百五十萬噸、內國貨物は二百九十萬噸に達するだらうと其道の人は想像して居る、それだけの貨物を現時の橫濱の港に由るとすれば、其運賃は以上の方式にて一千九十四萬圓と爲る、東京灣の築港成り、尙橫濱を經て入港するものとして、其運賃は百二十七萬圓てある、故に其差九百六十六萬圓は築港の利益てある、假に貨物を七掛けとしても六百七十六萬圓は東京市民の利益と爲る譯てある、其の半分三百三十八萬圓は之を市民の利益に歸せしめる(物價の低廉其他の關係にて)其半分三百三十八萬圓を築港の資本に當つれば、五分利として東京市は六千七百六十萬圓の企業を爲し得べき譯てある、それだけあれば東京灣の築港は間違ひなく完成するてあらう、

◎東京市は現に二百萬の人口を有して居る（内務省の公式統計には二百二十萬とあるが東京市の調査では百八十五萬を超えない）往く〳〵は五百萬に達するであらう、二百萬以上五百萬の人口を有する大都としては、其れが既に一大築港を必要とする自然の要求では無いか、僕は所謂横濱黨の人が、此顯著の事實を公平に思料せんことを望む。

◎以上の如な譯で、僕は東京灣の築港を東京市の繁榮に關係ある最大最重の事業と認めて居る、東京市には、内外より進められ、責められ、求められ、促がさるゝ種々なる事業があるが、殘念な事には、近來此築港の設備計畫を鼓吹する人が殆んど無い、此は僕としては殊に不本意千萬に思ふて居る點である、僕は不敏、何事をも爲す事は出來ないが、東京灣の築港の爲には、此際微力を盡したいと思ふて居る、生來未だ全力を傾倒してかゝるべき著大の事業に出遭はない、痛恨の極てある、或は此築港の如きは其一つであるまいかと思ふて居る、僕は將に此心を以て此事業を迎へんとして居る、果して是か、非か、先づ大方の敎示を受けたい。

◎築港を論じた序に、又電車の事に及ぶ、世間では電車市營をいくらか非難した人もあつたが（僕は敢ていくらかといふ、或は市營反對を市民の輿論と唱へる人もあるらしいけれど、輿論とは何ぞや、今日の新聞に對し、今日の集會に對し、又市民の氣合努力結合に對し、別樣の觀察を抱いて居る僕は、市營反對の彼の如きを、如何にしても多數の意向、輿論と認むることは出來ない）僕は電車市營を以て、東京市の爲にも、市民の爲にも、向來多大の利益あるべき事業と思ふて居る、反對論の多くは、其收支の算に就き隨分八釜しく論じたが、僕としては要するに其數字の根據に疑ひを免れない、どこをどうして其樣な數字が出たのか、其根據を理解することが出來無つたから、失禮ながら僕は一切之を雲煙過眼の場合の如くに視た、東京市は其公債の償却に凡そ三十年はかゝるであらう、其三十年かゝつた後の電車は少くとも年額六百萬圓の純益を生ずるであらう、即ち單に東京市の財政の上から見ても、

電車市營は、東京市の發達を促進する重要の計畫てある。

僕は東京灣の築港と、電車市營とを、東京市の計畫の二大眼目と思ふ、實に此二者は東京市の繁榮發達に避くべからざる一大關鍵てある、即ち其運用に多大の注意を加へらるべきや勿論てある。

◎僕は更に食料品市場の設備を、東京市の爲に焦眉の急と思ふて居る、日本橋の魚市場は既に久しい間の問題てある、獸肉の屠殺場は今日の儘に甘んずべきか否か、野菜市場はどうか、世間ては此等を市の問題として攻究する人が割合に少い樣てある、然し乍ら僕としては之を必然なる市の問題と思ふて居る、市の問題といふことは必らずしも之を市營にせよといふことでは無い、市營にするか否かは、其時の便利の問題とも考へられる、僕は必らずしもそれを絕對に主張しない、只、其設備を完全にすべく、焦心努力することが、市の責任だと思ふのてある。

築港の事も同様て、僕は必らずしも築港市營論者ては無い、只築港の急施を主張し要望する者てある、

附けて白す、米國に都市同盟なるものがある、其本部から各市へ、各市の教務主任へ、地方自治に關しどんな研究をして居るかと問合せたことがある、其時の答への中に「吾等は我が市の行政を研究するには餘りに悪過ぎると思ふて居る、吾等の食料品の分配は、之を穿鑿する程餘りに惡い」と斷論したものがあつた相な、先方ては、食料品の問題が都市行政の一大要目てある、我國ではそれがさうだとすら氣附いて評論する人が無い、外間の見當違ひの評論には往々困る場合もあるけれど。僕は市行政が今一段眞面目に研究されんことを祈る、

◎此んな事を書いて居つては、際限が無いから、最早大抵に切上げるとして、最後に英國ては七十億の國債を有して居る、それに對し全市債は既に六十億を超えて居る、英國の市の活動する所以はこゝに在る、こゝに其活動し得らる所以の要因が顯れて居る、日本の市の活動も、どうせ金の力を藉らねばならぬ、國債七十

億に對する市債の六十億が當を得て居るものならば、日本の國債二十七億に對しては、二十二三億の市債は起しても可からう、起すと起さぬは其時の都合であるけれど、起し得べき割合は凡そ此邊であらうかと思はれる、然も日本の今日には、意外に、地方債の悲觀説がある、意外に其抑制論がある、請ひ問ふ、金なくして、其都市を歐洲的近世式にする不思議の魔法箱は何處に在るか、僕は其所在を敎へられんことを待つのである。

◎東京市は電車市營と下水改良の爲め、遠からず一億二三千萬の市債を起すに至るであらう、其現存する市債は一千四百萬圓である、合して一億四千萬圓が近き將來に於て東京市の有する市債の全額である、龍動市は今十一億の市債を有して居る、即ち龍動市は、其國の有する債額の約七分の一は自ら有して居る、日本の國債の七分の一は、約三億七八千萬である、知らず東京市は、それだけの債額を起すことが出來やうか、出來まいか。

◎龍動市の年々の豫算は一億六七千萬である、而して英國の豫算は年々十三四億である、即ち約八分の一前後である、日本の豫算は年々五億五千萬位ゐである、其八分の一は約七千萬である、而して東京市は年々一千萬圓前後の豫算を立てゝ居るが、知らず東京市も亦七千萬圓前後の豫算を立て得る時期があるだらうか、あるまいか。

◎以上の事、有れば有るで宜しい、無ければ無いで宜しい、僕は只外間の批評家の注意を求め、激動を仰ぐのである。

足下、諸君の焦慮に堪へられない筈である、僕は現に責任者の一人として、只茫洋の歎を抱いて居る、其事業に就ては固より、又其人物に就ても。

太だお粗末だが此にて終る。

別に敎育の事がある、何をも言はなかつたのは遺憾である、又職業紹介所とか、共同長屋とか、感化救濟事業の方面もある、僕はどちらかといへば、それらの話が好きだ、精神的方面の話が好きだ、こんな

方なら少くも十四五年このかた、讀んだり、考へたり、感じて居る事が較々多い、今皆それを省いて、事業の一方面を説いたのは、敢て事業に急にして、精神感化の方面を疎そかにしたのでは無い、話の混雜を避けんがため、又其長引くのを避けんがため、一時後廻しにしたゞけてある、若し餘閑があつたら、而して重ねて許さるゝなら、僕は其方面のことを、更に申上ぐる機會を得たい。

今は教育に關して、只一語を添へる、曰く東京市民に工業上の補習教育を與へることが必要であらう、此は僕の理想の一つである、幾分か之を爲し得て去るか、遂に何をも爲し得ずして去るか、それは固より僕の料り知る所で無い。

英國憲政の革命

平野英一郎

(一) 緒論

千八百三十二年以來、英國の立憲政治に一大危機を胚胎せし上院否認權制限法案は、遂に本年八月十日、上院最終の討議に於て百十四票に對する百三十一票の多數を以て通過したり。是れ啻に英國の二大政黨たる自由黨及保守黨の勢力の消長に關するのみならず、實に同國立憲政治の革命として、最も識者の注目に値する所なり。夫れ英國は代議政體の祖國也。立憲政治の模範國也。民權自治の思想は、夙にアングロサキソン民族の國土に萌芽して、十三世紀の初頭に至り、憲章を發布し議會を創設せし以來、既に七百年の久しきに垂んとす。而して其間、歲と共に民權を伸張し、國威

を宣揚し、國富を增進して、遂に今日の隆運を見るに至りし所以のものは、獨立自治の精神を基礎とする立憲政治の効果に依ること、又決して鮮少なりとせず。故に現時世界の文明國を以て自ら居るものにして、殆んど皆其憲政を祖述し、以て各自の政體に適用せざるものはあらず。殊に近時世界に於ける憲政普及の趨向は、漸次專制未開の諸國に浸潤して、遂に其國民の覺醒を促さずんば止まざらんとするの勢あり。即ち先年露國に於けるヅーマの開設となり、近年清國にありては國會創設の運動となり、波斯、土耳其の如きも立憲政治を採用し、又印度も自治制度の施行を英國に迫りつゝあるは、よく此大勢を說明して餘蘊なきに非ずや。世界に於ける立憲政治の過去及現在は、既に斯くの如き偉大の進運を示したりと雖、將來果して如何なる發展を遂ぐべき乎は、今猶幾多の疑問の裡に鎖されつゝあるものと謂はざるを得ず。此際、立憲政治の模範國を以て目せらるゝ英國が、憲政運用上の二大機關たる上下兩院の關係に對し、根本的一大變革を加へたるは、單に同國のみに局限せられたる問題に止らず、實に立憲政治の將來に影響する重大問題にして、又世界立憲國の共通的研究題目なり。由來上下兩院の併立は、歷史的發達に基く自然の產物なりと雖、憲政の運用上、之を必要とするの理由、又一にして足らず。即ち政治學上の論理より觀察すれば、第一、一院制度に於て動もすれば陷り易き專橫の弊、不公平の判斷、輕卒なる行動等を相互に抑制するに在り。第二、上下兩院中の一方が、他の政治機關と抵觸せる場合、他の一院が調和の任務に當るの便宜あり。第三、監督機關の職務を有する議會が、更に分科して其任務を盡すの餘地を與ふ。第四、上院の存置は國民中、學識、閱歷、勳功、才幹に富める優秀なる少數者をして、其能力を政治上に發揮するの餘地を與ふ。實に兩院制度は此等の重要なる機能あるが爲に、一度英國に出現せる以來、希臘、諾威、其他一二の邦國を除くの外、凡そ立憲政治を採用する世界各國に於て、兩院の併立を見ざる國家なし。之に加ふるに、英人の國民性は、堅實にして保守、理

性に長じて感情に流れず、常識に富みて輕躁に失せず。常に事物を歴史と經驗とに依りて判斷するの傾向あるが故に、漫りに舊慣を變革するを好まず。然るに今回の上院否認權制限案は、前記の如き必要ある二院制度を、事實上一院制度に變更したるものにして、全く英國憲法史上の革命と稱するも過言にあらず。而して保守的なる英國人の國民性を以て、遂によく此變革を敢てしたるに至りては、其間必ずや深く基因する所なくんばあらず。是れ吾人が多大の感興を以て其經過と眞相とを研究せんと欲する所以なり。

(二) 憲政小史

英國憲政の改革を叙するに當り、先づ順序として上院發達の歴史に遡り、更に上院が英國の政治組織に於ける地位を說かざるべからず。抑も英國の議會が古代のウイテナ、ゲモット(賢者會議)より發達して、各種の國民議會となり、遂に上下兩院の分岐を生じたるは、千二百十五年、ジョン王一世が專恣の結果、貴族、僧侶、及騎士(ナイト)等に迫られて、マグナ、カルタ(大憲章)に璽署したる時に始まれり。該マグナ、カルタの第十四條に曰く、「萬機を國民の輿論に決するが爲に、國王は大僧正、監督(ビシヨップ)、幷に伯、子、男等の各貴族に對して、直接に召集令を發すべし。而して國王は又別に各州縣に於ける庶民に對し、當該地方官を通じて召集令を發すべし」と。是れ實に從來種々なる形式を以て開かれつゝありし國民會議が、上下兩院の區劃を生じたる濫觴にして、千三百四十七年、エドワード三世の時代に至り、遂に兩院制度は、完全なる立法機關たるべき形體を具備するに至れり。而して爾來兩院の權限、勢力の消長に就ては、幾多の隆替、變遷を閲したりき即ち千六百四十九年、クロンウエルの鐵騎英蘭を蹂躪して、チャールス一世を斷頭臺上に馘るや、彼は共和政治の名の下に、峻烈なる武斷主義を斷行して、上院を廢止し、之に代ゆるに一院制度を以てしたり。彼は同年三月十七日「君主政府廢止案」を議會に提出したる後、更に二日を經て議會に宣言して曰く、「英國の共和政府は、過去歴史の經驗に徵し、上院を以て英國人

民の爲に無用の長物たるのみならず、又危險を醸すの恐あるものと認む。因て爾後之を全然廢止すべし」云々と。然れども其結果は千七百九十五年より千八百七十五年に至るボナパート、ブルボン、及オルレアン王朝の治下に於て佛國が上院を廢止したると同じく、一院制度の生命は極めて短日月なるを免れざりき。即ちクロンウエルが上院廢止を斷行して以來、僅に十二ヶ年を經過したるに過ぎざるに、再び兩院は復活の運命に接したり。斯くして上院は蘇生し來れりと雖、其權限に至りては又昔日の勢威なく、漸次年と共に削減せらるゝの形勢を呈したり。則ち千六百七十一年には、下院は上院が財政案を變更するの權利を有せざる旨宣明するの決議案を通過し、千六百七十八年には又下院は財政上の立法權に對し、上院よりも優越權を有する旨の決議案を通過し、以て上院の權限を拘束し來りしが、千八百六十年紙稅廢止案の議會に現はるゝに及んで、上院は愈々自ら財政的立法權を放棄することを承認するの止むなきに至れり。斯くして上院が、次第に其位置を失墜するに至れる傾向は、英國憲法史上最も看過すべからざる重大要點なりとす。且夫れ其政府は下院の多數黨を基礎として立つ政黨內閣なるが故に、若し下院が可決したる議案に對し、上院若し再三之を否決して、兩者遂に交讓妥協の道なからん乎。之が最後の解決手段は二途あり。第一は即ち解散を斷行して國民の意志を問ふこと是也。而して總選擧の結果、國民多數の意向、政府を支持すると明白なるに拘らず、上院が更に否認權を應用して之を否決せる場合には、國家は內閣大臣の奏請を俟ちて大權の發動に依り、反對黨を抑壓するに足るべき新貴族を創造するを得べし。是を以て如何なる時代の內閣も、上院の頑强なる抵抗を打破すべき武器を有したるものにして、即千八百三十二年議院制改革案の際、新貴族創造の脅嚇は、遂に上院を屈從するに足りしなり。然れども歷代の內閣は、之を以て非常特別の手段として、其適用を愼みたるが故に、實際之が應用を見たるは、千七百十一年女王アンの時代に於て、前後只一回其例を見たるに止れり。

之と同時に上院も亦政府が極力通過を謀らんとする法案に對しては、自己の權限を超えて之を否決するが如きことなきを慣例とせり。次に英國立憲政治の特異なる點は、其憲法が所謂不文法として、一時的に編成せられたるものにあらずして、歴史的に成長發達したるものなると同時に、憲法學者の說くが如く、確定的憲法に非ずして、伸縮的憲法たるに在り。即ち英國憲法の精神に從へば、議會は立法上の主權なり。自己の意志を以て自己の意志を飜すは自由なるを以て、議會は主權者として自己の權限を擴張し又は短縮するを得べし。從て憲法と法律との間に區別を存せず。即ち之が變更改正に際しては兩者均しく過半數の贊成を以て足れりとせり。是れ世界憲法國の多數が、議會の權限は憲法を以て定め、法律若くは命令を以て之を伸縮することを許さゞるを原則とするに比すれば、其間多大の相違ある所以にして、英國憲法史上幾多の變革を生じ易きも、亦職として之に由らずんばあらず。

（三）近時政爭史

更に降つて近世に至り、上院の權限縮少の聲は朝野政客の間に一層の喧しきを加へたり。殊に之が唱首たりしは自由黨中の政治家に多かりき。千八百九十四年、グラッドストーンは其第四次内閣の首相として、愛蘭自治案が常に上院の否決する所となるを見るや、既に上院改革の止むべからざるを鼓吹せり。然かも當時に在りては機運未だ全く熟せず。天下之に耳を假すもの甚だ寥々たりしは洵に止むを得ざりし所なり。超えて千九百〇六年の總選擧に於て、保守黨はチエンバレーンの關稅改革問題の爲に分裂して、人心頗る同黨より離叛するや、多年雌伏せる自由黨は好機乘ずべしとなし、突擊奮鬪大に保守黨の地盤を覆へし、其反對黨の首領バルフオーアを落選せしむるの勢を以て、遂に終局の大勝利を博したり。則ち保守黨百二十六名に對し、自由黨は三百五十四名の大多數を下院に占めたるものにして、從來の總選擧中殆んど其例を見ざる奇捷とす。茲に於て乎自由黨内閣は、多年の政見を實行するの機到れりとなし、本黨の意氣正に天を衝かんとする

の概ありき。然るに底事ぞ、保守黨は下院に敗れたるに反し、尚多數の同黨貴族は上院に盤踞して、其の勢力牢固として拔くべからざるものあり。爲めに自由黨政府の議案は容易に下院を通過すると雖、一度上院に廻附せらるゝや、多くは排棄の運命に遭遇するを免る能はざりき。例へば上院は前には政府提出の複制投票法案（プルラルボーテングビル）を否決し、後には教育法案を修正して殆んど原案の精神を沒却せしむるに至りしが如きは是れ也。斯くして最近上下兩院の衝突の端緒は實に此時より開かれたり。時の首相サー、ヘンリー、キャンベル、バンナーマン氏は、翌年六月下院に一の決議案を提出して曰く、下院議員をして國民の意志を貫徹せしむるが爲に、無益なる他院の干渉を避け、併せて最後の議決權を下院に保有せしめざるべからず。之に關し議會は法律を以て上院の權限を制限するの必要ありと。本案は遂に何等具體的の効果を實現するを得ざりしが、之に引續き兩院の衝突を惹起すべき事件、踵を接して起るや、上院改革の聲、更に一層の氣勢を昂ぐるに至りしは自然の結果と謂ふべきのみ。即ち上院は千九百〇七年愛蘭土地法案を否決し、翌年又更に酒類業取締法案を否決し去りしが故に、自由黨の上院に對する敵愾心は益々增加したり。殊に近年天下の視聽を聳動せしめたるは、千九百〇九年の豫算案に對する政爭なり。藏相ロイド、ジョージ氏が所謂社會主義的豫算案を提げて議會に臨むや、上院は之を以て普通財政案と異り、革命的性質を帶ぶるものなりとの理由により、之を排棄せんと試みたり。同年十一月上院保守黨總理ランズダウン卿は議會に提議して曰く、

　下院は該豫算案に對する國民直接の判斷を知るに非ずんば、之に對して贊否を決定する能はざるものと認む

と。由來財政案の否決若くは修正に關し、英國の政治的慣習上、上院の之に容喙すべき權利を削減せられたるは、前節之を敍述せるが如し。然るに上院は此傳說、慣習を蹂躙し、又英國憲法の精神を無視して、既に下院の可決したる豫算案を拒否するの態度に出づ。

自由黨の憤懣と、國民の惡感其極度に達したるは固より其所なり。而して當時上院中の領袖は自己の態度を辯護して曰く、斯くの如き革命的豫算案に對して、國民の眞意果して那邊に存するやを究むる爲に、上院は政府をして總選擧を行はしむるの權利ありと。斯くして同年十一月ランズダウン卿の動機は七十五に對する三百五十票の大多數を以て通過するや、首相アスクイス氏は引續き下院に動議を提出して曰く

下院が從來保持し來れる財政案專議の權限を超えて、上院が之を拒否するの態度に出でたるは、憲法を蹂躙し、又下院の特權を剝奪するものと認むと。

茲に於て乎自由黨内閣は此機を以て、啻に自己の豫算案に對する國民の贊否を問ふのみならず、併せて多年主張し來れる上院改革問題の解決を試みんと欲し、直に議會を解散して總選擧に着手せり。故に此際に於て自由黨が熱心支持せんとしたるは豫算案及自由貿易なりしと雖、事實上全力を傾注して國民の輿論を喚起せんと勉めたるは、畢竟上院改革問題に外ならざりき。

而して此作戰計畫は英蘭に於ては豫期の如く其効果を奏せざりしと雖、蘇格蘭及愛蘭に於ては多大の反響あり。其結果自由黨二百七十五票、保守黨二百七十三票愛蘭黨八十二票、勞働黨四十票を獲得し、自由黨と保守黨との間、僅々二票の相違を生じたるに過ぎざりき、然れども自由黨は更に愛蘭黨及勞働黨を自己の與黨となしつゝありしを以て、再び多數黨として内閣に立てり。

然るに新議會開會の劈頭より、政府黨中の急進派は、上院改革問題を提げて政府に對する威嚇を試みたり。彼等は則ち天下に宣明して曰く、上院の世襲制度を廢し、總ての議案に對する其否認權（ヴイトー）を剝奪するの確信あるに非ずんば、政府は須らく行政上の全責任を抛棄せせざるべからずと。之が唱首たりしものは實に愛蘭黨首領レッドモンド氏にして、更に首相アスクイス氏に肉薄して曰く、若し政府にして否認權剝奪に關する國王の保證を得る能はざるか、又は他の方法により解決を荏苒として遷延せしむるが如きことあらんか、愛蘭黨は爾後全然政府を援助せざるべしと。是れ實に政府

に取りては内閣存立上の一大危機なり。何となれば若し愛蘭黨にして自由黨を離叛して、保守黨に走らんか。形勢は一變して保守黨が下院に多數を占むべければ也。玆に於てか愛蘭黨は全く内閣の死命を制せり。當時世人は唱へて曰く、ウエストミンスターの議會を支配するものはアイクイス氏なり。而してアイクイス氏を命令する者はレッドモンド氏なりと。當時政府は前年否決せられたる豫算案の討議を、新議會に於て急速に處理せざるべからざる境遇に立てり。然れども前記の如き形勢の下に愛蘭黨に對して一大讓步を餘儀なくせられ、眼前の急務たりし豫算案の討議を遷延して、先づ上院否認權案を劈頭第一に議會に提出するに決したり。斯くの如く愛蘭黨が上院改革問題に極めて熱烈なる態度を採るは果して何の爲ぞや。そは他なし。多年同黨の生命として起てる愛蘭自治案に對し、上院の反對的機能を剝奪せんとするに在るのみ。

（四）ローズベリー案

是より先、上院改革の聲朝野に囂々たるや、上院中の識者は局外の容喙を俟たずして、先づ自ら其組織の改造を企て、以て時勢の要求に應ずると同時に、輿論沸騰を鎭靜せしめんとせり。即ち千九百〇八年、前自由黨内閣の總理大臣にして、現今上院に於ける大建物たるローズベリー卿は、立法的機關としての上院の能力を增進する目的を以て、議員中の領袖二十五名を選擇し以て、上院改革案調査委員會を組織したり。同委員會は上院を以て全然新規にして且合理的立法機關たらしむるが爲に、單に門閥及傳說的關係よりして地位を占むる舊分子を排して、上院内容の根本的改造を企圖せんとするに在り、由來英國の貴族は世襲的に皆悉く上院議員たるの資格を有するものにして、十五世紀の交に在りては其の數僅に五十三名に過ぎず。アン女王時代に至りても尙百六十名を算するに止りしが、十八世紀末より十九世に入りては貴族の創設俄然として激增し、ビクトリヤ女王時代には四百〇九名に達し、千九百十年には實に六百二十餘名の多きに達したり。而して其議員の内容を點檢すれば、大僧正二、監督（ビショップ）二

十四、公爵三十一、侯爵三十五、伯爵百六十四、子爵四十五、男爵二百六十四、蘇格蘭貴族十六、愛蘭貴族二十八、其他四名とす。

此世襲制度は上院の空氣を沈滞せしめて、其弊害實に夥しきものあるのみならず。黨勢の分配、極端に一方に偏倚し、百年一日の如く終始渝らざるの狀あるに至りては、政黨政治を生命とする英國の如きに在りて不便不利實に焉より甚しきは莫し。玆に於てか同委員會は其改造案を立て、皇族を除くの外、單に貴族なるの故を以て上院議員たるを得ずとの主義を設けて、其世襲主義を認めず。從來の貴族即ち上院議員たりし舊習を打破して、其間截然たる區劃を設定せんとせり。該委員會は保守的分子を以て、大多數を占むるに係らず、斯くの如き根本的變革を上院に加へんとするは果して何の故ぞ。彼等は即ち說明して曰く

第一、上院議員の數は近時頓に激增し來れるが故に、立法的機能を充分に發揮するが爲には、之に對して相當の削減を加ふるの必要あり。

第二、世襲的に餘儀なく上院議員たらしめられたる貴族をして、其繁劇にして且不適任なる議員の職務を免除せしむべし。

第三、立法的職務に無經驗なる貴族を淘汰して、適當なる人材を選擇するは、上院自身の利害上、重大なる必要あり。

此等の理由により該委員會は、上院議員の資格を設定して六種とせり。曰く(一)皇族三名。(二)宗務法官五名。(三)貴族中の互選により選出されたる職員二百名。(四)特定資格を有せる貴族百三十名、(五)大僧正及監督十名、(六)一代貴族四十名以內にして、其全數約四百名を以て之を組織するに在り。以上の新分子中皇族及宗務法官は依然として昔日の儘に保存せしめ、其他の議員には、全世襲貴族中より互選を以て優秀なる人物を選出せしむると、又特定資格即ち、內閣大臣、印度太守、加奈太及濠州南亞の總督、愛蘭大臣、若くは下院議長等は勿論、又世襲貴族にて引續き十年間下院に議席を有したるもの、及此貴族又は一代貴族にし

て引續き二十年下院に議席を有したるものも亦選擧を俟たずして、上院議員たるの資格あるものとし、以て大に人材を上院に羅致せんとせり。該委員會は、更に上院改革の參考に資するが爲に、外務省より列國駐劄の使臣に命じて、外國に於ける元老院及上院の實情を調査せしめ、其有益なる報告を斟酌して立案の資料となせる所少からず。殊に米國のセネート、獨逸のブンデスラート、及瑞西のスタンデラートの如きは、該改革案中に聯邦的分子を加味せしむるに於て、鮮なからざる感化を與へたるを看取するに難からず。

　最後に該委員會が最も苦心考慮を費したるは、上下兩院の關係を如何にすべき乎の問題也。下院の多數黨を立脚地として立つ政黨內閣は、假令下院に於て如何に多數の味方を有するも、若し上院に於て少數なる場合には、兩院互に支吾扞格して、常に政務の澁滯を來すべきは明白なり。之が最後の解決手段としては、上院に於て政府の議案を通過するに足るべき貴族を新造するに在りと雖、單に一時的政黨內閣が、一會期中に於て一議案を通過せしむるに過ぎざるに、幾多の世襲貴族を創造するが如きは、啻に極端なる變則手段たるのみならず、此手段に利用せられたる新貴族自身は、常に甚だ不滿足の地位に立たざる可からず。是れ最も回避せざるを得ざる惡慣例なり。茲に於てか該委員會は最後の解決手段を左記の方法に據るべしとせり。曰く

　上下兩院に於て議論相合はざる場合には、從來の如く兩院委員の協議に附し、而して尚且決定に至らざる場合には、之をレフエレンダムと稱せらるゝ方法に依り、國民全般の意向を問ふて決定すべし。

以上委員會決議の結果は、千九百十年三月及四月に亙り、上院の討議を經て一個の議案となれり。茲に於て上院は（一）世襲貴族中の互選當選者（二）勅選議員（三）多年國家の要職に在りし者若くは特定資格に該當する者、（四）院外より選擧せられたる者等によりて組織せんとするに在り。然れども政府及下院は決して此改革案を以て滿足せず。更に兩院の關係につきて一層

根本的の解決を下さんと焦慮しつゝありし也。

(五) バックストンの上院改革論

英國現内閣商務大臣シドニー、バックストン氏(前遞信大臣)は其著「現時の政治問題」に於て、上院改革の急務とする所以を說くこと極めて詳か也。是れ單に同氏一箇の私見に止らず、又實に自由黨全部の主張を細大悉く網羅せるものと謂ふも過言に非ず。今其要旨を抄錄すれば、第一、凡そ國家統治の機關が存立の必要あるは、一般國民の統一を助長するの効力あるを條件とす。然るに上院は其資格を缺如せり。第二、世襲制度を基礎とする專制的及無責任にして、且民意を代表せざる團體が、國家の立法機關として存立するは、現代の文明的思潮と全く相容れざる所也。世界各國中斯くの如き立法團體を有するは只英國あるのみ。第三、上院現今の組織は、代議制度の精神と全く違反せり。國民は其選擧及び監督につきて何等の發言權を有せざれば也。第四、國家各種の統治機關中、獨り上院のみは、改善若くは改革を經たることなし。翻つて下院を見れば、漸次民政的方面に向ひ、現今は實に六百萬人の選擧權を基礎として立てり。然るに上院議員に至りては單に自己一人を代表する以外、何等の機能なし。第五、無責任、非代表的個人の集合(即上院)が下院を通して發現したる民意を蹂躪し無視するを得るの權力を有するが如きは、實に非立憲の甚しきものなり。而して彼等の大多數が、自己の技能、才幹に依らずして、單に華冑の子弟たるの故を以て立法者たるに至りては、其不法殊に甚しきを見る。第六、現時の上院組織に在りては、總ての貴族は假令自ら上院議員たるべきことを嫌忌し、又は不適任なりと認むと雖、遂に立法部の一員たる責任を免除せらるゝ能はず。第七、(イ)上院は年を閲するに從ひ、實質上益々代議制度の機關たるべき要素を失ひつゝあり。(ロ)昔時に在りては、上院は常に政黨政派に超然たりき。然るに過去半世紀間漸次保守黨の機關たるに傾き、殊に近年に至りては殆んど全く同黨員の占據する所となれり。(ハ)愛蘭及蘇格蘭貴族に關する現行選擧法不備なるが爲に、同地方

は自由黨の地盤なるに關はらず、其選出貴族四十四名は殆んど皆保守黨なり。第八、貴族は只一階級を代表す。曰く地主これ也。又只一種の利害を代表す。曰く土地これ也。斯くの如き狀態に關はらず、彼等は立法上に全權を振はんとす。之が爲に彼等の主として反對する法律案は、彼等の直接利害に關する問題にして、特に土地に關せる問題に於て最も甚し。而して貴族及其階級の利益の爲に、國家の進運は常に阻碍せられつゝあり。第九、國民を擧げて漸次自由黨に傾きつゝあるに關はらず、上院のみは獨り益々保守黨に化せんとす。第十幾回の總選擧を經ると雖、上院に於ける兩黨々勢の多數及少數の關係は下院の如く變化せず。故に保守黨が內閣を組織する時は上院存在の必要なし。何となれば政府の提出する議案は一として通過せざることなければ也。然れども自由黨起て內閣を組織する時は、上院は全く有害物なり。何となれば政府の議案に悉く反對すれば也。第十一、自由黨が內閣に立つ時は、上院に於ける政府黨及反對黨の地位全く顚倒す。反對黨の首領は即ち上院の首領なり。而して政府黨は常に甚だ少數なり。其結果政府の提出案は、必ず上院の一大難關を經過せざるべからず。茲に於てか政府が議案を作成せんとするに當りては、常に上院を通過すべく多大の斟酌を加へざるべからず。下院に於ても亦之と同樣の見解にて修正を加へざるべからず。而して該議案は更に上院に至りて修正せられ又は骨拔きとなるの運命を免れず。第十二、上院は往々にして、政府の主張、下院の決議、及國民の意志を蹂躙して顧みず。之が爲に國民の多數を背後に有する强力の政府と雖、政府として立つべき威嚴を沒却し、上院の前に叩頭して哀訴歎願を餘儀なくせらるゝこと少なからず。第十三、無責任、非代議政的にして、且保守的なる上院は、過去百年間、頑强にも各種の重要なる改革案に反對したり。殊に自治問題、宗教問題、及選擧法改正案に對して然り。實に上院は國運の進歩に伴はざるのみならず、寧ろ却て之を阻礙し、破壞して顧みざるもの也。例へば愛蘭問題に對する態度を見よ。頻々として同地

方に生ずる騒擾は、殆んど皆上院が愛蘭法案に對し、常に頑强なる反對を繼續するより挑發せられたるものに非ずや。啻に上院は重要議案に對して、然るのみならず、又比較的小問題にして而かも緊急を要する議案に對しても、之を遷延し、骨拔きとし、然らずんば排棄す。而して彼等は傲然として曰く、是れ輿論を教育し、輕卒なる決議を愼重にし、極端に走らんとする傾向を中庸を得せしめ、以て完全なる立法的職務を遂行する所以なりと。然れども事實は全く之に反し、上院の存在は常に國家政務の障害となり、地方騷擾の動機となり、國民憤怒の源泉となる。上院は洵に惡事の擁護者にして、善事の妨害者なり。第十四、上院に於ける平生の出席者は極めて少數にして、其議事方法たるや又極めて鹵莽杜選なり。

バックストン氏は更に進んて、上院議員世襲制度の惡弊を指摘し、無能なる貴族の跳梁するが爲に、有爲なる政治家の手腕を發揮する餘地を狹隘ならしめつゝあるを論じ、最後に今回の政變の主眼となりし否認權（ヴィトー）問題に及べり。彼は歷史の慣例上、上下兩院の最後の係爭を貴族の新造によりて解決するは、徒らに上院を龐大ならしめて、益々之が處理を困難に導くの愚策なりとし、斷然上院を廢止するか、然らずんば其否認權を剝奪するを以て、上院問題に對する根本的解決の最後の斷案とせり。以上は彼が上院改革に對する英國の輿論を網羅せるものにして、自由黨が一致して此意見に傾けるは勿論、愛蘭黨は多年其唯一の主義綱領とせる愛蘭自治問題を通過せしむる手段として之を援助し、勞働黨は貴族に對する反抗的感情と、及其社會主義的立法を通過せしむる便宜の爲に又之を唱導したり。由來議會は一院制度と二院制度との利害に關しては、憲法學上、理論の實際に亙りて頗る議論の存する所なるは云ふを俟たず。然るに世界に於て初めて二院制度を創立せる英國が、其七百年來の歷史ある上院を事實上殆んど廢止に近づかしむるに至りては、更に將來の政治學、及憲法論上に興味ある研究題目を提供するものなり。而して吾人は英國憲法史を閲する毎に、

バックストーン氏の議論を以て其政治事情より生ずべき自然の產物なりと信ぜざるを得ず。

（六）上院問題の解決

上院改革問題に關する世論の梗概は、バックストン氏の叙述によりて其一般を窺知すべし。之より復び回顧して上院問題の政爭に遡らざるべからず。愛蘭黨の爲に强要せられつゝありしアスクィス氏は、千九百十年三月末、遂に議會に上下兩院の關係を規定すべき議會法案（パーリアメントビル）を提出したり。議案の要旨は次の四點に在り。曰く

第一、上院は政府の財政案を修正し若くは否決するの權利なきことを法律を以て制定すべし。

第二、議會の各種法案中、財政案なりや否やは下院議長之を決定す

第三、財政案以外の一切の法律案は、引續き三會期中に於て下院が同一の議案を可決し、各會期終了の一ヶ月前に之を上院に廻したるに拘らず、上院二回之を否決し、下院に於て三回之を可決したる場合には、更に上院の議決を俟つことなく、其儘國王の裁可を經て之を法律となすを得。但其前後三回の會期間には、少くとも二ヶ年以上の間隔あるを要す。

第四、下院議員の任期を五ヶ年に制限す（現行任期は七ヶ年也）

此決議案は猛烈なる辯論討議の末、四月十日を以て通過したり。然れども上院に於ける該案の運命如何は、前途頗る暗澹として之を逆睹すべからず。而して當時政府の豫定計畫を觀察するに、該決議案を五月末に上院に廻付し、若し上院に於て之を否決するの形勢あらば政府案を通過するに足るべき新貴族の創造の保證を國王に奏請すべし。萬一此保證にして聽許せられずんば、斷然冠を挂けて高踏勇退せん。然らば內閣組織の大命は保守黨首領バルフォーア氏に下るべきも、下院に多數を占めざる保守黨は、到底大詔を拜する能はざるや論を俟たず。此際政府は飽く迄辭意を示して、政務を進行せしめずんば、政局の前途は暗黑に陷りて、遂に

保守黨及上院の屈伏を見るの外なかるべしと。斯くの如くにして總選擧終了後未だ數ヶ月ヽ出ざるに、議會の解散か、若くは政府の辭職に終るべきか。政局の前途は再び一大危機に瀕したり。

此時に當り、俄然エドワード陛下御不豫の報と、之に引續きて崩御の凶報とは、英國の朝野をして一大悲雲に鎖さしめ、政治的紛爭は暫く慈君を哀悼するの情によりて消散したり。ジョージ五世陛下、之に次ぎて直に踐祚し給ひしも、新皇帝の即位日猶淺きに際し、政爭の渦中に投じて陛下の宸襟を惱ますは、洵に臣僚の忍ぶ能はざる所なりとし、議會を七月迄休會したり。而して政府は其間、政界の[illegible]局面を平和の裡に展開すべき希望を以て、兩黨領袖會議(コンフェレンス)を開催し、秘密討議によりて兩院の衝突に關する解決策を講ぜんとせり。圓卓會議(ラウンドテーブル)と稱するものこれ也。兩黨より會議に列席するものは次の如し。

自由黨	保守黨
アスクイス(總理大臣)	バルフォーア(前首相)
ロイドジョージ(大藏大臣)	オースチン、チエンバレーン(前藏相)
ビレル(愛蘭大臣)	ランスダウン(前外相)
クリウ(當時殖民大臣 現時印度大臣)	カウドル(前海相)

該會議は六月十七日其第一會を開催せし以來、會を重ぬること實に二十一回に亙れり。然れども十一月十日の最終會議に於て、遂に協商は不調に歸し、首相アスクイス氏は陛下に謁見して其旨を奏上せり。會議の内容は終始秘密に附せられたるを以て、容易に局外の窺知するを許さゞりしも、其議題の中心が上院問題に在りしは勿論、更に愛蘭自治案、關稅改革案、及海軍問題等、英國將來の興廢に關する重大問題は其討議に上れりと傳ふ。斯くして政局の前途に横はる一大難關は、我元老會議に比すべき兩黨協議會の非常手段によるも、又之を遂に打破すること能はず。斯くの如くんば公然之を議會の討議に上すも、徒らに紛擾を增すのみにして、終局何等の得る所なきを奈何せん。首相アスクイス氏は百計殆んど盡きたり。殘る所は只貴族の新造あるのみ。則ち十一月十五日國王に謁見して之に

對する陛下の保證を得たるは、後日氏が議會に於て言明したる所によりて明か也。然れども政府は氏最後の手段に出づる前、先づ順序として國民の意向を總選擧に於て問ふことに決したり。

十一月二十八日、政府は下院を解散して、總選擧を行へり。其結果は保守黨二百七十二、自由黨二百七十二、勞働黨四十二、愛蘭黨八十四にして、之を同年一月の總選擧に比すれば、各黨派を通じて黨勢の動搖僅々一二を算するのみ。上院議員等は此選擧の結果を以て、國民が雙方に團扇を擧げ得ざりし證據となして、益々改革案に反對の氣勢を示せり。新議會に於て議會法案は三月三日下院の第二讀會を通過し、四月三日より其第三讀會を開始したり。保守黨は極力該案の通過を妨害するが爲に、九百件に亘る修正動議を提出し、又百七十三件の質問を提起して、政府に迫れり。就中其修正動議中の重要項目たる。

下院を三回通過したる同一法案を、上院が否決せる場合には之をレフエレンダムに問ひ、而してレフエレンダムの之を承認したる後、始めて該法案は法律となるべし。

との修正説は、四月廿六日の議場に於て又否決せられたり。斯くして議會法案は長日月に亘る討議の結果、遂に原案通り下院を通過し、五月中旬を以て之を上院に廻附せり。

爾後六月中旬を以て戴冠式の祝典に入り、國民は歡呼の裡に新帝の踐祚を祝福したり。之が爲に一切の政治的活動は暫時中止の姿なりしも、祝典の終了と同時に政爭の砲火は再び開かれたり。當時保守黨の態度を見るに、未だ自由黨内閣が昨年十一月を以て國王より貴族創造の允許を得たるを知らず。啻に此事情を知らざりしのみならず、保守黨中の一部の者は、却て國王が保守的傾向を帶び給ひて、自黨に尠なからざる同情を有するを信じ、以て猶十分政府と戰鬪を繼續し得べく、又假令必勝を豫期せざるも終極に於て何等か妥協の道あるべきを豫想せり。因て上院は遂に政府案に多大の修正を加へ、七月二十日第二讀會を通過したり。

其修正案の要旨に曰く。

政府案第一項に對しては、豫算案の議決權を放棄すべし。何れが財政案なりやを決定するの權利は下院議長に委任せず、兩院委員會をして之を決定せしむべし。

政府案第二項に對しては、所謂一切の法律中より國王の存在及大權、プロテスタント信者皇位繼承の件、愛蘭、蘇閣蘭、威爾斯の自治に關する件等を除き、其他の法律案にして兩院の議論相合はざるものあるときは、總て之を兩院委員の協議に附し、而して尙決定に至らざるものは、之をレフエレンダムに附して國民全般の意向を問ふて之を決定すべし。

是れ實に上院保守黨が、其首領ランスダウン卿を通じて提出したる最後の抗議狀なり。政府は上院が議會法案に對して斯くの如き大修正を加ふるを見るや、アスクイス氏は直に一書を裁して、ランスダウン卿に通告して曰く、上院にして修正を固持する以上は、政府は國王に奏請して必要なる貴族を新造し、飽く迄原案の成立を期すべしと。當時世上の流言蜚語紛々として絕えず。曰く政府は旣に五百名の新貴族名簿を調成して、何時にても之を發表し得べき準備ありと。又曰く政局の前途は再び議會の解散の外なかるべしと。而して首相がランスダウン卿に與へし一書は、實に憲政上の紛爭極點に達したる時局に對し、一道の光明を投じて前途の暗雲を一掃せんとするものなりき。玆に於て乎保守黨の首領は政府の屢々宣言したる國王の保障が、單に威嚇に止まらざりしを知り、上院に於ける保守黨の多數は、急遽態度を一變して政府の原案に對し、進んで贊成を爲さゞるも敢て反對せざることに一決したり。然れども此一事は未だ以て容易に時局の前途を樂觀するを許さゞるものありき。何となれば上院中の强硬論者たる前上院議長ハリスベリー卿、前海軍大臣セルボーン卿、及下院に於けるオースチン、チエンバレーン氏等は、頑强の態度を持して毫も下らず。最後迄政府案の修正を主張して奮鬪せんとするの意堅く、保守黨は動もすれば分裂を來さんとするの危機に瀕した

れば也。斯くの如き形勢の下に、七月二十四日、下院は更に上院より返付し來れる修正案の討議を開きしかば、議場は殺氣横溢して、空前の喧騒的光景を現出し、首相アスクイス氏をして殆んど口を開く能はざらしめ、甚しきは「國賊」、「反逆者」、「前國王を崩御せしめたるは汝なり」等の罵聲百出し、議長は遂に混亂の極度に達せる議場に閉會を宣して退出するの止むなきに至れり。

超えて八月七日、保守黨は政府不信任決議案を提出し、政府が國王に貴族創造の奏請を爲し、自家の私憤を漏さんが爲に國王の大權を弄せんとするは、憲法に戻るの大逆を敢てするものにして、英國憲政史上に一大汚點を貽すものなりと宣明せり。而して當時保守黨中の硬議が飽く迄政府を追窮せんとするの態度や、酷だ峻烈を極めたるものありき。該決議案は下院に破れて、遂に上院を通過したるが、曩にランズダウン卿の提出せる修正案は、財政案の性質を兩院委員と下院議長の判決に一任することを承認すべしとの一項の外、又更に下院に於て否決の運命に遭遇せり。斯くして兩黨の混戰絶頂に達したるが、天下の大勢は既に定まれり。ハリスベリー卿以下の强硬論者も、亦遂に之を奈何ともすべからざる也。玆に於て乎政府は成るべく新貴族を創造せずして政府案を通過せしめんと決したり。是れ政府が貴族の向背を點檢したる結果、上院中の棄權者三百五十餘名に上れり、反對派保守黨の少數なるを觀取したるによる。而して此政府の態度と、及保守黨貴族の屈讓は、一面より觀察すれば新貴族の創造が又相互に取りて一大苦痛たりしに基かすんばあらざる也。多數貴族の創造が、保守黨に取りて、多數の自由黨貴族を永久に上院に扶植せしむるの不利なるや論を俟たず。又自由黨に在りても一擧多數の有爲なる下院議員を、新貴族として上院に送り、而して其權限を削弱して活動の餘地を少なからしむるが如きは、自縄自縛の愚策に非ずして何ぞや。政府の作戰既に成り、成竹又既に方寸に在り。則ち八月九日、議會改革法案の最後の運命を決すべき討議は上院に開かれた

り。ランズダウン卿は一場の演説を試み、「上院は既に政府案に反對すべき對抗手段を發見する能はず。若し强て從來の態度を持續せん乎。只上院の名譽を毀け、國家の不信を招くのみ」ならず、又陛下の宸襟を煩はすの結果に陷るのみと述べて、屑く政府案を支持する所以を宣明したり。又自由黨上院院內總理ジョンモーレー卿も、政府の意志を表明して曰く、若し上院否認權制限法案にして敗れん乎。國王は如何なる反對黨にも打勝つに足るべき新貴族の創造を允許せらるべしと。而して採決の結果、百十四票に對する百三十一票の多數を以て該案は遂に通過せり。下院に於ける政府黨員が、勝報を耳にして歡呼踴躍したりと云ふに至りては、其喜悅得意の情正に想察するに餘りあり。回顧すれば先年自由黨が、ローズベリー內閣瓦解して、現內閣の創立を見るに至る迄、萎靡振はざりしこと約十年間、只纔かに政界の一隅に餘喘を保ちし當時と今日とを比す。誰か豈今昔の感なからん哉。

（七）結論

一葉の落つるを見て天下の秋を知るべくんば、吾人は今回英國に於ける上院改革問題によりて、世界に於ける憲政近時の趨向を看取するを得べし。論者、或は自由黨內閣が、國王より新貴族創造の允許を受けたる結果、遂に否認權制限案の上院を通過したるを見、之を以て王權擴大の徵證なりとなす。然れども英國憲法上、「國王は統治すれども支配せず」との原則に從ひ、平素國王は閣臣の施設、及議會の向背に對して、殆んど何等の容喙し給ふ所なし。只今回の新貴族創造を允許し給へるは、從來國王の保有して容易に行使せられざりし大權を、閣臣の奏請によりて發動せんとしたるのみ。王權の伸縮消長に於て何の影響する所なきなり。吾人は寧ろ今回の憲政の革命に於て、一は政府の權力の擴大と、一は國民の勢力の增進とを認識せずんばあらざるなり。

抑も英國に於ける上院の勢力强大にして、動もすれば跋扈恣睢の態度を現出し、政府を牽制し、下院を抑壓し、延ひて國民の反感を惹起すの狀ありしは、苟も英

國憲法史を通讀する者の認むる所にして、又バックストン氏の上院改革論中に痛論したる所なり。然るに今回英國政府の措置は、勇斷果決、根本より上院の專權的の分子を一掃して、單に之を以て下院の助言的機關若くは政府の諮問的機關たるが如き權限及作用を殘存するに止めたり。是豈政府の前途に横はる一大障害を排して、其權力に一層の强大を加へたる所以にあらずして何ぞや。由來英國に於ける國會の權力が、漸次內閣に移動せんとするの傾向あるは、既に先年來の趨勢にして、憲法學者エリネックも亦最近英國の政治を以て議院政治にあらずして、寧ろ內閣政治なりと斷言せり。是れ實に近世帝國主義勃興の結果、內に國民の自由を伸張するよりは、外に國威を海外に發揚するの必要上、著しく中央政府をして其權力を增進せしめたるが爲ならずんばあらず。斯くの如く世界の國際的大勢より、中央集權の傾向を馴致したるのみならず、又更に今回の上院改革によりて人爲的に政府の地步を增進するを得たり。之より現政府は多年の主張を貫徹するに於て一大猛進を試むるを得ん。即ち自由黨及愛蘭黨が、グラットストーン時代以來二十餘年間、全力を傾注して通過を謀りしに關はらず、常に上院の爲に排棄の厄運を免れざりし愛蘭自治案も、近年現政府が頓に鋭意努力しつゝある社會政策上の各施設も、千九百〇六年、上院の爲に多大の修正を蒙りて、殆んど骨拔の姿となりたる教育法案も、又將來引續き生ずべき各種の大問題も、殆んど山巓より大石を轉ずるが如く、易々として上院を通過すべし。斯くして諸般の政策及施設が、著しく自由派的風調を帶び來る曉には、英國將來の趨向に對して多大の影響を與ふべきを想像せずんばあらざる也。

翻て一般國民より之を觀察せん乎。世運の進步に伴ふて、國民の教育は普及し、國民の經濟は發達し、彼等が社會の一員にして、又國家の一分子たる自覺心を益々强盛ならしむる結果、政治上に於ける國民的勢力の愈々增進し來るべきは、世界各國自然の趨勢なりと謂ふも不可なきなり。就中英國は由來形式に於て君主

立憲政體なりと雖、實質上大に民主的色彩を帶びつゝある國家なるは、天下の齊しく之を認むる所なり。殊に今回憲政上の革命を經て、上院の機能を制限して、政府に權力を集中したるが如きは、事實上之を國民最後の勝利に歸せざるべからず。何となれば英國の內閣は全然下院の多數黨を以て其立脚地となすものにして、換言すれば國民多數の信賴を以て其生命としつゝあれば也。手續上より之を論ずれば、今次の政爭の紛起したる以來前後二回の總選擧に於て、國民先づ政府に信任を與へ、政府則ち否認權制限案を提出して、最後に國王が貴族の新造を聽許し給へるにより、遂に終局の解決を告げたるもの也。然れども實質上より之を見れば、國王の貴族新造に宸慮を決し給ひたるは、政府が憲法上の慣習に從ひて之を奏請したれば也。而して又政府が此非常の手段に出でたる所以のものは國民多數の信賴を背後に有したれば也。若し夫れ保守黨及其一派が、否認權制限案に代ゆるの解決策として、將來重要問題について兩院の議論一致せざる時は、レフエンダムと稱する國民直接の投票方法によりて之を決定せんことを主張したるに至りては、其間如何に民意を尊重し、民論に傾聽せんとする民主的趨勢の著しき乎を看取するに難からざる也。英國憲政の革命を論じて玆に至れば、一方輿論の低調にして、且政治的自覺心に乏しき我國民に對する一大敎訓たると同時に、又多年朝野に跋扈跳梁し民論を無視しつゝある官僚徒輩と貴族とに對し、其專制的迷夢を覺破すべき一天警鐘たる事を信ずるを得ざる也。（八月十五日稿了）

米問題

米穀問題に就きて

法學博士 神戸正雄

一

日本人が米を以て生活の最要資料と爲すことは日本の國民の經濟の重大なる弱點にして、如何にして此弱點を排除せんか、又は少くとも緩和せんかは我國の經濟政策の最重要なる問題の一なり。此事は學界に於ては夙に問題となり居る所なれども、實際界に於ては比較的閑却されたる所なりしに、適々近頃米價が異常なる高騰を爲したるにつきて、今更の如く一般人士の眞面目なる注意を惹起することゝなれるは、予輩の大に喜悅に堪えざる所にして、此際、啻に之が一時的の救濟策のみならず、根本的の救治策の講究さるゝことゝならば、日本の爲に大に慶賀すべきことゝなり。

二

米食の我が國民經濟上不利なることは、其價格の動搖の度合が大にして且つ其寧ろ上騰の傾向あることなり。是れ主としては日本人の口に適する米の生產及消費の區域の比較的狹小なるによるものにして、夫の麥類の如く生產消費の區域廣きものに比して不利なるを免れざる所とす。卽ち米は今日、世界の可なり廣くに產出はすれども、日本人の口に適するものといへば、固有の日本米の外には、朝鮮米位に過ぎず。而して日本米の特段なる外國販路といへば、多少はあれども、未だ日本米が食料品として海外に於いて特色を認めらるゝに至らず。斯くて日本に於いて米穀が非常なる豐作の結果として、內地に消費し盡されざる程生產せられたる場合ありとするも、之が爲めに海外に相當の販路を得ることは甚だ難く、又米穀が凶作の爲めに不足

を告ぐるときにも、海外より補充さるゝことは困難にして、我が米穀は夫の麥類の如く輸出入の自在なる穀物に比して價格の動搖の大ならざるを得ざる譯なり。特に米は麥などに比しては大仕掛に耕作するに不適當なるの點に於ても、其價格が生産上割合に高からざるを得ざる筈なり。加之、我國に於ては、既に平年作を以てしては、國內人民の消費を充たすの産額を有せず、特に人口は愈々增加して、産米の之に伴ふ能はざる事情よりいふも、其價格は愈々上騰すべきなり。特には又近年我國民の消費は益々贅澤となりて、苦しくても日本米を喰はんとし、安くとも、外國米や、麥飯は食ふことを肯んぜざるの風ありて、愈々此勢を助くるなり。而して此等のことは豐作年には格別の影響は之なかるべきも、凶作年には顯著なる影響を齎らすべきものなり。斯の如く我國の米穀の生産及消費事情の米價の動搖を著くし且つ米價をして益々上騰せしむべき傾向ある其上にも、外米關税の存するありて、特に凶作にして自國米にて自國消費を充たすに大なる不足を感ずる場合に最痛切に米價の上騰の勢を助長する所なり。

三

偖て我が米價が此頃未曾有の高價を現出したるにつきては、固より相場師輩の人爲的手段によるとも少からざれども、其の之をして勢を逞ふせしめたるにつきては到底自然的にも之をして高からしむる所以のものありしやいふに及ばず。或は近頃通貨の膨脹したるより一般物價を上騰せしめ、隨て米價の上騰をも齎らしたるやにも考へらるゝ所なるが、通貨の膨脹が其流通度、其代用物(小切手、振替票)の量額及流通度、並に一般取引額等を斟酌して、尙ほ幾分物價上騰に與りたるとは夫の近年大流入を爲したる外資が國債償還政策、水道電氣等不生産的事業の爲めに入りたるもの多く、生産的目的の爲めに入れるものと雖も、尙ほ事業創始の際とて、貨物の消費のみ先だちて生産の之に後るゝより自然國內の取引額の增加を伴ふこと少なき傾あるによりて推測せらるゝ所なり。然れども其が物價上騰の上に幾許の貢獻を爲したるやといふときは、左まで

大なるものに非りしことは確なり。斯くの如くに論じ來るときは、近頃の米價の大騰貴は主として前に述べたる日本人の口に適する米の生産消費に關する特段なる事情によるものといはざるべからず。即ち昨年の作柄は農商務省の統計によれば、四千六百萬石となれるが、之を正しとせば、平年の四千八百萬石に比して僅に二百萬石の不足に過ぎざることゝなるも、此數字につきては專門家の疑問を懷く者多く、事實は尙ほ一層の不作なりしが如く、兎に角目下弱氣黨の持米も少く、原産地は品拂底に、朝鮮米の如きも、滿洲浦鹽等の輸出多くして、此端境期に於ける在米は甚だ多からず。即ち米の供給の甚だ不十分なるに加へて、目下は例年天候の變化により價格の動搖の烈しき時季にして、特に今年は氣候不順に、水害頻出したることなれば、又々不作を生ぜざるやの掛念もあるに於ては、愈々米價を上騰せしむることゝならざるべからず。此心配にして全く取去られざる以上は、只さへ乏しくなれる米穀につきて賣惜みも盛なるべきこと想像し難からざるなり。而して他の一面に於て人口は益々增加し、生計程度は益々昂進して、外米、麥等の如き代用品の需要の少きに於ては、更に愈々米價を上騰せしむべきはいふ迄もなく、特に外國米に對して從來の百斤六十錢の關稅の之ありし上に、之を一圓まで引上げたりしことも、（一石につき約九十錢引上の二圓五十錢の關稅となる）此勢を幾分助けたること疑を容れず。

四

米價が前記の如く動搖の烈しきことは、啻に一般消費者の經濟の動搖を生じて不利を齎らすのみならず、農民階級と雖も亦た、其經濟の動搖に於て不利を被らざるを得ざるべし。特に今日の如き米價の上騰は一般消費者たる勞働者官公私吏員商工業者の損害たるのみならず、農業者階級に在りても、少數大地主の如く多少の凶作に拘らず、同額の小作米を收入して其得たる米穀を賣却すべき餘裕の大に、特に米價の高き時まで持堪ゆることを得たる者には大なる利益を與ふることゝなるべきも、小獨立農民、特に小作人の如く、收穫は凶

作の爲めに少かりし上に、自家消費料及小作米等は例年の如く差引かざるべからずして、賣却すべき餘裕は極めて薄きのみならず、其餘裕も旣に米價の安き時季に賣盡して、米價の高き今日まで持堪ゆること能はず、寧ろ今日は食料米を買入れんとするの必要さへある者に取りては決して有利ならざるなり。少くとも大地主と比較して關係的には不利なる狀態にあるものなり。

五

斯の如く國民中の一小部のみの利益となりて、大多數の人口の不利を釀す所の今日の米價を引下んが爲めに、政府が先づ關稅を百斤一圓より六十四錢に引下げ、更に當中限の取引を差止めたるも敢て不當とはいふべからず。むしろ其處置の緩慢にして時機を逸しつゝあるを憾まざるを得ざるなり。即ち關稅の如きも、引下げ得べき最低限たる四十錢まで引下げ、且つ其引下期限を尙一箇月も延長して外米の輸入を一層便利とし、併せて朝鮮米の受渡代用を認め、更に米運賃の低減を行ひて市場在米の豐富を助けたらんには一層の好果ありしならんに、此を敢てせざるは甚だ遺憾とすべきなり。

六

たゞ永遠の問題としては斯の如き取引界に不安動搖を與ふる政策を繰返すの必要なからしめざるべからず。否な更に進て日本人が是等の米價の動搖及上騰の不利を避んと欲せば、歐米人同樣麵麭を食するの國民となるより捷徑なるはなきなり。若も斯の如くになることを得たらんには、食料は豐富となり、價格上騰の恐少く、且つ其動搖の危險も小なるを得べきなり。然しながら斯の如き變更は啻に消費の方面に於て困難なるものあるのみならず、生產の上に於ても亦實に大變革にして、つまり日本の水田を畑とする譯にて、容易ならざる出來事たらざるを得ず。斯くて此が實行は先づ覺束なしとして、即ち日本人が永く米食を續け、米作を爲すものとせば、一面に於て殖民政策上、出來るだけ廣き外域、特に日本の勢力範圍地又は勢力範圍地たり得べき見込ある處に日本米種の繁殖を計り、且つ又內地に於ても農業政策上、益々農事改良を進むるこ

とによりて、內地產米額を豐にするのみならず、內國米の年の豐凶による產額の差を輕小ならしめんことを計り、他面、料理法の改良（例之、味附）によりて外米にても日本人の口に甘く食し得らるゝの途を講ずるを肝要とす。且つや夫の半搗米の普及の如きも、幾分か米の供給を豐富にするの結果を生ずるものなれば、望ましきことなり。或は米の購買組合の如きも、消費者にとりて幾分なりとも其不利を緩和すべく、之と同時に米に關する關稅は之を撤廢し、特に朝鮮米の移出及移入に重課せらるゝものゝ如きは眞先に撤廢すべきものなり。若も此等にして行はれんには、夫の取引の停止の如き自由を抑壓するの政策は幸に之に採るの必要なくして濟むべきものなり。斯くて一般消費者は米價の動搖の少く且つ其低落することによりて大なる利益を得べく、立國の大本上必要なる我國工業の發達も亦達せらるゝを得べきなり。但だ農業者は之によりて不利を被むるが如きも、彼等と雖も、米價の動搖の少きことによりて確に利益すべく、小地主小作人等は少くとも關係的に大地主に比して有利なるを得べきなり。若し夫れ斯くて被るべき農民の實質的の收入減に至ては、重き地租の輕減、副業の奬勵、產業組合の發展、農業資金の供給等の諸政策によりて補充するの外なきものとす。其他通貨の膨脹につきては常に注意警戒を怠るべからざること言を待たざるなり。

米價の問題

法學博士　福田徳三

穀物の價の高下は國民の生活に重大の關係あること勿論にして古今東西の政治家は何れも此問題の爲に苦心した者である、但し歐羅巴ては封建制度の消滅して後農業保護政策の出づる前までは主として安き穀物を國民に與ふることのみを方針とし其爲に穀物輸出禁止の政策をさへ行ひ輸入に對してはあらゆる便利を與へ只管斯民の食を充實することを圖つて居た、其間の我邦はと云ふと二個の矛盾した利益の間に挾まれて一貫した政

策を執ることが出來ず爲に國民に執つては甚だ迷惑千萬な事斗り行つて居つたのである、即ち德川時代の米價政策は高價を要求する武士及び農民と廉價を望む其他の階級との雙方を滿足せんとして其何れをも滿足することが出來なかたので、而して全體を通じて見ると幕府自らの利益の上からも米價の安きを防がんとして所謂『米價取立』と云ふことを行つたことの方が多いのである、有名な三貨圖彙の著者草間直方は此事實を詳しく記述し而して最も克く時弊を道破した言をなして居る、曰く『安きも高き天にて天地は不爲一物枉其時日月不爲一物晦其明豊凶高下は天地消長の道なり樂極則悲悲極則樂夏あれば冬あり何ぞ一般に豐熟をのみ得んや……宋の代王安石宰相にて政事を執しとき五百里の大湖を埋め新田に開きなば廣大の益ならんと其事を創めんとせしに此大湖の水を落すべき工夫なく案じ煩ひけるに客の中に劉貢文と云へる者是を聞て此水落さんと最も易しと云王安石悦て如何と問に答曰大湖の水を落さんとならば其大湖の傍今一つ別に大湖程の湖を鑿りて夫へ其水を落さば忽ち大湖は渴水すべしと云安石是を悟り大笑し其企を罷しと云ふ米價の高下も金銀の融通も天理の自然にて人力の儘には成り難し云々』然るに當時の幕府の政治家には王安石なかりしものか不相變其政策を繰返して國民に迷惑を掛て居た、さて今日は米價の高きを要求するものは主として大地主であつて幕府時代に於て有力の要求者たりし武士の階級は存せぬが其代りに大地主の勢力に影響せらるゝ議會と云ふものが加はつたから、矢張矛盾せる二個の利益の爲に挾み撃にせらるゝことは免れない、然らば直方の言は今に於て繰返しても決して時代錯誤ではあるまい、否獨り米價の事斗りではなく五百里の大湖を開墾する底の事柄は殆んど總ての事に就て我々は飽き足る程見せ付けられて居る、我々國民は常に大湖の傍に大湖を堀り又之を埋めて他の大湖を堀る爲に中々重い負擔を脊負つて苦んで居る、さて昨今問題となつて居る米價暴騰のことに就ては既に世上に種々の議論も出て居て今更之に蛇足を添へるまでもないことであるが、關税の引下

や取引所に對する禁止令やの當否得失等は要するに一時限りの問題であつて其判斷は然る可き專門家の說に一任す可きことと考へるが、我國民經濟上の根本問題として目下の暴騰は果して自然的幷に投機的原因にのみ基くか又は政策の上に間違つたことがあつて其が根本の原因を爲して居るかは十分愼重吟味を要することである、若し單に前者のみに止るならば其相應の救濟法を適當に案出する丈けで事は足りるが後者も加はつて居るとなると左樣簡單に問題の解決はつかぬであらう、今日まで新聞雜誌上に顯はれた識者の說を總括して見るに大多數は前者のみを以て原因とせず後者も又加はつて居ると認むる樣に思はれる、果して然らば今俄かに米價引下げの爲に種々の手段を施すに就て先づ根本の救濟法を考へる必要がある、德川時代には米價取立の爲とて隨分愚劣な手段を執つたもので、殊に其の政策を專ら大阪に就てのみ行ひ、資產家に命じて買米をさせたり諸侯に臺所をはたいて買上げさせたり、四方八方に隨分と厄介をかけたものである、今は其反對の場合で米價引下げの必要ありとし、あれでもない是れでもないとて色々な策略をやるとしても其が効能あれば兎に角若し別に大湖を鑿ちつゝありとすれば是は餘程の考物ではあるまいか、取引所に對する取引禁止は果して如何の効がある者か又其時機方法に誤がなかつたかは取引所に關係なき局外者たる我々は如何とも判斷する力はない、併し極めて素人的の觀察を以てしても定期相場のみ暴騰したのでなく現米も買占によつて暴騰した場合に獨り定期取引のみを押へて現米市場と立場を異にせしむるは單に取引政策としては當を得たものかも知れぬが、米價を引下げ樣と云ふ目的の上からは、其當否を疑はざるを得ぬ、此度の暴騰は取引所に出入する人が關係ある故一見すれば如何にも取引所に於ける定期取引が最大の原因たるかの如く見へるが、「デヴヰルの匙は長し」と云ふ諺もある、却て或は現米市場の方に長い手が延びて居るのではないか、否長い手は臺灣にも及んで居るとの說も聞いた、若し此推測が事實なりとすれば禍根は甚だ深く延長して居るの

て、其根を絶たざる限り我々は向後屢々同樣の運命に而も米に就てのみならず遭遇するものと覺悟せねばならぬ、取引所の取引は總て是等の準備があつての上なら誰が其人てあつても今日の如き暴騰を惹起す可きてあらう、されば受渡に臺灣米朝鮮米又は外國米の代用を許すと云ふことは眞に目下の暴騰を緩和する爲には是非あらねばならぬことゝ思はれるが、是れは取引所の『テクニック』を能く知らぬから我輩には何とも判斷が出來ぬ、兎に角一度取所に干渉の指を染めた以上は首尾一貫して當然の目的を達することに勉めて貰はなければならぬ、其他鐵道運賃の引下げ又は速達の實施等も『テクニック』の問題として十分に考へて貰ひ度いは勿論てある、然し是れは今一時限りの問題てある、

關税の引下げは之に反し稍々根本に觸れた事柄てある、無論之れあるは無きに勝れりとは我輩も世論に同感てあるが、然し關税を存置して凶作の時には四十錢まて引下げるを得と定めた事は、如何にも拙なる方法てある、英國に於て『スライヂング、スケール』を採用した實蹟は我輩が玆に之を繰返へす可くは餘りに顯著の事實だから已めて置くが、我邦現在の規定は『スライヂング、スケール』よりも遙かに拙にして愚なるものなることは一言せねばならぬ、民權蹂躙と云ふ語は嘗て屢々繰返されたが、此方法は商業上の安固を頭から踏にじる所の暴法てあつて、而して其作用は米價の高下を全く自然狀態以外に置くものてある、取引所の何んのと非難するが此法は其れにまして斯民の生活を不安の中に陷らしむるものてある、唯さへ政策の犠牲として我々は幾多の苦辛を嘗めて居る上に此くの如きあらゆる經濟的知識を足下に踏倒す所の規定の爲に其苦を重ふすることは實に堪へられぬ所てある、而して是れ實に徳川時代に於ける板挾的政策を踏襲する結果てある、エホバに跪きバールに跪かんとすれば隻方より咒はれるは知れたことてある、我輩は米の關税を全廢す可しと主張し殊に朝鮮米に對する移入税は即時に全廢す可しと確信するものてあるが、兎に角一方農業關税論者を滿足させつゝ他方全廢論者にも惡く思はれまいと

の矛盾的政策の不可なることは關稅保護論者も認めることと思ふ。

さて穀物の價は他の商品と大に異る程度に於て高下するものである、我邦に就ては何の調査も研究も未だないから我邦の數字をあげることは出來ぬが英國及他の西洋諸國に就ては左の如き比例を以て上下するものなりとは學問上の定說である、

供給高の減少	價格の騰貴
一割なるときは	三割
二割　同	八割
三割　同	十六割
四割　同	二十八割
五割　同	四十五割

故に穀價をYとし供給高をXとすれば

$$Y = \frac{0,824}{(X-0,12)^2} - 0,06$$

と云ふ公式が出來る、之によつて算出すると次の如き結果が出る

供給	穀價	供給	穀價
〇、五	五、六五	一、〇四	〇、九一
〇、六	三、五二	一、〇五	〇、八九
〇、七	二、三九	一、〇六	〇、八七
〇、八	一、七二	一、一〇	〇、八〇
〇、九	一、三〇	一、二〇	〇、六五
一、〇	一、〇〇	一、三〇	〇、五三
一、〇一	〇、九八	一、四〇	〇、四四
一、〇二	〇、九六	一、五〇	〇、三七
一、〇三	〇、九三	二、〇〇	〇、一七

即ち右に明なる如く穀價は伸縮の程度甚だしいもので僅かの供給減少は著しき騰貴を來すものである、所が西洋人の主食穀物たる小麥は今日に於ては兩半球に渉つて生産せられ其運賃も安くして世界商品であるから一國又は歐羅巴全體の不作であつてもアルジエンチンや合衆國の收穫を以て之を補ふから關稅の作用を別

にして供給需要の不調和は稀にしか起らぬが、我邦の米は亜細亜に限りて供給を仰ぐので其中ラングーン米サイゴン米が外國米として入來る外は日本國一國の供給によるのであるから、需要供給の不調和は起り易き非世界的商品であつて從て今後とも其價の暴騰暴落は免れぬものと覺悟せねばならぬ、此が不便なりとて我國民が米食を廢し又は節することは出來ぬ我々は其主要食物に就て既に天然の支配を受くること著しいもので殊に風雨の災の屢なる國にある以上此點の覺悟は必要である、然るに此の自然上の不安に更らに附加へて政策上の不安の重荷を課せらるゝことは實に實に堪へ難きことである、米價の調節と云ふ語は甚麗しく聞へるが調節其効を奏すれば兎に角然らざる場合に於て此の高下する米價に伴ふて政策が常に其跡を追ひて出入することは實に迷惑なる次第てはないか、況んや調節とは抑も何事を意味するか如何の程度に達すれば調節し得たるものとするか一向分らぬに於てをや『米價の安きも高きも天理の自然にて人力の儘には成り難し』とは既に寛政文化の頃に草間直方が道破した所てある、今日我邦に於て一石何圓何十錢が調節せらる可き米價の程度なりや誰か之を確言し得るものある、我輩は米價の調節なる名麗はしくして而して實甚だ危險なる思想の根本的に其跡を絶たんことを熱望せざるを得ぬ、從て政策に向て要求する所は一切の干渉一切の人爲を米價の上より取去らんこと是のみてある、凶作の爲に米價の騰貴するは當然なり之を防ぐの道は米の供給の範圍を廣くするの一方あるのみ、即ち輸入税を全廢し凡そ米を産する國は之を我邦に供給するを圖る可きてある、乍併農業保護の爲めに米價を高くするの必要ありとならば時に暴騰することあるは當然覺悟す可きのみ、若し又投機の爲に米價暴騰することあらば定期取引の禁止は政府の有する權なれば之を應用す可きも、之と共に人爲的に或は政略的に買占の行はれ得可き餘地を作ることを廢す可し、關税を存置しては此事甚だ困難なり、朝鮮米臺灣米の來るを沮み或は買占を容易ならしむるは更らに非なり。

故に米價を自然の數に歸せしめんとするには輸入關税を廢せざれば能はず然らざれば米價は下落よりも寧ろ騰貴の一方あるのみ、さて、農民否大地主の利益の尊重す可きは勿論なれども米價の高きは單に經濟上の問題に止まらず、一國の風敎の上にも重大の關係あり、同じく西洋の例ながら穀價と窃盗罪數との關係を示す一例をあぐれば、(千九百二年ベルク氏『獨逸に於ける穀價と犯罪』より取る)

年	穀價(小麥及ライ麥) 馬克	犯罪年齡人口十万に付窃盗罪處刑者數 人
一八八二	一八五、一九	三二五、三
一八八三	一六五、三七	三一二、四
一八八四	一五九、七三	三〇一、三
一八八五	一五四、〇一	二七九、三
一八八六	一四七、二六	二七二、三
一八八七	一四五、九九	二五九、一
一八八八	一五五、四三	二五一、五
一八八九	一六九、六四	二七四、一
一八九〇	一八一、三二	二六九、〇
一八九一	二一六、三二	二八一、二
一八九二	一八四、〇〇	三一一、三
一八九三	一四六、九四	二六九、五
一八九四	一二七、一〇	二六六、三
一八九五	一三二、一七	二五五、四
一八九六	一三九、二九	二四七、五
一八九七	一五二、〇八	二四九、九
一八九八	一七〇、五五	二五六、四

右の數字は自明である說明は入らぬ、窮して刑場の人となるものは右の如くだが其底に至らずして苦む人は更らに多きは言ふまでもない、西洋の如く世界的商品たる小麥幷にライ麥を主要食物とする國既に然り、非世界的商品否國內限りの商品たる米を常食とする我國が彼等が既に其弊に堪へざる農業關稅政策を模倣するの結果其害毒は彼に倍するものあるや疑なし。而して一の惡魔は七の惡魔を伴ふ、關稅政策は更らに人爲的の供給杜絕の手段を助長するものである、此度の暴騰は諸種の手段により或は緩和せらる可しとするも、

今の矛盾的政策にして存續する以上、再び此度の如きとある可きは明てある、されば目下の問題に就て更らに根本に溯つて解決の方法の講ぜらるゝに至らば、小難を以て大難を免るゝものと云ふ可きてある、我輩は政治界の識者に對し切に此點を熟考せらんとを望むものてある、以上僅かに一夕怱々の執筆趣意貫徹せず文亦章句を成さず汗顏の次第てある、(八月廿日於鎌倉)

米作の改良と日本民族の發展

河上肇

一

米の問題は既に七八年前より折に觸れては余の論じ來りたる問題なるのみならず、最近の卑見も既に近刊の『時勢の變』の中に略論し置きたれば、今ま需に應じて筆を執らんとするも、別に改めて論ずべき理窟あるに非ず。聊か與の拔けたる業なれども、既に言ひ古したる議論を簡單に左に一言し置かん。

二

昔は王維、嚴少尹に贈るの詩に曰く、松菊荒三徑、圖書共五車と。松菊荒るゝの茅屋に住ふて身の乾坤に屬するを忘るるばかりの彼も、學を樂むからには圖書のみは五車に滿ちたりと見えたり。凡そ學問の如きは、人間の事業の中にて、最も無形的精神的性質を有するものなれども、猶ほ外圍物質の力に待つこと此の如し。數年前の書に載する所に依れば、天文用の望遠鏡にて世界最大のものは米國ウイスコンシン州なるヤークスのそれなりと見えたり。此の望遠鏡のレンズ(眼鏡玉)は其の直徑四十一吋八分の三(約三尺五寸)ありて、其價二百萬圓なりしとぞ。日進月歩の世の中なれば今は猶ほ之に優るもあらんが、之に就けても思ひ出さるゝは、昨年ハレー彗星の現はれし時、我が天文臺の望遠鏡は至極幼稚なるものに過ぎざりしを以て、殆ど思ふ樣の觀測さへ爲し得ざりし事なり。げに地獄の沙汰も金次第とや。諸事萬端、その物質に緣ある限りに於

いては、榮枯盛衰皆な一として經濟の支配を受けざるは非ず。夫れ花を折らば林影動き、石を移せば澗聲廻る。物心兩世の一進一退、げに影の形に伴ふが如し。民族發展の大策を講ぜんとする者、經濟のこと豈に之を忽諸に附すべけんや。

三

人類社會の經濟が動物社會の經濟に比し、殆ど其の種類を異にする程度の進步發展を爲すに至りたるは、實に道具の賜なり。而して今や道具は更に進步發展して、殆ど之と種類を異にするの機械と爲りしが故に、機械時代とも稱すべき現代の物質的精神的文明は、過去道具時代のそれに比して、全然其の面目を一新するに至りたり。此事既に『時勢の變』の大半を費して之が說明に充てたるが故に、今ま重ねて之を縷述せずと雖要するに、國家問題中の最大問題の一は即ち經濟問題にして、而して經濟問題中の最大問題の一は即ち此の機械の發明發達を計るの問題なり。

機械の發明發達を計るの必要あるは、產業界の凡てを通じて同じ事なれども、古人も色食は人の性なりと云ひけん樣、一日も無くて叶はぬものは食物にして、又た吾等の費用の主たる部分を占むるも亦た此の食物なるが故に、食料生產の上に此の機械の應用を計ると云ふことは、就中、急務中の急務と云ふべきもの也。故に現時の歐米諸國に在りては、或は播種に、或は收穫に、或は製粉に、機械の應用前古無比と稱せらるるも、彼等は猶ほ之を以て足れりとせず、日進月步、年每に其の精巧を競ふ。是れ歐米諸國に於いて、食料の價格の年を追ふて下落し、然らざるも其の騰貴の勢敢て急激なるに至らざる所以なり。

四

今ま翻つて我國農業の狀態を見るに、未だ全く道具時代の稚態を脫するに至らず。されば農夫は、星を頂いて出て月を踏んで歸り、終日終歲、刻苦精勵すと雖も、彼等は益々其の生活難を唱へ、他方米價は却て年每に暴騰す。譬へば彼の汽車を見よ。京都より東京に行くに、百三十里の山河、數圓を投ぜば一夜にして坐

ながらに着く。是れ機械の効果なり。若し之に反し、舊時代の道具たる駕籠に乘りて行かば、一日行くこと十里乃至二十里、日を重ぬること十數日にして費す所も亦た尠少に非ず。今ま之を食物に就いて云ふに、かの歐米人は即ち汽車に乘り、吾等日本人は即ち駕籠に乘る也。是れ彼等が優に生活の享樂を恣にして、猶ほ且つ餘財を得、以て數百萬圓を一個のレンズに投じ得るに拘らず、吾等が如きは、之を彼等に比するに、眞に臥薪嘗膽、加ふるに世界無類の重税を甘じ乍ら、而かも年僅に千餘圓を費すに過ぎざる文部省の留學生すら思ふ樣には派遣し得ざるの窮狀に在る所以なり。徒歩以て汽車と競爭せんとす、縱ひ如何に日本獨特の大和魂を以てするも、我等は疲れて負け、負けて倒るゝの外あらざる也。

獨り米のみに非ず、醬油も味噌も、下駄も傘も、疊も障子も、凡て吾等日用の百貨は皆な前時代舊人類の遺物たる道具の力に依りてのみ之が生產を營みつゝある也。されば、たとひ或種の生活難は現時に於ける世界全般の問題なりとするも、我には又た之に加ふるに、更に其の生活難を甚しからしむべき別個重要の一大禍源を藏するを忘るべからず。是等の點は戶田博士が豫ねてより世人に向つて熱心に絕えず警告せられ居る事にて、現に本誌にも嘗て『固有產業の發達』と云へる一文出てたりと記憶す。猶ほこは同博士の新刊『日本の經濟』にも收めあらん。就いて參看されん事を請ふ。

五

往々にして吾等は、我國を以て夙に世界列强の仲間入りしたるものなりなど云へど、そは實に大なる過なり。軍艦、大砲、汽車、汽船、電車、電話機、是等こそ世界共通の品を使ふと雖も、醬油、味噌、疊、障子、下駄、傘、是等日常必需の品は、皆な舊來の道具にて生產されたる日本特有の產物にして、新式の機械に依りて產出されたる世界共通の商品には非らず。大觀すれば、我が經濟界の主幹根柢は、今ま猶ほ依然として孤立鎖國の狀態を保てる也。進步無比なる今の時代に於いて、永く此の舊態を改めざらんか、吾人は我國の終

に後るゝこと啻に五十歩百歩たらざるに至るべきを憂ふ。

然らば之を救ふの策如何。他なし、各種の方面に於ける固有產業に根本的改革を加へ、舊時代の道具的手工業を變じて新時代の機械的大工業の組織を採らしむるか。然らざれば、下駄を棄てゝ靴を履き、唐傘を廢めて洋傘を用ふと云ふが如く、我が固有の風を移し俗を變へ、以て歐米諸國の異風異俗に順應模倣するに在り。

思ふに進むべきは此の二途の外あらず。而して何れも皆な容易の業には非らずと雖も、必ずしも亦た絕對に不能と爲すに足らず。外國の命ずる所、吾人は此の方面に向つて努力奮發し、以て新天新地を開くの外あらざる也。

六

米の問題に就いて云ふも亦た然り。吾人は今日の如き道具時代の生產法を一變して盛に新式の機械を應用することとするか、然らずんば米飯を廢して麵包を食ふこととするか、二者その一を選ばざるべからざる也。

然るに獨り米の問題に至りては、此の二法の實現何れも至難にして殆ど不可能と云ふに庶し。是れ吾人が我國の前途の爲めに最も憂を抱く問題の一たり。

かの樺太の新領土を見よ。邦人の移り住むに從ふて、防寒設備の比較的完全なる露人の家屋は、新たに邦人の手に入るに及んで、凡て破壞し盡され、而して之に、日本式の窓を擴げたる熱帶的建築の次第に新造せられつゝあることを。風を移し俗を變ふるの難き此の如し。然るを況んや主要食物の如きは、數千年來の生理的遺傳に依つて之が嗜好を左右せらるゝこと甚だ大なるが故に、一朝一夕にして、吾等日本人が米を廢して小麥を食ふに至らんことは、彼の羅馬字採用の如きに比し、其の難事たる實に同日の談に非ざる也。

吾等が世界共通の主要食物たる——世界の到る所に於いて生產せられ、從つて供給豐富にして規則正しく、米穀の如く年々騰貴せず又た年々激變せざる所の——かの小麥を食ふ能はざることは、遺憾と云へば遺憾な

れど、數千年來の歷史を通じて茲に乘り掛りたる吾等が船の運命、今ま其船に、吾等は戰爭に强き長所を載すると共に、かの經濟上の短所をも載せて、機械時代てふ驚くべき時代の世界經濟の渦中に乘り出てたるなれば、只だ此の上は難路を推して進むの外あらず。即ち吾等は、吾等米食人種の爲めに、宜しく米の道具的生產法を改革して之が機械的大生產の策を講ぜずんばあるべからざる也。

乍去、農業は工業と異り、自然の束縛を蒙ること甚く、山岳起伏せる我が豆大の孤島の農業に、機械的大生產の方法を應用せんことは、今日の技術の進步を以てするも、到底事情の不可能なるを免れず。即ち吾等は、吾等の肉體に宿れる自然的生理的遺傳の爲めに麵麭を常食と爲し得ざるが如く、吾等は又た、吾等の鄕土が有する自然的地理的條件の爲めに彼の大農法を利用し得ざるの境遇に在り。是に於て乎、吾等は嘗て廣く知識を世界に求めしが如く、普く耕地を天下に求めざるべからず。夫れ近世技術の進步は、山を截りて田と爲し、海を埋めて庭と爲すを難しとせず。東西南北、天下地狹しと雖も、猶ほ吾等が爲めに豐富な■米田を供給して餘りあらん。明治の民は、宜しく世界は雄飛して、我が民族發展の爲めに千萬年の大計を講ずべき也。

七

食物に豐富なるもの始めて生存競爭に殘存するを得るは、一般生物界の天則なり。獸類と人類と其の撰を異にする萬々なりと雖も、食物なくして繁殖するを得ざるに至つては、全く其軌一なり。今や歐米の人種は豐富なる穀物の供給に飽き、吾等米食人種は日々に米價の騰貴に苦む。一大奮發を爲さずんば夫れ吾等が前途は危からん、是れ吾人が切に憂國の人士に訴へんとする所なり。

八

機械の發明の必要なること、識者の唱ふる既に久し。加ふるに我が農商務省は、近來頻りに農具の改良發達を奬勵す。皆な時代に適切なる言論政策にして、吾人

の雙手を擧げて贊成する所なり。然りと雖も、發明の必要を說きたりとて俄に發明起るものに非ず、又た官廳之が奬勵を爲したりとて、官廳の奬勵に依りて大發明は起るものに非ず。

獨り米の生產の問題と云はず、凡ての方面に亙りて機械の發明は急務中の急務なれども、其の急務なるを唱ふる者、何すれぞ早く其の本に反らざる。議論聊か枝葉に亙るも、請ふ吾人をして少しく此點に就いて論ぜしめよ。

夫れ近代の發明は盡く皆な歐米人の成し遂ぐる所。汽車、汽船、電信、電話機の類を始めとして、蓄音機萬年筆の末に至るまで、吾人は一として歐米人の恩を蒙らざるもの無し。今ま識者は之を以て偶然の出來事と爲す乎、余は則ち其の然らざるを信ぜんとするもの也。

余は嘗て我が國民性に關し『日本獨特の國家主義』と題する一文を本誌に載せたることあり。思ふに論誤る所多からんも、余は、今ま猶ほ大體に於いて其の說を維持しつゝあるもの也、而して我國に絕えて偉大なる發見發明の起らざるは、其の原因主として亦た此の國民性に淵源すと信ずるもの也。夫れ戰爭の如きは、數十數百乃至數千數萬の個人の力を併せて爲し遂ぐるの業たり。故に擧國一致乃至雷同附和の長所を有する我が國民は、最も能く此の戰爭に長ぜり。然るに彼の發明發見の如きは、此の如く多數人の合力に依りて始めて成し遂げ得らるゝに非ずして、書齋に蟄居し、試驗室に沒頭せる一個異常の學者の腦髓に依つてのみ始めて實現せらるゝものたり。發明發見に要する所は、擧國一致に非ず、雷同附和に非ず。否な之に反し、異を樹て奇を好む所の一個異常の變人が、嘗て隣人の評價を顧みず、嘗て國家の賞與を目的とする事なくして、只だ其の目的を目的とし、唯我獨尊勇猛精進の氣力を振ふて、奇想を天外に攫む時、玆に始めて發見と發明とあり。要するに發見と發明とは、衆愚凡俗の力を合併して漸く得らるべきに非ず、一個異常の大頭腦を有する唯だ一人の天才の力に依つてのみ始めて得らるべ

きものたり。吾人は今ま我國民を以て敢て、衆愚凡俗の集團なりと爲すものに非ずと雖も、動もすれば團結統一を偏重するの思想と政策とが、凡て新と異とを意味する一切の發明發見を其の萌芽に於いて摘り去ること無きやを危む者の一人なり。夫れ自由の思想は獨創の母にして、精神界に於ける新説と異論と、物質界に於ける發見と發明とは、此の母の產む兄弟なり、母なくして兄弟なく、又た兄なくして實に弟あらざる也。吾人は機械の發明を希望するの人士が、深く這個の因果を尋ね究めんことを希ふ。固より思想の自由は、時として暴論空想を產むもの也。乍併、自由競爭の結果に依りて、是等の暴論空想は、健全なる他の新論新説に依りて壓倒せらるゝに至るもの也。スペンサーの云へるが如く、凡て進歩は變化を意味す。變種の發生を呪ひつゝ發明の起らん事を望むは、山を掘りて魚を求むるの類のみ。

九

筆端聊か岐路に馳せたるが、之を要するに、吾人は我が經濟界の爲め、特に我が農界の爲め、偉大なる發見發明の相次いで起り、速に我國固有產業の面目を一新するに至らん事を希望して已まざるもの也。吾人平生人に戲れて曰く、米國は世界第一等の富國なり、然るにrice(米)國たる我が日本は、啻にrich(富)國たるを得ざるのみならず、列强中第一等の貧國なり、宜しくrice國を化してrich國たらしめざるべからずと。又た戲れて曰く、米の問題は八十八の問題なり、此の問題にして解決せらるれば、我民族の難問中八十八パーセントは同時に解決されたるに等しと。米のことを考ふる久し、數行の文を成さんと欲して計らずも復た數頁に及べり。

米價騰貴の眞因

松井柏軒

◎米價の騰貴には必らず原因がある、賀田一派の買占

を以て其の主因のやうにいふのは、短見の太だしいものだ。

◎我が一ヶ年の米需要高を五千萬石とすれば、一日の需要高は約十三萬七千石弱である、賀田の最も多く買占めたときが三十萬石て、今ては廿四五萬石に過ぎぬといふたら、多いときても、二日半分、今て二日分も買占めぬのである、其れて米價騰貴の主原となるとは到底信ぜられぬ。

◎然らば則ち眞の主因は何か、昨年不作の結果や、天候不順て農界に不安を與へたのも皆原因て、而して物價の騰貴したのも、殊に大原因てあらう。

◎物價騰貴の原因は、素より二三に止まらぬてあらうけれど、通貨の膨脹は實に主要な點てある、日露戰爭前後には、三億萬圓内外、多くも三億五千萬圓を超えなんだのが、今ては五億からある、最近の統計による、四月末日の通貨流通高が四億九千三百三十三萬餘圓て、五月には五億百七十五萬餘圓に爲て居る、昨年の五月末には四億六千六百四十七萬餘圓て有たのに、今ては五億を超えて居る是ては物價騰貴せざらんとするも得んやてはないか。

◎是に就ても思ふのは、政府が外債の利拂いのためといふので、後生大事に在外正貨制を株守して居るとてある、斯様なものを止めて、正貨準備が少いなら、構はずにズン／＼兌換券を縮少する、左すれば通貨縮少て、物價は下落する、隨つて輸出超過て、正價を外國から呼ぶ、其れがため多過れば、兌換券增加、通貨膨脹て、自然に物價が高くなる、隨つて輸入超過て、正貨が流出する、其れて丁度兌換券伸縮の妙作用が行はれて、物價と丁度好い處に据はるのだ、然るに在外正貨て、兌換券の妙作用が行はれぬから、通貨が膨脹すればしたようて一向に減らぬ、物價は高いばかりて下落せぬ、イヤ、丁度適當な點に据らぬのだ。

◎在外正貨制の賢からぬと位ゐは、算盤玉に明るい西洋人は素より御存知の筈てあらう、チャン／＼と利拂さへ滯らずば公債の信用の減ずる理由がない、然るに在外正貨が減ると、大變なやうに騒ぎ出して、例の電

車市有の外債を募集させるなんて、過失に重ぬるに過失を以てするものだ。

◎若し米價を始め一般國民の生計を安くするがために、物價を低廉ならしめんとならば、先づ第一に通貨縮少の方法を執らねばならぬ、又廣軌政策て、多くの外債を募るとなどは、餘程考へものであらうと思ふ。

◎經濟界ては總て激變を忌む、其れに國民食物の主要なる米價が激變するのは、殊に避くべきてある、二百十日に雨が降つて、風が吹いたといつては米價に激變がある、毎年二圓も三圓も上つたり下つたりするやうては心細い、之を防ぐためには臺灣米は勿論同じ國の朝鮮米なども大に移入する方法を執らねばならぬ、又清國政府へ勸めて、防穀令を撤廢させ、彼の楊子江流域に、多く産出する安くて甘い米をドシ／＼輸入するが宜い、農民のためだなどゝいつて、却つて防穀令を慫慂するやうては大きに困る、外交家も其の邊に用心が必要だ。

◎條約改正て税權回復は宜いが關税率、殊に食品の輸入税を高くしたのなどは氣が知れぬ、米價を根本的に適當な處へ置かうとするのは、先づ通貨縮小と關税率改正が最も有効の手段てある、是が眞實の根本法て、他は細枝粗葉の末に過ぎぬ。

◎昔の政治家は、米價の調節に大變に貴きを措いた、我が同盟國の政治家も、麵麭の價に苦心して居る、麵麭百斤に僅か二三錢高くなつたといつて大騷ぎをするてないか、我が政事家、また宜しく米價騰貴て、内閣叩き壞す位ゐ遣るやうにならぬてはダメだ、其れてないと、財政も眞に國民の生活問題といふ肝腎な琴線に觸れぬ、唯だ物持や貴族や、投機師の悦ぶ株券ばかりて、財政巧拙の標準を定めるやうては尙更ダメだ。

◎米買占めの賀田一派を姦商などゝ罵る人達は、身代を棒に振つて賣方に廻つたものをば、義商として其れに御禮ても言ふてあらうか、聞きたいものだ、矢野龍溪先生も、大藏書記官時代に、大隈大藏卿の命令て、自身財嚢を提げて横濱とかの米穀取引所の樓上に頑張り、政府の金て米を賣叩いて、米價を下げやうとした

けれど、到頭失敗したとかいふ、今は明治も四十四年てあるのに、未だに之と一般の誤見を懷いて居る者のあるのは嘆はしい、イヤ寧ろ噴飯すべきだ。

◎眞實國民のため、米價の安くなるのを欲する誠意があるならば、必らず根本的の方法を執て貰ひたいものだ、今日殊に言ふべきは、實に此の一點である。

米價の將來

法學博士　河津　暹

一

近頃米價暴騰して細民の苦痛少からざれば政府は或は關税定率法第六條に本き勅令を以て關税率を引き下げ、或は定期取引の立合を停止し百方之を防止せんと勉む米價の騰貴は政府を促してこれ等の政策を行ふの已むを得ざるに至らしめたるのみならず一面には國民をして其食料問題につき考慮せしむるの動機をなしたるもの丶如し。本誌が汎く種々の方面より米穀につきて意見を徴せんとしたるも亦其動機に促されたるものに非るなき乎。予輩もこゝに先覺諸先生の驥尾に附して米穀に關する經濟問題の一二を叙して教を江湖諸君子に仰がんと欲す。

二

米價は我等消費者よりいへば少しにても低廉なるを欲す。然れども之を生産し之を賣る者よりいへば少しにても不廉なるを欲す。即ち生産者又は賣手と消費者又は買手との間には利害の衝突するものあり。このとは獨り米穀に限るには非れども米穀の如く利害休戚の關係すると大なるものなきか故に經濟問題として自ら重要ならざるのみ。米穀は我等の常食とするのみならず社會の階級により又身體の强弱等により品質數量により多少の差こそあれ之が爲に消費する價額は社會階級により著しき差異なきものなり。社會階級に由り其消費する價額に著しき差異なければこそ其價にして騰貴すれば社會階級の卑くなるに從ひ苦痛甚しからざる

を得ざるなれ。米價の騰貴が直ちに貧民等の利益を害するは即ちこれが爲なり。故にこの點よりすれば米價の如きは少しにても低廉なるを希望せざるを得ざる譯なれども一方には之を生産し賣捌くものあり米價の低廉なるを悦ばざるが故に獨り消費者の利益のみより打算して米價を低廉ならしむることを理想とし目的とし其理想を實現し其目的を達する爲に猛進すること能はざるなり。即ち消費者の利益と生産者の利益とを互に或程度まで讓歩せしめ以て國民經濟上圓滿なる解決を見ざる可らざるなり。このことたる頗る難事に屬す。若し世に米穀の生産者をして相當の利益を擧げしむるを得べき米價の水準の求めべきものありとは之を解決すること必しも不可能にあらざる可しと雖も世にかくの如き穀價の水準あらざるを如何んせん。曾て英國に於ても穀物の價をして相當の水準を有たしめ之に由りて生産者と消費者の利益を調和せんとしたることありき其の所謂相當の價格をば Remunerative price といふレミユネレーチーブ、プライスとは農業者をして資本勞力に對して相當の報酬を得せしむべき價格の義なるべし然れども其價格の定め方は精確なるものにあらざりしかば數々之を改正するの已むなきに至りしことありしなり。其水準を求め難きこと多くいはずして明なり。

三

現今農業の利廻りは甚だ低く、農商務省の調査に由るも若し農業者をして其勞力に對して相當の賃金を計上すれば收支償はざる場合も少からずといふ。農業の利廻にしてかくの如く低きものなりとせば、たとへ米價の低廉なるは消費するものにとりて利益ありとはいへ、低廉なる米價に甘んぜざる可らずといふは聊か片手落の論たるを失はざる可し。予輩私に謂ふに我等消費者が米穀に對して支拂ふ所と農業者が其米穀に對して受取る所と少からざる懸隔あり。東京の白米小賣相場につきて調査したる所に由れば白米一石十七圓五六十錢の中荷主の受取るべきものは十四圓前後に過ぎずといふ尤も之を精白するに當りては搗減りもあるべく包裝の不完全なるが爲に散佚する米穀も多かるべく其

他之に關する諸種の避く可らざる費用もあるべしと雖も農業者が受取る所と我々消費者が支拂ふ所との間には商業機關の不完全なるが爲に少からざる出費あるは爭ふ可らざるものゝ如し。世の農業論者は農業の技術的方面の改善を說くに非ずんば直ちに農業關稅を動かして之に由りて農業を保護せざる可らずと論ずるもの多し然れども農業者の手を離れて我々消費者の手に渡るまでに介在せる商業機關並に商取引の改善に由りて一方には農業者は今日より多くの報酬を受くるを得ると同時に一方には我々消費者が米穀に對して支拂ふ所即ち米價をして少からしむる餘地あるを閑却するもの少からざるなり。農業の技術的改良にして庶幾せらるべきものなりとせば農產物の商業の改良も亦望んで得べからざるに非ずと信ず。現に投機者は取引所を濫用して米價を釣上げ之に由りて利益を得んとしたるに非ずや從て世上米穀取引所制度の改善を論ずるものあるに非ずや。知るべし米穀取引所制度の改善が一方には米價をして相當の程度に止まらしむるを得ると同時に一方には農業者が其資本勞力に對して多く受取るを得せしむる力あるを。取引所制度の改善にして尙且つ然り其他生產者と消費者との間に介在する夥多の商業機關並に商取引の改善にして行ふを得ば消費者が失ふ所少くして農業者の得る所多からしむるを得ん。若し夫れ相當の方法を講じて米穀が運搬の際散佚するとなからしめ又は倉庫等に藏置する際鼠又は蟲等の爲に毀損するを防ぐを得ば我國の農業の狀態にして何等變化するとなくとも米價の上に少なからざる影響を見んと蓋し難きにあらざるなり。予輩は識者が我國の主要產物たる米穀の商取引並に其機關に注意せられんとを切望せざるを得ざるなり。

四

米價の將來は我國が我國にて消費する米穀を自ら生產し得るや否やに關係すると少からざるなり。元來一國の消費する所少くとも其の國民生計上主要なるものは之を其國に生產して敢て外國の助を待つを要せざるを國民經濟の理想となすこの點よりすれば米穀の如き

は我國にて消費する丈は之を我國にて生産せざる可らざるなり。然れども我國の米穀の生産は我國の消費を滿足する望ありやといふに然らざるなりこの點につきては先頃拓殖局は我本國並に臺灣朝鮮の米作につきて調査する所あり「米」と題し冊子を編めり蓋し植民地の經濟上の價値は本國の經濟の欠缺を補ふにあるが故に獨逸の如きは夙に之に注意し獨逸植民地の開拓利用に由りて本國の工業の原料並に國民の消費物をこれに仰がんと欲し調査する所あり殖民地經濟委員會は之を集成して千九百十年獨逸殖民地經濟と稱する一書を公にせり拓殖局の臨むる所之に傚ひたるもの乎。この冊子に由る時は我國人口は益々増加して已むとなきが故に今より三十年後には需要額は七千百萬石に達すべく反之米穀の生産額は今日知らるゝ有ゆる方法を講ずるも尙六千五百八十萬石を超ゆると難きが故に少くとも五百萬石は不足せざるを得ず而して臺灣の米作は同じく我等の知れる有ゆる方法を講せば三十年後には九百八十三萬石を産すべく反之人口の増加等を見積るも其消費額は四百七十一萬石に出でざる可らざるが故に結局島外供給力は五百十萬石なりといふべく辛うじて前記の不足額を補ふを得べし而して更に朝鮮を見るに之も有ゆる方法を講じて可耕地を開拓すれば三十年の後には千五十二萬石を得べく同地に於る消費額を八百四十三萬石なりとせば二百八萬石の餘裕を生ずべく從て之やがて本國の不足を充塡するものとなるなり。これ等の計數が悉く信憑すべきものとせば我國の米穀は臺灣朝鮮の助けを得ば三十年後までは辛うじて我消費する所を滿足するを得べき筈なり然れども其生産額は可耕地は之を耕し、耕耘上用ゆべき方法あれば之を用ひ換言せば有ゆる方法手段を用ひて初て得らるべきものにして事實上この生産額を得べきやは頗る疑問たり而して其消費量とても人口は今日に於る増加率を以て増加するものと見、而も米穀の消費の人頭割は今日と異るとなきものと見たるものなれども文化の進歩するに從ひ米食するもの次第に増加すべきが故に其消費人頭割は増加するものと見るべし若し人口の増加にして計算

の如くなれば其消費總量は前記の數より多くとも少かるべき理なし果して然らば三十年の後とても我國にて生産する米穀を以て我國の消費を滿足し得べきやは大に疑はし特に三十年後に於ては我國の米穀の生産は消費の增加上勵行し得ざるは明白なりとす。即ち知る數十年の後には我國は外國の米穀に由らざる可らざるとを。このと曾て立國論中にも略言したる所なるが更に拓殖局の調査を藉りて之を略說したるなり。此觀察にして誤なしとすれば我國の米價は今日に比し增加こそすれ低落するとあらざるべし何者我內國米は勿論臺灣朝鮮米は諸外國米に比し遙に優れるが故に需要の增加に伴ひ又は耕作限界の低下に連れて價格の騰貴を見るべきなり。但し內地米の價格の騰貴に從ひ從來內地米を需要したるものが轉じて外國米を需要するに至らば自然內地米の需要の增加を見るとなく從て內外米の價格は互に接近すべしと雖も、たとひ內國米の需要が轉じて外國米の需要となるとも其勢は思ふ程著しからざるべきが故に大體に於ては內國米の價格は騰貴するものと見て誤なかるべし。其騰貴の程度は如何あるべきや前に陳べたる米穀の商業機關並に商業取引の改善によりて之を償ふを得べきや予輩は之を豫言する材料あらざるを以て、凡て之を疑問となし置かざるを得ざるなり。

米價にして騰貴するものなりとせば我國の工業等の將來につきて寒心すべきものあり食料品の騰貴はやがて賃金の騰貴を意味し賃金の騰貴は生產費の增加を意味す生產費にして增加すれば一方には外國市場に於て外國の工業品と競爭する上に於て困難を感せざるを得ざると共に一方には外國工業品の輸入を招き內國市場を守る上に於て困難を感ぜざるを得ざるなり。英國にて自由貿易論者が穀物條例の廢止を標榜して起りたるは畢竟同條例の爲に穀價は騰貴し工業の進步を阻害すると少からざりしが爲なり。我國も亦工業の發達に伴ひ同じ運命を見るとなきや。要するに予輩は當面の問題としては我國米穀の取引の改善を希望し稍遠き未來の問題としては穀物の價格は騰貴すべき勢あるを以て

之を防止する方策を立てんことを希望して已まざるなり。

米問題に答ふ

法學博士　松崎藏之助

拜啓箏硯益御多祥大賀の至に存候然ば先日來屢々御來訪を辱ふし目下の米價問題に付卑見をも需候處小生事過般友人の死去やら靜養の爲旅行やらの都合にて拜顔を不得遺憾此事に候御諒恕是れ祈る處に御座候米價の茲に至りし原因に就ては中々一朝一夕に盡す所に無御座小生の熟考にては天爲人爲兩ながら相合して未曾有の騰貴を惹起致し候次第と存候抑天爲と申すは昨年の不作を以て第一とし日本米の需給の範圍狹きを以て第二と可致か不作にして供給減少すれば米價は自ら騰貴すべく而も食料品の價格の高低は供給額の增減よりは一層著しき程度を以て變動するは既に業に世人の熟知する所に有之英國に於ける例の穀物條例の經驗に際しても當時の政治家等の最考慮せし所に有之候況んや日本米の如く需給の範圍限局せられ居り設令自由貿易政策行はると想像しても猶ほ輸出入自由ならざる貨物に至りては高低の度合も一層激甚に有之畢竟するに外國米の輸入又は内國米の輸出ありて需給を調節する事不能譯合に候況んや最近人爲の之れに加はるものあるに於ては其結果は知るべき耳と不申を不得候餘り世人の注意せざる事に候得共小生は今回の米價暴騰に關しては所謂農商務の統計又は報告なる者も其一因と看做さゞるを得ざるものに候一昨年以來政府は景氣恢復を企圖せんが爲め或は強ひては收穫額を誇張するにあらざりしやと被存るゝ節なきにしもあらず候されば一昨年は割合に收穫の多きに苦しみ今年は却て其少きに苦しみ居るは何んと奇現象に無之候や小生の信ずる處を以てせば一昨年は世人の云ふ程豐作に無之昨年は亦世人の申す程の收穫可有之とも存候はず即ち一昨年の五千二三百萬石は實際に比して多きに過ぎ昨年の四千六

百萬石は又多きに過ぐべく而して米商抔は昨年來古米の未だ倉庫を出でざるものありあり。。と大呼して潤澤を粧ひし上一昨年の秋以來豐作を呼號して米價の下落を謀りし結果は覿面刻下の暴騰となるも偶然ならず候されば五千萬の國民をして米價暴騰の不意打に遭はざらしむるには先づ米石の統計を精確に致し近時米國に於ける如く一定の時期を定め規則立ちて各地方に於ける米穀の收穫高を報告するを必用とすべく候次に所謂買方なる者が先づ正米の買占めを謀り而して後定期に及びしは誠に惡むべしとは云ひながら商人としては咎むべきにもあらず要は國民利福を圖る政府者としては法律命令の許す範圍内に於て需給の調節を心掛けられ度ものに候夫に就ても鐵道院が現今の米價を以てしては運賃の如きは米價の高低に關係なしとの意見の由承知候が果して然りとせば言語道斷物價變動の理法を皆目無視するにあらざれば知らざるの誹をも免れざるべく存候何となれば一錢一厘の利と雖も運賃にして減少せば回漕者にとりては其れ丈けの利益に候利益あれば續々回漕有之べく回漕あれば買占め團にして市場を獨占する事不能は見易きの道理に御座候尙又輸入米關税の存するを以て米價騰貴の原因と萬口一樣に唱ふる樣子に御座候得共小生は此れに就ても亦意見有之候目下本邦米の價は殆んど、外國米に關税なくして高低するの狀態に御座候試みに外國米の一等米と日本米とを比較せられよ其價格のはだかりは非常にして兎ても百斤の輸入米に對して六十錢は愚か一圓を課したりとて追ひ付く事不能既に追ひ付く事能はずとせば關税を下げ乃至撤廢したりとて何の効果も無之又事實は果して之を證明致し居るにあらずや是等は英國又は獨逸抔に於ける農産物の輸入關税とは大に趣を異にする點にして何卒注意ありたき事に候實業家抔が恬然之を唱ふに至ては惜みても餘りある次第にあらずや所謂河童の河流れたるものに非耶右樣の次第に付目下米價を調節するには例の標準米の範圍を擴張するを以て最急最要の手段とすべく取引所に於ける當中取引停止の如きは六日の菖蒲たるを不免と存候先は旅行中故大要迄如斯に御座

候草々拜具

●「米問題」に對する横井農學博士の來書

米問題は食物問題てある需要の增加は確然なれども供給が之れに追ひ及ぶとの出來るやは世の疑ふ所にして漫然不可能と斷定するものあれども未だしかく早々にすべきものにあらず農事の改良は著々としては行はれ開墾の遲々たるに比して生產を增加すると頗る急速なるを見る今後とても其餘地は甚だ多し必ずしも悲觀すべきにあらず少くとも之れが增殖は十分に力めざるべからず直ちに輸入によりて之れが補充を唱ふべきにあらず米問題は今日の所謂米價暴騰の爲めに世人の注意を惹くこと甚し然れども勞働者に至るまで一袋十錢安くも五錢を煙草に費しつゝある我國民に取りて一升二十錢三十錢の米が果して左程非常高を以て同じ堪ゆべからざる苦痛を以て見るべきものなりや本年の相場は收穫多しといふ報道によりて秋安すなりし反動が此の高價を致せるものにて十八九圓は或は當然價と看做すべきものなるやも知れず余は常に米の研究に怠らざるものゆゑ貴需に應じて一文を草し度く候へども如何せん旅中資料を有せず而かも用事多くして如何にも意に任せず乍殘念御斷申上候早々　十七日

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▲高峰博士發見特許製法に由る消化新藥▲強度一定効力永久不變
▲類似模造品あり「タカ」の冠字御注意▲各地有名藥舗にあり
▲日英博覽會化學品部に多數のヂアスターゼ類出品せられたるも
審査の結果獨り本劑の優良なるを賞賛し特に發明者の功勞を表彰

タカヂアスターゼ

せんが爲め我高峰博士に最高賞牌たる**名譽大賞**を贈與せり本社は我醫界に本劑の優秀絶倫を證明せられたる此實蹟を報導し得るを大なる光榮とす。▲說明書郵呈す

發賣元　東京市日本橋區室町三丁目　三共合資會社

大學教授博士鈴木梅太郎氏發見の特許製法に由り製造せられたる本劑は吸收性同化性の**完全**なる**有機性燐化合物**にして其効用は總ての

特許新藥 ユーキリン

營養增進に在り結核性患者、食慾不振、病後恢復期に用ゆべく殊に**神經衰弱**患者の營養劑とし卓効あり

發賣元　東京市日本橋區室町三丁目　三共合資會社

（中付甲の二）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新秋劈頭の盛觀

文藝倶樂部

九月一日發行 第拾貳號 正價二十五錢 郵税二錢五厘 十六冊前金三圓九十錢

▼▲小説 **結婚前後** 田口掬汀

▼▲小説 **敵國の友情** 新田静灣

▼▲史劇 **配所の正則** 小田春宵

▼▲講談 **本町小梅** 邑井貞吉

▼▲劇評 **演藝當座帳** 岡鬼太郎

○飛行器模型製作販賣業
○寺の下足番 土田清祐
○ほんき屋 掠蓮花
○野菜の巣物 動坂の人
●劇通非劇通 柿山伏
●歌右衛門診義 贋阿彌
●講談颶風錄 曉紅
●大入袋 岡太郎

●歌右衛門の名跡 竹嶼
●新名題市川伊達藏……
●夏と今年の京都……
●下馬評 一白生
○月見の今昔 有祿山人
○飴賣訪問記 紫芳
○新流行 蕪雨
○本町誌 愚案

東京本町 博文館

(中付甲の三)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

石川寅治 吉田博 大下藤次郎 中川八郎 渡邊審也 小杉未醒 河合新藏 滿谷國四郎 合著

瀬戸内海 寫生一週

特價 限り五千部 金貳圓貳拾錢

四六版美裝函入
原色版二十二枚
木版、寫眞版、石版
繪畫百十餘枚
紀行文百二十頁
定價金二圓七十錢
郵稅金八錢

曩きに小豆島に旅して瀬戸内海一部の風光を「十人寫生旅行」にものしたる、太平洋畫會幹部の一團は、更に大に瀬戸内海を巡遊して、遂に此書を成したり、日を經る事三十日、足跡正に四國山陽九州に及ぶ、瀬戸内海の好景は日本の誇りなり、此書亦近時出版界の尤物ならずんばあらず、巨匠八人の彩筆はあらゆる版種を盡くしたる百數十葉の版畫となりて諸君を待つ、諸君は瀬戸内海を見たりや、さらば更に此書によりて其印象を的確に再現せられよ、諸君は未だ瀬戸内海を見ざるか、さらば直ちに此書に依りて坐ながら彼の煙波漂渺の間に心遊せられよ、若し夫れ將に彼處に遊ばんとする人にして、衣囊裡に此書を携へられなば、其感興其便益、又云ふ可らざるものならん

十人寫生旅行

瀬戸内海 小豆島

中村不折 滿谷國四郎 河合新藏 吉田博 大下藤次郎 中川八郎 鹿子木孟郎 小杉未醒 高村眞夫 石井柏亭 共作

美裝函入全一冊
定價金貳圓
好評第三版

特價 限り千部 金壹圓七拾錢

東京市日本橋區馬喰町二丁目一 **興文社** 振替貯金口座東京一八四四

（中付甲の四）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



數奇傳（四）

——一小文學者の自叙——

田岡嶺雲

（拾）平凡な學校生活

(1) 古くから傳はつた血

予が家の血には古くから文學を嗜好する性質が傳はつて居るらしい。我家の祖先は土居得能の土居氏との事だが、系圖を缺いてゐるから確かで無い。予等の曾祖父は町人てはあつたが、歌を讀むで、京都の日野家に添削を仰いで居た、其稿本の一部が今でも殘つてゐる。祖父は前にもいつた如く酒と客とを喜ぶ詩人肌、今で謂へば一種デカタンの肌合をもつた人らしいが、別に詩も歌も作をした樣子は無い。父の兄弟は女をも加へて八人てあつた相だ、予等が知つた頃は伯母一人と叔父二人とてあつた、父は始終邑の事や家の事に鞅掌して、晝は滅多に家に居た事の無いほど忙しい身であつたが、夫でも閑をぬすんでは歌をよむだ。一人の叔父は別に取とめた學問は無い樣子てあつたが、俳句は上手て單の月並ては無かつた、予は病

氣て國に居た頃此の叔父に俳句の手ほどきをして貰つた。其次ぎの叔父は三人中て其頃ては一番纏まつた學問をした人て、詩も作り、漢文も書いた、が後に軍人に成つたので、此の方は捨てたらしい、又此の叔父は多方面の趣味を持つた人て、畫もかいた、此の叔父が彈いたといふ胡弓が家の押入れに永く藏はれてあつた。

予等兄弟の中ては、一番の兄は早くから詩を作つた、能く白紙へ自分の詩や古人の詩などを書き散してゐた、字も中々甘かつた。二番目の兄は畫の稽古をして蘭や菊を習つてゐた、此兄は豫備門時代には小説も書いた事があつたらしい、硯友社の出來た頃危く其連中に入る所だつたといつてゐる。

予も未だ大阪へ出ぬ前から、小説の眞似のやうなものを書いては獨りで喜んでゐた、而し文學者といふやうな者にならうとは當時は思ひ寄らなかつた。大阪に居る頃は海軍に入るか、否ずば大學の政治科へ入ることが志望であつた、大臣か大將か、民を濟ふか國を救ふか、是が少年の野心であり理想であつた。併し五年間の病氣で、海軍に入るには不適當な身體となつた、而して病中の慰みに多く文學の書籍に親しんだのが、何時しか此方面の趣味を解する樣になつてゐた。

水は紆り曲つても終には卑きに就く、予の文科の選科に入るに至つたのも、自然の性が之に嚮はせたのであらう。予の家に傳へられた血の一部は、予によつて劃然と著しくせられたと共に、又夫が予の如き不敏のものによつてせられた爲めに、頗る光彩のない者となつたことを、予は吾が祖宗に向つて謝せねばならぬ。

(2) 初めて自分の汗の報酬を得た

一年半の水産傳習所を卒業さへすれば、直ぐ國へ歸るといふ家人との約束であつた、其約束を無にして更に三年の學校生活を續けやうといふ事は、第一は予の健康上より、第二は父を失うた後の家庭の事情より、到底兄等に承知されさうに無い。予は考へた、前以て相談すれば必ず異議が出る、若かず事後承諾を求めや

う、出來かした事は仕方が無いとして許して吳れやう、是より外に策は無い。

予は叔父は勿論兄等にも秘密て選科入學の手續を運ばうとした、三田へ往く方角を轉じて上野の圖書館へ通つて受驗の準備をもした。但茲に忽ち困つた事は受驗料(多分五圓てあつた樣に覺えてゐる)てある、予は其頃兄から月々一圓の小遣を貰つてゐたが、夫は皆古本を買つて了ふ。今からはいへば僅か五圓てはあるが、叔父にも兄等にも仰ぐことが出來ぬとすれば、外に此金の出處が無い。受驗料が出來ねば、予の企は根本から覆つて仕舞う。予は少からず此には頭を惱ました。

左考右思の末が、其頃四谷の大番町に居た母方の伯母に事情を打明けて借りやうと決心した。此より外に途はない。此の伯母は多少文字もあり、縋りついて賴めば呑みこんで吳れるだけの、物の譯つた人てあつた。

或日思ひ切つて此伯母の家を訪ねた。往きは往つたものの、金を借せといふ事がどうしても言ひ出し惡い、言ひ出さうとしても胸が躍つて口へ出ぬ、顏が徒らに赧くなるのみてあつた。

思ひ切つて言ひ出して見ると、造作もなく貸してくれたのてホッとした。

金といふ者を他人の手から借りたのは、此時が初めてであつた。

學校へ入つて後の夏休みてあつた、予は其頃本郷五丁目の裏通りの素人家に下宿してゐた、兄の其頃は未だ多くも無い俸給の內を割いて學資の支給を受けてゐる身には、避暑旅行などといふ贅澤もいへなかつた。駿河臺の袋町の崖の上に立つた涼しさうな下宿屋を探し當てゝ、其處に移つた。其時移轉の金に窮して、今まて下宿した家が質屋に親類があるといふのを幸に、賴んで母や伯母が丹精の手織縞の冬物を一行李ソックリ金に代へてもらつた。

是が予が質といふものを置いた初めてである。

其の駿河臺の下宿屋て予は蘇東坡の傳を書いて、當時田口卯吉氏が發行してゐた史海へ投書した。見晴しと風通しは宜いが、午後になると西日が一杯に照りつ

ける室で、原稿紙五六十枚の物を書いた苦しさと、書終つた時の嬉しさとは、女の出產といふ者を想はせた。其月の末に一封の原稿料を受取つた、開けて見たら十圓あつた。

是が予が自己の額の汗によつて金を獲た初めてである。

(3) 毒蛇に吸はるゝ花の蜜

三ケ年の學校生活中、一處不住の浮浪人の樣に隨分と彼方此方へ下宿を變へた。

岐阜の大地震の歲には、牛込の榎町の下宿屋に居た。其頃は未だ此邊も寂しかつた、裏は田甫で折柄冬枯の、關口から目白臺へ掛けての蕭踈な景色が望まれる、朝々窓を明けると、霧が煙の如く室に流れ込むだものだ。

同じ原町の法華寺に間借をした事もある、和尙に小僧が一人居て、曉さらぬ内から晨の勤の太鼓が枕に響く。小僧は脊の高い、顏の間延びのした、芝居の道成寺に鼻の下を靑くして出て來さうな型であつた。

此處から通つた時は、學校は可なり遠かつた、冬の日の短い頃で文字通りに星を戴いて出て星を戴いて歸つた。教師の講義を聽くよりも圖書館で勝手な本を渉獵つて暮す日が多かつた。人顏の見えぬ黃昏を屋臺店の大福餠を袂に忍ばせて、噛りながら步行く事もあつた。

谷中の此も法華寺に居た時は、間だけ借りて居たので、學校への往復に茶屋町の一膳飯屋の繩暖簾を潛つて食事をした。飯一杯が五厘で、刺身の五錢を除いては菜は大概一皿一錢であつた樣におもう。雪花菜汁か殊に甘かつた。

此寺には梵妻が居て、おしめが墓の傍によく乾してあつた。和尙はテカ／＼と紅く脂切つて俗氣と肉慾との發達してゐるのが想はれた、併し豚のやうに細い眼に其の惡人で無い相を示してゐた。梵妻は和尙とは大分年が懸け違つて居た、顏立は醜い方では無かつたが、其小さい額に蹙つた眉と釣上つた眼とが如何にも慳貪らしく見えた、實際左程でも無い事に其兒の守を叱り

叱りする聲は厲しく且つ甲走つて面憎かつた。

此守婢は素直な痛々し氣な女であつた。小柄な細面て眼が黒かつた、主婦の無理な命令にも逆はず柔しく立働いて、子供の守の隙々にはかい〴〵しい襷がけて本堂の廣い縁などを拭いて居た、自分の部屋の掃除も此女が朝々してくれた。境内に居た植木屋の娘の同じ歳頃ながら妖に蓮葉なのに較ぶれば、其眼の光りに何の汚れをも宿しない初々しさが、際立つて貴かつた。

夏休みの旅から歸つた時此女はもう居なかつた、銚子とかへ酌婦に賣られたのだと聞いた。むくつけな荒くれ男に毒蛇のやうに附纏はるゝ日蔭に咲いた花のやうな憐れな彼女の姿を想ひ遣つた。

間借をしてゐた染井の植木屋には、庭一面に楓樹があつた。家の人が往來に向つた處に茶店を出してゐて鄙びた若い娘などが床几に集まつてゐた。此頃ユーゴーの作に讀み耽つて、道を行く隙も惜しく、學校への往復を讀みながら歩行いて、看板に頭を打衝けたり、大八車に突き當ることも珍らしくなかつた。

最後に移つたのは彌生町の下宿屋であつた。此に居たのは卒業前から卒業後へかけ隨分長かつた。

吾等同人が夜鬼窟と號したのは此下宿屋の一室である。

予が始めて世間に出て、世間を觀、世間と接し、世間と鬪ふたのは此の下宿屋に於てゞある、此の下宿屋は予が實際的の生活に入つての最初の陣地である。

(4) 夜鬼窟の同人

學校を卒へたのは、明治二十七年の、日清戰爭が將さに開かれんとして、電信隊や測量隊が密に新橋から朝鮮へ送り出される頃であつた。

學校へ入つた初め、嘗て大阪で自分と同級であつた人々が金釦の制服を着けて揚々として居るのに比べて、一種の繼子根性とでも云ふのであらう何となく肩身狹く感じた、自分も高等學校の試驗を受けて正科に入りたいと其準備に孜々と勉强した。其内に夫が如何にも小供らしい虚榮心のやうに考へられて來た、男は裸百貫、肩書ての白痴嚇は卑怯だと思つて斷念した、

が今からいへば是も終に負惜みに過ぎない結果となつた。

嘗て金に窮して、一書肆の或叢書を書かうと談判した時、名義だけでも學士の肩書の人と共著にと斷はられて、予は此書肆からは以來唯の一冊たりとも出版せぬと決心した。若し此書肆からの出版物で予の名を冠したものがありとすれば、夫は他人の書いたものに予の名を貸したまでだ。

學校を出るには出たが矢張兄の保護を受けてゐた、夫でも抱負だけは凄じかつた。東西文明の融化といふ大きな題目を提げて、同志の東亞說林といふ雜誌の發行や、東亞學院といふ學校の設立やに關つたが、書生の無成算、孰れも永續はしなかつた。

此頃帝國議會から始まつて躍起といふ語が一般に流行つた、其語には一種不平と反抗と突進との意味を含んでゐた、我等同人も文科大學中の躍起組たるに外ならなかつた。此の躍起の語をもじつて夜鬼窟と予の室を命名した、當時六疊の予の室は雜誌の編輯局であり、又同人の俱樂部であつた。

アブサント酒を呷つてカフエ某の定連たる今のデカタン黨は、佛蘭西の詩人風を氣取つて居るのであるが、其頃の我等は醉枕窈窕美人膝、醒握堂々天下權といふ東洋流の豪傑を理想としてゐた。愚な事だが、其頃の我等は、放縱な生活を卓犖不羈の行だと信じてゐた、酒色の沈湎は物慾の目的としてよりも、寧ろ一種の風流として意味を有して居た。今日の所謂モダーニストも、當年の予等も共に一種のデカタン臭味を帶びて居たに異りはないが、モダーニストが官能の纖巧を誇とするに對して、予等は寧ろ何事にも無頓着な意氣の粗放を衒つたものだ。此も時勢の變遷であらう。

想へば春秋十八年、當時の同人も皆老いた、壯圖も豪興も今は唯思ひ出の夢とのこる許りであらう。

(5) 青年文の發刊

明治二十八年の正月であつた、神奈川の高島山に居た長兄の家で歲を迎へた數日後、山縣五十雄君からの手紙に接した。少年園で文庫以外に一雜誌を發行する

に就いて會見がしたいとの旨であつた、予は匆々歸京して其編輯を擔當することとなつた。

雜誌は二月十一日の紀元節をトして其第一號を發行した、『青年文』が是である。

雜誌は主として中學生以上の青年の文學的作物を掲載するものであつた、而して卷頭に、山縣君の發意で、評論之評論の『世界の進歩』欄に倣うて、其折々の文藝批評を掲げることにして、之を『時文』欄と題した、標題を二行に跨らせたのも山縣君の意匠に成つたものだ。

此の『時文』欄は初めは山縣君と予とが匿名で執筆し、後には笹川臨風君や佐々醒雪君抔からも助を得た。予の我意に任せた無遠慮な批評は、世間から漫罵と認めて攻撃せられた。實際予の批評は科學的には何等の根據もなかつた、唯自分の好いとおもふものを好いといひ、惡いと信ずる物を惡いといふ極めて獨斷的なものに過ぎ無かつた。但世間からは一概に罵倒するやうに謂はれてゐたが、自分では随分新進の作家に同情して推挽に努めた樣に信じて居る、併し人といふ者は褒めた處よりも惡口の方が多く眼に附く者らしい。

日清戰後の國運の勃興をうけて、此頃は紅葉露伴逍遙美妙等の全盛時代に次いで第二の文學興隆期であつた。新氣運は新作家を生んだ。鏡花が出た、一葉が出た、柳浪も出た。早稻田文學の創刊も帝國文學の創刊も此頃であつた、島村抱月君も、金子筑水君も、故高山樗牛君も、姉崎嘲風君も、此間に出た。『文學界』の一派が其清新を以て文壇の一局に赤幟を樹てたのも此頃である、北村透谷君も、平田禿木君も、戸川秋骨君も、將た又島崎藤村君も此間に出てた。許多の才人詞人鬱勃として一時に叢出した。

『青年文』も亦知らず識らず此氣運に促されて出たともいひ得る、『青年文』は文壇に蟠れる情弊の荊棘を斫披いて、無名新進の作家の出頭の地を開拓するに努めたのであるが、其の期する所の効果を擧ぐるには、予のあまりに不敏なりしことを恥ぢねばならぬ。併し當年の青年文投書家にして今日文壇上に知名の士と成つ

て居る人も二三は有ると思ふ。

此頃の予には文章は神聖なる事業であつた、毎月末の青年文の『時文』の起草にも、必ず朝爽の時を擇んで几に向うた、心の散ずることを恐れて身を靜にし、殊の惰ることを恐れて食を減じた、食後の少憩の折にも古人の詩集の類の外には雜書に手を觸れなかつた、恰かも盈々と注がれた盆水を捧げ持つが如き敬虔の態度を以て、予は紙に溢み筆を執つたのである。故に其文字は固より見るに足らずとするも、其言々句々皆衷心の誠より出てた者であつたことだけは、當年の予の文章に於て聊か採るべき點であつたとおもふ。

雙鬢に種々たる白髮を見る今日、復た當年の意氣もなく熱誠もない、何事にも感興をも憤悱をも感ぜぬほど、予の血は冷かになり了つた。顧みて當年に恥づることが多い。

(拾壹) 銷魂記

(1) 打棄られた樣な町である

筆によつて獲る瑣細な報酬は、到底予が當時の放縱なる生活を支ふるに足らなかつた、夫に學校を卒へて後の何時までをも果しなく兄の保護の下に立つことは甚しく疚しかつた、予は餘儀なく、予にとつては極めて不適任な學校教師として作州に赴くことを決心した。

岡山までは汽車、其より北へ十六里、山に傍ひ川に沿ひ、奧へ奧へと車に搖られて行く、人間の境涯と離れて寂しい寂しい國へ果てしもなく曳きこまれて行くやうで、云ひ知れず心細く情けなかつた。但折節初夏の、若葉を罩めて煙る小雨に、山も水も緑に匂うて、太古のやうな閑さは嬉しかつた。

津山は、山の峽に、打棄られたやうな置忘れられたやうな町である。其南を流るゝ津山河の瀨音の外には、繞り圍む山の沈默に封じられて物の響もせぬやうな町である。黝ずんだ家並の古び、街の上の疎らな人通り、殊に士族町の頽れた石垣、傾いた門柱、歯抜け歯抜けの屋敷跡に茫々と草の茂れる、何れにも老衰と廢頹と

を想はせる町である、活動のない生氣のない、文明と機械とに遠ざかつた町である。空想に憧れ功名を夢み、徒らに風雲を望んで焦悶する生若い身が、何して此の薄闇い佗しい處に、呆然と何時までか堪へられやう、况んや其日々の仕事が、塗板の前に椅子を据ゑて、活きた蓄音器の役を勤める教師たるに於てをや。

孟子は天下の英才を育つるを人間の至樂の一にさへ數へた。教育といへば如何にも趣味ある事業らしい、併し夫は自分の意のまゝに精神的に人物を薫化陶冶することが出來る上の事だ。今日の樣に一も二も規則づくめに形式づくめに、ヘルバルトがこうのペスタロッチがどうのと、夫で何が面白い。定められた時間に、定められ教場に出て、定められた教科書を、定められた分量だけ講義の切賣をする、夫で何が面白い、縱使んば人の女房を竊んでゐても、生徒の前へ出ると品行方正の權化でゞもある樣な顏をしてゐれば夫で濟む、教育家とは僞善の人の名である。校長の前では逡巡して小使の前では威張る、諂諛を禮讓と心得、曲謹を恭敬と心得てゐる、教師といふものほど卑怯な卑劣な者は無い。教師といひ教育家といふ者が此の如きもので無ければならぬとすれば、夫に何の面白味かある。教師といふ者は厭な者だ。自分の意思を曲げて型に嵌つた行をする事は後めたくて予には出來ぬ、野性を帶びた予には鼻面へ綱を附けて引廻さるゝ樣な檢束には到底堪へられない。

前に一度教壇に立つた事はある、併し夫はたつた一日であつた。國の先輩の人の推薦で、日本中學へ備はるゝ筈になつた、受持は三年級の漢文である。三年級は中學生中で最も御し難い者ださうだ。夫な加減は知らない、少し遲れ目に駈附けて教場へ入ると、生徒は多分休課たらうと想つて居た當が外れた不平であらう、一齊にワーッと喊の聲を揚げる、夫で新任の挨拶でもしてサッ／＼と引上げて仕舞へば無事であつたらうが、そんな事に氣の附くには餘りに若かつた、構はず生徒に輪講を命じた、生徒は質問に事よせて議論を吹掛ける、教場は喧囂混亂に陷つた。其内に時の鐘が

鳴つた、立去らうとする予の後から毆れと浴せかけた者がある、聞捨てにすべき筈を、怒に堪へ兼ねて居た予は、振顧つて喧嘩腰で詰寄せる。大人氣ない騷をして、其日限りて辭職して了つた。

いじめ〲と物の黴る梅雨の天氣のやうに煮へ切らない教師氣質は人のを見るさへ予は厭だ、どうして自分が永く其れに堪へられやう。

若し予に次に記すやうなローマンスが起らなかつたなら、予は其歳の夏休にはもう津山を去つてゐたかも知れぬ。

(2) 予は戀を解してはゐなかつた

放縱な生活に慣れた予は、遽に其行ひに檢束を加へることが出來なかつた。加之乾枯びた樣な無趣味な周圍に厭倦を感じて、其不滿の代償を何者にか求めざるを得なかつた。

此地方の人は、教師としての予等が興を旗亭に估ふのを左許り怪しとも思はぬほど、品行の問題に弛緩てあつた。予は殆ど公然に茶屋の門を潛ることを敢てした。

或時など東京から訪ねてくれた友と、折柄の夏祭の夕を妓を携へて、雜閙の中を、構はず歩行いた。之を見た生徒があつて、校長に抗議を申出たといふ事を後に聞いた。有理な話てある、苟くも所謂教育家としては身分柄有るまじき行ひてあつたらう。併し當時の予は、虛僞な善は、露骨な惡よりも更に惡てあると信じて居た。

初めは唯だ肝膽を披瀝して相語るべき友も無き寂しさを紛らす爲めに過ぎなかつた。窮屈に畏まつて因襲的な通り一遍の挨拶を分別臭い髯男の口から聞くよりも、無知無學な女どもの下らぬ談笑が、予には寧ろ貴かつたのだ。

從來にも予の心の底の底に常に蟠まつて消えやらぬ鬱塊があつた、憂愁とも憤懣とも自らにも識られぬ、何の爲め、何事に對してとも自らにも譯らぬ、但如何なる時にも心の隅に黯い影を感ぜぬ事は無い、忘れやうとして勉め趁ふ歡樂の耽溺も之を忘らすには力が無

かつた。しどろに醉うた其奥にも醒めて冷たい我が潜んでゐた、打ちおろす撥を彈き返す太鼓の響には、吾が胸も共に開けるを覺える、而しそれも刹那に過ぎなかつた。予は飽くまで予が胸に蝕い入つて去らない悶々を抱いたまゝに、作州に來たのであつた。

　作州の山は秀て水は清かつた、而し予の悶々を慰むるには自然はあまりに生温い、予は寧ろ寒時は寒殺し熱時は熱殺する底の强烈な刺戟を欲した。

　予の沈湎は時とともに漸く加はつた。

　予は今まで黃金に切賣せらるゝ汚れたる戀に、汚れたるものとして對する以外に、眞に戀なるものを解しては居なかつた。

(3)　月見草の樣な女であつた

夢のやうに果敢ない光を手賴に生きる、月見草のやうな女であつた。

　恐ろしい或物に追はれてゐるかの樣に、女の態度は常に怯々としてゐた。

　其には理由があつた、女は奇な運命に弄ばれて生れた者であつた。

　此町の出來事は隅々まで手にとる樣に承知して噂を喜ぶ予の傭婆の語る所は此であつた。

　此女は夙くから他人の家の養ひ子となつた、女は其母の罪惡に生れて其父は眞の父では無い、其の養はれた家の父が眞の父である、從つて今の家の母は眞の母て無いが姉は血の續いた眞の姉である、而して其姉の眞の母は既に亡く、今の母は其眞の母では無かつた、縦しい此の母と姉との仲は固より圓滿で無かつた其反動として、女は寧ろ此母に愛せられてゐた、斯る義理と義理との紛糾ふた家庭に人と成つて女は現に其の眞の父眞の姉の下に在りながら、此に眞の父眞の姉としての愛を要求する權利も無い、唯だ斯る社會に普通な、冷かに女を黃金の犧牲とする殘酷な命令に服從するの外は無かつた。女を愛してゐたといふ母さへも矢張老後の安樂を此の女に託らうとする慾得づくからであつた。

　女は父母兄弟の愛の柔みを全く知らずに成長した、

少い時から身にひし〲と喰入るやうな冷たい義理責めの羂にからまれて我意の自由を樂み居る瞬間さへも無かつた。笑を賣り媚を賣り貞潔を賣る、何よりも堪へ難い苦痛であつたらう、併し反抗するにはあまりに素直に氣の弱い此の女は其身の薄倖を恨みつゝも、泣いて其運命に服從せざるを得なかつた。義理、此二字は此の女には如何に詛ふべき語であつたらう、女には此ほど恐ろしく響く言葉は無かつた。

女は較事を辨へて居た、其だけ自己の意思を沒却し自我の獨立を抛棄することの懊惱は大であつたらう、併し其家人の命令の前には是非となく一身を犧牲にするほど、少時よりの境遇は女を義理なる者の前には戰慄せしめた。

斯る運命に育つた女てあつた。

(4) 戀を語るに相應はしい家であつた

予には二人の間が、『偶然』の戯れに結ばれたものとは想はれない、自からは豫め知らぬ宿命とてもいふ樣な者が前から定まつてゐたとしか考へられなかつた。東京を遙かに距てた而も此んな山の奥の、今までは其名をさへ聞かなかつた土地へ特に來るやうになつたのも、本より國を異にし境遇を異にする見ず識らずの二人が、其の互ひの存在をいふことすら永久に覺知することなくしてもあるべき所を、斯く相識り相許すやうになつたのも、二人の運命を絡んだ逃れぬ約束であらうと思つた。

其頃女には一人の男があつた、男は町でも屈指の素封家の息子て、女に惑溺んで入れあげた末が、其父の判を竊んで金を借りた、固より世間に有勝ちの強ち咎むべき事でも無いが、但當人が戸籍上他家の人となつてゐた爲めに、情實を顧みない冷酷な法律は、彼の行爲を容さなかつた。彼は謂はゞ此の女のために獄に投ぜらるゝに至つたのである。予が女と識つた時、彼は既に獄から出て新妻を迎へて居たが、女との關係は全く絕えては居なかつた。是も女には一つの義理の枷てあつた。

女の此事情と、予の身分柄との爲めに、我等は極め

て密かに會うた。

町を稍々外れて、監獄の高い黒板塀を附いて廻ると、津山川に枕んで小やかな閑かな旗亭があつた、我等は此の家を擇んで會うた。庭に大きな松が盤旋として、月の夜など疊の上に其舞ふやうな影が落ちた。雨の日は、向ふの山に、湧いては流れる雲の徂徠が河を隔てゝ眺められた。殊に蒼茫の底に沈みゆく黄昏を、瀨を曳きのぼる舟人の叫び、哀調水に響いて長く曳き、沁み入るやうに胸に應へて、坐ろに人の涙をさそふ。戀を語るに相應しい家であつた。

(5) 夢みる樣な戀は出來ぬ

狭い土地は何事も目に立ち易い、我等の噂が漸く人の口に上るやうになつた。山陰道への修學旅行に國境の山越えに足を痛めて先に歸つたのを、女の爲めてあるかの樣な噂をすらした。そんなに迷ひ溺れてゐる樣に想はれるのが口惜しかつた。

實際其頃の予の戀は左程までに亢りつめた戀では無かつた、女の身の貞潔の汚れてゐるのも忘れなかつた、斯る女を妻として家に入る可らざるものなることも忘れなかつた、第一人者として泣き笑ふ自らの姿を第三人者として觀照することも出來た、誇張せられた、飾られた言葉の綾に戯曲的な効果を期待るやうな氣分を雑へることも出來た。全く我を沒しない、反省の餘裕と顧慮の餘地とのある戀であつた。二十五を越えた男、廿を越えた女には夢みるやうな戀は出來ない。

併し酒飲が醉へば醉ふほど、醉つてはゐないと管をまく樣に、自分は迷はない溺れないと信じてゐながら、夫が既に迷うてゐ、溺れてゐたのかも知れぬ。少くとも他所目にはさう見えるだけには熱してゐたのであらう。

女が男を絶つたことを聞いた。而し我等の無事な日は長くは續かなかつた、後難は直ちに踵ぎ起つた。

女が男と絶つたことを予のためと解釋して、女の母は予を憎んだ、予は亦此の、小い顔に不釣合な險しい眼と鋭い鼻を持つた女の母に媚ぶるには、矜持する所があまりに高かつた。女の母は予を忌んで予を女より

退けやうとした、女の母は更に女に他の男を强いた。女は義理の前に立縮むだ、弱き女よ。

一種の憤慨は予の戀を更に熱せしめた、女と會ふことは更に數々となつた、女の母は頻りに女の予と會ふことを妨げた、予は女の母に氣附かれぬ樣に、家を變へては女と會ふた、女と會ふことは更に愈よ繁く且頻りとなつた。

會ふべき金に窮するの時は、覿面に來た。

(6) 予は黃金を呪ふた

予は從來、長い間の御殿勤めに氣位の高くなつてゐた伯母の感化と、黃金隨手散といつた風の支那詩人の豪宕な思想の影響とて、金といふ者を極めて輕じてゐた。東京に居た頃など、原稿料でも手に入ると、唆らるゝ樣て落着かない、友人を探し步いては其日に費つて仕舞はねば氣が濟まなかつた。

今まてとても固より金には窮しがちてあつた、而し夫は下宿屋の拂ひを延すか、質屋へ驅附けるか、徹夜して原稿を書くかすれば埒の明く、皮一枚の上の窮し方てあつた。

予は初めて窮困の眞の苦き味を嘗めた。

予は此時ほど痛切に、金の賤しさを感じたと同時に、又金の貴さを感じたことは無い。

予は書籍の上にのみ知てゐた世態人情が實際に斯程にあるべしとは思ひも寄らなかつた、自分の味方てあると想つた人に、今日はもう裏切られてゐた、自分に同情して自分の爲めに竭してくれてゐた者も今日はもう見も顧らぬ、掌を翻したやうに追從笑ひは冷笑となつた、前にひれ伏した顏は橫に背けられた、擦りながら下げられた手は面と向つて揮り上げられた、媚びは顰みとなり、諂ひは嘲りとなつた、窮した予に向けらるゝ者は唯白い眼と刺のある言葉とのみてあつた。

予は、料理屋の主人風情に口汚なく罵らるゝを、憤懣をおさへて其の言ふに任せねばならなかつた。

貨幣とは何だ、鑛屑ては無いか、紙片ては無いか。苟くも血を具へ靈を具へた人間が、之がために頭を蹂躙らるゝ、此ほど恥辱な事があらう歟

鑛屑の前に叩頭する、紙片の前に拜跪する、夫はする人々の勝手である。而し此の鑛屑と紙片との有無多少を以て人格評價の標準とする、人物輕重の權衡とする、此ほど無禮な事があらう歟。

予は黃金の萬能力を咒うた。

(7) 心のさもしさを恥ぢた

予は此間に病に罹つた、臥るほどではなかつたが、咳嗽をすると痰に血が混つて出た、醫者は肺を傷けたのかも知れぬといつた。予は自分の知つた肺を病んで瘦せ衰へた人々の姿を想ひ浮べた。予は自ら濟ふ可からざる病と覺悟して生命を抛げ出した、自分には大悟した積てあつたが、實をいへば自暴自棄てあつたかも知れぬ、醫者の戒めに背いて夜も更した、酒も飮んだ、胸中の悶々に堪へかねてはコップ酒を呷ることさへあつた。

其頃同僚間に醵金して飼つてゐた馬があつた、每日之に騎つては駈けを追うた、四足塵を絕つて空に躍る時、其時のみは念頭に貧もなく病もなく、不平も懊惱も苦悶も無かつた。過激の運動も醫者に禁ぜられてゐたが、やめなかつた。

夫ても病は別に重くもならなかつた。但窮は彌々加はつた、郊外の敗れ寺に生徒と同炊さへした。何でも雨のじめ／＼と降り續く折てあつた、鬱つた樹立に、部屋は我が心の影のやうに薄暗かつた。

女の母は予を疏んずることが彌々甚しくなつた。女と相會ふ機會を得ることは彌々難くなつた、會へば手を執つて互ひの薄倖に泣いた。

路に遺ちたる金あらば拾ひもかねまじく、人無き室に金あらば竊みもかねまじき我が心のさもしさを恥ぢた。道心惟れ微なり、斯る時にこそ人は思はぬ罪惡をも犯せ。予は慄然として我が影を顧みざるを得なかつた。

憂に瘦せ貧に惱み、病に罷れたる身を、折柄の暑中休暇に、國境に近き湯原の溫泉に避けた。此にも夜逃げしたとの噂が立つたとか、斯くまで予は人の謗の的てあつた。

(8) 唯二人で歩きたかつた

湯原は津山から西北へ十四里、伯耆街道に當る宿場を兼ねた溫泉場である。溫泉の湧き出る河に沿うて兩岸に山が連なる、水窮まらんとしては又曲り、水の曲る毎に山も亦折れ、山勢水流相追ひ相隨うて紆餘しつゝ、漸く遠く漸く遮る、南畫に見る樣な景色である。

山の峯に遮ぎられて日は遲く出て早く入る、翠の山からも碧い水からも冷たい風が吹いて晝も閑かだ、夜は夢のやうな月の光に、河鹿の聲のみが澄んで聞える。

予は此の里に遠い、谷深い、人の稀れな、空の高い洞のやうに物靜かな古驛の夜を、唯二人しめやかに語りつゝ、袂を露にしぼる迄女とそゞろに歩いて見たかつた。

其時の事情として、夫んな事はたゞの空想に過ぎなかつた。

予の此地に來た後の、女の母の、女に對する監視は更に嚴しくなつた。予と諜し合はせて家を遁れ去るのを恐れたのである。物の沒分曉い女の母などは男は凡て女のためには地位も名譽も顧みたいやうな痴け者と見えたらしい。

而し女の奥にはそんな意嚮が動いてゐぬでも無かつた、夫となく予に語つた事もある、但女が最も畏れる一切の義理を棄てゝ、夫を斷行するには、あまりに意思の弱い女であつた、且つ又夫を斷行して後の予の身にかゝる迷惑をも斟酌し得る分別をもつた女であつた。

女は男が此頃足の途絶え勝になつて來たのも、女の此の決心を鈍らす一つの原因であつた。

併し此も暴風雨の前の一時の沈靜ともいふべきものに過ぎなかつた。

颶風は、地を捲いて倏ち脚下に起つた。

(9) 父に似な母に似な

是より先き女は母となつてゐた。

父となる！、斯く想ふとき予は一種嚴肅の氣に撲たるゝを感じた。父、其語には威儀と責任とがある、予は省みて、其の父たるの資格を自ら疑うた。

予の行はあまりに放逸であつた、其放逸の罪を負うて生れ出づる吾が子に對して、予は自らの行を愧づべきでは無からうか。又其母の玷れたる貞潔の辱めを、自ら識らざる其身にうたはるる吾が子に對して、予は自らの行を恨むべきでは無からうか。私生兒、ア、何たる殘忍なる語であらう。而し官廨の公認を經て結婚せる所謂夫婦なる者に非ざる男女の間に生れたる者を、人は敢て冷かにかく呼ぶ。予は斯かる特異の稱を冠せられて生ひ出づる吾が子に對して自らの行を悔ゆべきでは無からうか。

何の因縁ありてか、吾等二人の斯る境遇の下に生れんとする不幸なる子よ、貧しき父と心弱き母との憤りと悲しみとの不安不定なる神經の激動を感じて、爾も亦其父の如く感じ易く、其母の如く傷み易い性質を稟けて生れる事は無かろうか。

父は薄倖、母は薄命、父に似な母に似な、大賢たらずんば大愚たれ。斯く予は窃かに其子の前途の爲めに祝せざるを得なかつた。

但女の、母となつた事は、女の、其母に對しては一種の强みであつた。女は其母が已むを得ずして予に許すことを期待してゐた。予も亦我が兄に縋つて處理の方法を講ずることを決心した。

吾等は砂漠に歩み勞れた旅人が、前途に草樹蒼きオアシスを望み見た心地がした、而しそれは竟に蜃氣樓たるに過ぎなかつた。

予は此間に學校を辭職した。

津山よりは西五里の湯郷溫泉に身を避けて處分の定まるのを待つて居た。

女の身は突然として人に贖はれた。

(10)

何時の間にか人の有であつた

予が湯郷へ來る前から、女は客に連れられて神戸から更に宮島の方へ往つて居た。予は女に久しく會はなかつた。

湯郷は又鷺の湯とも呼ばれて關西では可なり聞えた溫泉場であるが、四邊は田や畑のみで鈍い色に包まれた様な土地である、散歩にも歩ぬ、話相手も無い、夫

れに此頃は妙に心が荒んで書さへ讀む氣になれぬ、何を思ふともなく茫然として坐つたまゝの時が多かつた。

來てから暫くは女から何の音信も無かつた、寂しいやうな物足らぬやうな其日其日を送つた。

朝から曇つて低く垂れた暗い雲が掩被さつて厭な日であつた、午後に女からの手紙が屆いた。手紙は厚かつた。

急がはしく封を開いた、女の身に起つた大變動の報が其れに卷き込められてゐやうとは想ひも寄らなかつた。

手紙には次の樣な意味が書かれてあつた。

宮島へ連れられて往つた其客が、遂に身贖をすると言ひ出した、咄嗟の間に母は承諾した。客は貴方の事をも、此身が母になつてゐる事をも知つてゐる、客は貴方に逢つて相談して來いといふが、併し貴方の今の苦しい樣子は知つてゐる、生中に相談すれば、男の意地から貴方の今の苦みを增す事より外は無い。自分一己を死んだ氣にさへなれば、貴方の身も立ち母の顏も立ち客の言分も立つ譯である。今の場合一時客の言分を立てさへすれば、後は後での分別もあらう。それに客も自分の身を可哀相とおもつて、母の手から一旦自由にして、後は自分の心任せにしてくれる考がある樣にも想はれる。兎に角此手紙の着き次第至急に歸つて貰いたい、會つて十分に自分の心をも話したい。とこうてあつた。

予はおもはず手紙を疊の上へ抛げつけた、予は前に會つた折の、物を包んで吾に憚り隱す樣に何となく疎々しく疑はれた女の素振などを想ひ出して嚇とした。其自分の母や姉への義理のみに氣を兼ねて、自分を二の次ぎにする女が憎くなつた。肉を汚すことは直に心を汚すことゝて無いといふ斯かる社會に特種な道德觀を、矛盾とも思はぬまで此の社會の風氣に染んだ女が憎くなつた。金で贖はるれば其金に對するだけの一時の義務を果せば宜いといふ樣な斯る社會に有勝ちな輕薄な心情を縱使んば予をなだめる積にもせよ、露骨

に言現はす女が憎くなつた。女の身の今後を處せんとする予の苦衷をも知らず予に恩に衣せる樣な口吻を漏らす女が憎くなつた。其間にも又女の境遇を憐れともおもひやつた。

予は飛んでも歸つて、面のあたり女を責めやうとおもつた。又女の口から親しく辯疏も聞きたかつた。

併し夫は餘りに未練がましい、事は既に決つてゐるては無いか、白々しい、會いたいとはなんだ、今更會うたとて何になる、手紙に答へるには手紙で足りる。

自分も此から後をどうしやうといふ考を立てゝゐないても無かつたが、今さら其れをいつたとて始まら無い。決心して先方へ往かうといふなら往くが宜い、而し一度往つた以上は先方へ竭すだけの事は竭くすが人間の務だ、二心をもつてもらうよりも自分は寧ろ夫を喜ぶ。又先方の考を揣摩つて自分の勝手に解釋してゐるが、今時そんな時代な眞似をする鷹揚な人があらうとは想はれぬ、そんな夢のやうな事を考へてゐて後で失望せぬが可い。自分は今になつて未練らしく何にも言はない、但今までよく人に、欺まされぬやうにと言はれ／＼ても自分は御前を信じてゐた、今にも信じてゐる、併し其人々に夫れ見たかと後指をさゝれる唯それのみが口惜しい心外だ。

予は此んな意味の言を長々と書いた。書いても書いても自分の氣分が十分に書足らぬやうにおもはれた。

手紙を書きは書いたものの、せめて最後に今一度會つて、言ふべきことも厭くまで言ひ、聞くべき事もしみ／＼聞きたかつた。

心は迷ふて決しかねた、氣がイラ／＼としてジッと坐つてゐられなくなつた、起つて室の中を步行いた、機械的に足は動いても、心は飛んで玆にない。

終に手紙を握つたまゝ予は綱曳の車で津山に還つた。

津山の町に入つた時は、秋の日は曇つたまゝに蒸れて街に火の點く頃であつた。

熱したゐた頭は漸く冷かになつた。女に會ふのが又如何にも未練におもはれて來た。

女への手紙を託しやうと店先まで立寄つた其家の二階に、さんざめく宴が其女の引き祝てあつたとは知らなかつた。

(11) 離愁を牽く埠頭の花

其夜は種々の思ひに亂れて、眠られぬまゝに明かした。

夜は明けても起き出るが懶かつた。予は絶望の空虛へ突き離されて、四圍の色彩も光明も一時に滅えた、喪神した人の樣に、凡ての事にも物にも吾は意味を失ひ感興を失うた、予は廻り燈籠のやうに人の動くのが詰らなく想はれた。今何のため起き上らねばならぬのか夫をさへ疑うた。

予は此頃傭婆の妹に當る踊りの師匠の狹い二階を假りの住ひとしてゐた。下座敷ては折々若い華やかな女の笑ひ聲が聞えた、予は他人の輕い心が妬ましかつた。

漸く起き出てると、思ひ寄らぬ女の母から使が來た。駄菓子を店に列べた棟割長家の奥の間て女の母に會つた。其口から女が昨夜剃刀を把つたことを聞いたときには有繋に駭いた。

悽愴の感に搏たれて予は暫く言ふ所を知らなかつた、但之れとともに予は一種勝利の誇を以て女の母に對した。

女は剃刀を把つたまゝ、思ひに迫まつて泣いた、其聲を聞いて駈入つた人に支へられて女は突き損じた、創は極めて微てあると聞いた。

此事の起つた幾日かの後、離盃酌むべく人に招かれて、女が預けられてゐた其の旗亭に往つた。

慣れた家とて、入口から默つてあがつた、未だ火點前てあつたが、隧のやうな其の次の間は薄闇かつた。偶と見ると、其の夢の影のやうな黄昏の色に紛れて、壁に倚りかゝつた女の姿が幻と浮く、『死』の世の人かとも見ゆる許り顏が凄く蒼白い。やッと覺えず聲をかけたが、其儘面を背けて急ぎ足に奥へ通つた。

十月の末の日、白々あけの曙に、予は想ひ出多き此地を去るべく、津山河畔の埠頭に立つた。町はまだ閴

然と眠より覺めない、天にはうすれゆく星疎に、河の面に薄靄が立迷ふ。山國の秋は既に晩い、舟を繋いだ一本柳のすがれた枝からハラ／＼と葉が散つて、うすら寒い朝風が肌に沁みる。孤寂の佗しさがひし／＼と胸にせまつて、うら悲しい。

舟はやがて纜を解いた、急湍を下つて矢より疾い。男には功名の野心は戀より強い。重い負擔を肩より卸して活動の自由を得た今の吾身が、心竊かに喜ばしくも想はれながら、流石に名殘は惜しかつた。見る／＼遠ざかりゆく津山の町の朝朗を、幾度か振顧つた。

十五日旅（下）

倫敦　繞石生

○五月五日。リヴプウル發——汽車——キンダメア下車——徒歩——コニストン泊。好晴。

リヴプウルを十一時十分發の汽車で出て、プレストン、ランカスタア、カアンフオオス、オクスンホオムを經て、所謂「英國湖水地方」の入口たるキンダメアに下車したのは三時頃であつた。

僕は乘合馬車にも乘らずに、湖岸のボオネス迄一哩餘の道をテク／＼歩るいて行つた。道は下り一方だから、歩るくのは樂だが、暑いのには少し弱つた小蒸汽の着く棧橋へ行きついた。棧橋の左右の渚には、三人乘五人乘の貸ボオトが幾十艘と繋がれて居る。僕は先づ棧橋まで行つて、そこの共同ベンチへ腰かけた。

湖水は南北四里餘、東西の幅の狹い處は三町、廣い處でも十六七町しか無い。ボオネスはその東岸の中程にあるのである。

棧橋の處は入江になつて居るが、正面にベル、アイルといふ周回一哩許りと覺しき島がある。若葉青葉の大樹が繁つて居る。此の島から、或は半町、或は一町、或は二三町と離れて、大小幾つかの小島が散布して居る。或る島は緑の芝生に灌木が其處此處に簇生して居る。或る島は島の幅よりも高い若葉の大木が二三本岸近く聳えて居る。對岸にはクレイフ、ハイツの連丘が起伏して居る。水は、日の照らす處、銀鱗の如き漣を輝かして居る。實に平穏な綺麗な景色だ。

僕は煙草を吹かしながら、此の景色を暫く眺めて居た。一人旅の氣樂さは、さて此から何處へ行かうと考へる。此處から遊覧用の小蒸汽船に乘つて、北の方、湖頭のアムブルサイドへ行つてもいゝ。南の方、湖尻のレイキサイドへ行つて見てもいゝ。前者を採ると、船は幾多の小島の間を縫ふて、途中東岸のロオ、ウルド、ホテルへ立ち寄る。此の近くにミセス、ヒイマンスの居たダヴ、ネストといふ家がある。行つて見たい。後者を採ると、船は同じく幾多の小島の間を通つて進む。途中左側のストルス、ホオル、ホテルへ一寸着ける。千八百二十五年、サア、ヲオタア、スコットの爲めに短艇競漕を催うした折、ワルヅワルス、サウジイ、カニング、キルソン等はスコットと共に此のホテルの物見臺で見物したと聞いて居る。之も行つて見たい。が時計を見ると三時半を過ぎて居る。今日は此處から十哩のコニストンで泊る計畫て居るので、到頭兩者どつちも見ぬとにしてしまつた。

上りのか、下りのか、小蒸汽を待つ客が棧橋へ來た。此處からコニストンへはどう行くが一番便利かと訊いて見ると、やはり僕の豫定して居た通り、對岸へ渡つて、徒歩て行くより外に仕方が無ささうだ。

湖岸に沿ふて、下へ八九町下ると渡頭がある。湖の最も狹い處と見えて、幅四町は無ささうて。渡船は、淺い縁のある、筏のやうな、扁たい船で、その横に繫いてある玩具程の小蒸汽が、兩岸へ水すれ〳〵に張り渡した鐵鎖をつたふて一直線に渡して呉れるのであつた。

振返つて見る。滝山の森を背にした湖岸のボオネス町が、小島の蔭になつては又現はれる。やがてベル、アイル島に蔽はれて見えなくなる。ベル、アイル島の前に、野生のリリイ、ヲヴ、ザ、ヴレイが多いので有名なリリイ島が二つ見え出す。その後のトミ、ホルム島が見える。渡舟は、クロオ、ホオムの小島に接して過ぎる。左の方はと見ると、兩岸の連丘の下に、長短幾つかの出鼻が見えて、何れも渚まで茂つた木々の若葉の影を水に醮して居る。湖の末は川程に細まつて居る。その中心に、上りか下りか、小蒸汽の煙が見える。

對岸に上つて、山を右にして坂道をたどる。湖水は暫くの間左方に眺められる。小蒸汽は上りと見えて、今は渡船場に遠からぬラムプ、ホオム島に近づきつゝある。風が無いから船脚が其儘に殘つて居る。逆さに映つたその島影も亂れぬ。

* * * * *

ファア、ソウレイ村ニア、ソウレイ村と通つて、坂道を右へ下りるとエスエイト、ヲオタアといふ小さな湖水がある。道はその東側に沿ふて居る。

道の兩側は、平たい石を二尺許りに積み上げて石壁が出來て居る。人通が少いと見えて、左右の石壁から一二尺の處は道に芝草が生えて居る。蒲公英、車前草、菫も生えて居る。仰いで電線を見ると二本しかかゝつて居ない。頗る田舍臭い。

道の右側はすぐ山で雜木が茂つて居る。左側は、湖水の渚までなだらな芝原になつて居る。其芝原には此處に二匹其處に三匹と羊が草を食つて居る。牛の鳴く聲が遠くからきこえる。一時間ほどの間、人一人に出會はなかつた。

* * * * *

ホオクスヘッド村の入口に小學校がある。ワルヅワルスの通つた學校で、悪戯に自分の名を刻んだ樫のベンチが保存してあつた。

村の中程から一寸左へ入つた處に、氏の住んで居た家がある。黑ずんだ扁平な石を積み上げて、漆喰のその間隙に詰込んだ、言はゞ石壁の小さな二階家だ。軒

が傾いて居る。前に二坪許りの空地があるが、家の床はその空地よりも低くさうだ。四角な窓が二つあるが、中は暗さうだ。

家の左側に、家と鍵の手になつて、同じ石壁の物置がある。頽れさうに傾いて居る。

村は村だが、此のあたりは人家が二三十軒立並んで居る。僕は切りに渇を覺えたので、インは無いかと探すと、一軒あつた。表の扉は明け放しになつて居る。入つてオイ〳〵と呼ばはつても誰も出て來ぬ。表座敷といつた部屋は土間で、粗末なテエブルの左右にベンチが置いてある許りである。テエブルの下に鶏が三羽何か啄んで居たが、僕のオイ〳〵と呼ぶ聲に驚いて、裏の同じく土間の部屋へ逃げて行つた。

その六七軒先に、田舍にしては珍らしい煉瓦の家があつた。軒に、ホオクスヘッド、カントリイ、インスチチユウト、カフエエ、アンド、テイと書いた板札が吊るしてある。茶を飮まして貰はうと思つて、扉をコツ〳〵と敲く。十六七の娘が出た。

「御茶を飮まして貰へませんか」

「ええ、上げますとも。さあ御入りなさい」

と親切だ。

「これは私の部屋なんですが、――よう御座います――この部屋を通つて、あの部屋に休んで、下さい」

と言ふ。娘の部屋を通つて、その「あの部屋」といふへ入る。本當の入口は此の部屋について居るのであつた。一方は窓、その反對の側は、娘の部屋と壁で隔つて居る。他の兩側は壁總てが書架になつて、裝釘美しい本がぎつしり塡まつて居る。文學書が多いらしい。

娘は自分の部屋でパンを切つたり、茶を入れたりして居る。僕は大きな四角なテエブルの四方にキチンと置き並べてある澤山の肱掛椅子の一つにドッカと疲れた身體を置いて、茶を待つて居る。娘一人しか居ないらしい。頗る靜かだ。

『ねえさん。此處は圖書館なんですか』

と、(娘の部屋への扉は明け放してあつた)訊ねると、

折柄戸棚から牛乳の壺を取り出して居た其娘が、僕の顔を見ながら、

「え丶、まあそんなやうな處です。村の集會にも使用ますし、青年會の會場にも使用ますし、平常は斯うやつて旅の方の御休場にも使ひます」

と打解けた言葉で、親しげに話す。眼色、顔色、髪の毛は違つて居るが、僕は何んだか此の娘が日本人らしくて仕様がなかつた。やがて茶盃に、ブレドアンドバダアの皿や急須や載して持つて來た。

「あなたは日本の方ですか」

と言ふ。日本人は初めて見たと言ひながらも、珍らしさうに眺めもせずに、僕と少し離れた處に立つて丶、何彼と話す。如何にも人懐つこい、可愛い丶娘てあつた。別れる時も、暫らく門口に立つて見送つて呉れた。

水色リボンの髪飾り――薄玉子色のブラウズと裾短かに穿いた同じ色のスカアト――金具の光かつた黑の短靴――水づいた眞青の眼のその顔――僕の頭には今てもそれが瞭然と殘つて居る。

* * * * *

ハイ、クロスといふ、なだらな坂を上る。小山を少し切り開いたのか、兩側が低い土手になつて居る。土手には芝のところ〳〵櫻草が惜しい程密生して居る。左右の高みにはラアチが林を爲して居る。人の字形に垂れ繁つた枝に、檜葉の葉に似た新芽が垂れて居る。坂道の眞正面には、嶺に一條の雪を殘したオルド、マンの峻嶺が聳えて居る。それに隣つてエザラムの岩山が峨々と突立つて居る。日は今し兩山の間の小山に沒して、僕の行く坂路は日を受けなくなつたが、ラアチの森つゞきの、左右幾多の連山には、まだ日の當つて居る頂を殘したのが見える。

向ふから子供が二人來る。一人は十許りの男の子て、紺の厚いメリヤスの半袖シャツ、それに汚れた半ヅボンを穿て居る。一人は七つ許りの女の子て、茶色の靴足袋を膝頭まで現はして、淸らかな白い衣物を着て居る。男の子は鳥打帽、女の子は裳まで後ろに垂らした

金髪に麥帽を阿彌陀に冠つて居る。女の子は小さな淺い手籠を提げて居つた。そして歩るきながら、立ち止つては土手から櫻草を摘みとつて手籠に入れる。

僕は通りすがりに、

「櫻草？それは。綺麗だね」

と言ふと、男の子は姿を正して、鳥打帽に手を觸れて「イエス、サア」と言つた。女の子は僕の顔を見て微笑んだ。手籠をのぞいて見ると半分以上たまつて居る。

「何にするの」

と訊くと、あれこれと莖の長さうなのを摘みながら、手短かに

「花束に」

と小聲で女の子が答へた。外國人を外國人とも思はず平氣で應答する、此處英吉利の子供は實に可愛らしい。

＊　＊　＊　＊　＊

コニストンには立派な宿屋もあるが、僕は窓にアパアトメントとある家を賴んで一晩泊らして貰ふとにした。

表側の食堂から遠くコニストン湖が見渡される。道と家との間に、さゝやかな庭園がある。食堂の窓際には、二列に植えられた薔薇が花をつけて居る。通路と隔つ生垣の內側には高さ一間許りのロドデンドロンが二本、一本は白、一本は桃色の花を葉が見えぬまでにつけて居る。庭の中央には、饅頭形に土を高めて白パンジイを植え、それを環形に二寸幅ほどワスレナグサで取りまかしてある。

庭の四隅には短冊形の花床があつて、色んな櫻草が植はつて居る。餘りキチンとしては居るが綺麗だ。

道の向ひ側は、湖水の岸まで芝原だ。岸に近く飛び〲に若葉の大木が見える。木立を透して鏡の如き湖水の一端が見え、對岸の、或は芝ばかりの、或は木の繁つた小山も見える。窓から正面の湖岸に牛が二匹居る。一匹は樹の陰に立つて居る。一匹は渚に首を垂れて水を飲んで居る。

青空に星が一つ二つ見え出した。弦月はオオルド、

マン山近く懸つて居る。

繪に見るやうな景色だと思ふ。

○五月六日。コニストン發、——アムブルサイド迄七哩半徒歩——同所からケスヰク迄十五哩コオチ——同地宿泊。終日軟風無雲の快晴。

コニストン湖の東岸に、テニスンが一時住居つて居たテント、ロッヂといふ家があり、その十四五町下に、ラスキンが老後の閑居たりしブラントウッドといふ家があるのだが、時間の都合上行き得なかつた。

コニストン村の寺にラスキンの墓がある。僕は第一に此の墓へ詣つた。

墓は寺の後壁を三四間離れて、斜め左にある。寺の壁には山吹が匐はしてある。八重の花が滿開てあつた。

墓を前に十字架狀の紀念碑がある。高さ一間半はあらう。

墓に面した側には、ラスキン初期の作や詩を現はしたのだといふ、立琴を手にした男を彫つてあつて、その上の紋模樣のパネルに「ジョン、ラスキン、千八百十九年——千九百年」と刻んである。その上に、畫工らしいものの像や、松の木や、「近代畫人論」の表紙模樣が細かく彫つてあり、その上に「ストオンス、ヲヴ、ヱニス」を表はした「セント、マアクのライオン」、その上に「セヴン、ラムプス」を表はした蠟燭の火が彫つてある。

南側には、氏が好んだ薔薇の花、「ラヴス、ミニイ」などに能く書いて居る栗鼠、ロビン、魚狗が彫つてある。動植物に對する氏の嗜好を表はしたのだらう。反對の北側は色んな紋模樣が彫つてある。

裏側には、下の方には、主人から金を受取つて居る葡萄園の傭人、——これは「アントウ、ヂス、ラスト」を表はしたもの。その上に「セザミ、アンド、リリイス」を表はした模樣、その上に「フオルス、クラビゲラ」、その上に「クラウン、ヲヴ、ワイルド、オリイヴ」、その上に「セント、ヂヨオジ、アンド、ザ、ドラゴン」と、ごちや／＼彫つてある。僕等日本人の眼には無趣味なも

のてあつた。
去つて寺から遠からぬ「ラスキン紀念館」に入場する。名は大きいが、二十疊敷位の一部屋だ。
入口正面の壁には、ブラントウッドの家の寢室、書齋、其他のスケッチや寫眞が隙間無く懸けてある。
左側の壁には、ラスキンが講演の際、聽衆に示した自畫のダイアグラムやスケッチなど懸つて居る。
壁に沿ふてはスタンドに硝子張の箱が並んでゝ、ラスキンに關した種々なものが陳列してある。
「近代畫人論」「ストオンス、ヲヴ、ヱニス」などの挿入した繪の原畫がある。スケッチ帳がある。ラスキン八十の賀に諸方より送つて來た賀狀、水彩畫具箱、水筆、杖、蟲眼鏡、名紙、礦物採集用の鐵槌、講演の原稿其他種々あつた。

* * * *

コニストンからアムブルサイドまで、山道を三里あるいた途中のことである。
とある坂を下り切つて、僕は大樹の蔭に、石を尻に休んで居つた。
向から、馬に枯枝を積んだ車を牽かして、馬子が來る。馬子とは云へ、立派な鼻髭と顎鬚を蓄へて居る。汚い鳥打帽をかぶつて、上衣無して、縞目の見えぬ迄よごれたシャツを腕まくりにして居る。ヅボンは黑光りに光つて居る。木靴重げに曳きずつて、馬の橫を鼻歌うたひながら歩るいて居る。六尺はあらうと思へる頑丈な男だ。
それが僕の休んでる前を通る時、丁寧に帽を取つて
『グト、モオニング』
と挨拶する。僕も『今日は』と返へす。すると更に
『ヱリ、ヲオム、イズントイット』
と言ふ。僕も
『イエエス、イッチズ』
と答へる。僕は、姿顏に似ぬ馬子の此のやさしい挨拶が昨日の娘の仕打と同じく――すつかり氣に入つてしまつた。
坂を上る時に、その馬子が馬の後になつて

『ハリ、アッポンポン。ハリ、アッポンポン』──と勵まして居るのを僕は暫く見送つて居た。

＊　＊　＊　＊　＊

クラパアスゲエト村を過ぎて、ロウリグ、フエルの小山に沿ふて一本道の里道を進むと、幅十間位の瀬川に架したロセイ、ブリチといふ石橋へ出る。サンドストンの眼鏡橋て、僕の胸の高さの、石の欄杆がある。橋の兩袂に續く里道にはポプラアが青々と並木を爲して居る。川の一方の岸は草原て、毛氈の如く短かく刈られた芝に、五厘銅大のデイジイの花が一面に頭をもたげて居る。一方の岸には柳が──日本のほどには枝は垂れぬが──綠の細葉を水に映して居る。

使小僧らしい子供が、橋畔のポプラアの樹蔭へ自轉車を乘り棄てゝ、橋の欄杆に凭れて川を覗いて居る。

『何が居るのかえ』

『トラウトが居ます』

『エア』

『ルック、──ゼア。ゼア。』

『オオ、イエエス。アイ、カン、シイ』

水が淸いので、さまて淺からぬ川底の石が歷々として見える。そして一尺二三寸乃至一尺六七寸の、大小七八匹の鯉のやうなのが、緩るく尾鰭を振つて、列を爲して流れを悠々と溯つて居る。

中學時分に、『アイ、カン、キヤッチ、エ、トラウト』なんといふ文句を讀本て讀んだ記憶があるので、かうやつて、英吉利の田舍の瀬川て、現に泳いて居るトラウトを今見て居るかと思ふと、何となく愉快てあつた。

川上を見ると、川岸の柳や、道の並木に遮ぎられてアムブルサイドの町家は見えぬが、セント、メリイス、チヤアチの尖塔が四五町の遠さに上半部を表はして居る。ワンスフエル、パイクの連峰が其右方に蜿蜒と起伏して居る。

＊　＊　＊　＊

初めてコオチといふものに乘つた。コオチにも大小種々あるが、僕の乘つたのは、箱馬車の大きいのに、

屋根へベンチを前後四列くつつけたやうなものであつた。一列のベンチに四人しか掛けられぬ。箱の中へは人を乗せずに、客の荷物を入れるやうにしてある。馬は二頭てあつた。

御者は最前列のベンチの右端に坐して手綱を操つて居る。鼠色のトップハットを冠ぶつて居る。頰鬚が後ろから見える。古いが黑のモオニングを着て居る。薄色の半ヅボンに赤皮の長靴を穿いて居る。

初列のベンチは御者と並んて女が三人、次列には娘二人を中にして夫婦もの、三列には後ろ向きにイイトン服の十二三の子供、最後列には僕が中央て、右に三十許りの女、左に商人らしい男、御客は十一人だ。

アムブルサイドから十七八町行つた所て、ライダル、ヲオタア湖を左に見る。長さ十町幅三町餘りの小さい湖水だ。木の繁つた小島の姿、湖岸の葦の角、湖水を取卷く四方の連丘、總てが箱庭式のチンマリとして居る。

近くにワルヅワルスが死ぬる時まで住居つて居た家があるのだが、縱覽を許さぬと聞いて居るし、コオチも停めぬので、行つて見なかつた。

道はライダル、ヲオタア湖の北岸に沿ふて、デ、クインセイの居たナブ、コテエヂの前を通つて、綠蔭深き小山を越える。と、眼前にグラスメア湖が展開して居る。

グラスメア湖は長さ十四町、幅七町あるといふ。中心に木の四五本突つ立つてる島がある。「皇子島」といふのださうな。風が無いから、その木の影が一本〳〵はつきりと水に映つて居る。多くは木の無い四方の岩山が、之れ亦逆まにその影を醮して居る。島蔭からボオトが現はれた。パラソルをさした白衣の女が舵を操つて居る。夫らしいのが兩手で左右の櫂を漕いて居る。木の影、山の影が亂れそめる。

グラスメア村を後に六七町行くと、右にスワン、ホテルといふ宿屋が一軒あつて、それから三哩の長坂に差かゝる。左にはスチイル、フエル(千八百尺)右にはシイト、サンダル(二千四百尺)の岩山を望み、行手には遠くスキドオの高嶺の巍然たるが見える。

坂の絶頂近く勾配が急になる。
「女の方はよろしう御座いますか、男の方は降りて頂きます」
と御者が頼む。
二列目のベンチの夫婦者、その娘二人が眞先に、僕も、僕の左右の男女も子供も、車輪を足繼にして土手へ飛び下りる。馬車を二三間後にしてトツトと歩く。イイトン服の子供は、何處から取出したか、蜜柑をシヤブリ〳〵歩るいて居る。とすれば馬に追付かれさうになる。
「ユウ、キルビイ、ザ、ガイド、ツ、ゾウズ、ゼンツルメン、キルユウ?」
と御者に言はれる。
振り返つて見ると、知らぬ顏して、相變らず蜜柑を甜ぶりながら、後れ勝に歩るいて居る。初列のベンチの女三人は乘つた儘で居る。其のうちの一人が、僕等にきこえるやうに
「オオ、ヰアー、レイジイ」
と言譯して居た。
絶頂の道傍にゴロタ石がピラミツド形に積み上げてある。カムブリアの最後の王ダンメイルの墓だと言傳へられて居るものである。
坂の下り口に、左に白壁の平家の一軒家がある。ナグス、ヘツド、インといふ休茶屋だ。その向ひに草原の中に、ヰスバアン、チヤアチといふ、如何にも田舍じみた小さい寺がある。馬車は寺の前で停めて暫く休む。
先刻下りなかつた女達も下りた。そして寺へ入つた。二列目の四人も僕の右隣の女も續いて寺を見に入つた。
僕は左隣の男とインへ入つた。バアへ入つて見ると、粘土製のパイプに辛さうな煙草を詰めながら御者が女主人と話して居る。僕はバスを一パイ呉れと頼む。
「麥酒一パイ飮まないかね」
と御者に言つたら、
「そりやどうも有難う御座います。一層ビールよりか

キスキイに願ひます」とニコ〳〵して居る。始終强い酒を飲むと見えて、眞紅な鼻をして居る。門口へ出て見ると、例の子供が獨り馬車の上に殘つて、未だに蜜柑をしやぶつて居つた。

＊　＊　＊　＊　＊

馬車の終點から、サウジイの紀念碑のあるクロスエイト、チヤアチへ行くには、町の端から端まで步るかねばならぬ。僕は急いで行つた。いくら墓場を探して見てもそれらしい物が見付からぬ。折から墓地を通る人があつたので尋ねて見たら、チヤアチの中にあるのだといふ。『明日は日曜で寺の門が開くから明日になさい』と言はれて、疲れた足を曳きずりながら、今度は安宿を探しあるいた。

○五月七日。ケスヰク滯在。曇天。

町外れにグレタ橋といふ小さな橋がある。右手の高みにサウジイが千八百三年から四十三年まで住居つてたグレタ、ホオルと稱する邸宅が見える。灰色に塗つた二階造の仲々立派な家だ。寺は橋から三四丁離れて、田舍道に沿ふて立つて居る。

紀念碑は右側の横脇道の、說敎壇の裏手にあつた。右手に持つた開いた書物を腰近く置いて、心持右向きになつてる等身大の大理石の臥像が、長方形の碑石の上に載つて居る。碑の一面にはワルヅワルスの撰んだ碑銘が彫つてあつた。

＊　＊　＊　＊　＊

町から半哩許りにカスル、ヘッドといふ、標高五百三十呎の岩山がある。僕は林間の小逕を辿り〳〵、到頭その岩山の頂上に登りついた。

正面眼下にダアエントヲオタア湖が瞰下せられる。『一方には、周回九哩、形ち紙鳶に酷似せるダアエントヲオタア湖の幾多の小島を浮べるを眺むべく、――他方にはバッセンスエイト湖を望むべし。ニユウランヅの諸山恰も天蓋の如くに之を蔽ひ、遠くボロオスデエルの峽谷を距て丶峻嶺高峯の相重なれるが見え、後方を顧みればスキドオ及びブレンカスラの二山雲表に聳

ゆ」とデ、クインセイの書いて居る通りの眺望だ。右方脚下にケスヰクの町家が造物の干菓子のやうに並んて居る。

* * * * *

ダアエントヲオタアに、高い松の木の茂つた、フライアアス、クラッグといふ出鼻がある。右方近くに樹木鬱蒼たるダアエント島、左方二三町の距離に同じく樹木鬱蒼たるロオズ島、前方遠くにセントハアバアツ島が見える。絶景だ。此の絶景に向つて、出鼻の尖端にラスキン紀念碑が立つて居る。

碑は幅一尺六七寸、高さ一間半許りの、何の飾の無い、薄い石で、前面には、上部に月桂樹の葉に左右取巻かれて居る氏の横顔が浮彫にしてあつて、浮彫の上に「ジョン、ラスキン」、下に「千八百十九年――千九百年」と刻んである。そしてその下に、

「余の記憶する一生の最初の事件は保姆に伴はれてダアエント、ヲオタア湖畔のフライアアス、クラッグの懸崖に到りしことなりき」

といふ、氏の文中の一句が七行に刻んである。そして湖水に面した裏面には、

「大神の御霊は、卿等の四周、卿等の呼吸する空氣に在り。大神の光榮は、卿等の見るなる光明に、また大地の豊盛に、また大地の造物に在り。大神は、卿等の日々の糧を日に日に與へ給ふが如く、その默示を卿等に日に日に書き給ひぬ」

といふ、同じく氏の文中の一句が刻んであつた。

○五月八日。ケスヰク出發――汽車でカアライル迄――カアライル見物――カアライルからグラスゴオ迄汽車――グラスゴオ見物――同所からバロク迄夜汽車――同所宿泊。午前は曇つてたが午後晴れた。

* * * * *

汽車はカアライルを出てからビイトック迄は何處にも停車せぬ。此處で後押の機關車を附けて出發する。左右とも、處々岩石の露出して居る荒野だ。飛び飛びに羊が草をあさつて居る。雨雲が遠くの山々を裾まで蔽ひ隠して居る。

坂が下りになつた處で、左に數哩四方の平野が見える。緑の芝が綺麗に刈られて居る。遠くに――遙か遠くに木立が一ヶ處見えて、それに近く白壁の人家が二三軒、煙突から炊煙を淡く立てゝ居る。日本では見ぬ廣大な景色だつた。

汽車は縱の森林を左右にしてひた走りに坂を下る。クライド河が左に見える。幅が四五間しか無い。

河幅が次第に廣くなる。川土手に若葉の並木があるやうになる。その並木越しに、木柵で限つた、幾區劃の牧場が見える。のそり〳〵と歩るいてる牛もある、臥て居るのもある、他の牛を追つかけて居るのもある。立つた儘動かずに居るのもある。遠いのは大豆粒程に見える。幾百頭居るのか數へ切れぬ。雨雲を洩れた日光が此の大牧場の其處此處を照らす。照らされた處の芝に咲いて居るバタカップか蒲公英かゞ鮮かに黄色い。

* * * * * *

グラスゴオでは美術館だけ緩くり見た。油繪ではレムブラントの「甲冑の武士」、レノルヅの「小公子の肖像」、ミレイの「仕事へ」、彫刻ではフイランスの「悲哀」、ロダンの「カレイの市民」、ヘンリイ、ベエツの「ホオマア」が殊に深く頭に殘つて居るだけだ。

○五月九日。バロク出發――船でロック、ロモンド湖を渡つてインヴスネエドへ上陸――同所からストロナハロハア迄コオチ――同所から船でロック、カトリン湖を渡つてトロサックスへ上陸――同所からコランダア迄コオチ――同所からスタアリング迄汽車――同所宿泊。午前は曇天、午後快晴。

* * * * *

波止場を離れると、直ぐ正面にインヒミユリン島が見える。水際まで樹が繁つて居る。松らしい木の深緑と、落葉松や赤楊の淺緑が、極めてい丶色を出して居る。その島に近く、クレインチ島、トリンチ島、クレイリンチ島が順次右に點綴して居て、その向に少し大きなインヒケイロク島が見える。船は此等の島を左に

して右岸のバルマハ村を見當に進む。島へ飛んで行かれる程近く通ほる。島と島との間から、左岸に近いインヒタヴンナハ島や、インヒコンナハン島が遠くに見える。湖水は此邊幅二里はある。左右ともに、岸から直ぐに峨々たる大岩山が聳えて居る。ロック、ロモンドの此邊の景色は「英國の湖水」より遙かに偉大だ。

* * * * *

船は左岸のルスへ着ける。岸に沿ふて家が二三十軒ある。いづれも二階家の一軒建だ。どの家も庭を有つて居る。庭はいづれも低い生垣で限られて居る。その生垣の新綠が實に美しい。庭には、何の花か遠眼に能くは分らぬが、紅黄紫白の草花を植えた花床がある。パンジイ、プリムロオズ、ワスレナグサ、金盞花などてあらう。或る家の庭には、生垣近く大きな梨の木があつて、雪とまがふ花瓣を頻りと生垣へ散らして居つた。

船はルスを後にして、ロワアデナン指して眞北に進む。湖水は此邊大分縮まつて幅二十町餘りだ。左岸には、削ぎ取つたやうに急な岩山の水際に石垣を築いて、砥の如き坦道が出來て居る。木は若いが並木が道の兩側に規則正しく植はつて居る。右舷にインヒロネエグ島が見え、前方に航路を塞ぐが如くに突出したロス岬が見える。その岬の眞上に當つて、赤裸々たるベン、ロモンドの高峯が湖水を壓するが如く、群山を拔んでゝ居る。

* * * * *

午前は少し風があつた。ベンロモンドの山巓には時に雨雲が懸つた。それが午後は風が全く歇んで、見る間に雲は霽れて靑空になつた。

僕等は「サア、ヲオタア、スコット號」と稱する白塗の小蒸汽に乘つてストロナハラハアを後にした。

ロック、ロモンドは長さ十里許りもあるのだが、此のロック、カトリン湖は長さ四里に足らぬ。幅は廣い處でも十二三町しか無い。湖水を取卷いて居る連山もロモンド湖のそれよりも遙かに平穩な姿をして居る。

「湖上の美人」で有名な「エレンガ島」は、湖水がアク

レイ川へ注ぎ落さんとする東岸近くにある。椀を伏せたやうな岩山だ。枝と枝と重なり合ふて樹木が繁つて居る。天鵞絨のやうな厚い苔が岩を蔽ふて居る。水際に角の長い鹿が立つてゝ、月が其姿を水に映して居たらばなど想像して見た。

　船は此島を左にしてその後蔭へ入る。湖水は、はや川と蹙まりかゝつて居る。兩岸には、高さ幾十丈の、殆んど垂直な岩が、蠢々と屹立して居る。その裂目〳〵から、清水が滲み出て居る。岩襞の苔は黒い程水づいて居る。岩の上からは、多くは赤楊と見ゆる木が空をせばめてそゝり立つて居る。振返つて湖水の方を見ると、此の懸崖と『エレンガ島』との間に、鏡の如き水を隔てゝ、何の邊の湖岸か裾近く一と叢杉林のある芝山と、その後の淺黄色の遠山が見えた。忘れ難い好景であつた。

＊　＊　＊　＊　＊

　アクレイ湖を右に見てコォチは走る。

　下草に蕨ばかりの雑木林を拔けると前方にエンナハア湖がその一端を現はす。

　對岸重疊たる連丘は、處々木立があるが、多くは芝ばかりだ。

　道の左は、突兀たる岩山が斷續して居る。峽間〳〵には斜面の急な牧場もあるが、大抵は荒野だ。

　とある岩の頂に人が立つて居る。身長より高い杖を右手に突いて居るのが見える。その前七八間離れて、瘠せた犬が右に走り左に走りワン〳〵吠えて居る。見ると犬の前方十四五間距つた、殆んど岩許りの急な山腹を、岩の間を縫ひ〳〵幾十頭の羊がウヨ〳〵下りつゝある。犬は羊が横へ外れぬやう、後れぬやう、監督して吠えて居るのであつた。

　その犬の吠えるのが餘程後に聞えるやうになつた頃、同じく左手の岩山の後方に、音に聞く崇高なベン、レヂ山の上半が見えだした。

　エンナハ湖が將にタイス河に入らんとする處では、右は水までなだらかな芝生の牧塲で、左の岩山は次第に低くなる。山とても斜面の荒野が次第に平坦になる。

荒野の窪地に鬪の繋つた處もある。

やがてコオチはスコツトの詩て忘られぬ『コイラントオグルの淺瀬』てあつた處を急いだ。

〇五月十日。スタアリング見物――同所からグラスゴオ迄汽車――更に汽車でエアへ行き、バアンスの小屋を見――グラスゴオを經て夜半エデンバラ着――同所宿泊。終日無雲の快晴。

* * * * *

町外れの小山の上なるスタアリング城に登る。西の方、牧場、森、小山の幾哩かを距てゝ、ベン、ロモンド山、ベン、ヱニユ山、ベン、レヂ山、ベン、フオリツヒ山が互にその雄を競ふて屹立して居るのが眺められる。折から春の如き霞が淡く棚引いて居つた。北から東にかけては處々木立の見ゆる大平野を、タイスの流が銀蛇の如く蜿蜒と、末綠の如く細く見える。南の方は、遠く山まで巨浪の如く起伏して居る高原である。高原の中程に土手の如く横に延びた岡が見える。城から一里はあらう。その岡に長い旗竿の立つてるのも微かに見える。千三百十四年ロバアト、ブルウスがエドワアド二世の大軍を打破つたバンノクバアンの古戰場たるを示す旗竿ださうな。

不圖倫敦塔其他て見た古昔の甲冑、鎖帷子、脛當、楯、旗指物、槍、太刀等が眼に浮ぶ。あんな物の具に身を固め、あんな旗指物を風にひるがへし、あんな槍を提げ太刀を振つて戰つたものかと、遠く此の古戰場を眺めながら、兩軍の馳せ交ひ入り亂れて戰つた樣が想像された。

* * * * *

城門を出ると斜面を爲した廣場がある。

門に近くロバアト、ブルウスの銅像がある。鍔下を左手に握つて左の足尖近くに突いた長剣の柄頭に輕く右手を置いて、遠くバンノクバアンを望んで居る。

銅像のある側は芝原だ。城門へ眞直ぐに通ずる道を距てゝ、向側は、廣場の一區域、砂土堅き練兵場になつて居る。軍曹らしいのが、十二三人づゝ新兵を集めて、あすこに一團、こゝに一隊と、練兵の初歩をやつ

て居る。僕は銅像の前の草地に胡坐かいて、巻煙草ふかしながら練兵を見る。

兵は帽もかぶらず、半袖の紺のメリヤス、シャツに、汚れた白ヅボンを皮帯で留めて居る。靴は所謂兵體靴の、底の五六分はあらうと思へる厚いのを穿いて居る。

軍曹殿は、同じく帽子無しで、半袖の緞茶のメリヤス、シャツ、それに黒のヅボン、白靴といふ、一寸意氣な姿をして居る。

横隊になつて行進する。

「てら、右にならつて！レフト、ライト——レフト、ライト」

入隊順に並ぶのか、丈の高いのゝ次に低いの、又高いのと、身長順には並んで居らぬ。六尺もあらうと思へるものも居る。僕より低さうなのも居る。足並が揃ひかねる。

「レフト、ライト、——レフト、ライト。バック——タアーン」

『右向け』と間違えたのがあつて叱られる。

僕は今日はエアへ行つて、エデンバラで泊る身だといふことも忘れて、長い間見て居つた。

* * * * *

バアンスの家——バアンス、コテエジ——は、石を塗り込めた、白い、厚い、荒壁の、草葺の、馬小屋ほどの路傍の平家だ。家根の中央と隅とに、壁と同じ色の四角な煙出しがついて居る。

西側の壁の、左隅に近く入口がある。扉を披いてはいる。床板も無い。ゴロタ石が敷きつめてある許りだ。天井など固より無い。梁に手が届きさうだ。六疊敷位しか無い。暗い。

厚い荒壁で次の間と仕切つてある。扉をあけて入る。西側の壁に向いて馬繋ぎ場がある。四頭入れ得るやうになつて居る。

同じく荒壁で境した次の部屋にはいる。八疊敷はあらう。窓は西に一つ、東の道に向いて一つしか無い。西側の窓の下にバアンス使用のテエブルが置いてあ

る。日本の田舍小學校の敎室のテエブルよりも御粗末だ。その右にタム、オシヤンテイの使用したといふ椅子がある。左には絲紡の大車がある。

右側の壁には、バアンス死後、一時此の小屋を居酒屋に使用した折、看板に用ひたバアンスの油繪の肖像のある板と紡車のエッチングの額がある。左側の壁にも四五枚額がかゝつて居つた。

その次の部屋も東西の壁に小さな窓が一つづゝしか無い。西側の壁近く、バアンス使用の圓卓、腰掛、足臺などある。左隅には壁に棚を吊つて古皿が並べてあり、右隅には古簞笥がある。右側の、さつきの部屋との境になつてる厚壁の西隅は、壁を刳りぬいて大きな龕様のものが出來て居る。此處に床を延べてバアンスは寢たものださうな。

左側の壁には。中央に大きなフアイア、プレエスが設けてある。

それでも此の前後の二部屋ほどは天井がある。頭が屆く程に低い。

此の小家に近く「バアンス、ミユジイアム」と稱する小さい建物があつた。一部屋だ。壁には多く諸家の筆になつたバアンスの肖像や家の繪が吊してある。硝子張の陳列箱にはバアンスの手紙、原稿、詩集の初版、フアミリイ、バイブル、氏使用の蠟燭立、氏が書き入れをして居るロオレンス、スタアン集第六卷、バイロンが有つてたバアンス詩集、バアンスに關する書籍等三百品以上陳列してあつた。

「タム、オシヤンテエ」に名高い、ドオン河の橋近く、氏の紀念塔がある。希臘殿堂風のバアンスとは一向調和せぬものだつた。

○五月十一日。エデンバラ城、國民美術館其他見物――メルロオズ迄汽車――同所から三哩のアボッフオオドへ往復徒歩――メルロオズ宿泊。

＊　＊　＊　＊

エデンバラ城は北、西、南とも殆んど垂直な絶壁を爲した岩山の上に立つて居る。南方に郊外の丘陵廣野が望まれる。西と北とは、岡と谷とに參差と町家が建

並んで居る。脚下にスコット紀念碑、國民美術館が見える。東の方、城から次第になだらな町家の盡くる處、ホオリイ、ルウドの宮殿の聳ゆるが見える。宮殿の左方、小山の上にネルソン紀念碑が鮮やかに見え、右方にアアサアス、シイトの岩山が突起して居るのが見える。眺望絶佳である。エデンバラが「近世の亞善斯」と呼ばれて居るのは無理も無い。

蘇國々王王冠室、クイン、メリイ室、大宴會室。セント、マアガレット禮拜堂を見た。いづれも懷古の念に堪へざらしめる。此等に就ては異日更に詳記するとにする。

城に近いハイストリイトのセント、チャイルス寺にスイチヴンソンの紀念像がある。エスト、プリンセス町のセント、カスベルト寺にデ・クインセイの墓がある。カスル町にはスコットが二十六年間住居つてた家がある。バアリメント、スクエアの圖書館にはスコットの「エエヴレイ」の原稿がある。僕は此等を氣長に探ね歩るいて見たが、修繕中の爲めホオリイ、ルウドの宮殿ほどは其一部分しか見ることが出來なかつたのは遺憾であつた。

＊　＊　＊　＊　＊

ヲオタア、スコットのアボッフォオドの家は、王侯の邸宅とも擬ふ宏壯なものであつた。邸内に林もあれば花園もあり果樹園もある。トキイド川に臨んで對岸のガラ、ヒル、バアクス、ヒルの山々を己が庭園の一景と收めて居る。

初めに二階の圖書室へ案内される。案内の女は黒の衣物、黒の袴の婆さんであつた。鞭を手にして一品〳〵指摘してペラ〳〵とノベッに説明する。説明が、金閣寺ての『向ふに見ゆるが細川石』式なのが面白かつた。

『此の部屋は長さ四十呎、幅十五呎。天井はロスリン、チャペルの天井を模したもの。藏書の數が二萬卷。これなるボクスウッド製の椅子は、羅馬のボルギイズ宮殿にあつたもの、出版者コンスタブルの寄贈品』

といつた體だ。出窓に近く、臺に載つた大きな硝子張

の箱に、骨董品が陳列してある。いづれもスコット遺愛の品である。クイン、メリイの印形、ボブ、ロイの財布、ジョオジ四世から給はつた嗅煙草箱、バアンス使用の大盃、エリントン侯の髮毛、ネルソンの髮毛など六七十品はある。

次なる客間へはいる。支那繪の壁紙が美しい。壁は三方とも大小幾多の油繪が吊し連らねてある。

東側にはロカアトの細君になつたソフイア孃の水繪の肖像(ニコルソン筆)マクスエル、スコット(ミラア筆)の肖像など五六枚かゝつて居る。

南側にはスコットの肖像(レエバアン筆)、スコットの母の肖像(ワトソン筆)など、大きいのが七八枚かゝつて居る。

西側にはクロムエル、ドライデン、ホガアスなどの肖像が四五枚ある。

室内の什器總て華麗を極めて居る。

その次に小さな武器室がある。南北と二部屋ある。壁の上部、下部、部屋の中央一列に置き並べた臺上の箱、――鐵砲、拳銃、短刀、長劍、槍、楯と隙間無してある。マレイ人使用の長刀に隣つて西班牙ブルフアイタアの庖刀、それに隣つて亞米利加印度人使用の刃の扁平な刀、その次に支那の青龍刀、その次に波斯のダッガア、その次に蒔繪の鞘の日本の短刀、その次に蘇國古代の槍の穗尖と――各地時代のが蒐集されて居る。

客間の壁裏に當る處に、武器室に隣りしてホオルがある。

ホオルの床はヘブリデス産の黑と白の大理石が碁盤目に舗いてあり、四方の壁は彫刻美しい樫のパネルで飾つてある。東の扉の上には龕があつてセント、アンドルウスの彫像が安置され、西側には同じく龕にセント、ピイタアとセント、ポオルの彫像が安置してある。客間との界になつてる壁の中央に彫刻の細かな石造の爐があり、爐の飾棚にはマリイ、アントアネットが有つてたといふ大時計其他の裝飾品が置いてある。壁には武器武具鹿の角など程能く並んで掛けられて居る。

部屋の中央に硝子箱が卓上に置かれて居る。中には、

スコットの靴、碁盤縞のヅボン、細かい横縞のチョッキ、白いトップハットなどある。

圖書室へ通ずる廊下を横切つて、圖書室と脊中合せの氏の書齋へ入つて見る。

天井まで、三方とも書物で埋まつて居る。脊皮金文字の裝釘美しいのが幾千百卷とも知れぬ。壁の中程に、階段を上つて行ける手摺付きの道が出來て居る。僕の如き丈の低い者は、此の道へ上つても壁の上方の段の書物には手が屆きさうに無い。此の書齋から階段を三階へ上ると寢室があるのだと聞いた。

○五月十二日。メルロオズ、アベイ見物――セント、ボスエルス迄汽車――同所から廿一町のドライボロ、アベイ迄往復徒歩――セント、ボスエルスからベトフオオド迄汽車――同所宿泊。無類の快晴。

＊　＊　＊　＊　＊

ドライボロ、アベイの廢寺にスコット幷にロカアトの墓を弔ふての歸り路、寺の森を後に見て、トヰイド川の渡船場へ出た。フト、ブリチといふ橋を架換へるので、橋の川下二町餘りの、河幅の稍狹まつた處に臨時に出來た渡船場である。

川は深くは無ささうだが、流が急なので底は見えぬ。水は極めて清い。少し下手に瀨がある。淙々と音を立てゝ居る。

對岸の渡舟の來るまで、土手の芝生に踞んで待つ。土手の後ろは寺の森續きの林だ。對岸は石交りの赤土の崖で、崖の上には低い木柵が見える。木柵に沿ふて若葉の樹が一列に並んで居る。樹は若い。川上の橋の袂には栗か樫か、下枝も梢も繁りにしげつた大樹が二三本見える。その右に白壁の二階家がある。家の右は段々の草原だ。英吉利には殆んど野菜畑を見ぬ。日本には段々畑を能く見るが、こつちぢや段々野だ。その段々野の遠くに、箱根の二子山のやうな山が並んで見える。草原へ地圖を披げて見る。エイルドン、ヒルスといふ山だと知る。告天子の聲が近くきこえる。長閑だ。

『さあ、お乘りなさい』

いつの間にか渡舟は、此方の岸に繋がれて居るので

あつた。

○五月十三日。オルニイ迄汽車――クウパア、ミユジイアム見物――ベドフオオド迄汽車――同所より十七八町のエルストオ迄往復徒歩、同所にてバンヤンの生家見物――ベドフオオドからケムブリヂ迄汽車――同所宿泊。快晴、夕方曇る。

* * * * *

クウパア、ミユジイアムは赤煉瓦三階の一寸大きな家だ。尤も地階の二部屋だけに遺物その他の展覧品が陳列してある。

入口の一部屋には四方にクウパア時代の寺だの、生れた家だの、庭だのと、油繪水繪エッチングの額が無數にかけてある。片隅に八段の書棚がある。下三段はクウパアの使用した書物、上五段はクウパアに關した書物が入れてあつた。

次の部屋にはクウパアの手紙、原稿、「オルニイ、ヒムス」の初版、ロングマン社出版の詩集、エスタアの挿繪のある詩集、ストダアドの挿繪のある詩集などが重もな品物であつた。

十九年使用したといふ、二階の寝室のベッドも見た。

狹い裏庭の「サンマア、ハウス」にも入つて見た。

バンヤンの居た家といふのは、藁葺の低い平家で、表の道と裏の庭とに面して前後一つづゝ小さい窓のある部屋が二つしか無い。頭がつかへさうに天井が低かつた。

* * * * *

ベドフオオドからケムブリヂへの汽車は平地の間を走る。平地とは言ふものの、なだらな丘もあり、窪んだ沼地もある。水の見えぬ處は、丘もたゞの原も、芝が一面に敷き詰めたやうに生えて居る。木立があつても、木の根元まで芝が敷きつめられて居る。汽車道に近く、雉子や野兎が遊んで居る。野兎はヒヨイ〳〵と五六歩飛んでは汽車を顧みる。雉子は悠々として草の根の蟲を啄んで居る。

* * * * *

西の方、空に一處鼠色の雲が現はれた。次第に擴がり、次第に黒くなる。やがて今迄此の四方の平野を遍ねく照らして居た日を遮つた。不圖見ると、東の方、二重の虹が大半圓を描いて空高く懸つた。ワレエス畫堂にあるルウベンスの「虹」の繪が思ひ出された。

○五月十四日。ケムブリヂ滯在。終日雨天。

『英吉利での雨降りの日曜日』！殊に田舍町での雨降の日曜日ほど靜かな、淋しい、物足らぬ氣のするものは無い。

僕はコムマアシャル、ルウムの窓近く椅子に掛けて表の通路を見る。向側の商家は、いづれも其の軒までの一枚硝子の大窓を木戸で蔽ひ包んで居る。入口の扉にも裏にカアテンが懸つて居るから、店の内部は見えぬ。

教會から歸りの、聖書を小脇に、片手で蝙蝠傘をさして、片手で裾を少し捲くしあげた婦人、——マキントッシュの襟を立てゝ山高帽は濡るゝに任かした男——キャップを冠つてフロックの上へガウンを引ずるやうに羽織つた、鬚ばかりが白い黒衣裝の教授らしい人——小さい蝙蝠を相合傘に肩をヒシト押し合ふて、膝までの短いフロックに、股までの長靴足袋がシックリ合ふた蚊細い脛を現はした姉妹らしい少女——こんなのが一と仕切り通つた後は町は元の靜かさに還つた。膝喰で固めた心持中高い道に降りしきる細雨は、兩側のガタアに泥水の淺い溝を造らして居る。

たま〲ケタヽマしい發動機の音が遠くにきこえる。停車場まで通ふ乘合自動車が裏町を通るのだ。

晝飯の相客は四人あつたが、何處へ行つたのか宿には居らぬ樣だ。話合手もなけりや。讀むべき新聞も無い。

アアギングの『肥大紳士』に描いてある景色がしみ〲偲ばれた。

* * * * *

キングス、コレヂのチャペルでの禮拜に列して、歸途僕はトリニチイ、コレヂの裏のキングス、コオトを經て、カム河に架した小さな石橋に立つた。橋を渡る

と所謂「バック」だ。千坪餘りの芝生だ。「バック」は隣校のケイアス、コレヂ、クレア、コレヂ、キングス、コレヂ、クインス、コレヂの「バック」に小路を距て、或は小流を境にして接續して居る。どの「バック」も芝は短かく刈られて、形容は古いが毛氈を敷いたやうに綺麗だ。此の各大學の芝原は、クインス、ロオドと稱する大道を距てゝ、各大學所有の所謂「ガアヅン」に續いて居る「ガアヅン」は一と抱に餘る大木が疎らに植はつた芝原である。

石橋に立つて河上を望む。遠くにセント、ジヨンス、コレヂが見える。右手には大學の宏大な建物が見え、左手には前述の「バック」を距てゝ「ガアヅン」の木立が見える。「バック」の芝も、若葉の木立も、雨に濡れて翠綠漏らん許りである。

○五月十五日。午前ケムブリヂ滯在。午後汽車で倫敦へ歸着。快晴。

*　*　*　*　*

フイッツヰリアム博物館を見た。倫敦の「國民美術館」と「大英國博物館」とを合せて、規模を極めて小さくしたやうな博物館である。ロセッチ、ホルマン、ハントの鉛筆畫が少なからずある。ロセッチの「ザ、ハウス、ヲヴ、ライフ」の自筆原稿、スヰンバアンの「アタランタ、イン、カリドン」の自筆原稿等文士の自筆物も少なからずある。古磁器、古陶器、油繪、埃及希臘ものも、可なり蒐集されて居る。

（以上は十五日の内地旅行に手帳に書留めて置いたのを、あれこれと一部分づゝ引延ばしたのである。繁簡其の宜しきを得ないのは、學事多忙の爲めに添削の暇が無いのだと、偏に讀者諸君の寛容を祈るばかりである。

七月十七日　繞石白）

秋草と蟲の音の印象

初秋の一夜

水野仙子

「それぢやあ行つてまゐります」
「いつてらつしやい御機嫌よう！」
艶々した雨合羽に身を固めた車夫は梶棒をあげた。軒低くさし出た松の葉にばさ〳〵に幌の擦れあふ音がして、徐に車が後向きになると、ネルの格子縞の半身が、淋しさうに會釋した白い顏が、がら〳〵と消えて行つた。檜の垣添へに、細かい雨に濕つた土に新しい轍の跡が並んで殘つた。

　私は夏瘦せのだるい體を柱にもたせたまゝ搖られ〳〵遠ざかつて行く車の音と、格子戶の下に憚つたやうな音をたてゝ居る雨の音を聞いて居た。さびしい、けれども何處か氣が張つて居てその思ひがつきつめられない、そのつきつめられない侘びしさに、私はその淋しい思ひを極めたい爲めに、
「さびしい今日から私はこの家にひとりぼつちなんだ！」
と心に繰りかへしてみた。

たわいなく取りどめもなく笑つたあとを、お互にてもつまらなさゝうに淋しい顏をして默り込んでしまふのに馴れた女二人の生活、つひしたことからこの夏の暑さに負けて、病みあがりの一人は藥代の工面にと故鄕の信濃へかへることになつた。

　林と原と畑とに圍まれた丘の家に、訪ふ人もなくて四五日は過ぎた。此頃は灯ともし方から夜となれば殊に蟲の音が繁くなる。洋燈の火を細めてふらりと出た。ひや〳〵しい夜の風に袂をふかせて、ふりかへり〳〵

道を行くと、松の樹の間に今拔け出て來た家の灯が、竹格子の障戸に薄くうつて居る。道端の南瓜畑の、夜目には白い花の下にも蟲の音があつた。下駄の音に近いのはハタとやんて、蹴るともなしに蹴つてゆく石ころの飛んだ先のがまたハタと止まる。後にはもうやりすまして心おきなく錆びた音を續けるのてあつた。

××さんの家――楢の立木に圍まれて道からは灯影も見えぬ家の人達が懷しく、草深い飛石を傳はつて、行くと、心のまゝに繁つた兩側の草が、初秋の匂いを運んてさや〳〵と袂に觸れた。

「何誰？――さん？」

萩の下枝から、小聰しく走り出た小犬の吠え聲に、緣側へつと出した奥さんの顏は灯影を後にして暗かつた。

「やあ、――さん淋しいてせう、×さんはいつ頃おかへりてす？」

××さんの顏が重なつて緣側に出ると、私はなんといふことなしに安心して庭に佇んだ。

「まおあがんなさい」

孤つ家の庭には圍ひもなく、延びた芝生を踏んて手を延ばせば、數十本哀れに立つたとうもろこしをぎイと捥ぎとることも出來る、日廻りの萎えた花が月のない空あかりに哀れに傾いて居る傍には、コスモスの青い莖が細かい葉をつけて夜露に繁つて居る。

「まるてもう秋てすね」

と端近に××さんが立つて言つた。空には高く星があつた。絶え間なく四邊を圍んて居る蟲の音は、默つて人々の考へがちり〳〵になつた時に、殊にそれが鮮かに聞えた。

「電車の灯を見に行きませんか」

私は思ひ出したやうにかう言つて、灯影の屆かぬ芝生から足をぬいて緣の方へ寄つて來た。

「いきませう！一體――さん、あれは新宿から代々木に行く間のが見えるんてせうか、それとも代々木から千駄ケ谷に行く電車んのてせうか――此間も曾惠とそのことを話したんてすがね」

「さア――」

私はかう言つたまゝ、ふと今まで無意識にまさぐつて居た手のうちのものを明るみに調べて見ると、いつの間に摘み取つたものかそれは我毛香のまだ固い蕾てあつた。

秋草と蟲の音との印象

小金井きみ子

澁見川の中流には北越の松島といはれる景色のよい所がある。新潟行の汽車が其傍の鐵橋を一日に幾度も通つてゐる。こゝは昔この村の大地主が、水利をつける爲に、多大の費用と勞苦とを惜まず切り開いたのだといふ事て、勢のよい水が其鐵橋の土臺と面白い松の差し出た島とを洗つて、末は幾町かの良田にそゝいて、いはゆる越後米をみのらしめるのである。

初秋の心地よい日其清流を漕いて行くのは、わたし逹の乘つてゐる舟ばかりてあつた。御飯の用意をして漁夫に網を打たせながら上つていつた。鮎がかゝる。鮎がかゝる。「やあ大きいと思つたらくずたらべえだがんに」といつて逃す。「あ鯰を逃がした、こりやあ強性ていかねえ」などゝ大聲をあげる。暫くは雑木林や堤の傍を通つて行く。

上つて行く程川がだん〳〵淺くなる。綺麗なひた〳〵の水が透き通つて底の小石が見える。もう棹はきかぬ。すると網をやめて船頭が二人程はら〳〵と水に下りて、屋根に乗せてあつた索で遙かに先に立つて引いて行く。船底をする小石の音が耳につく。船はある岩の間の狭い所へ這入つていつた。それから又流れが急になつて川幅も廣くなる。此邊から萩の花がちら〳〵と見えはじめた。ゆる〳〵と漕いて行くほど、花はだん〳〵多くなる。こゝらが一番よからうと舟をとめた。舷に立つて見渡せば、向ふ一町程は萩と薄とまじつて咲きつゞいてゐる。中にも驚くのは、一丈もある崖の上から、殆水面へつく迄枝が垂れて咲いてゐる萩てある。美しい花瓣は水に散り浮いてゐる。水が音を立て

ゝ落ちてゐる向ふ岸の岩蔭に、鶺鴒がいく番も遊んでゐる。「そこらで又やつて見やう」と又網をはじめる。何か大きいものらしいと、急いで又手を出したら大きな鯉であつた。それはすぐに押へたが又手の目に一面に花がかゝつてゐた。ところ〴〵に葛かつらが長い〳〵絲をたれて居る。少し風が立つて來ると、裏吹返してひら〳〵とする。惜しいと思ふ程萩を手折つて屋根へ結びつけて漕ぎ出す。「こゝまだし〳〵」といつた卯の花車を思ひ出す。

　川邊の小道を木を背負つて通る男が大きな雪のかたまりを持つてすゝりながら行く。向ふの危げな橋を馬の口を取らせてインバネスを着て傾く夕日を洋傘でよけながら渡つて行く人がある。珍らしい樣子の人と聞いたらば、此地に一人しかない醫者が、近在へ呼ばれて行くのだとの事である。もう萩はなくなつてこゝらは薄まじりに、撫子や女郎花が少し咲いてゐるばかりである。この橋の袂から漕ぎ返した。

　下りは早い筈だがそれ程でもない。薄暗い林の蔭を通る頃には、そこゝで茅蜩がカナカナカナと忙しさうに鳴き出した、舟の足はなか〳〵進まぬ。やつと半分道下つたのに、もう夕霧が立渡つて、水の面のみが白く暮殘つてあたりは暗くなつてしまつた。ところ〴〵の木蔭からかすかに燈火の光が見える。いつからともなく兩岸の草原で蟲が盛んに鳴出した。何の蟲と何の蟲と一々聞きわけて蟲撰などが出來さうではない。轡蟲の賑やかなのもあればすいとの寂しげなのもある。その外名の無い樣な蟲さへとり〴〵に哀れげに、秋を告げて居る。そんなにならうとは思はなかつたので燈火の用意をして來なかつた。一面に萩を葺いた舟の中ではみんな一言も出さないで、ぢつと坐つて蟲を聞いてゐる。船頭達は舟を流れにまかせて、舷で煙草をふかしながら何か小聲でいつてゐる。折々大きな聲で笑ふと、其聲がひどく水に響く。やがてそれが流れを渡つて消えうせると、はじめにもまして靜かになる。唯色々な蟲の聲のみが岸から聞える。

「あ月が」と一人の船頭がいつた向ふの杉山の蔭から

月の光がさし昇つた。その影はいつか露を置いた萩の枝にもやどる。きら／＼と輝く水を舟の足がくだいて行くのが、勿體ない樣な氣がする。

鈴蟲

國木田治子

八歳に成る玉ちやんは口繪の澤山ある雜誌を一心に見て居たが、やがて一つ畫を暫らく見つめて居たあげく『れんちやん、是れは何にをして居る畫なんてしやうね』と不思議相に、緣の柱に寄りかゝつて小聲に端歌を唄つて居た若い叔母さんに聞いた。其畫は山の中腹に毛氈を敷いて二三人の風流人が蟲の音を聞いて居る圖てあつた。それを一目見た叔母さんは『それは蟲の音を聞いて居る所なのよ』と玉ちやんに敎へた。『蟲の音つて？』と玉ちやんは聞きかへす。『聲の事なの』『左樣わかつた。私始めお月樣が出て居るからお月見かと思つたけれど、みんなが下を向いて何にか考がえて居るやうなので、何をして居るのかと思つたわ。此所は田舍ね、此人達は東京から汽車に乘つて蟲の聲を聞きに來たのてしやうかね。』眞面目に聞く。『左樣なのだらうよ』と、叔母さんはあいまいらしい返て答へて自分も其畫を見入つた。『それじやア田舍の蟲の聲の方が東京の蟲よりは好い聲なのですね』『そんな事はないだらう』『じやア、何故田舍までわざ／＼行くのてしやう。お家に居たつて肩させ裾させだうて緣の下て毎晩なくし、緣日に行けばスイッチョだつて、ガチヤ／＼だつて、リーン／＼だつて賣つて居るわ。ホーラ鳴いた叔母さん所のリーン／＼だつて、私の家のスイッチョだつて朝も晩も好く鳴くワ』と言つて岐阜提灯と並べて掛けて有る鈴蟲の籠を見上げた。玉ちやんに左樣言われた叔母さんも思わず籠を見上げた。鈴蟲は暫らくしてまた鳴いた。其聲を聞くと叔母さんはッと立つて籠を下して庭に持つて出ると、打水涼しげな庭先を夕月が照して居た。『マア好い月！と言ひながら花壇へ籠を置いて座敷へ戻つて來た。叔母さんのする事を無言て

見て居た玉ちやんは『叔母さん、籠を土の上に置くと蟻が來てリーン〳〵をいじめるわ』と心配相に言つた。『大丈夫よ。直ぐまた持つて來るから。玉ちやん寢むいの』とぼんやりして居る玉ちやんの手を取つて引寄せた。『エヽ私今朝、朝顏のひらく所を見やうと思つて母樣と一所に早く起きたので。最早寢むたくなつたわ。』と甘へた聲で言つた。『じやア叔母さんの膝を貸すから枕にして最少し待つて居らつしやい。お庭で鳴くリーンの聲を聞いてから寢かしてあげるからね』『エヽ！』素直に膝を枕にして横に成つた。『おゝいゝにほいね、白粉の香でしやう此は私にもつけて頂戴ね』と言つた。『アヽ？マア靜かに成さいよ』と叔母さんは輕るく團扇て蚊を追つた。『アラ！リーン〳〵が彼んな可愛らしい聲て鳴いてよ』と暫らくすると玉ちやんは此樣言つて、はね起きた。『家て鳴く聲とお庭て鳴くのとは聲が違がふわね』と叔母さんも言つた。『エヽ、眞實ね、じやア矢張り田舍には澤山蟲が居てそうして、こふ言ふ可愛らしい聲て鳴くから、東京の人がわざ〳〵汽車に乘つて聞きに行くのだわ、わかつた？』とさも〳〵わかつたらしく言つた。叔母さんも「明日の芝居行きはやめにして、父樣が蟲の音を聞きに大宮へ行くとおつしつた其方へお供しやう」と心の中できめた。



三井王國と三菱王國

△舊家と出來星

早川鐵冶

三井は何處からの風來ものか知らぬが、三井家に言はせると本國は伊勢で何の守（かみ）とやらの子孫で二百年以上の舊家といふ。舊幕時代には大名に金を貸したり、吳服物を商つたりしものだ。之に反して岩崎は遂昨今のもの、土佐の田舍武士より身を起し、明治維新の騷に他の者の大臣參議を狙つて居る中に、獨り事業に着眼して成功した、是が先代彌太郎で、同じ土佐藩でも後藤伯だとか福岡子抔よりは家柄が惡い。今の久彌は即ち二代である。當り前からいへば岩崎は成上り金持、出來星紳士て、三井は家代々の富豪といふ相違がある。出來星は進取的で舊家は保守的と思はれ勝てあるのに、三井の方が遣り口が派手て岩崎の方が頗る地味てある。

が何處ても家運長久なるには二代におとなしき者を要する。北條も二代の義時は溫和しく、大層親父の我儘を心配して大事を取つて出たが、それを繼いだ

泰時は偉い仕事の出來た人物であつた。後北條でも此通り、伊勢新九郎長氏は偉らい人物だつたが、其子の氏綱は溫和しい、そして三代の氏康となると亦偉らい人物であつた。足利も初代の尊氏は偉らい。が其子の義詮は少し人物が落ち、三代の義滿になると是が又遣り手だ。德川も家康の偉らい事は誰も知つて居る。が二代の秀忠は溫和しい一方の人、只守成に勉めた丈であつた。三代の家光になると、是が又大の惡戯者。丁度都合の宜い代替りでいつて居るので、能く十五代も續いたものである。岩崎家も亦此通り。岩崎彌太郎は實に卓出した創業的の偉才であつたが、其子の久彌は守成一方である。が久彌の悴には又積極的に活動する偉らい人物が出るも知れぬ。今岩崎家の遣り口の地味な所は岩崎の家運の向上を示すもので、大に祝すべきである。

が成上りものは勇猛敢爲思ふ存分に仕事をし、數代續くものは何事も控へ目勝に地味に仕事をするといふが常規であるのに、それが斯う反對に出るには、自ら兩家の頭だつものに左樣なるべき人物の居る事を語るものだ。

三井には山本條太郎が居るが、霸氣縱橫冒進して憚らぬ男で、上海に居ても、三井の一支店長でありながら、能く百萬圓以上を儲けたといふ人物である。三菱には莊淸次郎が居る。是は其父から臨終の際に岩崎彌太郎に託されたもので、言はゞ家飼ひの小倅。幼少から彌太郎の世話で育ち、小學から大學までも其手で遣つて貰ひ、遂に明治十八年に大學を卒業して法學士となつた僕だの藤田四郎等は竹馬の友である。世間には薩張り知れて居らぬ樣だけれど、極、手堅い、石橋を敲いて損の無い樣にとのみ心懸け行く人物で仲々偉らい。

三菱にはもつと偉らいものに莊田平五郎が居つた。是は三井の益田と比すべきだらう。岩崎の姪聟である、慶應義塾を卒業すると間も無く三菱に入り、性行全く相反した彌太郎の氣に入り、遂に彌太郎を補佐して今日の三菱の基を固めたのだが、其遣り方は頗る地味である。

益田は如何かといふに、是も役人上りて。七年の退官後先づ先收社に入り、間もなく三井に入つたので、彼是れ四十年近くも居る。口も八丁、手も八丁、偉らい豪膽な人てはないけれども非常な才子。切れる樣な才子てある。即ち手堅い一歩々々蹈み固めて行く莊田平五郎を元老にした三菱と、細心にして縱横無盡に斬つて行く益田孝を中心にした三井との遣り口は此處から抑も分れるのだ。益田は三井の大番頭だけれども其財產は骨董品を合せたら數百萬といふ巨額に上つて居らうが、それに比して莊田は甚だ權衡を得ぬ、五百圓の月給て、止す時にも僅か二十五萬圓位しか貰はなかつた。一寸聞けば多い樣にもあるか知らぬが、今日にすれば二十五萬圓は知れたものだ。

銀行の方ては三菱には三村君平が居る。是も亦年寄つた至つて堅い人てある。其上には更に豐川良平が居るが、是は先代彌太郎の甥に當る。一見不得要領な男だけれど、人を見るの明がある。今日手堅い人物を三菱の要所々々へ入れて置くのは全く彼の才幹てある。彼は自ら豐臣秀吉、德川家康の略、張良、陳平の智を一身に兼ねんとして此名を選んだものだといふが、其豐臣、德川の略は知らず、兎に角張良、陳平の智者を盡く簡撰して三菱へ引き込み、要所々々へ配つたのは偉らい。即ち前に言つた莊田は彼の先輩てあるが、彼は之を引いて來て遂に岩崎の姪聟とした、又大石正己の樣な豪傑を引いて來て久彌の敎育係として育て上げさせたこともある。三菱の人才には堅い、眞面目なといふ一種の特色を帶びて居るが、是は多く豐川の眼鏡によるもの、豐川には群雄駕御の才がある。彼の下には群雄來り跪き、相共に三菱の經營に當る。近藤廉平も亦彼の引いて來たもの、そして自分の妹聟とした。加藤高明も岩崎の聟となつたが、是も彼の引いた人物てある。明治屋の先代磯野計とか增島六一郎とか末延道成とか云ふ連中も彼れが引込んで來たのてある。凡て此の如くてある。

三井には今早川千吉郎が居る、是は元老てはないけれども兎に角故參てある。矢張り役人上りて、溫厚な

人だが豊川程の人才ではない。其早川の下には池田成彬と米山梅吉とが居る、二人とも米國に遊學した人で、若いハイカラな遣手である。三菱の方では皆老人が居る。今言つた位な人達は三井へ行けば僅に課長か營業部長といふ所である、彼の有名な今村清之助の聟の串田萬藏の如きは、岩崎久彌と共に米國に行つて學んだ秀才で、池田輩よりは無論先輩であるが、三菱に居つては今尚ほ營業部長である。然るに三井では頻に新進氣鋭の人を拔いて之を要所に置く。元來が銀行は他よりは地味な所であるけれども、それですら三井の方では此通である。

三菱の事業で少し地味でないのが造船である、造船は國家からしても最も必要なものであるが然し地所や銀行の樣の損のないものではないが此處には水谷六郎が居る。是は岡山出身で、勤王家で國事に奔走した人、後に英國に行き造船學を覺えて戻り、三菱に入つて働いて居る。非常な老人だが是が部長をして居る。

三菱の鑛山には南部球吾が居る。是は小村壽太郎、平井晴次郎、古市公威等と共に開成學校第一の留學生なのだから、役人とすれば技師の元老株位になるべきだ。一方には、又山田直哉が居る。是は十八九年頃の大學の卒業生で三井の鑛山部長をして居る。

事業の種類にしても、三菱は三井の樣な物産とか木材とかいつた風の、性質上盛衰の有るものに手を着けぬ、即ち只鑛山とか銀行とか地所とかいふものにのみ力を用ゐて居る、三井は之に反して何でもやる。三菱のやるものには、倉庫會社、保險會社といふが如き皆堅いものばかりであるが、三井の方では、紡績會社とか呉服屋とかいふ樣な、盛衰計られぬものに迄も手を出す。是は畢竟するに其兩家の中心たる主腦者の頭に因るのである。要するに三菱は一門郎黨を以て經營し、三井は赤の他人を入れて經營する。一代者の金持が一門郎黨を驅りて働かせ、數代續きの金持が赤の他人を入れて働かせる、といふ處に兩家の相違が明かに存在する。そして自餘の遣り口以上の相違も之に自ら附隨して顯著に現はれて居るものと見る。

三井の最も派手な事業は物産會社であるが是れには前に云ふた山本條太郎とか福井菊三郎とか岩原謙三とか云ふ商賣に掛けては眼から鼻に抜ける様な一騎當千の若き強者が居る見渡すところ三菱では斯ゝる派手な切て回はる程の人はない否三菱の憲法では斯かる人物は可成用ゐぬ様にして居るのではないかと思ふ。

△三井と三菱の比較

松亭

三井と三菱と比較して誰にも目立つて見えるのは、其營業振りが片一方は派手やかにして進取的であり、片一方は地味にして保守的であるといふ事で、之はもう誰が見ても直ぐ氣が附く所である。尤も近頃は三菱の方でも、今迄のやうな地味で保守的な遣り方ではいけないといふ議論もあつて、營業振りも少し變つて來たやうである。動機の主もなるものは、小彌太といふ人が副社長になつたからといふ事だ。今迄は莊田平五郎が總理大臣になつて、三菱の方針は大抵あの人によつて定められたのである。處が莊田といふ人は元來保守的な地味な人であるから、遣り方も矢張り地味に保守的になつたのである。小彌太が副社長となつてからは、莊田と意見が合はずそして其結果莊田は三菱から退隱することになつた。それから莊田の下に銀行部長をやつて居つた豊川良平も、實は其前から莊田の遣り方には不平であつた。從て或は政治界へ打て出るとか、あすこを罷めるとかいふ噂も世間にチョイ〳〵出た。打て出るといふのが本當か、やめるといふのが根據のある事か、よく分らぬが兎に角不平であつた事は事實らしい。が自分が直接政治に携はらぬ迄も例の土佐一派の黒幕となつて骨折つた事は事實である。所が莊田が廢して、豊川が其跡釜へ据つて總理大臣になつた譯だ。それが詰り小彌太の意見が行はれ掛けた證據と見ることも出來る。今日迄は未だ三菱の營業方針が著しく變つたとも見えないし、又ひどく事業擴張をやつた

とも見えないが、其端緒は見えて居る。現に九州炭坑に頻りに手を伸ばしたり、神戸で倉庫業をやつたり、水陸連絡の計畫をやつたり、いろ〳〵な事をやりかゝつた。殊に神戸では盛んに仕事をやつて三井と競爭して居る。從て三菱も今迄の方針を改めて之から三井に劣らぬ積極方針に出るだらうと思はれる。

今迄三井の使用人が主人家に對する關係と、三菱の使用人が主人家に對する關係は餘程違つてゐる。三井の方では總て人物本位、腕本位であつて、腕の立つものはウン〳〵登用され、働きのあるものが總てを支配する事になつた。そして働のないものは假令主人でも無視されてゐる。處が不幸にして三井の主人側の方には餘り働き手がない。番頭の方が何時も腕が上である。從て三井の事業といへば、番頭が主人顔をして仕事をして居る。三井に何か頼まうと思へば三井の主人よりも益田なり早川なり團なりに頼むことになる。又此等の番頭達の極めた事は必らず行はれる。主人といふものは殆んど無視されて居た。甚しきに至ては三井の使用人に主人の顔を知らぬものが大變ある。主人の家が何處にあるかを知らぬものは勿論澤山ある。處が益田孝の品川の邸を知らぬものは無い。又早川や團の家を知らぬものも殆んど無い。此等の番頭達の顔を知らぬものは固より無い。三井は詰り番頭政治である。

處が三菱では少し趣が違ふ。三菱の使用人は矢張り飽くまでも主人として岩崎兩家を立てる。莊田、豐川以下の番頭と雖も主人のいふ事は聽かなくてはならぬ。無視することは到底出來ない。從て小彌太が副社長になつて意見が極れば廿年勤めた莊田も退隱しなくてはならぬ。これは一つは永年の習慣もあるだらうが、三菱の主人が三井の主人よりも遣り手であり、利口であるといふ事が主もなる原因である。三菱の主人には番頭を抑へる丈の威力がある。同時に三菱の方では主人側も使用人に對してなか〳〵勤めて居る。例へば岩崎の妻君達は盆暮には土産物を持つて莊田、豐川は無論の事、もう少し下の番頭手代の處へ訪問に出かけるといふやうに勤めて居る。從つて使用人の方からは無論

の事、何の場合にも必らず主人家を訪問に行かなくてはならぬ事となつて、家族皆お伺ひするやうになる。だから三井の如く、使用人が主人の顔を知らぬといふやうな事がないのみか、主人家と使用人との間は極めて密接である。啻に事業の上に密接であるのみならず、家族的の關係が密接てある。使用人がどうしても主人を無視することが出來なくなる。此點は三井と餘程違ふ所だ。全然正反對といつてもよい。

終りに猶、一寸附け加へて置くが、三井の總理大臣をして居る益田といふ人は非常な才子て、どつちかといへば餘程輕薄だと思はるゝ程の才の勝つた人である。て三井の人物に對する態度も、此益田の性格にも關係があるやうに思ふ。才があつて働きのあるものには非常な優待をする。そして一朝働きが無くなれば早速追ひ出すといふ風だ。三菱の今の總理大臣豊川良平は働きもあり、頭もあるが、極く正直ないゝ人て、又男氣もある。銀行家仲間ては銀行家の老壯士といつてる位だ。そして一身の利益などは丸て念頭に置かず、偏へに主人家大事と奉公して居る。て三菱では使用人の報酬などは到底三井のやうに出さない。其代り一旦因緣がつけば、役に立たぬからとて直ぐに拋り出すやうな事はしない。三井ては大番頭は勿論の事、中番頭に至るまで皆相當の資産を作つて居るのに、三菱ては莊田ても豊川ても何も財産を作つてゐない。別に贅澤したんてもなく、道樂をしたんてもない。報酬が實に薄いのてある。こういふ風てあるから、腕のあり、働きのあるものは皆三井の方へ行つて、腕がなく安全な所を欲するやうなものが皆三菱の方へ行きたがる。若し三菱で今後積極方針を取ることにしたならば、今のやうな待遇——報酬ては到底人物が集らない。だから此待遇を變へるといふ事が三菱の營業方針の變更にとつて最重の問題だらうと考へる。

△總てがよきコントラスト

南木摩天樓

▼金持ちは一體嫌ひだ、强ち自分が貧乏だから嫌ひだと云ふ譯でもないが、何でも金さへ有れば天下何事も自己の意のまゝになると云ふ樣な高慢な面がいかにも癪に障るのだ。

▼尤も學者なんと云ふ連中でも存外物は分らぬものと見えて、矢張り金持が金を天下唯一のものと思つて居る樣に自分の學問を以て一切萬事の根本と心得て居る。倫理學者は倫理學がなければ人生は立ち行かぬ樣なことを云ふ、社會學者は又自分の専攻學が一切學問の總府だと主張する。或は純正哲學、或は敎育學、或は心理學、何れも皆然らざるはない、然れば人間の物質的生活に最も直接不離の關係を有する金錢の番人が、自分を以て天下最も偉大なる勢力を有する者と感ずるのも强ち無理ではない。或は彼等の思想の極めて單純なるだけ、生中學問をして人生の大局に通じた樣な積りで居る學者連中の己惚れなどよりも、却て正直て罪のない方かも知れぬ。

▼そんな好き嫌ひの論はどうでもよいが、僕は斯の如く金持ち並に偏に金を愛好する者を嫌ひてあるが爲に、金持ちと云ふ者に對しては殆んど興味を持たぬ。從つて彼等の右往左往については少しも注意して居らぬから、三井三菱なんと云ふ者に對しても知る所は殆んどない。徒に他の寳を數へて自ら半錢の分なしだからネ。そんな下らぬ詮議をして居るよりも、自分の貧乏を追拂つてマー人の世話にならぬ工夫でもする方が、先以て國家の爲と云ふもんだ。

▼併し、三井と三菱そのものゝ身代の多少とか、事業の盛衰とか云ふものは餘り知らなくとも、是等の大身代を動かして行く人物の奈何は幾らか知らない事もない。マーそんな事でも少し許り話して見やうかい。

▼何にしても三井と云つたら日本では昔から富限の代名詞の樣に思はれて來た古い金持ちだから、その主人連中は何れも皆斯うしつとりした落付があつて、云は

ど殿様風な大様の所がある。例へばその宗家たる八郎右衛門は云ふ迄もなく、高保にしても、八郎二郎にしても、三郎助にしても、又、源右衛門、得右衛門にしても、各多少の差はあるが、併し大抵皆こせつかない、ゆつとりした優味がある。所が三菱と來ると、何にして一代身上て、先代が維新前後のどさくさに乘じて、その英邁果斷の資を以て殆ど一擧作り上げたのであるから、今の久彌なり小彌太なりにしても、未だどうしても先代奮鬪の餘響を脱する譯には行かぬ。換言すれば岩崎の當主連中には、未だどうしても商人氣質と云ふよりも斯う如何にも油斷もすきもない樣子、こせついた一種の臭味のあるのが鼻に附く樣な氣がする。

▼と云つて三井一族が丸て馬鹿殿の樣に、何も世間の事を知らずに泰然と納まり返つて居ると云ふのではない。實際に於ても彼等は――八郎右衛門が三井合名會社に於ける業務執行社員兼社長として、三郎助が同じく鑛山部長として、高保が三井銀行に、又八郎二郎が三井物産に社長として、――何れも毎日判て押した樣にそれ〳〵會社に出勤して、兎も角も事務を總攬して居るのであるが、而もその態度たるや、全然部長有能の才を信任して大抵は彼等の施爲計畫するものに一任し、自らは單に形式的に云はゞ盲判を押して居ると云ふ風てあるが、三菱になると夫れが趣が違ふのてある。

▼三菱合資會社ては久彌が社長の小彌太が副社長てあるが、就中久彌の如きは頗る英邁達識の方て、事業の計畫施設の如き、苟くも大體に關することは凡て自ら裁斷せずには置かぬと云ふ風て、假令毎日極まつて出勤すると云ふてはなくとも、決して徒らに盲判を押してるのに滿足して居ない。そんな風だから彼は社員等に對しても餘り評判のよい方てはなく、中には成り上り者だからいやにケチ〳〵していかぬなんどゝこぼしてる者さへある。

▼一體久彌と云ふ人は阿米利加仕込て、廣く歐羅巴諸國なども遍歷して居るので、世界の大勢にも幾らか通曉して居やうし、殊に財界の趨向や事業界の大勢と云つた樣な事にも一通りの見識もあり、議論も持つて居

る。大抵一代富限の息子などには得て馬鹿が多いものだが、久彌に至つては決して不肖の子ではない。恐く裸一貫で世の中へ抛り出しても必ず一廉の仕事は仕出來すだらうと思はれる。此の點に於て岩崎家そのものは兎も角も幸福と云ふべきであらう。

▼所が雙方の大番頭連に至ると、此の對照が丸で反對になつて居るから頗る妙だ。

▼三井の代表的人物は顧問の名の下に實權を總轄して居る益田孝である。三菱で之と相對し來つた大番頭は前管事の莊田平五郎である。益田と莊田、一寸聞いたゞけでも妙にコントラストを感ずる。益田は至極進守的の、何事に對しても意見の多い、派出な事を好む質であるが、莊田と來ては丁度此の反對で、十分の事は七分に云つて置くと云ふ風の番頭氣質、思慮は極めて綿密であるが、その代りに何事にも質實を旨とし、地味にヂリ〳〵と進んで行かうとする質である。

▼此の兩者の性格の相違は某實業雜誌上に顯はれた彼等の口吻に於ても看取することが出來る。益田は曰く「日本も歐米文明國と同等の地位を占める事となつたとは云ひながら、今日は過去の成果に安んずべき時ではない。世界を對手とする競爭の時代となつては、全身の精力を集中して奮鬪する覺悟がなくてはならぬ。此の奮鬪的努力は實に近世產業界の凡てに亙る礎石である」と、當り前で誰でも云ふ事であるが、之を如何にも引込思案主義の莊田の言と對照し來るに及んで、如何にも大風呂敷を擴げてる樣な所が著しく目に付く。

▼莊田は曰く、「世の中に突進主義の人間もあれば、大事の上に大事を取る風の人間もある。自分は力は無いが有るだけの力で出來るだけの事はした積りである。勿論自分はよく自己を知つて居る爲め、自分で出來ぬことは人に遣つて貰つたのである」と。

▼是等二人の進取主義と退嬰主義とは、偶然にも亦三井と三菱との事業の經營振の上に顯はれて、一は何方かと云へば派出で、一は甚だ地味、一は浮華で一は堅實と云ふ樣に漠然ながら行き方を異にして居る樣な傾

向が認められる。勿論彼等のみが事業を按排して行く譯ではなく、兩者は寧ろ命を受けて實行する役廻りなのであるから、必しも兩者の性格が直接に事業の上に顯はれたものとも云へぬ。或は寧ろ多く兩家の家風が兩者をして爾かならしめたのかも知れぬが、兎に角三井と三菱との比較に於て、此の點は多くの人の必ず先づ注目する所であらう。

▼三菱も三井も共に鑛山部は重要なる事業であるが、併しながら兩者の最も重要な事業は、三菱にありては造船業、三井にあつては物產會社である。造船の方は仕事が大きい丈けに餘程の長期を見込んで經營して行かねばならぬので、其の施設は最も著實堅固でなければならぬ。然るに物產の主要目的たる外輸出入業は、機微を伺ひ寸刻を爭ふものだから、勢ひ世界競爭裡に在つて最も敏捷に立ち廻らねばならぬ。或は斯う云ふ風の業務上の關係からも兩者經營振りの差異は來て居るのかも知れぬ。

▼三菱の造船所は神戸と長崎との兩所にあつて、旣に三十年來經營し來つて居るが、未だに思はしい收益を收むる迄には至らぬと云はれて居る。夫にも拘らず東洋將來の海運事業の發展てふ永遠の目標を置いて、孜々として其の設備の完成と技術の練達とに努め、凡そ新しい機械とあれば如何なる高價を拂つてもどし／＼之を購入して居る。斯くて創設以來今日に至る迄少くとも二千萬圓の資金は之れに固定させてるだらうと云ふのだから、其の堅實にして根氣強い經營振りには何人も驚嘆せざるを得ぬであらう。

▼三井物產は今は其の形式に於て株式會社となり、三井家直接の事業ではない事になつてるけれども、其の實株式の全部は同族の所有する所で、實質は以前と少しも異る所はない。之は又二千萬圓の資本金を以てして、我國貿易總額の四分の一乃至三分の一をその一手で行ひつゝあるのだから、資本の流動は極めて迅速で、決算期每に莫大な利益を收めつゝある。此の兩者は實に三井三菱の主なる生命であり特色であると共に、又實に我が現時の事業界に於ける二大壯觀と云ふを妨げ

ぬ。

▼此の派出と質實との對照は、兩者の銀行部に於ても見ることが出來る、三菱の方は單に三菱合資會社中の一部があるに過ぎぬが、三井に在つては之も形式上株式會社として千萬圓の資本を握り、盛んに商業資本の融通をして居る。併し前者は元より無限責任で、云はゞ三菱の全財産が銀行の後見をして居る譯だから、實力に於ては殆んどこれに並ぶものはない、從つて信用の度も甚だ鞏固なるを得る譯になるが、三井の方は資本金は多くとも、株式會社である以上、形式上之れに專屬した資本の範圍だけしか融通は利かない事になるから、何うしても一般の銀行と同じく基礎が絶對的に安全だとは云へない。されば信用と勢力との點から見て、或は寧ろ三菱の銀行部に一着を輸することがあるかも知れぬ。

▼斯う云ふ風でコントラストは何の方面にもよく顯はれて居るが、此の風は自然兩方に無數に使はれて居る人間の間にも共通して、各々一種の氣風を爲して居る樣に思ふ。即ち三井家の人はよく交際もするし皆相應にお饒舌もする、又よく働く代りに、時には職務以外に自分の儲け仕事もやる。然るに三菱の方はどこ迄もしんねりむつつりで、新聞記者などにも滅多に逢はない、餘り出しやばりもしない、事々しく意見も立てないで、何でも閉ぢ込めてこつ〳〵働いて居ると云つた風が一般にある。

▼最も莊田に代つて管事になつた豐川良平は、よく何事にも意見を有つて居て、又それを十二分に云つて除けると云ふ風で、前管事とは餘程變つた所があるが、併し三菱に於ける上述の如き氣風は長く既に一個の型を爲し來つたものであるから、固より一管事の更迭位で、それが遽かに變化して來る樣なことは當分有り得ないであらう。

▼尙一つの對照は兩者の政治組織の差異に於ても見らる〻。三井にあつては同族會と云ふ合議體が主體を成して、萬機は爰て裁判せらる〻のであるが、三菱ではそれが凡て主權者たる久彌の獨裁に出づるのである。

それは兩管事が時に智嚢を傾けて献策もしやうが、兎に角最後の決は繋つて一人の意志に在る。此の點に於ても兩者の特色はくつきり別れて居る。

▼夫は何方が善いとも惡いとも云はぬ、又此の場合善惡の批判は標準の取り樣によつて如何樣にもし得るてあらう、が兎に角僕の見た限りては確かにこんな樣な差異と對照とがあると思ふ。

▼終りに三井は派出だけに公共に盡す志が篤い、殊に近頃は巨資を投じて慈善病院などを建てゝ所謂濟生救民をやる、教育に於ても九州には夙に立派な工業專門學校を經營して居るし、あの築地にある海軍陳列所なども慥か三井が建てゝ献納したものだとか聞いて居る。ナニ三井一族の財産からしては元より些々たるものに過ぎぬてあらうが、併し其の志だけは讃めて遣つてよからう。三菱も富に於ては三井と相拮抗して居ると聞くが、未だ岩崎家が此の方面にどれ丈け盡したことがあるか承つた事がない。

△三井は米、三菱は英

臥榻逸人

兩家の活動振を比較するなら三井は米國風で三菱は英國風である、三井は如何にも華やかだが三菱は何處となくドッシリして居る。華やか丈に三井の方が如何しても社會の顏觸が多い。第一に元帥てはないが、三井には益田孝が居る、最初からの深い關係を持つて、主人の爲に百事の參謀となつて居り、隱然たる一大勢力を爲して居る。即ち三井の原動力を爲して居る。

三井の主人側は幾つにも分れて居る。銀行には高保が居り、物産には八郎二郎が居り、鑛山には三郎助が居る。併しそれは單に名目丈に止まつて、其全體の細大の事務の主宰てはない、其名に因つて遣る、實務を執るものは他に在るのだ。即ち銀行側には早川千吉郎、池田成彬、米山梅吉が居る。孰れも有力な人物、道理も心得居れば事實にも行ひ得る、實務に鋭ひ優れた腕の揃てある。それて三井は頗る銀行事務には頭角を抽

き、其社會には實權あり、世間に關係も廣く信用も厚い、私立の銀行として其信用の厚くして大なる誠に稱すべきてある。がそれを其様に完全に保ち行く人があるから斯う行く、其人といふも必ずしも前に擧げた三人だけに限りはせぬ。まだ本店支店に行き渡つて相當の人物が居るからてある。啻に地盤の固いのみてなく、世間の三井銀行に對する評判に據るも其通り、一體の仕事の仕振が堅實てある。三井三菱は自分一人て色々な事をやる。銀行といつても專業てはない、此點に於ては中央銀行や澁澤の銀行とは違ふ。それ等は專業てある。三井三菱は兩手に花てある。それは或る場合には專業者よりも、他に營み居る事業の方から障害を受くるといふ不利益なしとはせぬ。がそれ丈に關係が廣いので地張りが强い。

物產會社には飯田義一、福井菊三郎、岩原謙三等の諸氏が居る。まだ居るか知らぬけれど、兎に角私の普段多く顏を合はす人達は此邊てある、物產の仕事は仲々大規模て倫敦に大きな支店を持つて居る。渡邊專次郞は其處に居つて勢力を有し外國關係の任に當つて實務も知れば信用もあり、仕事の出來る人てある。斯様な人物を多く網羅して長い間に得意を殖し、次第に信用を擴張する。利益は大分ある。

別に鑛山會社なるものがある。是は三池の炭坑とか飛彈の鉱岡の炭坑とか、筑前の博多附近の炭坑といふ樣なものを經營するので、それには團琢磨が居つて其衝に當つて居る。

其の他て三井の經營に屬するものには三越商店がある。是はデパートメントストアて、日比翁助が其主任者だが、何處て研究して來たのか知らぬけれど、仲々巧にやつて居り、段々に新研究を加へて行く、是は米國邊に能くやつて居る仕事て、何といふ譯語があるか知らぬが、先づ此方ていふと萬屋てすね、萬屋といつても日本の今迄には彼様なものはない、日本の萬屋は實は百屋位の處て、何でも彼でも商ふと言つても其種類は知れたもの、今三井でやつて居るデパートメントストアこそは本當の萬屋てある。何でもある、それ處でな

い、甚しきは三越商店を化して一種の娯樂所、見物所、遊び場とする觀がある程に色々心目を娯ませる設備がある。費用も隨分掛るとは思ふけれどもそれで計算は間に合ふらしい。多少行つて見て綺麗で買心地が宜いといふ事もあるか知れぬけれど、それだけ品物を高くせなければ間に合はず、客は氣持善い々々々々で買ひに來るが、實は案外高い品を買はされて馬鹿を見るのかも知れぬ。私等には左樣いふ遣り口は好かぬ、成るべく餘計な事には雜用を省いて品物の方を安く賣りたいと思ふ。客も眞面目なものは先づ斯ういふ點に考へ着くであらうけれども世間は皆左樣でない所で商賣になる。休憩室へ入つて氷水の御馳走になつて。是は御馳走だと喜んで居れど、其實自分の懐から支出して居るといふ樣な愚な話もあるも知れぬ。兎に角彼れ迄に何ても御座れ流儀に商ふのは極、極端な遣り方てある、世の進むに從つて分業になり行くのだが、デパートメントストアは全然其反對てある。三越商店は其反對の方に進んて、御茶も飲めれば菓子も喰へる、朝から晩迄寢具も賣れば着物も賣る、かと思へば勝手道具も賣るといふ有樣てある。實は其處迄は知らぬ。私はまだ行つて見た事がないのだから。

三井ては此處のみてなく各方面に於て新しい研究をして行くが、其れには根本の基礎がある、即ち三井同族會なるもので、井上侯爵が肝煎つて居られる、初は澁澤男なども關係された事があつた。根本の話は皆此處て定まり、一部局は一部局て又別に定める、それ故例を言へば、銀行、物產、鑛山、吳服。まだ小別したら幾らもあるか知れぬがそれ迄は知らぬ。此處にそれ〳〵有力な人達が居つてそれぞれ敏腕に働いて居る、それを井上さんが側から監視して居るので、智慧のあるものが、是が宜いとか惡いとかいふ點を進言すると、井上さんが引受けて小言役を勤められる。と先づ言つた風の組織に爲つて居り、是て善い事を進め惡い事を止めて行くのてある。

三井ては又鐘ヶ淵の紡績會社、王子の製紙會社、北海道の炭坑會社にも株を持つて居るが、是等は皆銀行

の方でやる。頗る大株主の様である。此類は凡て會社の仕事としてやり、それぞれ代理者を出して居る、併し凡ての方面に出すといふてもない樣だ。銀行の支店は殆んど全國各所に行き渡らぬ所ないらしい。物産の方でも其通り。大抵な所に支店があり、歐羅巴、亞米利加、支那は言ふに及ばず、更に此頃では印度に迄手を着けて居る。殆んど全世界に向つて勢力を扶植し、それ相當に放資をして居る。

　三菱は根本は船で、是に依つて大勢力を作つたのであり、今日も亦それに向つて大資本を放下して居るのだけれども、只今では特に三菱のものとはなつてはゐぬ。郵船會社は公共的仕事となつて居る。が三菱がその大株主たることは言ふ迄もなく、三菱關係者が多數其會社内に入込んで居る、三菱これ自身の事業としては鑛山、造船、硝子等で、外に尙ほ農場を持ち、牧畜をもやり、コンデンスミルクの製造もやる、現に奥州小阿彌に大牧場があり、又朝鮮に土地を買つた、が其主なる事業といへば矢張り銀行、石炭、造船等で。就中、造船には最も資本を投じて居り、長崎にも神戸にも大きな造船所がある。三菱の會社には久彌、小彌太の二人が主脳で、其下には幹事として豊川良平が居る、以前は莊田平五郎が其位置に居たのだ。銀行には三村君平、鑛山には南部球吾等が居る、それに次いでの人物も大分居る、即ち銀行には串田萬藏が居り、本店には莊清次郎が居る、各支店、各造船所、各鑛山出張所等にも夫々主長たる人が居るのだけれども、其人々を迄は知らぬ。

　先代彌太郎さんを助けて最も思慮深い經營をしたものは莊田である、川田小一郎も三菱を補佐した一人だつたけれど、二十二、三年頃に日本銀行の方へ移つて仕舞つた。それ故三菱に力を盡し大功勞ある歴史ある人といへば莊田である、慶應卒業後三十年も勤續したものであつた。又終始細大となく三菱に力を入れて來た人には豊川良平がある。是は只漠然たる豪傑風の人らしいけれども偉らい緻密な人、思慮ある人である。先づ放膽文も書ければ小心文も書けるといふ人である。大ざつばな事をのみ言ふて居る樣ではあるが、又

細かい算盤も知つて居る、それ故此事は出來る此事は出來ぬといふを明かに知り、又人の善惡邪正をも早く見拔く。此二つが旨く分れば、何事をしても立派に成就するに相違ない。

久彌さんの人物は知つて居るが、父の如くに優れた豪傑肌の處はないかも知れぬけれど、沈着て事務を識別し整理する丈の能力はある。又人を容るゝの雅量もあり、勤勉て質素てある。此點は最も稱贊すべきてある。豪家には稀に見るべき人物てある。只彼れ丈の能力のある人だから、今少し社會の上に力を用ゐて吳れられたらと思ふけれど。どうも引込思案てある。併し、といつて大名等が奥に引込むと同一の意味ていふのては決してない。事の善惡邪正は能く分る人て、眼を見開いて知つて居る。豊川が如何に豪傑張るにせよ、又能く事が分るにせよ。勝手に其指圖に任すといふ事はない、三井の方の人達とは働き振も腦力も元より違ふ。

三菱の地張は甚だ大きく、そして又大きな經營をやる。日比谷の新市街は三菱が作つたのだが、彼れは三菱にして初めてやれる仕事だ。初め彼の茫漠たる原を買ひ下げた時には、此處には市街を作るなどいつても如何なる事かと思ふ位てあつたが、兎に角今では彼れ程迄になつて居る。東京市に於ける新市街といへば先づ彼れてある。市街とする事は陸軍省から買ひ受ける時の條件となつて居たものの、仲々の覺悟てなくては彼れ丈の大金を寢せて置けるものてない。それを買ひ切つてやるといふのは、遠い未來を見込み、百年の後に於て我寶物とするといふ大經綸て、誠に地味な仕方てある。

私は大體何の勢力といふ樣な事を言ふを喜ばぬけれども、然し政界でも實際形の上には長州藩とか薩摩藩とかの色別が知れる如く、財界に於ても矢張りそれが見えて居るは事實てある。政府との關係を離れて居る銀行は、即ち日本銀行とかいふものの外には、十五銀行を初めまだ色々あるけれども、併し財界に於て大動力を爲して居るものといへば先づ今言つた樣な此三井

三菱の如き向てあるのて、我等が程能く一致して行かなくてはならぬ。我々は只その間に立つて聊か合の楔子となり、調和を計つて行く爲に、微力を盡さうと思ふ丈てある。

△三井と三菱

青南居士

三井と三菱の主人公の比較といつた所て、一方は主人公が極めて多いし、一方は極めて少いんだから一寸一口には評しにくい。岩崎ては久彌さんと小彌太さんとが始終會社に出て仕事をして居る。三井ても主もなる人が矢張り出て來るさうてすが大抵は番頭任せてせう。

誰てもいふ通り三井のやり方は積極的て華やかて、ある。一言にしていへば亞米利加式だ。なか／＼勉强もし、愛嬌もよく、ちつともヌカリがない。三菱は極く地味て一言にしていへば英國式だ。三井の方は積極的て華やかにやつても、それまてには、よく調査をしてやるから別に危つかしい處は見えない。又三菱は地味だといつても造船業もやれば銀行業もやり、倉庫業もやり、鑛山業ては銅もやり炭坑もやる。やはり手はなか／＼擴げて居る。

三井の主もなる人物といへば矢張り益田(孝)、朝吹(英二)、飯田(義一)、高橋(義雄)、山本(條太郎)、早川(千吉郎)、岩原(謙三)などてせう。此等の人が皆部門／＼に分れて其腕を揮つて居る。全體は同族會といふ合議體のもので極るのてある。一體三井の總理大臣ともいふべき益田といふ人はなか／＼才のある積極的の人て、外の事へは一切顔を出さずに三井の爲に專心一意にやつて來た人だ。アレは實に感心だ。岩崎家ては久彌さんが主としてやつて、今は莊田が引いたから豐川良平が表面に立つてやつて居る。私は三菱の方には懇意な人が少いから、他の人物はよく知らぬが、豐川は極く磊落な、眞面目な人て、一寸話をしては要領を得ぬやうてあるけれども、なか／＼物の分つた人だ。

國民黨成立の時などは大いに盡力したといふものもあるが、それは仙石とか大石とかいふ所謂土佐派の人と同郷の關係上からだと思ふ。

三井と三菱とどつちが大きいかは確言することは出來ない。ナニセ三井の今のやり方は世界的で、腕揃への連中が文明的に敏捷に仕事をし殊に物産の方などは收益が莫大なものであり、岩崎の方の仕事は地味で眞面目なものばかりであるから、今の儘で行つたら或は三井の方が大きくなるかも知れない。此兩家の外に住友、安田などいふ富豪が居り、殊に安田などは將來どうなるか分らぬが、當分の中は三井三菱は我國に於ける最大富豪の位置を失ふまいと思ふ。

△三井三菱兩家の人物

金銀銅人

三井三菱兩家の主もなる人物について私の知つてることをお話して見ませう。

三井家で先づ第一に指を屈すべき人物は、いふまでもなく益田孝ですが、あれは一見して才子と見える人だ。餘り才が勝ち過ぎて、どつちかといへば餘程輕薄な人でせう。今は顧問といふ名になつて重役以上の位置に居る。此前の井上侯の大病の時に、――あの明治四十一年の秋の大病で、もう井上侯が駄目だらうといふ時に――「時事新報」で、井上侯沒後の財界はどうなるだらうといふ意見を募つた事がある。其時にあの人は井上侯が亡くなつても財界に何等の變動が起らぬといふことを斷言した。つまり井上侯は今の財界にあつてもなくても同樣だといふ意見を述べた。先生は多分井上侯は駄目だらうと思つてこんな説を吐いたらうが、不思議にも井上侯はまた生きた。此時は先生內心忸怩たるものがあつたらうと思ふ。兎に角此一事が非常によくあの人の性格をあらはして居ると思ふ。元來あの人は井上侯の世話になつた人で、あの人の今日あるは全く井上侯の力である。然し彼の心底には侯を崇拜してゐるかどうか疑問である。今の顧問となつたの

はいろ〳〵の理由があつて、決して單純な說明は出來ぬが、一つには井上侯の沒後、全然あの人が總裁の位置に立つ――三井の最高の位置に立つ準備でなからうかと思ふ。が私は思ふには井上侯の沒後井上侯に代つて最高の地位に立つものは、恐らくは彼にあらずして桂公であらうと思ふ。又其次は後藤男といふやうな人であらうと思ふ。今日桂公も後藤男も餘程三井に接近しかけて居る。將來は關係が益々深くなるだらうと信ずる。一體益田といふ人は獨立獨行の人でない。何かの勢力につかねば働けない人である。だから自然桂か後藤の勢力につくだらうと思ふ。何處までも番頭適材だ。そこは大倉に及ばない。大倉は一人で働く。あの人にはそれが出來ない。益田がもう少し度胸がよければ今日までに非常の富を作つたらうとの說だ。

この前に三井が非常に衰へた事がある。東京での所得が七十何萬かに下つた事がある。其頃の事である。三井家復興の爲めに井上侯を頭に仰いだ。其時井上侯は三井家復興の大任を益田に託せずして中上川に託した。元來中上川といふ男は非常の豪傑で酒も好き女も好き、腕力もある、素晴らしいやり手だ。若し中上川が生きてゐたら益田は頭が上らなかつたかも知れない、話は少し橫道に入るが當時三井銀行は「二六」から叩かれて盛んに取附けに逢つた。其時中上川は澁澤男などを追ひ出して一人で四方に戰を挑んだ。そして日本銀行の川田小一郎に賴みに行つた。川田は男氣のあの男だ上に、中上川の態度が氣に入つたものと見えて、應援してやらうといふのでいくらでも金を出して呉れた、あの剛愎な中上川が他人に頭を下げたのは多分此れが初めてゞあらうといふ事だ。何でも中上川が三井に入る相談は井上侯と汽車の中で十分か十五分間の立談で決したといふ事だ。此中上川を引張つたといふ事が矢張り井上侯の眼識でせう。三井は此爲めに、崩れかゝつた不運を挽回して、更に大いに興隆した。三井が井上侯に對して頭が上らんのは此時の事があるからでせう。

益田といふ人は元來卑吝な人だとの噂がある。之に

ついて一つ面白い話は、三池炭坑の訴訟事件について江木衷が行つた時の事である。一體三池炭坑は三井の主もなる財源であるが、あれを三井の手に入れたについては餘程面白い芝居があるが、それは先づ拔きにして、江木衷は其訴訟事件の爲めに三池へ行つた。當時益田は三池を經營して居つたが、江木は何か奇拔な事をやらうと考へてゐた。三池では一度江木を御馳走したいといふので、三池では何もないからといつて熊本に連れて行つた。處が江木は熊本中の藝者お酌を一人殘らず總上げさせて、それら悉く引率して田舍芝居の總見に出かけた。そして二幕ばかり見てドット引擧げた。それが非常な評判となつた。そして主人側では貴方のお氣に入つたのがありましたらとか何とかいつたけれども、江木はそんな事には一向頓着なく、今直ぐ三池へ歸るといふ電報を打つた。三池では今江木が七十人ばかりの藝者を連れて歸るといふので、大急ぎで山海の珍味を集めて膳部を用意してゐた。着いて見ると江木衷一人なので、こちらでは何だか拍子拔けがして狐に撮まれたやうな氣がする。此時江木は益田に向て、流石に貴方だけあつて用心をして、みんなのお膳立をしてあるのは感心だが、いくら何でも其れを連れて來ぬのが僕だといつた相だ。江木のした事は悉く意表に出てた。何でも三井では此位接待費をかけたのが無いといふ話だ。然し江木は濟したもので、おれがよい廣告をしてやつた。安い廣告費だといつてる相だ。多分江木が暗に諷したものでせう。

話は元へ戻つて、益田が腹の中で井上侯に不平に思つて居るのは一つは中上川ほどに益田を見て呉れなかつたといふ事もあるだらう。然しいくら心中に不平があつても、それを顏にあらはすやうな益田でもない。けれども益田が井上侯に慊らぬ感を持つて居ることは大抵の實業家が知つてゐやうと思ふ。兎に角益田は事務も出來、働きもあり、目先も利き、又通辯上りだから歐文の電報なども書け、又ブロークンでも英語で話が出來る。爪生繁子は多分益田の妹でせう。あの人に缺けて居るのは斷の一字で、度胸はどうも少し足らぬ

やうである。あの人の頭腦のある事は今度の廣軌鐵道の辯論でも分る。記憶も大變よい人だ。度胸のないのと、卑吝だといふのがあの人の缺點だと私は信ずる。三井で外に特色のある人といへば早川と朝吹でせう。將來有望な人は山本條太郎、池田正彬などいふ人でせう。山本は米澤の人、池田は福井の人、池田は銀行家として最も有望なやうである。早川は此頃チト慢心過ぎて少しく勢力を失墜した。山本は餘程新進氣鋭の人で仕事を非常にやる。然し人格としては朝吹が一番でせう。豪傑らしい處がある。今から三十年も前に三井へ入る前に自分で貿易商會とか何とかいふものをやつた事がある。其時に損をしつゝ營業をしてゐたに拘らず、十八圓位の社員に半期の賞與に百圓もやつたといふ事だ。三十年も前の百圓は可なりエライものだ。實に度胸のいゝ男だ。今でも自分の仕事には極めて大膽な事をやるが、然し三井家の事務については金錢の出入なども大變綿密にやつてゐる、一寸見れば何にでも無頓着な風に見えてよく物の分つた人だ。世の弱者にも同情するといふ風の人だ。

三菱家に於ける人物は今の處矢張り豐川良平で、世間でいふが如く、才もあり見識もあるがどつちかといへば、德望のある、いゝ人であらうと思ふが私は三菱家の人物とは深く交際してゐないから評は罷める。

兩家の主人と主人と比べては、三井は殆んど三菱の敵でない。岩崎家の主人は餘程エライ。今の久彌といふ人も凡物ではない。存外質素なもので、煙草も「朝日」を吸つてゐるといふ事だ。そして進退動作餘程勇敢な所がある。三井の主人は昔洋行して歸つて、病を起し、昨年も復た洋行したが、お人よしといふ丈けだ。自分一人では何にも出來ぬ人だ。家庭からいつても三菱の如く質素ではない。社員に對しては三菱の方が懇切なやうだ。三井の方はどこか冷酷な處がある。其營業振りは三井が派手で三菱の地味なる事はいふまでもない。が三井の派手といふ事に附け加へて置きたいのは、三井では何でも名の出るやうな所に金を使ふ。慈善病院とか何とか人の目に附く所に金を出す。つまり世間體を重ずる。處が三菱の方では世間體には餘り構はない。今三菱では地方に澤山土地を持つて、大きな地主である。そしてその自分の土地の小作人の保護改善などには非常に力を盡して居る。然しこれは世間一般の人には餘り分らない。越後などでは三菱の小作人取扱は殆んど模範になつて居る。三井ではこういふ目

立たぬ事は決してやらない。
又兩家の邸宅を見ても其間に餘程の相違がある。麻布今井の三井の邸宅に行くと、どこまでも昔の町人式て、善美を盡しては居るが、何だか切剝細工のやうな感じがする。そこは岩崎の樣に浪人式、武士式だのとは違ふ。岩崎の方はパッとして大きい。岩崎の家風を作つた人は此前の彌之助といふ人で、此人は大いに評論する價値のある人だが、故人となつて今の論題外だから他日に讓る。あの人はどうも磊落で、淡泊で、大きな處があつたやうに思ふ。彌太郎に對するあの人は楠木正成に對する正季、新田義貞に對する義助のやうな人だ。あの人は重役などの會議の時に、みんなの意見を一遍に聞く。そして即座に解決をつけて了ふ相だ。それは三井の主人の只報告を聞く丈けとは大いに違ふ。今の久彌も此彌之助のする所を受繼いで矢張り一體が似て居る。
三井では人が來ると、家來扱にする。三菱では客扱にする。飯を食ふ時でも、彌之助といふ人は廊下の角の處へ坐つて客にグルリと座敷を廻らして上も下もつけない。宴會でない時は給仕もお酌もつけずに德利をつけ切りにして、無くなれば代へるといふ風であつた。何處までも創業の風を失はない。久彌もそれを見習つて居る。三井の方では今は純然たる殿樣風だ。
三井は多く使用人任せだから、利益が多くても、其利益の大部分を重役などに占められ、岩崎は主人がやるから大抵主人のものになるといふ相違がある。
此兩家の政治界に對する關係なども餘程面白い題目だ。松方、大隈は三菱系、井上は三井系なることは誰でも知つて居ることだが、今日政友會の代議士は餘程三井に關係ある。國民黨の方は岩崎に關係ある、先の陸奥伯なども三井の世話になつたといふ事である。伊藤公は兩方から尊敬されて居つたが、經濟上の關係は別にないやうだ。殊に岩崎彌之助はひどく伊藤公を崇拜したもので、彌之助が日本銀行の總裁をして居る時分に、井上侯が來ると別に笑談をいはぬが、伊藤公が來ると、馬鹿話をして、玄關まで來て、ドコカ御一所に行きませうかといつて、よく馬車に乘つて料理屋?か何かへ行つたものださうだ。
新聞紙に對しては三菱では豐川良平が其買收係をやつて居つたものだか、三井では「二六」「萬朝」などに叩かれてから、ひどく怖がつて居る。今は「中外商業新報」の野崎弘太とかいふ幇間のやうな男が、三井と三菱の間をクルクル廻つて居る。（完）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

九月號

婦女界

一冊十五錢郵税一錢五厘六冊九十錢十二冊一圓七十五錢

神田 同文館

私の最も感心した婦人

▲我が姉竹崎順子……矢島揖子
▲ヂュリアワード夫人……麻生正藏
▲蜂須賀侯爵夫人……棚橋絢子
▲某實業家の妻君……三輪田玄道
▲大統領夫人と懇意な人……山脇房子
▲歴史上の三女流……大森金五郎
▲沈默裡に苦闘する人……下田次郎

◎婦女子は如何に心を修むべきか 加藤咄堂
◎見合ひ結婚より起りし悲慘の實例 宮田脩
◎愛情的結婚と人格的結婚 高島平三郎

◎產褥熱と產時の注意 大瀬醫學士
◎小兒のはしかとくさ 豐福醫學士

彩色石版口繪 はつ秋 渡邊香涯
表二階 太田三郎
アート紙印刷寫眞
插繪八頁

▲九月の料理いろ／＼
▲重寶な家具いろ／＼
▲衣服と色との關係
▲似合ふ着物の選び方
◎小說とみくじ……内田魯庵

△文藝其月々 沼波文學士
△英詩と婦人 若月文學士
△名畫解說 瀧村文學士
△海外婦女界 記者
△初秋の流行 婦人記者

懸賞新題 お友達の數を問ふ 用紙葉書‖同年齡のお友達の住所姓名を書いて送る事 一等五圓 (中付乙の一)

懸賞新題一等五圓外數等 ● 和歌俳句習字繪畫 一等三圓其他數等

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

各學校家庭必備の寶典

文學博士坪内逍遙先生新著

劇と文學

倫理に文學に造詣最も深く、明治の大文豪と景仰せられ、特に劇に關しては古今東西に亙り我が邦獨と稱せらるゝ逍遙坪内博士が近來最も心血を傾注せらるゝは劇の改良上進にあり其自ら資を投じて文藝協會を設け、學識ある技藝家を養成し、夫のハムレット劇を帝國劇場に試み又大阪角座に演じて、社會の喝采を博し、天下の同情を集めたるは世の記憶に新たなる所也。本書は博士が最近の論談を集めたるものにして、精到なる批判と研究とより成りたる金玉の文字也。單に劇を好み文を嗜む士女に止まらず苟も趣味好尙の向上を希ふもの乃至社會風俗の改善に志す者は、必ず一讀せざるべからざる名著也。

◀近刊▶

菊版美本全一冊
紙數約五百頁

文藝の精髓本書に蒐る

東京帝室博物館歷史部學藝委員　高橋健自先生著

鏡と劍と玉

鏡と劍と玉とは百人の尊重せし所、是に關する研究は今人の聽かんと希ふ所なるべし。著者考古學の研鑽に從事すること多年本書は即ち其一端を發表せるもの也。畏けれども三種の神器に關する考證も本書を讀まずんば知らずして止みなん。之を座右に備ふべきは豈啻史家藝術家のみならんや、若夫れ卷中に挿める饒多の圖版のみを見ても趣味深き圖譜たるを得ん。かくて生徒に國體の尊嚴を知らしめ、忠愛の念を涵養すべき各學校は勿論忠良なる子弟を造らん家庭には必ず一本を備ふべき也。

菊版全一冊
彩色石版コロタイプ版精巧木版等凡百八十圖入
定價壹圓五拾錢
郵稅八錢

（中付乙の二）

發兌元　東京神田　冨山房　電振　本替　四二五　一〇〇　三三一　（六番）

租稅負擔の義務ある者は悉く讀め

本多精一先生新著

財政問題百話

四六判天金
全一冊三百五十頁
正價壹圓
郵税金八錢

↓本多先生は我邦財政論者の泰斗也。其卓論は天下の珍として萬人の尊重する所今や我國民の知識が著く此方面に缺如せるを慨して本著あり。收むる所の壹百題、悉く國民頭上に懸れる重要問題にして之に向つて一々的確明快なる說明を與へ、當局者の急所を突き一般人の迂濶を誡む。而して蓋し財政問題は政府政黨の私すべきに非ずして、租稅負擔者の解決せざる可らざる問題也。而して本書の使命たるや、其尤も重大なる諸問題を解說すると同時に財政上の活知識を普及するにあり。政事家、銀行家、會社員、株式業者、政黨員乃至地方財政に關する人士は固より、一般國民必讀の快著也。

本書要目

◉財政問題とは何ぞ◉財政整理の意義◉財政家の本領◉新日本の財源◉財政政策と財政術◉財政計畫と政黨◉財政の走馬燈◉公債の整理◉公債相場◉四分利公債◉財政計畫と銀行者◉日露戰後の五年間◉廣軌改築の時期◉鐵道財源と外債◉事業計畫と繰延◉國庫補助◉地方財政の整理◉義務教育の負擔◉地方税の整理◉地方債の整理◉外債の自然的增加◉在外正貨◉金準備の戰爭◉公債の利率◉當局者の財政觀◉財政上の秘密◉豫算委員會◉政府の借金根性◉救貧と防貧◉所得税法◉銀行と取引所◉煙草專賣收入◉郵便收入◉軍備費◉ローヤル、コムミッション◉財政通◉桂公の財政策◉政友會の役廻り◉相場師の苦情◉國民黨の財政觀◉官業主義◉半官半民事業◉兌換劵の增發◉豫算の今日主義◉公債下落すればば◉今後の增税◉内閣更迭と財政◉商業會議所◉手形交換所◉實業家の嚮背◉水と酒◉清國の借欵◉英國貸さずば◉自治體の營業◉地方財政の監督◉財政困難の意義◉國家百年の長計

東京神田
冨山房
電本四 一三〇
振替五 〇一番

(中付乙の三)

和歌

尾上柴舟選

○　挧垣青花

みだれそめし心おさへてひとり寝る夜のつゞく頃棕櫚の花さく

いら〳〵とおもふこゝろのおちつかぬゆふべかなしき沈丁花かな

むらさきにくゆる煙草を見まもりぬ五月の花の白う咲く朝

夕ぐれの月はうるめり樹に倚りてさびしきこゝろ巻煙草吸ふ

靜やけく青葉そよぎて昏れぬれば思ひ疲れて窓ぎはによる

ほろ苦きビールの味の舌にあり夏の夕のやはらかきかぜ

牛乳すゝるあしたのにほひバイブルの皮の表の手ざはりのよさ

○　小林落葉

木の間行きふとしも踵かへすとき涙わりなく頬を流れたる

若ければ戀まゝなり今日の日も青葉林に歌ひくらしぬ

夏來れば産れし國の青山に心行き居て呼べど歸らず

旅と云ふなつかしき名にほだされて旅に來つれど猶さびしかり

遠く來て遠く都を思ふ身にさびしするどし夕暮のかね

○　奥川夢郎

夏くれば月草咲けばきみ泣きしかの砂はまの眼にうかぶかな

眞鍮の蚊帳(かや)のつり手を手にもてば今日といふ日の泣かまほしけれ

指折りて大人になるをたのしみしその少年を顧ふこのごろ

君と歩みクラスメートに笑はれし海岸道のおほばこの花

○　西村孤舟

初なつの雨後の林の中に來てつよき若葉の香にひたりぬる
ねむの花くぬぎ林のをちこちに淡く浮きたるふる里の山
色町の夜更のともしすがれたる山吹のごと霧にしづめり
初夏の風吹くかなた我がために涙する人ありやと惑ふ
よき歌を心すさびにうたふにも人なつかしきこの夕かな

○　仲村白歌

あわたゞしく海のほとりにもてゆきぬ荒みし心疲れしからだ
荒みたる心いだきて海にゆく海は海なり何事もなし
かなしみに別れんとして海にゆくたはれ男を潮風が吹く
海といふ言葉をなかばきゝさしてふと思ひ出ぬ海はなつかし

○　飛川晶巒

君が前かなしき事のかずかずを訴へんとて先づ涙ぐむ
老いませし父が瞳を思ひつゝひとり冷たき夜の床に入る
あかづける布團の中にうづくまりこの日なしたる事を見返る
月見草さびしう咲けば汝が言葉にはかにねびて改たまりける
いさな突く海のあら男に思はれて土佐にありてふ人を悲しむ

○　龜山敬外

砂山のまばら樹立を透きて見ゆ漁村の上の有明月夜
複線の汽車のレールのきら〳〵と晩夏の磯の鋭き日光
貝殼の浪にゆらるゝはかなさを獨り見入りぬ磯の夕ぐれ
何かわかず白き花もつ刺草の根方に海を見てある夕

○　鈴木風影

花みれば黑きを厭ひ月みれば暗きを望む我れの哀れさ

毛蟲燒く若き女に青葉の香清しく迫る六月の風
白き鷺飛べるが如き山百合の花にまつはる谷の夕風
名も知らぬ西洋花に流れたる植物園の朝の塵かな
栗の花の白き光にそれと知る闇の河邊の君が家かな

○ 武田又八

何となき物のしめりをかぐ如く胸のうつろに秋はにじめり
秋といふそのさびしみに獨り坐し活くてふ事をしみじみ思ふ
君を思ふ心ひまなみ秋立つときく日渚をさまよひくらす
ねたみ故おのがつくりし憂ぞと人の口端はかなしかりけり

○ 島さつみ

山青むわれにうれしきことのあり漸く海を忘れんとする
うら寒き風吹き起る夕ぐれの山のいろてそわりなかりけれ

知れる子の顏のすべてをなぐり書く葉月よごろの靜けさにゐて
この七日逢はねば心うつりけむ女思へば散る棕櫚の花
泣くほどの悲しさとてはなけれどもくもれる空にむかへば寂し

○ 大眉朝果

こともなく暮るゝ夕べはかなしやな白粉の花つつましう咲く
しんみりと泣いても見たやおしろいの花のかほりにひたる夕暮
白いかほ暗に浮かせしおしろいの花をめぐれる蟲のかずかず

○ 香取秋二

酌婦らと酒くみ交しざれ唄を歌ひつゝ我が悲しみてあり
うら悲し機械あぶらに汚れたる臂抜け服に腕とほす時
栗の花小雨のなかにゆふじろむ小窓に寄れば涙わりなし
販路のはてつゞける青に大海の潮さすに似て皐

月風ふく

○ 武田青眼

八月の稲まだ青き田の面のなかに白穂を見るが悲しさ

物思ひ居れば夕となりにけり立ちてともしをともす悲しさ

心よう夢の覺めにし初秋のしとねのなかの物思かな

○ 若林星骨

南風のたえずそよげる海ぞひの砂丘の上の野茨の花

泣きぬれし瞳の中に冷やかに月の光のしみ入る夕

バナヽなど甘くにほへる夏の夜の果物店のともしびのいろ

青淀む夏の水底ほの白く藻の花ゆるゝうす月夜かな

○ 江上魚梁

いらだてる海の面に吸はれゆく日光をたゞ茫然と見る

秋初め入江に遠く連れる灯よ帆柱よ海はくれゆく

竿させば竿の先までひそみ入る月の光よ潮満てる海

○ 木下祐次

口笛に知れる限りのマーチ吹き霧の大野の水草に立つ

月光のはかなき夜の音樂のしみ入りにしや青きりんごよ

○ 松岡落木

まともより光を浴びて立てる木の洞に籠れる闇の淋しさ

樂隊の眞似して街を行く兒等の中に默してありし吾なり

○ 松島落果

山々の嶺に雪あり水無月の朝の寢ざめの肌のつめたさ

落日の黄なるひかりにうすあまへ松の穂にほふかなしき皐月

卯つ木さく頃となりけり彼のをんな寂しう細りあだめきて居む

○ 木村風の人

倒影のあざやかさ見て岸に立つ夕の心淋し靜けし

町の角廣告塔の陰に立ち人を待ちけるある夜忘れず

○　木森刀水

多くおもひ少しく語る性ゆゑにものたらずとて君やうたがふ

たそがれぬ鳥よけものよ高山のこの靜けさに安からに死ね

冷かに立てる石をば何と見る汝れの行くべき墓にはあらずや

○　三浦薔薇

合歡の花こぼるゝみれば歌よみしわかき日の夢かなしかりける

白粉もぬらず二十をいたはしき女は道をときて死にゆく

○　丸山英

母よわが願ひといふは外ならずもとの一つの乳呑兒にせよ

君か手の仕立おろしの衣(きぬ)まとひそゞろ心になれる春の日

○　渡邊甚之助

くちをしと思ひし事もかさねにき今はそれにもなれてかやすし

あなうつけ見殘す夢を紀念する男は歌をつくり遊びき

○　佐野珂村

棄てに來し悲しみになほそこばくの心殘りぬ白ぼけの花

自らをあはれむになほ疲れたる心淋しく七月に入る

○　井田葉歌

新築の昨晩(よべ)より灯青き家にすゞろにさける石竹の花

樹々の間にてだまとなりて消え去(う)せし我口笛のなつかしき哉

○　高杉露星

栗の花少し黄ばみて我が妻の世帶窶れが眼に浮ぶ夕べ

思ふこと更になしとは氣やすめに君がのこせる言葉なりしよ

○　松見芳石

ステップの繁れる中に身を臥せて靜に思ふ遊牧の民

若き日にめぐり會ひたる心地して子供等なぞと花火をばあぐ

○　　櫻城としみ

紅の薔薇のかげにつつましくまなつの光吸ふ蜥蜴かな

夜あがりの街路に沁める青瓦斯の淡くつめたきなつのあけぼの

○　　小柳江付

理髪器(バリカン)のやゝにつめたき感觸にわかれて秋の街をかへりぬ

おしろいをつけし女の頰のよさ酒場(ビヤ)のゆふべの靑きマントル

○　　田中白想

かなしくもかの墓原の士をはふ蟾蜍(ひき)のなげきに似たる歌よむ

待ちくらしわが靴あとのみだれたる丘をし見れば黄なる花さく

○　　佐久良友哉

しらじらと月が海をばはなるごと我の心は君をはなるゝ

酒といふものを覺えし悲しさよ日記する日等まれになりしこと

○　　尾崎渡水

曉(あけ)の色大空にあり風の音山の木にありほとゝぎすなく

○　　鷲尾草堂

たわ〳〵とうつろ椿の實の青む九月のわが家たれも來なくに

父のなき家はさびしや安らかに生ひしこの身を誰にか見せむ

○　　若林牧春

小さなる悲しみごともこまやかに語りいづれば君涙ぐむ

向日葵の花にまひるの日が光る明るき家に君まつこころ

○　　吉井南鷗

老いませるひとりの伯母が住む家の釣鐘草の花のおもひ出

○　　伊瀬幸太郎

殘しゆきし軒の古巣につばくらの歸らざる日の

つゞくさびしさ

○

さすらひてしばし休らふ夜となれば眼にうかびきぬ歌舞伎座のびら　高野麿

○

人氣なき應接室の卓上にリンゴの皮の散らばれる午後　朝香淡水

○

涙をば母にみせじとする哀し昨日も今日も森に來て泣く　小松湘村

投稿例に依つて非常に多く、止むなく次號に廻はせるもの大半なり、諒せられよ

應募和歌は
東京小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛
封筒の表面には「中央公論歌稿」の六字を朱書すべし

俳句

蟲

高田蝶衣選

蟲も夜々母が事語る伯母なりき　月精
隣客に怪れかねて蟲に獨り浴ぶ　同
蟲も聞き守る鹽釜のとろ〳〵火　同
蟲が呼ぶ雨かや庫裡を葺き急ぐ　同
出序に診てやりぬ蟲もすだく壁　同
手水落せば搖る丶湖や蟲の鳴く籬　同
執達吏の封じ忘れを蟲鳴きぬ　都月
石臼の目ざれ廻りに蟲やみぬ　同
洩れ酒の石斗を知りぬ蟲更けて　同
荷揚場の油溜り蟲に更しけり　同
諷し得て莞爾たり蟲の夜更け行く　摘星辰
蟲鳴くや佳墨小さきを磨り雖む　同
蟲の野を蜀の帷幌に參じけり　同

一家言纒めつ蟲の秋に居る　同
夜露れして不時の出舟や蟲繁し　柳子
水を汲む僧の端役や蟲更けぬ　同
色淡う洗ひし衣や蟲の聲　同
傾ける海思ふ夜空蟲の聲　同
蟲の野や練る鞍なしの行事めく　杜鵑花
湯漬菜の香に安宿の蟲澄める　同
串餅の名に古りし寺や蟲に寄る　同
夜逃荷に遇へり裏町蟲の聲　但翠
蟲なくや隣人月に薪割りて　同
草賊の住み家訪ふ狐蟲更けて　同
捨罠に蟲鳴けり悲歌舟よりす　寒泉
痲疹兒が珍ら寢し蟲なける夜や　同
灰を賣る事知りぬ蟲は灯に來る　同
哀歌巻をなす幽棲や蟲の秋　波月
蟲の聲禮缺く長座欵待に　同
長老に屈して下山や蟲の徑　同
馬死せし馬舍祓ひや蟲の聲　松夢
同社せしに碑文も草す蟲夜頃　同
漸減の瓜積出しや蟲の濱　同
酒飲まぬ末座灯暗らを蟲の聲　百幽

異母弟の悲しさも想ふ蟲の聲　同
雨に騒ぐ土管つまりを蟲鳴けり　同
異腹なればこの旅もする蟲の秋　灸花
蟲なくや月の厨口汐滿てる　同
一夜乞ふてこの邑に緣す蟲の宿　同
大樹挽く楔にも蟲啼き澄める　朱星
治水說く僧若し蟲すだく宿　同
國禁の書に倚る蟲を暗き灯に　同
遠篝見て書房出づ蟲の聲　蔦雨樓
緣談に來て聾に逢ふ蟲の宿　同
亭の蟲君が警句の餘韻ある　同
師が風姿意表に出づ蟲に訪へば　翠郭
塔影を池水に入れて蟲涼し　同
晩景を茶亭に生きて蟲仄か　同
蟲なくや盲ひてより史を誦んずる　唄我
柿の澁も壺にせん蟲老いし宿　同
峯渡りする鹿に蟲の夜露れせん　同
歸客つぐ上げ汐や兩岸は蟲　花馭史
高草に蟲鳴けり囮すめる朝　同
家深う蟲啼けり門の樹の風に　風水火
風明りする水際草すだく蟲　同

繪巻物解けば灯華やかに蟲の宿　三石
師が冷たき遺訓あり蟲澄める夜に　同
酒の座に漏す大望を蟲鳴けり　松葉
煮ゆる待つ爐にまどろめば蟲の聲　同
筆供養もしつ君泊めし蟲鳴く夜　吼天生
妹が事に來し君酔ふや蟲鳴く夜　同
蟲に寒さを夜盗に衣恵まれし　狠子
蟲に幾夜妻孕めれば狸うたぬやらん　同
鍛冶具しまう時火の白し蟲の聲　里雪
泊り咎めなき草鞋解く蟲夕　同
小爭に隣井をくまず蟲の家　牟婁男改吐櫻樓
吾れ故の不和と家出も蟲鳴く夜　同
人買は村に老いけり蟲の秋　禾坤改刀魚
蟲くなや芋代官の墓の下　同
湖泊漁意にあり枯叢蟲日夜かな　國郎
露蘭に酔趣見馴る蟲遠音　同
走り職いつも夜涼し蟲の聲　三荒
引き水を檢す夜火なり蟲の聲　同
蟲の宿幼きが歌に名ありけり　愛香
酒池に溺れし往事又戀ふ蟲の夜や　同
遠き人に寄する愛慕や蟲しげき　竹美

夜半に我あるを思へば蟲せまる　同
出獄の知らせ文書く蟲更けて　愚案
蟲なくも雨呼び草の峠茶屋　同
御山魔所一樹澄む月に蟲の聲　應跳郎
境過を咏めり師も居て蟲の宿　同
門を出るに足の痺れを蟲鳴けり　蒼蛇
蟲鳴くや干し忘れたる馬の鞍　同
蟲の窓筆架整へば月も出し　秀天郎
放歌止めば枕に蟲を親しうす　同
一聲の冴ゆるに蟲の鳴きつぎし　潮音
深石に露氣凝れば靜蟲の聲　同
月草に滿つる歡喜を蟲鳴けり　雪骨
ズン切りの並松蟲の月澄めり　同
蟲鳴けり鋸甕の埋め殘す草　白青
足枷の詩に心萎ゆ蟲の聲　驟雨
蟲賣や蟲籠程の小提灯　美殿
梨むけば皮が續きぬ蟲の宿　蒂柿
溫泉の客の衣の始末や蟲の聲　貞女
深草の蟲かも鳴けり君戀ふに　儆羅
啼く石の鳴かで蟲なく夜なりけり　秋紅
蟲の社拜者にうとき鶴も飼へり　木兆子

蟲なくや果樹の名に古き古泊り　孤風子
板橋を越せば堆肥に鳴く野蟲　汀風
蟲の音に湖荒れを卜す翁かな　天水老
訪ふが皆慈父装へる蟲夕　蒼明
鳴啼くや心を勞す炊事番　太以字
この朝思索に適す蟲名殘　碧虚郎
此秋の蟲召されけり院の御所　紫明
釜の下爐の中に蟲を聞く夜かな　象眼
蟲に寄せし悲歌多く此地立たれけり　丁字

某樓妓

妓とならぬ昔を知れり蟲の聲　薔薇

課題　露　九月十日〆切
　　　黍　十月十日〆切
規定　▽淡路國假屋在釜口高田蝶衣宛
　　　▽一人三十句以下△用紙は半紙

評論

英國上院問題の解決

一

英國上院問題落着す、自由黨雀躍欣賀の狀、統一黨失意喪心の態、殆んど想見するに足る者あり。

如何にしてか能く玆に至りたる。曰く英國皇帝が貴族新造を敢てして迄、政府を援助するの決意を堅うし給ひたるに依る。顧みるに英帝の貴族新造を以て政府を援助せられたる實例は、二百年前アン女帝の治世中、貴族十二名新造に依りて、上院に於けるマルボロオ卿の戰爭繼續說を打破したること一回あるのみ。此件は一七一九年、有名なるサンダンランド伯の貴族新造權

制限案提出を促したりと雖も、案敗れ、皇帝の貴族新造權は爲めに何等の制限をも蒙らざりき。(後年に起れる一代貴族問題丈は別として)。而して一八三二年、上院が總選擧の明かに民論の趨向を表示せるに拘らず、頑固に政府提出の改革案に反對するや、ウヰリアム四世は首相グレイ卿に與ふるに貴族新造の保障を以てしたり。此保障は上院が蒼皇屈服したるを以て、事實上に發現せしめずして止みたりと雖も、上院が總選擧に示されたる民論を無視するに當り、皇帝(寧ろ内閣)が便法として貴族を新造し、上院の形勢を一變し得可きは、最早や益々疑ひも無きに至れりき。

其已に皇帝の權能は昭々瞭々たり。此上の問題は唯だ皇帝が此權能をアスキス内閣の爲めに行使せらるゝか否かにありしのみ。然るに七月下旬、内閣遂に此保障を得るに至る、自己の階級の激増を喜ばざる貴族の俄然降服し、八月十日百十四對百三十一の多數を以て否認權廢止案を可決したるもの、何ぞ偶然と言ふ可けん哉。

二

然らば則ち否認權案即ち議院法案通過の結果は如何、試みに先づ其内容を檢せば下の如し。

(一)若し財政案にて下院を通過し議會閉會の一ヶ月以前に上院に送附せられたるに拘らず上院が其の送られたる日より一ヶ月以内に修正を爲さずして之を通過することを拒絶するに於ては該財政案は上院の承諾なくも皇帝陛下の許に提出し陛下の裁可を得て法律たるものとす

(二)若し財政案以外の法案が三會期引續き下院を通過し且つ閉會より一ヶ月以前に上院に移されたるに、毎度上院にて否決せられたる時は第三回目の否決後直ちに皇帝の裁可を得て即ち上院の贊成を得ずして法律となる可し

(三)議會の期限を五年に短縮す

(四)財政案なりや他の案なりやは下院議長が二名の委員と協議して決定す可し

即ち知る、上院は財政案に關して明かに全く其權能を放棄し、それ以外の諸議案に對しては約二年餘之が通過を阻止し以て下院の再考を求むる丈けの權能を保有することとなりたるを。

財政案の事は論ずる迄も無し。何となれば一六六一年のウエスミンスター街衢改修案以來、下院は着々財政上の優越權を主張し、十九世紀中半の紙稅法案問題に至つて、上院の無權力は殆んど明瞭となりたるを以て也、將た一九〇九年藏相ロイドジョルジ氏の社會主義豫算案、紛議を惹起したりと雖も、之に對する上院の反抗は財政案たる故にあらずして、寧ろ別に社會的

革命を意味すと目せられたるを以て也。今日の事何の奇か之あらん、然かも上院が財政案以外の議案（憲法上の改革案等をも含みて）に對して否認權を喪失せるに至ては、抑も何等重大なる改革ぞや。

ランスダウン卿は一世の傑物也。其統一派を代表して上院に提出し、敗北したる修正案の梗概は則ち下の如し、

皇帝の存在若くは大權に關する事項、愛蘭、蘇格蘭、威斯（ウエルス）等に議會を設立する件、若くは兩院聯合委員會が憲法の重要事項と認むるものは本案（否認權廢止案）の適用より除外し、之等は一應選擧人に訴へ其是認を得たる後にあらざれば皇帝の裁可を乞ふ可からざると、

此修正案にして成立せりとせんか。貴族の立法的生命は猶繼續したりしならん。蓋し普通の立法は之を除き苟くも憲法上の改革に對しては、貴族も依然否認權を有したるを以て也。左れど同案一たび成りて次て敗れぬ。最早や上院は生命無く活力無き裝飾品に過ぎざらんとす。

三

自由黨政府は何が故に斯くの如く強硬の態度を執りたりし乎。由來貴族の保守主義とは附物たり、從つて上院は常に統一派の味方として、自由黨の執政を妨害したるに依る。過去半世紀に於て普通教育案、勞働職業紛議案、複票案、愛蘭自治案等自由黨内閣の提案が上院に否決せられたるは、其忘却する能はざる所たりし也。人或は曰はん、自由黨貴族を新造せば可ならんと、然かも自由黨員と雖も一般華冑社會に入らんか、階級的利害に動かされて、氣節消磨し易きを奈何。況んや其子孫に於てをや。

或は曰く否認權廢止に代ゆるに上院組織改革を以てすると可と。然かも統一派の提案の如く、大體貴族を基礎とするの外無き以上、何ぞ大勢を變ずるを得んや。

四

理由は孰れに在るにせよ、否認權廢止は最早や仕遂げられたる事實也。然らば則ち其英國政界に及ぼす影響如何、吾人の所見を略記すれば下の如し。

（一）愛蘭等の自治　愛蘭の自治は自由黨が一八八六年及一八九二年に企てゝ敗れたる所、今回上院なる妨害物消滅する以上は、必らず同案の提出を見るに至る可し、然かも愛蘭自治問題は蘇格蘭及威斯の自治問題を發生し、更に母國對殖民地の立法關係問題を生じ、結局所謂フエデラル、

バリアメントの實現を促すに至る可し。

(二)民主的傾向　否認權廢止の結果、自由黨の勢力を增進するのみならず、諸政黨をして一層民主的たらしむるに至らん。蓋し貴族の勢力減退は自然に政派の打算中に入る可きを以て也。而して社會主義的立法は一層盛んならざるを得ざる可し。

次ぎに世界に及ぼす影響は如何、顧みるに上院問題は米國にも露國にも將た我國にも之れあり、民論の妨害物たる所相齊し、然るに今や立憲制の母國たる英國に於て今回の事あり、少くとも無形的教訓を學ぶ可きこと誰か亦疑はん哉。遮莫今にして箇々の邦國に及ぼす其程度如何を豫測するが如きは、恐らくは愚にあらずんば狂なるべし。

(備考、統一黨首領アスキス氏は内務卿チャーチル氏に對し將來統一黨政權を執らんか上院の組織を改造し其代り否認權を復舊せしむ可しと言明せり、然かも下院が自己の優越的地位を犧牲にして迄上院の權能を增加せしむ可きか、恐らくは是困難ならんか、兎も角統一黨こそ見物なる可けれ)

英米仲裁條約

英米仲裁條約正文發表せらる。吾人は之を見て仲裁々判が戰爭に代るの時期猶遼遠なるを想ふ。何ぞや。本年一月米國大統領タフト氏の卓上演說に表示せられたるが如き廣大なる平和運動は。遺憾ながら同條約に於て之を見るを得ざれば也。

先きには條約問題と言はず、權利問題と言はず、利益問題と言はず、一切の國際的係爭事件を仲裁に附す可しと聲言せられたりき。吾人は條約權若くは國際法に關係無き單純の利益問題が如何にして司法的機關たる仲裁々判に附せらる可きかを危みき。然かも平和運動に谷々たる米國理想家の態度には、轉た敬服せずんばあらざりき。

然るに今や如何。「性質上裁判に附するに妨げなき」を條件とす。是實際に於て法律的性質にあらざる紛爭事項の除外を意味す。而して法律的性質にあらざる係爭が國際紛議の半ばを占むるを思はゞ、誰かタフト氏理想の實現が愈遼遠となりたるを否むものぞや。泰山鳴動して鼠一匹を出すと評す、或は酷に過ぎむ。然かも看板と實物と違ふ淺草觀世物の類と呼ぶも、仲裁條約に寃を訴ふること能はざる也。

米國上院の難關

英米、米佛仲裁條約、米國上院に提出せらるゝや、俄然難境を生じたり。是同條約第一條に於て明かに米國上院が各事件の仲裁附議につき協贊するの權限を附與せるに係らず、第三條に於ては共同調査委員會（國際的機關）に紛爭が仲裁々判に附す可きものなりやの決定權を附與し、同委員會の決定には上院も盲從せざる可からざる譯合となりたるに依る。

上院の反對は何の不思議無し。一八九七年及一九〇八年に於て同院が仲裁條約に反對したるも、矢張り自己の批准若くは協贊の權限を固持し、其減小を欲せざりしに起因す。今回の事亦同一のみ、然かも斯くの如くにして、仲裁條約は遂に成立の希望ありと言ふ可き乎。

（備考　米國上院外務委員會は八月中旬、仲裁條約案に修正を加へ、上記の共同調査委員會の事業を上院自身の手に移すことを決議したり）

摩洛哥問題經過

風か、雨か、孰れとも分き兼ねたるは、摩洛哥問題とす。而して今猶伯林に於ける獨逸外相キダーレン、ウエヒテル、佛國大使カムボン兩氏間の談判は、雲深うして知り難し。世上徒らに紛々たる蜚語を聽く。遮莫、最早や難局は多分過ぎたるならん。而して是實に英國が一九〇四年の英佛協約を重んじ、極力佛に聲援するの決意を示したる結果而已。

露獨協商

八月中旬、露獨協商調印の報あり。而して其内容として傳へらるゝものに曰く、

第一條　露國はバグダット鐵道の敷設に反對せず又外國の資本をして此の事業に參加せしむることに異議を唱へざる可し然れども此の事業の爲に露國に對し金錢上若しくは財政上の犧牲を要求すべからざるものとす

第二條　波斯の鐵道敷設事業完了したる時は露西亞はバグダット鐵道と聯絡する爲め土耳其波斯の國境に至る支線を敷設すべく其敷設はサジエカニキン並にコニヤバグダット線の既成の後に在るべきものとす露國は此聯絡線のカニキンに於ける終點に達する迄に通過すべき地方を決定する權利を留保す獨露兩國政府は此線路に於ける國際交通を容易にすることに勉むべく例へば通過日限を制限し或は區別の取扱を爲す等總て國際交通を困難にすることを爲さゞるべし

第三條　獨逸國はバグダッド鐵道と土耳其波斯國境との間に在る地帶に於てカニキン以北に如何なる鐵道をも敷設せず又は其敷設に實體上若くは外交上の援護を與へざることを約す

第四條　獨逸國は波斯國に於て如何なる政治上の利害關係を有せず只通商上の利害關係を有し露西亞が波斯北部に於て政治上軍事上及經

濟上の見地より特別の利害關係を有することを承認す、又獨逸はカスル、イ、シリン、イスパハン、イエズド、カックの線より北に於てガシックと同緯度の阿富汗國境に至る間に於て鐵道、道路、航海、電信架設等總て土地に關係する特許を自ら要求せず、又は自國臣民若くは外國臣民の之を要求するを援護せざるべきことを聲明す若し獨逸國が此の如き特許を得んとするときは豫め露西亞と協議すべし之が代償として露西亞國は引續き波斯に於ける獨逸通商の爲めに完全なる均等の取扱を爲す可し

露獨協商の論は先きに試みたる所、茲に縷說せず。然かも此協商の活用如何は恐らくは露國が實際三國協商を見捨つる程度如何に依らん。論より證據。獨逸は佛國が依然英國と離れざるを見るや、一九〇九年獨佛協商を無視して憚らざるにはあらざる乎。

英國の大同盟罷業

先きに戴冠式に際して水夫罷業あり、次ひて又々波止場人足の罷業を見る、英國は同盟罷業の頻々たると大規模なる點に於て、第二の佛國たらんとするに似たり。

斯くの如くにして交通の故障繼續し、物價愈騰貴す。而して最多く此物價騰貴の禍を蒙むるものは、今回罷業者を出せる細民階級たる可き也。



金棒秘記

饒舌子

⊙××博士などは日英同盟は過去には日本の爲めになつが、將來は餘り有難いものでない。寧ろ露西亞と益々堅く握手して同盟を作り、之に獨逸を加へて、日露獨の三ヶ國で東洋問題を決するのが日本の利益である。さうすると米國も英國も手が出せるものでない。場合によつては英國は其寶庫たる印度をも失つて了ふ。米國も支那に對する野心を抛つより外仕方がない。今迄の歷史を無視することは出來ぬが時勢に應じて外交上の新局面を開くことも亦必要である。吾輩は理想論として日露獨同盟論を唱ふると論じてゐらるゝ。

⊙此事を福本日南氏に話すとそんな說は大愚論である。支那に於ける英國の貿易額は、世界の何れの國よりも多い。彼が日本と結んだのも結局其れが爲である。從て若し東洋から排斥せらるゝやうな事があれば英國

は死命を賭して爭ふに違ひがない。まア其れは兎に角矢張は獨逸といふ國が日本に取つて最も恐るべき敵であると思ふ。何となれば英國はどういつても老舖である。又美術工藝品にかけては佛蘭西の獨占だ。獨逸といふ奴はそいつを見込んで、安物の紛ひ物の製造を初めた。處が世界で最も多いものは矢張り貧乏人だから、其れが旨く中つて今日の獨逸工業の盛大を來した。日本はどうかといふと將來矢張り工業で立つより外はない。天然の地形が農業國たるを許さんし、商賣にかけてはチャンコロに敵はない。矢張り工業を盛んにして、支那に賣弘める。之より外に日本の活きる道がない、處が日本の工業は紛ひ物も紛ひ物、大紛ひ者だ。獨逸も紛ひ物だが彼は科學の應用が日本よりも進んで居る丈けに、全じ紛ひ物でも日本のよりずつとよい。例へば同じ赤いフランネルの腰卷を造るにしても、獨逸のは洗つても一寸色が變らぬが、日本製のは一度水を潜ると血にでも染つたやうに眞赤な汁が流れる。日本の紛ひ物はどうも獨逸の紛ひ物に競爭が出來ない。將來日本の生命たる日本工業の販路を東洋から驅逐する奴はキット獨逸だ。其獨逸と協同して東洋問題を決するなど丶は以ての外だ。願はくは獨逸をして成るべく東洋の事に指を染めさしたくないといふ論だ。

◉世間では軍備は戰爭する爲めでなく、平和の維持の爲めだといふが、僕は平和維持の爲めの軍備ほど嫌ひなものはない。軍人が平和維持の爲めの軍隊だと考へるやうになれば、もう軍隊は腐つて了ふ。今日英國の海軍では對二國以上の艦隊といふ事を名として、大きな金をかけて終始實彈射撃かなんかやつて、百分の九十何パーセントとか命中するといふて、そして世界を威かして戰爭をしない工風をして居るが、僕の考では案外弱いものだらうと思ふ。亞米利加の兵隊も矢張りさうだ。平和維持の軍備をやつてる所で強い兵隊はない。みんな腐つて了ふ。魚の腐つたのはまだいゝが軍人の腐つたのはそれこそ始末にいけない。大飯を喰つて、馬鹿に金がかゝつてまさかの時には役に立たない。もう仕様がない。僕は軍隊は成るべく少くして、必らず戰爭するもの戰爭したいものとして、餓えた虎のやうな精神を抱かせて置くに限ると思ふ。現に御維新の時の幕府の兵隊のザマはどうだ。天下を震駭せしめた三河武士の子孫も、三百年の泰平に馴れて、旗下八萬騎の徳川勢を差向けても、僅か薩長二州の小勢に散々やりまくられて居る。幕府の兵隊には戰志がない。何でも澤山の金を貰つて、江戸を發つと、大阪へ行つて、戰はぬ中からもう歸りの土産物を買つて居る。此時陣中へ土産物を持出して、いゝ金儲をやつたのが、アの松本順太郎サ、こんな風だから軍人に戰志が無くなつてはもうお終ひだ。僕は無用の費用をかけて軍備擴張などするよりも、戰志ある寡少の軍隊の方が有效だと信ずる。曾て寺内さんに此説を述べて叱られた事があつたが、然し今でもさう確信して疑ない、とは有名なる某論客の談。

◉後藤鐵道院總裁にも留任せずなど丶書いてある新聞があるが、實は留任したくても留任されぬのだらう。後藤だの、寺内だのは平田や大浦は固より、大味噌をつけた小松原などに比べても、勢力の根據地を持つて

ゐない、後者は兎に角貴族院に堅き根據を持つてゐるが、寺内が總督をやめ、後藤が總裁をやめれば一寸立場に困る。殊に後藤は困る。先生はどこまでも留任したいだらうが、政友會の連中は後藤に對しては大分異論があるから、到底其儘に置くまい。後藤の洋行と出かけたのは、伊藤の洋行と同じく、外國にでも行つて又運の開くるのを待つ積りだらう、と某政治家の評。

新刊批評

▲日本現在史綱

增澤長吉著　寶文館發行

此書は著者が日露戰役前「最近五十年史」と題し出版したるものに訂正增補を加へたるものにして、主として中小學の教師の教授參考書及び初等教育を卒へたる青年の讀物として書かれたるもの也。嘉永六年より昨年の韓國併合に至るまで約六十年間の重要事蹟を平易簡明に記述したるは著者の功也。但附錄中、憲法と皇室典範の條文は必ずしも附するに及ばざりしと思ふ。(定價一圓二十錢)

▲小波お伽百話

巖谷小波著　博文館發行

お伽噺の本家本元にして、滿天下の幼童少女の遊び友達たる巖谷の叔父さんが、二十年間に書き綴られたるお伽噺の中より比較的短かきもの百篇を集めたるものにして、多くは教訓的なれども、中には詩趣を主としたるもの、實意的にと工夫したるもの滑稽を目指したるものいろ〳〵ありてお子供さんに一つ讀み聞かしたら最後、百篇讀み終るまで、毎晩せがまるゝものと御承知ありたし。諸畫伯の揮毫にかゝる挿畫亦鮮麗也(定價一圓八十錢)

▲お轉婆

吉田雨耳譯　寶文堂書店發行

ゴルキーの作を翻譯せるものにして、譯文も概して流暢に、讀みにくき箇所の少きは譯者吉田文學士の手柄なるべし。二百七十餘頁の、物語にして、所謂お轉婆娘の性格も明かに、自然の描寫の生き〳〵したるは流石にゴルキーの作と感嘆せしむ。殊に末段の超然的、皮肉的なる處甚だ面白し。近來の好譯書の一たるを失はず(定價九十錢)

▲生活の趣味

遠藤隆吉著　富山房發行

「勢力を善用して人生を深く且つ廣く解釋し、時々刻々に於て、將た又其場〳〵に於て、覺悟ある生活をなし、自主獨立の氣象を養はしめん」との目的を以て書かれたるものにして「圓滿なる常識」「青年間の話」「農家と獨立の思想」「自覺と修養」「孔子と釋迦」「生活の意味」「讀書法」等の項目に分ち、常識主義、實行主義を鼓吹したるもの也。(定價一圓二十錢)

▲小品作法

水野葉舟著　春秋社發行

葉舟氏の此種の著は、何處までも氣が利いて、何處までも面白く、新しい感じを起させるやうに書いてある。著者の小品に對する經驗、作法、著者作例、諸名家小品等を載せてある。小品文の得意なる著者の作だけあつて青年文士を益すること少くない。(定價六十錢)

▲文藝地理東海道五十三次

橫山健堂著　前川文榮閣發行

黑頭巾の名前を以て本誌の讀者とお馴染なる橫山健堂氏の著述であ

る。露堂氏が歷史と地理に深き趣味と、鋭く、且つ詩的な觀察を有して居る人であることは、評者が改めて吹聽するまでもなく、本誌讀者の知らるゝ所である。本書は東海道五十三次を汽車の窓から望みつゝ、其地の文學、地理、政治產業、風俗歷史、風景等を叙述し論評したもので、なか／＼趣味の多い書である。文章は何時もの黑頭巾式でなく、平易な口語體で口述してあるが、此種の作には却てふさはしいやうにも思ふ。卷中に澤山收まつてゐる插畫は殊に面白い。（定價一圓六十錢）

▲ソクラテス論語　浩江保纂譯　東亞堂發行

プラトーの對話集、ゼノフォンのソクラテス語錄、クリスチーの金言集等よりソクラテスの教訓及び弟子等の問答に關するものを集めて編纂したるものにしてソクラテスを研究するにはよき材料の一たるを失はず。又讀物として青年子弟を益すること多し。（定價七十五錢）

▲和譯七書と鬼谷子　田岡嶺雲譯註　玄黃社發行

孫子、呉子、司馬法、尉繚子、三略、六韜、唐太宗李衞公問答の七書及び鬼谷子の和譯にして支那兵書の主もなるものは略ぼ此中に網羅せられたりといふべし。我輩は元來漢文の和譯を好まず、殊に本文中に割註の多きを讀みにくしと感ずれども、本書の如きは座右に備へて時に師讀する價値あるものゝみなれば、志あるものは一讀すべし（定價一圓）

▲富の成功　福澤桃介著　東亞堂發行

着眼も奇拔、立論も奇拔、文章もなか／＼奇拔で、普通の實業家輩のいひ得ない事を巧みに面白く言つて居る。面白い著述だ。附錄の株式成功策も亦面白い。實業志願の青年には勿論だが、一般の讀物として面白いと思ふ。（定價五十錢）

▲佐久間象山　山路愛山著　東亞堂發行

史論家としての愛山氏は天下に定論あり。吾人の喋々を用ゐず。此篇平明なる言文一致を以て叙述しながら、處々覇氣あり精彩あり一度卷を開けば、卷を終らずんは止まざらしむ。何人も一讀すべし。（定價九十五錢）

▲少女美談　渡邊白水著　實業之日本社發行

少女の模範となるやうな美談三十餘を集めたもので、書き方も平易で流暢少女方のよき讀み物なり（定價六十錢）

▲山水行脚　坪谷水哉著　博文館發行

旅行癖ある著者が日本全國——琉球臺灣までも股にかけて旅行して見聞したる事實を平易に有りの儘に記述したるものにして、形容詞澤山で內容はゼロの旅行記に優ること萬々也。旅行者にとつてよき參考書、案內記也。插畫又美也（定價八十錢）

▲婦人禮法　下田歌子著　實業之日本社發行

婦人の禮法に關する事項一切を網羅せるものにして、四百頁に餘る大冊子也。古に泥まず、新に流れず新舊折衷して著者獨得の禮法を說述する所流石に著者の凡婦人にあらざるを表示して餘りあり。女學生、及び一般家庭の主婦にとりてよき讀物也（定價一圓五十錢）

▲泥人形　正宗白鳥著　春陽堂發行

現代文藝叢書第一編として發行せられたるものなるが、製本の粗惡なると、作物が最近に於て雜誌で一讀したるものなるとの理由より、深き感興を起さゞりき。但し安價なる故まだ讀まざる人には便利也（定價廿五錢）

▲遠羅天釜（白隱禪師）　無我山房發行（定價十五錢）

▲大川友右衞門（麟慶口演）　東亞堂發行（卅錢）　▲荒木又衞門（後日の仇討）（典山口演）　仝上

◎日本文藝叢書（東亞堂發行、定價上製卅錢並製廿錢）

▲馬琴傑作集（第一）　▲平家物語（後篇）　▲通俗三國誌（第六）

▲俠客傳（下編）　▲邯鄲諸國物語（前編）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

故文學博士 藤岡作太郎著

東圃遺稿

文學博士 芳賀矢一
文學士 藤井乙男 共編

(最新刊)

菊判美製箱入
全一冊
正價金壹圓五拾錢
郵稅金拾貳錢

■國學史、日本評論史、國文學と風俗■

故文學博士藤岡東圃は一代の學者なり、その生前に公にせられたる著書甚だ尠からざるが、なほ篋底に藏して鉛槧に附せざるもの多しとなす、今やまづ國學史、日本評論史、國文學と風俗の三種を輯めて一卷を出す、蓋し明治辛亥の出版界本書を得て始めて刮目して見るべきものあるを知るなり、幸に購讀の榮を給へ。

夏目漱石著

我輩は猫である

寸珍合本
裝幀頗美製全一冊
正價金壹圓參拾錢
郵稅金八錢

漱石先生傑作の「猫」は御承知の如く出版當時から三册つゞきの單行本として今日まで洽ねく一般の御需用を充たして居りましたが今回更に講讀者諸君の御便宜の爲め縮刷合本の一册として刊行する事と致しました。價格の廉、携帶の便、體裁の美は御覽になればすぐに分ります。

東京日本橋角 大倉書店 振替貯金二三八番 賣捌各書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

(中付丙の一)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

四十四年版

文學博士 金澤庄三郎編

辭林

三萬部限り
特價金貳圓

定價金貳圓五拾錢
郵稅金拾六錢
見本進呈送料貳錢

■特價貳圓は將來再び見るを得ざる大廉價なり■

語數の饒多なること言海、言泉よりも遙かに勝り約十萬を算す現代活用の語辭は勿論理科、法政、文藝等の學術語を始めとし外來語、俚語其他最新の新熟語を網羅し圖畫一千有餘を挿入す解說は正確にして索出至便なり國語辭書にして亦百科辭典の功を有す。尚此書は字音索引、發音索引の外に更に難訓索引あり何れも他に類を見ざる新案にして如何なる難字難語と雖も索出自由なり。

大好評

大歡迎

發行所 東京神田 三省堂書店 振替口座一五九七

(中付内の二)

●古典的知識は國民性の淵源●

大町桂月先生校訂解題

學生文庫

袖珍總クロース
舶來紙特製美本

定價各冊金參拾錢

郵稅四錢
全壹百冊
逐次刊行

古典的名著は既刊書目國家の生命也

1. 南朝史傳 全
2. 日本外史 上
3. 益軒十訓 上
4. 謠曲全集 上
5. 曾我物語 全
6. 西遊記 上
7. 源平盛衰記 壹
8. 太平記 壹
9. 心學道話 全
10. 常山紀談 上
11. 日本外史 中
12. 益軒十訓 中
13. 先哲叢談 全

以下續々着手中

- 義經記 全
- 平家物語 上
- 源平盛衰記 二
- 大岡政談 全
- 一休諸國物語 全

●諸君試みに一本を手にし給はゞ其の刹那に全卷完成の日を鶴首せらるるならむ是れ何故？

▲選擇至善 ▲校訂嚴密
▲解題卓拔 ▲內容豐富
▲印刷鮮明 ▲裝幀優良
▲製本堅牢 ▲價格至廉

發兌 東京市日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局三六六六番 振替東京一七四四番

(中付內の三)

新版

◁賜天覧▷

滿天下の青年諸君の讀まざるべからざる教訓書

澁澤男爵序　福本日南氏序評　王利紹龍君著

楠公遺訓

全一冊洋裝袖珍三方金総クロース金文字入　正價金四拾五錢　郵送料四錢

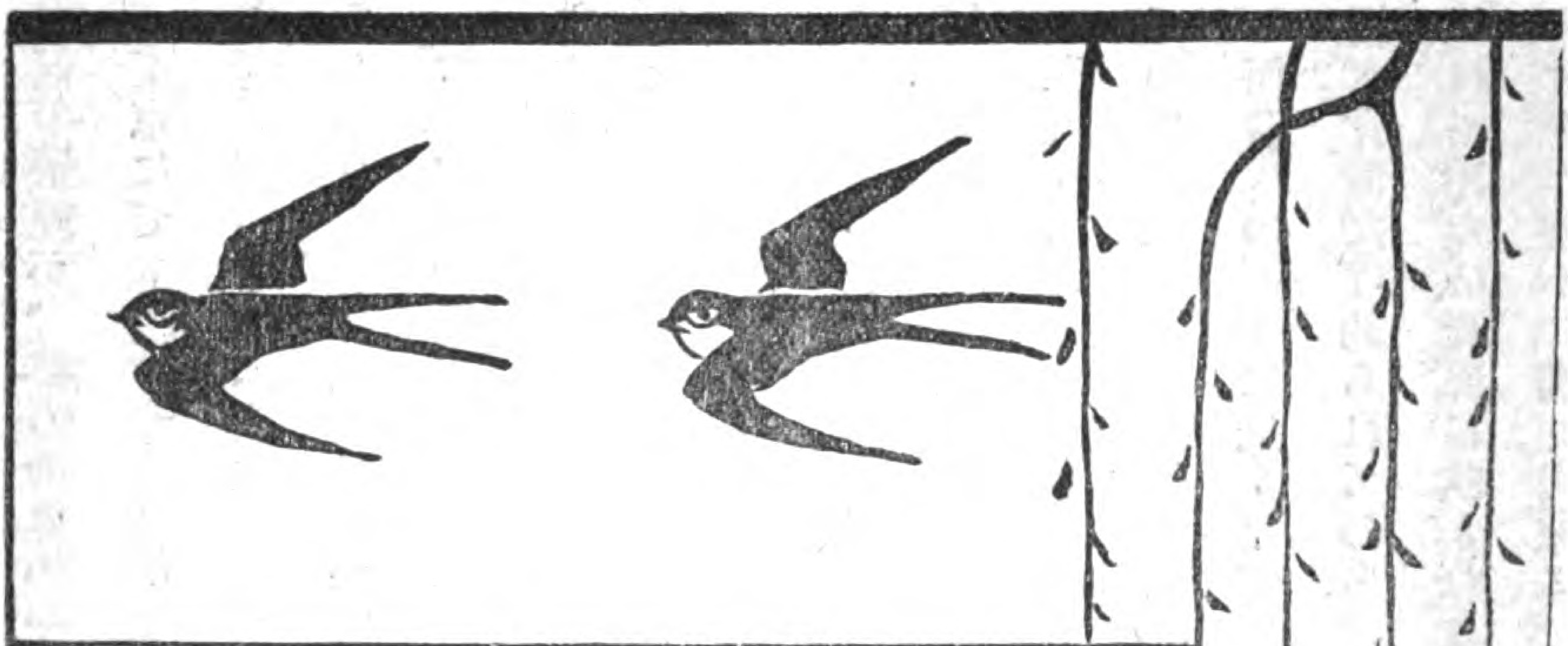
個人的に生れて個人的に死するは凡人也社會的に生れて社會的に死するは偉人也楠公は南北朝時代第一の偉人にして勤王家の模範たり。本書は楠公自らその實驗を叙して正邪善惡を論じ字々至誠を罩め一族郎黨に遺したる大教訓なり故に楠公の事蹟言行を了解せしめ其跡を偲ぶは唯本書あるのみ一般家庭の讀物なるは勿論廣く天下青年男女の讀物としては本書を於て他に之を求むべからざる良書なり敢て之を諸君に薦む。

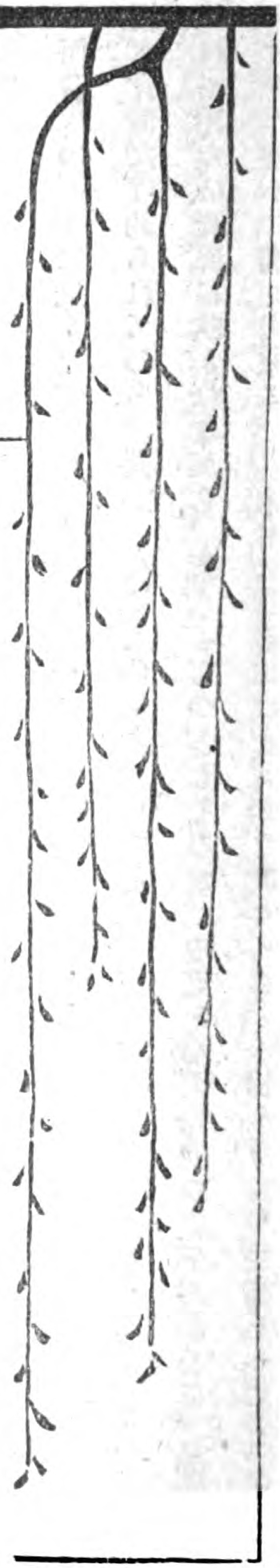
發賣元　東京日本橋數寄屋町　振替東京二三七一番　六合館

賣捌所・東京堂・至誠堂其他全國有名書籍店

（中付内の四）

中央公論秋期附録小説





窒息

正宗白鳥

（一）

「意氣な柄が貴郎(あなた)には似合つてよ」と、お種さんが見立てゝ呉れた浴衣地を買つて、氷屋で一休みして、それから銀座の草市を見た。夕立後の空は涼しさうに晴れて、賑やかな人通りも汗臭くはなかつた。麻殻や眞菰や切籠燈籠岐阜提灯などが、久しく忘れてゐた田舍の盂蘭盆會を思越させた。一列に並べた先祖代々の位牌や、その前に立上る線香の煙や、

僧侶の讀經が、夢の世界のやうに浮んだ。

「東京にても精靈祭りといふ者があるんですかね。僕等は盆でも彼岸でも、殺風景に暮して來たけれど、亡者を祭るといふ事は面白いことですね。僕も位牌を買つて來て、一人でお祖父さんの亡魂を招待しやうか知ら」と、私は佛樣いぢりの好きだつた祖父を思出した。

「ぢや、明日私の家へ入らつしやい。麻殼を焚いて、貴郎のお祖父さんも一緒にお迎ひしますから」と、お種さんが云つた。

「えゝ。貴女とこの佛壇へ位牌を置いて貰はうかな」

私は祖父の靈をも其處で祭られるのが悅しかつた。お種さんの手で香火を手向けられるのが無意味ではなさゝうに思はれた。そして母親と夜店の前に立つて、麻殼や鬼灯を買つてゐるお種さんの横顔を、何氣ない風で見入つてゐた。

三人はてんでに買物を持つて、暫らく其處等を散歩してから、本郷へ歸つたが、最早可成り夜は更けてゐた。私は追分の下宿屋の前で、明日の訪問を約して親子に別れた。

何時ものやうに急ぎ足で自分の部屋へ入つて、電燈を點けて障子を開放した。寢床は延べられて、蚊帳も片側だけ釣られてゐる。だが、夜更しの癖のついた私は、直ぐに寢る氣にはなれなかつた。窓際に凭れて冷たい夜風に吹かれながら、暫らくぢつとしてゐた。中庭を隔てた向ひの部屋からは、聞馴れた木曾節が幽かに聞えて來る。「木曾の御嶽山はナンヂャラホイ……」袷やりたや足袋そへてと、一つ唄

を繰返し〳〵してゐる。それが今夜は殊に涼しさうに氣持よく響いた。私は薄暗がりに微動してゐる楓の青葉を見ながら、その唄に耳を留めた。左右の部屋は先日から人氣がなくて寂としてゐる。同宿の知人は皆故郷へ歸つたり避暑に行つたりして、後に殘つてゐるのは二三の知らぬ人ばかりである。今唄つてゐる醫學生ともまだ口を利く機會はないが、その男は親もなく兄弟もなく、只の一人者であるさうだ。同宿の者が歸省するのを羨しがつてゐたと、下女のお竹が先日話してゐた。

自分のやうに、親兄弟の切なる望みをも斥けて、東京に踏止つて氣儘に暑中を送らうとするのとは異つて、歸るべき家のない身はさぞ淋しいことだらうと、氣の毒に思出すと、その唄までも哀れつぽく聞え出した。浴衣掛けて寢そべつてゐるその男の姿が葉越しにちら〳〵見えた。

やがて唄が止んで雨戸は鎖され、向ひの部屋も暗くなつた。下女は重さうに草履の音をさせて上つて來て、廊下の戸を手荒く締めて行つたが、私はまだ寢付きたくない。この涼しい快い夜をもつと樂みたかつた。話相手はなくとも、獨りで自分の過去や將來を描いて樂みたかつた。お種さんの面影や言葉付を思浮べるだけでも、果しのない樂みとなつた。長い睫毛や小さい可愛らしい鼻、何時かちらと垣間見た白い肌はお種さんを見るたびに、思ふたびに目の前に浮んで來る。「豚のやうにブク〳〵肥つてやがつて厭な女だ」と、惡口を云ふ友人もあつて、私自身も口では度々さふ云つてゐたが、その痩せてゐないのが私には懷かしい思ひをさせた。口の大いのをわざと小さく見せるやうに窄めるのが、却つて可愛らしく思はれた。そして、彼處へ出入する男の中でも、自分が一番あの女の心を惹いてゐるのに違ひない。

母親だつて自分には竊かに許してゐるのに違ひない。

私は親子二人の不斷の素振りや言葉を考へて、さう極めて疑はなかつた。「學校を御卒業なすつたんだから、早く奥樣をお貰ひなさいまし、今の中に極めてお置きなさる方が間違ひが出來なくてよう御座いますよ」と、先日あの母親が云つたが、その言葉の裏は略々察せられる。母と娘と私との三人は無言の中に深い關係を結びつゝあるのだ。私がこの夏歸省しないのも、それが重な原因になつてゐるのである。極つてしまうまでは東京を離れたくはない。兩親に知らせて同意を得て、新家庭をつくる準備をするために故郷へ歸るのでなければ、少しも歸りたくはない。

それにつけても、當人の口から確かな愛の言葉を聞きたかつた。疑ふ餘地はなくても、輕い不安がふと胸を曇らせることがないでもない。明日か明後日、今度こそ折があり次第。氣臆れしないで、一刻も早く明ら樣に自分の思ふことを云つてしまつて、先方の心の底を打明けさゝう。他人を間に入れたり、母親に訴へたりするのは面白くない。直かにお種さんの口から露の滴たるやうな返事を聞かなくては面白くない。

て、私はその女が如何なる態度如何なる言葉て、私の戀を容れるかと、さま〳〵に考へて見た。互ひに戀を誓つてから後の女の樣子が、心に波打たせた。二度三度戀の經驗を積んで來て、女の心を知つてゐるつもりの私は、男の戀の囁きを聞いた後の處女の樣子を想像するに苦しまなかつた。

自分にしても今度こそは誠の戀をしてゐるのだ。思慮ある戀をしてゐるのだ。九月から初めて世の中

へ出て、自分の腕で生活の道を開くのであれば、これまでのやうに浮々してはゐられない。新しい家庭をつくつて新しい生涯に入るのだから、一時の無分別から取返しのつかんことをしてはならん。それにしてもよくお玉とも仲よく別れたものだ。若し今まで引つゞいて關係の切れてゐなかつたら、どんな目に會ふかも知れやしない。あの女も私には惚れとつたから……

幸ひにも私は何處か女に好かれる所を持つてゐるのだ。七つ八つの頃小學校からの歸りに、峠の茶店の婆さんが私を指差しながら、「あの子は大きくなつたら、村山先生のやうに娘つ子に騷がれるだらう」と、店先の客に向つて話してゐたが、今までに幾度私は婦人の賛辭を得たか知れない。寄宿舍へ入つた時、同窓の生徒の居並んだ所で、或男が「この中で誰れが一番好きだ」と、賄方の主婦に訊くと、主婦は「さうねえ」と、一座を見渡してから、「矢張り笠原さんが一番可愛らしくつていゝわねえ」と私に目を注いだ。「矢張り」と云へば以前からさう思つてゐたのに違ひない。

東京へ來てからも女の懷しい言葉には不自由しなかつた。此方から近寄つた女に厭な素振りを見せつけられたことはない。だが、私は只の一度も女のために身を過らないで修學時代を通つて來た。學問の妨害をされぬだけの用心はして來た。絶えず女の柔しい空氣に取卷かれながら、人並以上の成績を得て卒業したのである。學問の樂みと女の樂みと、一つを棄てゝしまうやうな愚かな眞似は、私には出來なかつた。……

と、私は自分の過去を顧みて、徒らに時を費さず心も苦しめなかつたことを喜んだ。同窓の友人で卒

業までに、病氣で倒れたり、學資の不足で退學したり、女で失敗つたりした者が幾人あるか知れない。竹部の奴はとう〳〵下宿屋の下女を脊負ひ込んでしまつた。河井は鳥屋の女中に係合つたことを新聞に仰山に書立てられて、故郷に對しても未來の妻君に對しても面目を潰してゐる。

そんな幾多の友人に比べて、私は幸福だ。何の差障りもなくて、これから新しい生涯に入れるのだ。

私は不斷他人よりも幸福であると思はなければ氣が濟まなかつた。

（二）

翌日も夕方まで取留めのない事を考へながら、氣儘にごろ〳〵してゐた。前後の障子を取放してゐるので、狹い部屋も廣々とした。明るい生々した夏の空は、輕い私の心には快く映つた。青桐や楓など中庭の青葉が濃く鮮かに見えた。冷こい空氣は絶えず何處からか忍んで、肌に染込んで來る。「かうして下宿屋にゐるのも、もう僅かの間だ」と、私は三年の間住馴れた部屋を懷かしく見廻した。襖や壁には私の汚した墨汁や墨の跟も殘つてゐる。不斷氣に留めなかつた床の間の牡丹の掛物や、鴨居の鳴鶴の書も目についた。粗末な間に合はせ物ばかりの部屋の道具の中に、小さな銀側の置時計のみが贅澤な光を放つてゐる。あれは寸陰をも惜しめと戒めて叔父が買つて吳れたもので、いくら金に困つた時でもあればかりは手放さなかつた。そして、たとへ朝寢をしても、樂みに心を取られても、螺旋を掛けることは忘れなかつた。三四年の間置時計の針を止めたことはなかつた。が、この夏ばかりは掛けるの

を忘れたこともあつた。氣がついてゐてもわざと打遣つとくこともあつた。此處一二ヶ月は懶けられるだけ懶けやうと心を許してゐて、時計には些しも用がないのだ。

何もしないでゐると日が永い。時計の針の廻るのがのろいやうだ。下女が「お風呂へ」と知らせて來るのが待遠しくなつた。て、その聲を聞くと直ぐに湯殿へ驅付けた。側の臺所の騷ぎを聞きながら身體を磨いてゐたが、ふと下女が戸口を細く開けて、「笠原さん電話！　女の人から」と馴々しい調子で知らせた。

「誰れから」と、私は多分お種さんだらうと思つて頭を持上げて、「近藤さんかい」と訊ふと、

「いゝえ、瀧川さん。あの人でせう」と、下女は笑つた。

「後で掛けると云つとけ。切つといて吳れ」

私は胸を轟かせながら咄嗟にさう云つたが、急に心に雲が掛つて、最早平氣で身體を洗つてはゐられなかつた。瀧川と云ふのはお玉のことだ。あれほどに譯を云つて、幾らかの金をもやつて、互ひに心置きなく別れたのに、今更何を云ひに電話を掛けるんだらう？

私は再び電話の掛るのを恐れた。そして、風呂から出ると、洗立ての浴衣に着變へて、鏡に向つて髮を整え、晩餐には一寸箸を着けたばかりで戸外へ出た。西の空には獸の形をした黑雲が渦卷いて、夕日が華やかにその周圍を色取つてゐる。仰いで見てゐると黑雲は次第に勢ひを增して、日の光を蔽ひかくさうとした。「今夜も夕立がありそうですな」と、店先に立つてゐる老人が空を見て云つた。往來の共用

水道栓は今が忙しい盛りて、引續いて襷掛けの女が手桶を持つて行つたり來たりしてゐる。打水は埃臭い風を起した。

東片町の近藤の家に近づくと、其處の親爺が濁つた聲て謠曲を謠つてゐるのが聞え出した。開放した庭の木戸から見ると、白い髯を垂れた品のいゝ老人が、剛張つた浴衣を着て、扇子を持つて謠つてゐる。臺所の方ては行水の音がしてゐる。私は散歩の次手などに、よくこの木戸の外に立つて、家の物音に耳を留めながら、想像を凝らして樂んてゐたこともあつて、折々はわざ〳〵遊びに來ながら、遠慮して家へは入らないて引返すこともあつた。今日も外から家の中の平和な樣子を見てから入つた。

「おや。丁度いゝ所へ。待つてたんてすよ」と、母親は膳立てしながら云つた。私は食事後だと云つて辭つたが、強いて勸められるので、家族と一緒に膳に向つて、上方風の煮麵（にゆうめん）の御馳走になつた。食事が濟むと、門口て麻殼を燃して佛を迎へ、佛壇には燈明を點して香火を手向けた。そして軒端に岐阜提灯を釣して、その淡い光の下に家族は集ふた。空一面に擴がつた黑雲も、パラ〳〵と僅かな雨を落したばかりて、次第に晴れかゝつた。

「この頃は毎晩涼しくつていゝ氣持てすね。これぢやわざ〳〵避暑に出る必要もありませんね。生中旅行して窮屈な思ひをするよりや、自分の家て氣兼ねしないて氣儘にしてる方が、却つて避暑になりますね。一體一家團欒の樂みは夏の晩にあるんだと思ひますよ。田舍の私の家などては、毎晩庭に涼臺を出して、其處へ村の者が入變り立變りやつて來て、いろんな話をして行くんてす。村のその日の事件や昔

からの傳説が洩れなく分つて、涼臺が新聞の代りになりますよ」

私はかう云つて、自分で一座の話の中心になつて、うろ覺えの田舍の涼臺の話などを傳へた。針小棒大に興を增すやうに話を運んだりした。だが、親爺が側に居るので、何となく心が引けて浮いた調子にはなれなかつた。そして、兎もすれば、幾度も聞いた親爺の昔話がくど／＼しく始まるので、快く受答へするのが苦しくなつた。御一新頃は大學のあたりは森川宿と云つて、田舍の宿場のやうだつたこと。兩國の見世物小屋の汚くて臭かつたこと。正月の明け方の小鰭の鮨や拂ひ扇箱の聲の風流だつたこと。吉原の燈籠や涼み舟の話など、江戸の昔は最早幾度も聞かされてゐる。上方生れの母親は負けぬやうに横から口を出してお國自慢を始める。

そして、お種さんは兩親の昔話に倦屈もしないで、何時も感心してよく聞いてゐるらしい。終日こんな昔染た空氣の中にゐて、よく厭にならないことだ。白い柔かいあの耳朶に兩親の萎びた言葉ばかり聞かせるのは惜しい氣がする。私は折々お種さんの方を顧みて、そつと耳打ちしたかつた。自分の魔力のある息を吹込みたかつた。この平和な、しかしながら居眠りの出さうな家にも勢ひをつけたかつた。そして相手が平氣で座に加はつてゐるのが歯痒ゆかつた。

「笠原さん、一つ先日の敵打ちをしますかな」と、親爺は暫くして闘碁を促した。だが、私は今夜は何か知ら用事を持つてゐるやうで、心が進まなかつた。て、強いて斷つて、雜談に時を過した。昨日の浴衣地を仕立て貰ふので寸法を取らせたばかりて、爲す事もなく、暇を告げねばならぬ時刻となつた。

「明日の晩は久振りに若竹へでも行きませんか」と、私は母親に向つて云つて、明日も亦遊び來る口實をつくつて置いた。

「今の中貴郎(あなた)もせつせと遊んでお置きなさいまし」と、母親は玄關で笑顏をして見送りながら云つた。

せつせと遊べとはいゝ辻占だが、痒い所へ手の屆かぬ様なこの頃の遊び振りは、如何にも物足らない。

私はお種さんと二人きりの世界を夢みながら、大學前の夜店を見歩いて、夜更けて宿へ歸つた。歸ると今まで忘れてゐたお玉の電話を思出して、「あれからまた電話は掛らなかつたかい」と、下女に訊くと、掛らないと下女は答へた。

「掛らない！」何故だらうと私は怪んだ。そして稍々物足らない氣がした。

「あの人に會ひたいんでせう、笠原さん」と、下女は廊下に突立つたまゝ冷かすやうに云つた。

「あゝ會ひたいよ」私は油ぎつた下女の顏を見上げて、「お竹さん、まあ其處へ坐つて話してお出てよ。どうせ用はないんだらうから」と、手招きした。

下女は大きな尻を閾に卸して、片手を疊に突いて、自墮落な様をして、私の方へ目を向けて、

「瀧川つて女いゝ女だわね」

「さうかい。近藤さんと何方(どちら)がいゝ」私は他人の目でどう批評するか聞きたかつた。

「そりや瀧川さんの方がいゝさ。細そりしてゝ姿がいゝわ、色も白いし。貴郎(あなた)は何方(どちら)がいゝと思つてゝ」

「さあ……僕は何方も好きだね」

「両手に花と云ふんでせう、こんな時に。だけど何方も高嶺の花ぢやないの」と、下女は柄にない洒落れた口を利いた。

私は侮辱されたやうに感じて、「何が高嶺の花だい」と、嘲笑つた。そして、「これで女に付纏はれるのも五月蠅いものだよ」と、思はせ振りに云つた。

だが、下女は何とも感ぜぬらしく、「この頃は妙だよ。皆さんがよく電話口で女の人といろんな話をしてるよ。」

「羨しいだらう。お前も誰れか話相手を見付けたらどうだい。」

「話相手なんか幾らでもあるさ。」

下女は暫らく無駄口を叩いてから、欠伸しながら階下へ下りたが、その二人の女を批評した言葉は、後までも私の心を刺激した。そして二人の顔形が媚を含んで目の前に浮んだ。

（三）

翌日。電話が鳴ると、お玉からぢやないかと、自から耳を聳てるやうになつたが、つひに誰れからも掛らなかつた。掛らなくつて幸ひだと思ひながら、何だか約束を違へられたやうな氣がした。

この一日も遊びに來る人もなくて、私は只食つて寢て暮らした。夕飯後にはまた東片町へ行かうかと思つたが、あまり繁々一つ家を訪ねるのも後目たくて、帽子を被り廊下に立つたまゝ、暫らく決しかね

てゐると、其處へ下女が手紙を持つて來た。封筒に「たきかは」と假名で書いてある。私は部屋へ戻つて帽子を脫いて、机に凭れて讀んだ。「……首尾よく御卒業なされし由、まづは目出度存じます。御卒業の上は御歸鄕相成りしことゝ存ぜしに、昨日電話にて承ればやはりそのお宿にてお暮らしの由。ついては是非々々一度お目にかゝりてお祝ひ申上げたく候。お話し申したきことも山々これあり候へば、明晩八時ごろ湯島の天神樣まで來て下さい。若し御都合があつてお出でにならねば、私の方からそのお宿へお伺ひ申します……」

私は手紙を前に置いて考へた。「此方から行かねば向うから宿へ押掛けて來る」と云ふのが、嚇し文句のやうに感ぜられた。あの時得心して、もう一生會はぬと云つて別れて居りながら、手紙の樣子では、それは丸で忘れてゐるやうだ。そんな事は云つた覺えはないと云ひさうな書振りだ。會つたらまた因緣をつけて纒はりつからうとするのかも知れない。

て、私は輕い恐怖を覺えた。どうしようかと思ひあぐんだ。只會ふだけて無事に濟めば、會ひたくないてもないんだが。そうは行くまいな。

兎に角私は外へ出た。東片町は通拔けて大學の方へ向つた。森川町の下宿屋の前に立つて、二階を仰いて友人の名を呼んだが、答へがない。どの部屋にも燈火が點いてゐないでヒッソリしてゐる。外に訪ねる人もないので、パラダイスへ上つて冷した麥酒を飮んだ。此處にも學生らしい客はゐなかつた。皆んな田舍のすが〳〵した所へ行つて、自分二人置いてけ堀にされたやうな氣がしないでもない。

私はふと淋しくなつた。誰れとでも思ふ樣話をしたくてならなくなつた。て、側の若い女中を捉へて馴れ〳〵しい口を利いて見たが、向うからは少しも碎けて來ない。空々しい返事をしては、只ニヤ〳〵笑つてばかりゐる。

私は詰らなく其處を出た。そして當てもなく歩いてゐる中、今夜近藤へ行かなかつたことを悔ひるやうになつた。今夜だつたらお種さんにもつと接近されたかも知れぬと思はれ出した。明日の晩行くにしても、これからの一晝夜が待遠しかつた。それに明日の晩はお玉に無理にでも會はねばならぬとすると、とてもあの家を訪ねられさうではない。

ぢや、どうせお玉に會ふのなら、いつそ今夜會つた方がいゝ。よかれ惡しあれ、一日でも早く先方の云ふたとを聞いた方がいゝ。自分に取つて今が大事な場合だから………

私は怖い者見たさにお玉の居る方へ引かれて行つた。切通しを下りて横へ外れて、薄暗い片側を歩みながら、向うの西洋菓子屋に目を留めたが、瓦斯の光が店を照らしてゐるばかりて、人影は見えなかつた。二三度行戻りしたが、誰れも家の者は出て來なかつた。あの女はもう此處にはゐないのかと疑ひながら思切つて店先へ寄つて、買ひ物をしやうとすると、母親が出て來た。母親は私の名は知つてゐたが、顏は知らなかつた。

「最中をこれだけ」と、十錢銀貨を菓子箱の縁に置くと、母親は「夜分はお涼しう御座いますね」と、お世辭を云ひながら、紙袋へ最中を落した。私は横からその手付きや顏をぢつと見てゐた。近藤の母親と

同じぐらゐの歳格好だが、思ひなしか、あんな柔和な面影はなかつた。大きな鼻の側に疱痕のやうな窪みが幾つもある。そして艶がよくてテカ〱してゐるのが却つて薄氣味が惡い。

指の太い手で手渡しゝた紙袋を懷に捻込んで、私は見返り勝ちに、切通しの方へ歸つた。

當分母親の側に落付いてゐて、店番をするのだと、お玉は云つてゐたが、どうも彼處にゐさうではない。第一あんな慾の深さうな顏をした母親が、娘を小さい店の番人ぐらゐにして遊ばせて置く法はないと思はれた。

て、私は暫らくお種さんのことを棄てゝ、お玉の境遇を考へた。明日の晩兎に角天神でとも會はうと決した。そして、宿へ歸るにはまだ早過ぎるので、ふと思立つて「若竹」へ入つた。圓喬が牡丹燈籠を語つてゐた。客は疎らで、しんみりした噺は物音に累はされないで、鮮明に耳に入つた。私は何時か噺の中に引入れられて夢を見てるやうな心で、病み疲れた新三郎の姿と、遠くからカラコロ下駄の音をさせて來るお露の幽靈とを淋しく目に浮べた。噺が濟んでから、その次が待遠しくなつた。そして、終ひまで續けて聞きに來ようと思つて、明日からの樂みが一つ殖ゑたのを喜んだ。

（四）

翌日は友達が二人、朝早くやつて來て、晩まで賑やかに話して行つたので、私は先日來のやうに獨り靜かに夢見て暮らすことが出來なかつた。二人が部屋中いろんな者を取散らかして歸つた後で、私は急いで近藤宛の葉書を書いた。「九月からの仕事について一兩日奔走してゐます。浴衣はもう縫つて下すつ

たてせうか。明日は是非頂戴に上ります。早くあれを着たいんてす」と、お種さん宛てに書いた。
そして、それを持つて直ぐ外へ出た。時計は八時に間がない。急いて歩いて身體は氣持惡く汗ばんだ。間近くなると、足を緩めて周圍にも目を放つた。境内には涼みに出た人が多い。共同腰掛は塞がつて、そのあたりに子守が幾人も蹲んて、何か勝負事をして遊んてゐる。だが、お玉に似たやうな女も其處等にゐなかつた。まさか違約する筈はないんだがと思ひながら、氣を焦立たせて、二三度境内を步き廻つてから、男坂を下りかけると、不意にその女の顏が直ぐ側に見えた。二人とも同時に相手の顏を見た。
「遲くなつて濟みません」と云ひながら、お玉は苦しさうに息を吐いて、石段に足を留めた。髮は亂れたまゝて、顏は逆上せたやうに紅らんてゐる。
私は人目を避けるやうに、稍々離れて鳥居を出た。以前は指と指とを握つて步いたこともあつたが、今日はさう馴れ〳〵しくするのを憚つた。今宵一夜は打解けて話したかつたが、後々の掛合ひが恐ろしくて、そんな慾望は强いて壓へつけた。
私は人通りの少い薄暗い方へ步んだ。
「何處へ行くの」と、お玉は大儀さうに步きながら云つた。
「さあ。池の端ても一週しようか」
「私、そんなに步けないわ」

「ぢや、今何でもお云ひよ用事があるんなら」

「だけど往來て話は出來ないぢやありませんか」

「さうだねえ」

私はいゝ智慧も出なかつた。お玉の目と口許には物言ひたげな心が動いてゐる。

「僕は此頃暇ぢやないんだよ。今夜もあまり緩くりしちやゐられないんだよ」と、私は言譯をしたが、このまゝ逃れられさうでもなければ、また逃れたくはなかつた。「ぢや、蕎麥屋へでも入らうか」

「えゝ。蕎麥屋なら何時かの所がいゝてせう。この先の」と、お玉は頤で差示した。

「あゝ、あの時の家か」と、私は夜更けて行つて酒を飲んだ家を思出した。あれは寒い夜だつたが、蟇口を道に落したのに氣付かなかつたので、勘定の時にどきまぎして、その形に外套を置いて來た。

「二人の顔を覺えとるか知らん」と、私は其處へ行くのに興味を感じた。

上框に腰掛けた客はジロ／＼二人の顔を見たが、二階へ上ると、外に客がなかつた。私は風に向つて座つて、團扇を動かしながら、明るい光でお玉のしほらしい姿を見た。何を云出すかと危まれながら、かうして打寛いて若い女を見てゐると惡い氣持はしなかつた。

「お前、この頃はどうしてるの?」と、暫くして訊いた。

「どうしてるつて、あれからづうつと家にゐてよ」

「さうかい。昨夕通つて見たら、店にはゐなかつたがねえ」

私は女の言葉を疑ひもしなかつた。お玉は一寸驚いたやうに目を据ゑたが、
「いゝえ。私毎日家にゐたのよ。昨夕は叔母さんの家へ遊びに行つてたけどね」と、力強く云つて、「だけど、私もう家にはゐられないのよ。あんな小ぽけな店では幾らも商賣がないんだから、とても食べて行けないの。私、貴下に濟まないけど、買つて頂いた着物も無くしちやつたの」
「あんな着物は幾らにもなりやしないぢやないか」と、私は氣輕に云つて、「そしてこれからどうするんだい」
「どうしたらいゝと、貴下思つて？」
「さあ。僕などには分らないね。矢張洋食屋か何かの女中にでもなつたらいゝぢやないか。隨分收入があるんだらう」
「いゝえ、駄目！　洋食屋の女中なんかて幾らお金が殘るものですか。殘らなくつてもいゝけど、私今身體が丈夫ではないから、とても氣骨の折れる仕事は出來さうぢやありませんわ」
「しかし何をしたつて氣骨は折れるだらう。それよりや早く嫁に行つたらいゝぢやないか」
「さうねえ、それがいゝわね。何處か私のやうな者でもワイフにして呉れさうな所はなくつて」
お玉は邪氣なく笑つた。其處へ笊蕎麥に銚子を添えて下女が持つて來た。私はお玉が差付ける盃を拒んで、「僕は今日は飮まんよ、頭が惡いから」と云つて、直ぐに箸を執つて蕎麥を引寄せた。
「ぢや、私飮みますよ。よくつて」と、お玉は姿態をつくつて羨しがらせるやうに云つた。

「あゝ」私は平氣で嗇変を竪り出した。

「でも一人飲むんぢや詰らない」と、お玉は顔を顰めて呑みかけた盃を下へ置いて、「卒業祝ひに一杯ぐらゐいゝでせう。……あれからもう二月(ふたつき)の餘になるわね」

「あゝ」

私は置注(おきつ)ぎに注がれた盃を見詰めながら、「今日は僕に何か話があるんかい」と、それが氣になつてゐながら、さり氣なき風で云つた。

「別に變つた話つてないわ。わざ〳〵お呼び立てして濟まなかつたわね。堪忍して頂戴。私會ひたかつたから」

哀れつぽい調子で云つて、首を傾げて目を下へ向けた。それを見てゐると、私は久しく感じなかつた醉心地を覺えた。そして、自分の心に相手の心が染込んだ。何時までもかうして差向ひて坐つてゐたかつた。去年の冬この部屋で云つた事もきれ〳〵に浮んだ。が、ふとまた思返して、

「僕もお玉さんのことは忘りやしないんだけど、どうせ仕方がないんだよ。あの時云つたやうな僕の身の上だから」と、相手の感情を害はぬやうに用心しながら云つた。

「私、貴下(あなた)に迷惑を掛ける氣は些ともないのよ」

女は首を持上げて此方(こちら)を見入つた。私は眩(まぶし)いやうな氣がした。で、つと盃を執つて、汚れた酒をぐつと呑んで相手に差した。女は悦しさうにそれを受けて、

「貴下、私のお母さんをどう思つて？、あれて中々意地が惡いんですよ。どうかして私を利用して樂をしようとばかり思つてるの。この頃は私側にゐるのも怖いやうだわ。……だから今度は家を逃出して當分の間姿を隱さうかとも思つてるの。さうてもしなけりや私生命が續かないやうな氣がしてよ。……貴下どう思つて？」

「さあ。僕にや分らないが、逃出したつてお前が困るだらう」

「だつてお母さんの側にゐちや、私立つ瀨がないわ。私何も我儘をしたいんぢやないのよ」

「て、逃出してどうしようと云ふんだい。當てがあるんかい」

「だから、貴下に相談してるんぢやないの」

「僕だつて今は困るなあ」

私は再び胸を曇らせた。假りにも自分を手頼りにして素直に訴へてゐる女を、慘たらしうは取扱はれないやうな氣がした。慾得ばかりぢやない、眞心から自分に思ひを寄せてるんだものを。て、

「僕もこれから自分の腕一つてやつて行くんだから、浮かりしちやゐられんのだよ。どうせ思ふやうにならん世の中だから、お前も諦めてお母さんの云ふ通りにした方がいゝね。その中緣があつたら、また折々會つたつていゝんだから」

と、わざと笑ひながら慰めるやうに云つたが、不滿らしい風て暫く口を閉ぢた女の顏を見ると、ふと底氣味惡い氣がした。どうして呉れと云ふんだらう？

「あゝ」私は平氣で醬麥を啜り出した。

「でも一人飲むんぢや詰らない」と、お玉は顔を顰めて呑みかけた盃を下へ置いて、「卒業祝ひに一杯ぐらゐいゝてせう。……あれからもう二月の餘になるわね」

「あゝ」

私は置注ぎに注がれた盃を見詰めながら、「今日は僕に何か話があるんかい」と、それが氣になつてゐながら、さり氣なき風て云つた。

「別に變つた話つてないわ。わざ〳〵お呼び立てして濟まなかつたわね。堪忍して頂戴。私會ひたかつたから」

哀れつぽい調子て云つて、首を傾げて目を下へ向けた。それを見てゐると、私は久しく感じなかつた醉心地を覺えた。そして、自分の心に相手の心が染込んだ。何時までもかうして差向ひて坐つてゐたかつた。去年の冬この部屋て云つた事もきれ〴〵に浮んだ。が、ふとまた思返して、

「僕もお玉さんのことは忘りやしないんだけど、どうせ仕方がないんだよ。あの時云つたやうな僕の身の上だから」と、相手の感情を害はぬやうに用心しながら云つた。

「私、貴下に迷惑を掛ける氣は些ともないのよ」

女は首を持上げて此方を見入つた。私は眩いやうな氣がした。て、つと盃を執つて、汚れた酒をぐつと呑んで相手に差した。女は悅しさうにそれを受けて、

「貴下、私のお母さんをどう思つて？」、あれで中々意地が惡いんですよ。どうかして私を利用して樂をしようとばかり思つてるの。この頃は私側にゐるのも怖いやうだわ。…だから今度は家を逃出して當分の間姿を隱さうかとも思つてるの。さうでもしなけりや私生命が續かないやうな氣がしてよ。…貴下どう思つて？」

「さあ。僕にや分らないが、逃出したつてお前が困るだらう」

「だつてお母さんの側にゐちや、私立つ瀬がないわ。私何も我儘をしたいんぢやないのよ」

「で、逃出してどうしようと云ふんだい。當てがあるんかい」

「だから、貴下に相談してるんぢやないの」

「僕だつて今は困るなあ」

私は再び胸を曇らせた。假りにも自分を手頼りにして素直に訴へてゐる女を、慘たらしうは取扱はれないやうな氣がした。慾得ばかりぢやない、眞心から自分に思ひを寄せてるんだものを。で、

「僕もこれから自分の腕一つでやつて行くんだから、浮かりしちやゐられんのだよ。どうせ思ふやうにならん世の中だから、お前も諦めてお母さんの云ふ通りにした方がいゝね。その中緣があつたら、また折々會つたつていゝんだから」

と、わざと笑ひながら慰めるやうに云つたが、不滿らしい風で暫く口を閉ぢた女の顏を見ると、ふと底氣味惡い氣がした。どうして呉れと云ふんだらう？

ヮ相談にも乗つて呉れなきや、私もう何にも云はない」と、女はやがて獨言のやうに云つて、「さあ、もう歸りませう」と、立ちかけた。

私は手早く勘定を濟ませて外へ出て、天神の方へ歩みながら、「その中僕も考へとかう」と、相手の不滿を柔げるやうに云つた。女は無言て、小指を噛みながら、首垂勝ちに歩んだ。そして、鳥居の側まで來ると、「貴下直ぐ家へ歸るの」と訊いた。その聲は低かつたが、私の耳には力強く響いた。このまゝて歸られるのなら歸つて見ろと云はぬばかりに聞えた。

「私、今夜は家へ歸りたくない」と、女は更に呟いた。そしてふと氣付いたやうに、「貴下」と私を見て、「七軒町に風通しのよい貸間があるのよ。私一寸知つてる家なの。母子二人つきりて極く靜かだし、部屋も汚かあないの。貴下移つちやどう？　下宿屋は騷々しいから間借りをしたいつて、何時か貴下が云つてたから、私氣をつけといたの。何ならこれから行つて見ちやどう？」

「いや、もう間借したかはない」

九月になれば一家を構へるつもりなのに、間借りなんかするものかと思ひながら、「ぢや、兎に角今日はこれて別れるよ」と云置いて、私は心を急がせて、一直線に切通しへ出た。もういゝだらうと思つて、やうやく振返つたが、お玉の姿は見えなかつた。ずつと家へ歸つたか知らんと、女の云つた事を一つ一つ新に思ひ浮べた。新に思ひ浮べては考へて見ると、それが皆憐れでもあり優しくも思はれた。口數の少かつたのと、遠慮勝ちだつたのに氣づくと、一層可哀さうな氣がした。だけど、豫期してゐたやうに

執念深くなかつたのが幸ひだつた。あんな母親を持つた女に何時までも關係してゐてはどんな目に會ふかも知れない。おれは今大事な時だ。世の中へ出る間際に身體に傷をつけちやならない。そして、今夜も殘る夜を「若竹」で過した。圓喬は伴藏が幽靈に金を貰ふ所を話してゐた。淋しい場末の蚊遣りの烟や、夜更けて幽靈との蚊帳越しの話は、私をして山間の故鄕を連想させた。狐狸や天狗や死靈や生靈の話は、奧深い山や茂つた森を背景にして、屢々聞かされてゐたが、今牡丹燈籠を聞きながら思出すと、田舍の幽靈にも皆戀があつた。恨みがあつた。お露のやうな女はあつたのだ。

女の一念の恐ろしさが考へられた。芝居にても噺にても蛇のやうな執念深い女が多いが、實際の世でもさうだらうか。

（五）

寄席がはねて外へ出ると、靜かになつた町に淡く月の光が流れてゐた。私は歸り途に森川町の下宿屋の前に道寄りすると、友人の江川が窓際のテーブルに寄つてゐるのが見えた。聲を掛けて部屋へ通ると、江川は書きかけた手紙に文鎭を置いて身體を捩向けて、「今夜君のとこへ行つたんだらうつて皆怪しんでたよ。ゐなかつたから、多分東片町だらうと思つて後から行つたんだぜ。今夜何故來ないんだらう。何處かいゝ遊び場所が出來たのかも知れんと云つて、彼處の母親も心配してた」と、眞顏で云つた。

「些つと用事があつたから」と、私は空々しく云つて、「しかも僕もさう度々行きやしないよ」と言譯を

した。

「だけど彼處は氣持のいゝ家だね、ホスピタブルで。皆んなが捌けとる割に厭味がなくつていゝ。僕もこれから時々遊びに行かうと思ふ」と、江川は落付いた目を据えて、持前のボキ／＼した口調で云つて、「彼處ぢやどうも君を自分の家の者のやうに思つてるらしい。そして少し君を買被つてる」と薄笑ひをしたが、それが私の耳に皮肉のやうに聞えた。

「別に買被つちやゐないよ。僕はこれで何でも剝出しだから」

「しかし人間は男でも女でも好きだとなると買被るものだよ」

江川は椅子を離れて疊の上に胡坐を搔いて、煙草を吸出した。月は淺い軒から流込んで、ランプの火は涼しい風に動搖して居る。私はこの狹苦しい部屋に蟄居して、いやに哲學者染みたことを云つてゐる。色の黑い男を、憫れむやうな心で見てゐた。

「あんまり君を信用し過ぎてるぜ、あの家では」と、江川は思ひ出したやうに、また薄笑ひをした。

「それは當然さ」と、私は得意らしく云つた。「僕には好かれる素質があるんだね。僕は生れてから誰れでもさう厭がられたことはないね。一度ぐらゐ手强く厭がられて見たいやうな氣がする。」

「そりや君が自分で氣がつかんからだよ。しかし一生そんな氣にゐられりや仕合せだ。人間と人間とは腹の中ぢや互ひに憎惡の刃を磨いてるんだから。君はまだ經驗がないから分らないけれど、僕は早くからひどひ目に會つて、知り過ぎるほど知つてゐるね」

「可愛い裏に憎い〳〵がある位なことは誰だつて知つてらあ。可愛かつたり憎かつたりするから面白いんさ。しかし僕なんか自分で注意して惑溺はしないから、厭な思ひをしないで濟むんだ」

「いや、まださう悟るのは君にや早過ぎるぜ」と、江川は首を振つたが、やがて一二度話したことのある昔の戀が思出したやうに顔を曇らせた。「僕も女に裏切られたと知つた時にや、實に癪に觸つた。女が側にゐりや八つ裂きにしてやらうと眞から思つた。先方の母親から僕の母親に頼んで、卒業したら結婚して呉れと向うから頼んで置きながら、二三年立つ中に一言の言譯もしないで勝手に破談してしまつたんだからね。それも母親よりも女が惡いんだよ」

その女の送つた二三の優しい手紙を、江川は今も持つてゐて、嘗て私に見せたことがあつた。その女が今は江川よりも詰らぬ男に嫁してゐることも聞いてゐる。で、同じ話を熱心に繰返されるのを私は好まなくて、それを堰止めるやうに、

「君のやうな場合は有りうちの事ぢやないか。さう一人に拘泥する必要はないと思ふ。癪に觸つたらそれ以上の女を見付たらいゝぢやないか。僕はその手段を執るね」と、事もなげに云つた。

「誰れてもさう云ふね。經驗のない常識家は」と、江川は皮肉な笑ひを浮べて、「所が實際その場合に臨んだら理窟通りにや行かんものだ。僕の事だつて一寸話す譯に行かない込入つた事情があつたんだ。兎に角君にしても一度身を切られるやうな痛い經驗をして來にや人間の味は分らない」

「さうかねえ」

私は輕く受けて口を噤んだが、江川の今夜の言葉が、不斷よりも毒々しいのに氣づいた。何だか自分を見下げてゐるやうな意地の惡い樣子も見えた。座敷へ入つた時から變だつたが、何故だらう？　別に怒らせるやうな事をもした覺えはない筈だが……………て、私は急に不快に感ぜられて、直ぐに出て行きたくなつたが、不意に立つのも變な氣がされて、「あゝ、もう十二時だ」と時計を見て呟いた。そして、「君はこの頃何時に寢るんだね」と訊いた。

「僕は時間を極めて寢たりしない。寢たい時にや寢るし、起きたい時分に起るんだ。人間は機械的に束縛されちや駄目だ」

「さうだねえ。僕もその主義だよ。しかし今夜はもう眠くなつた」

私は欠伸をしながら立上ると、江川は「まだ早いぢやないか」と引留めたさうに云つて、「明日の晩も束片町へ行くんかい」

「さあ………」

私は階子段を下りながら、その上まで見送つて來た江川を顧みて會釋したが、彼れの濃い眉や平たい鼻が厭らしく思はれた。

宿へ歸ると階子段に腰掛けて、肌を露して居睡りをしてゐた下女が、目を細く開けて、「お留守に電話が掛りましたよ」と知らせた。誰れからとも云はなかつたが、私はそれと察して氣がゝりになつた。

（六）

「人間相互の憎み」と云ふやうなことを江川が頻りに説いてゐたが、それは彼自身の今夜の態度に現はれてゐたのだと、私は自分の部屋へ入つてからも、暫く不快の感に襲はれてゐた。そして江川がこれから折々東片町へ遊びに行かうと云つたのを思出すと、厭て溜らなかつた。花園を泥足て汚されるやうな氣がした。

て、翌日は彼れの行かぬ時にと、朝起きると直ぐに東片町へ行つた。親爺は家にゐなくて、母親と娘とが新聞を讀んでゐた。庭には眩しいほど日が照つてゐる。私は汗に浸つた首のまはりを拭つて、二人の側に坐つて、新聞に目を向けて、

「今日は十六日てすね、僕は今朝まだ新聞も讀まないんてす。何か面白いことがありますか」と訊いた。

「淺草は賑かてせうね」と、母親は云つたきり、新聞の噂はしなかつた。そして仕立上つた浴衣を取出した。私は直ぐに汚れたのを脫いて新しいのに着更へて「いゝ柄てすね」と、自分て身裝に見惚れた。

「貴下にはこんなのが調和してるわ。裄も丁度いゝ工合てせう」と、お種さんが云つて、親子で左右から私を見詰めた。

「仕立賃に何か奢りませうか、涼しいと淺草あたりへ行つてもいゝんだけど」

私は調子づいた。そして、何處か涼しい所――多摩川か十二社かへ一日遊びに行くやうに誘はうかと思つたが、母親を連れて行くのては張合がなかつた。で、長い睫毛の中に露を含んだやうな黑目の動くのを目の前に見ながら、二人の樂しい世界を描いてゐると、柔しい母親も小憎らしい妨害者のやうに思

はれてならなかつた。先日は父親が邪魔になつたが、今日は母親さへも邪魔になつた。そして、次第に抵牾かしくいら〳〵した氣持になつた。ホスピタブルな家だの、居心地のいゝ家だのと云つたつて、そんな事は最早悅しくも何ともない。只二人の聲を外に聞く人のない所へ行きたい。昨夕の蕎麥屋でもいい。暑苦しい所でもいゝ。……この廣い東京に居りながら此處でかうして會ふより外はないと思ふと情なかつた。

て、不思議に心が沈んで、不斷ほど口數が利けなくなつて、庭の草花の話などしてゐても、それが如何にも空々しくて、口と心とが別々に動いてゐた。この頃は母子二人きりの時に來ると、折々自分で遠慮氣もなく臺所へ入つたり、戸棚を開けたり、茶菓子を捜出したりすることがあつたが、今日はさう馴々しくはしやぐ氣になれなかつた。口輕にお種さんを調戲へもしなかつた。

「今日は笠原さんも大變大人しいのね」と、お種さんが怪んだ。

「少し考へ事があるから」と、私は笑ひに紛らせて、「江川は昨夕何か云つてゐましたか」と、それでも話の材料にしようとした。

「いゝえ、何にも。だけどあの方も面白い方ね」

「えゝ」と、私は氣のない返事をして、「僕のこと何か云つてましたか」

「貴下は世間見ずのお坊ちやまだつて。さう云つてゝよ」

「馬鹿にしてらあ」と、私は苦笑した。が、別に惡くは云つてはゐなかつたらしいので安心した。

「あの男はまだお坊ちやんで正直だから、浮かりすると女に騙されるかも知れない、今の中に早く結婚させた方がいゝなんて、江川さん頻りにさう云つてなさるんですよ。そして私に、早くいゝのを搜して遣れつて、眞劍に云つてなさるの」母親は乘氣になつて、傍から口を出した。

「有難い譯だね。そして貴女はどう返事しました？」

「笠原さんには私達がお世話しなくつたつて、どんなのでも望み次第におあんなさるでせうつて、さう云つて笑つたんですよ」

「幾ら私ても、望み次第と云ふほどぢやありませんね」

私は戯談らしく云つて笑つた。そして、江川と云ふ男も惡い人間ではないけれど、一寸頭が掛けてゐるからと、あまり深入させぬやうに注意した。女に棄てられてからあゝなつたと解釋して、さも意氣地がないやうに江川の身の上の概略をも話した。あの人にそんな事があつてと、二人は面白がつて聞いて、同情の言葉を發した。私は何となく厭な氣がした。

日はます／＼勢ひを增して、燒付きさうに庭を照らしてゐる。風は死んで木の葉一つ動かない。お種さんの顏にも汗が煮染んだ。「暑い！」と屢々歎息しては眉を蹙めた。私はその汗に濡れた滑かな肌が想像されてならなかた。蒸れるやうな空氣の中に汗の臭ひや髮の臭ひが、鼻を突いて來るやうだ。

暑い戸外へ出る氣にはなれなくて、私は引留められるのを幸ひに、午餐をも饗ばれて、日暮まで愚圖々々してゐた。珍らしく一日かうして見てゐると、母子は何かしら家の中の用事があつて、彼方此方と

動いて、立つたり坐つたりしてゐる。そしてお種さんが汗みどろの身體を動かしてゐるのを、私は油斷なく目で追うてゐた。脊伸して爪立てた足の裏をも、屆んだ後姿をも……嘗て薄化粧して正裝して琴を掻鳴らしてゐるのを見たことがあつたが、その時よりも取繕はぬ今日のお種さんの方が、私の心を強く刺激した。駄洒落など云つて居れぬほどだつた。

「今お湯を沸かしますから、行水をつかつて晩まで入らつしやいな。遊び友手にいゝてせう。寄席のお伴なら致しますから」と、母親は力を入れた痩せた手で、水道の水を釜に移しながら云つた。

私は生返事をして、縁側に立つて迷つてゐたが、ふとこの上此處にかうしてゐるのは却つて苦しいやうに思はれて、出拔けに暇を告げて、逃げるやうに外へ出た。日の光は最早薄らいてゐた。暑さに疲れた顏した勤め人らしい男が幾人も通りを跡つてゐた。

何故今日はあんな氣持ちになつたんだらう？　と、私は自分の部屋へ歸つてから考へたが、最早以前のやうに、只行つて快く話してくることは出來なくなつたやうな氣がした。て、當分足踏みしないてゐようかとも思つて見たが、それては仕事もないのに、暑い東京に留つてゐる理由がない。江川など外の男が我は顏に出入するのに、自分だけ遠ざかつて平氣てゐられさうてもない。

て、私は思詰めた果てに、無理にても機會を見つけて、自分のもだ〳〵した思ひをお種さんに打明けようと決した。捌けてゐながらも注意深く、娘の周圍を見張つてゐるらしいあの母親の黑い目を避けて、

自分の心を傳へる工夫を凝した。まさかの用意の密書をも認めることにした。

まづ汗を流してからと、私は風呂へ入つて來て筆を執つたが、短かくて氣の利いた文句は容易に見つからなかつた。で、記憶を辿つて、これまで女へやつた手紙の文句を思出したり、お玉などから寄越した手紙を、參考として文庫の中から取出して讀んだりした。そして、讀んだり思出したりしてゐる中に、遂に密書は書く氣がしなくなつた。あれほど懇意になつてゐる家なのに、そんな者を用ひるのは危險でもあり、愚かしくも思はれたのである。

私はこの夜を過ごしかねた。涼みに行く氣にもなれず、「牡丹燈籠」の續きを聽きに行く氣にもなれなかつた。向ひの醫學生の木曾節を聞きながら、身體一つを持扱つた。

（七）

例になく早く寢たので、翌日はまだ朝風の涼しい間に目が醒めた。頭が輕くて身體には力が滿ちてゐるやうに感ぜられた。朝餐も甘かつた。お種さんのことも胸の曇りにはならない。自分に心を寄せてゐるものを、さう慌てる必要もないと思はれた。

しかし、お玉はどうしたらう、昨日留守の間に二三度電話が掛つたらしいが……私は態よく斷るばかりと待構えてゐたが、多少の損害は覺悟せねばならなかつた。萬更厭ではない女に思付かれるのは惡くもないけれど、そのために東片町の人に信用を失ふかも知れぬのが恐ろしかつた。ほんの一時で末の望みのない女に邪魔されて、新しい幸福を取逃がすのが恐ろしかつた。慾の深さうな母親に強迫り込まれ

てもしてはと思ふと更に恐ろしかつた。

今日屹度また電話を掛けるだらう……私は忘屈なあまりに、それを待設けるともなく待設けてゐるやうだつたが、正午過ぎまで何の音沙汰もなかつた。で、最早掛らないこと丶思つてゐると、日暮前になつて、ふと「笠原さんお客様ですよ」と、不斷に似ない慇懃な下女の聲を先觸れに、直ぐその後からお玉が濟まして入つて來た。

意外なので私はどぎまぎした。「暑かつたらう途中が……」と、團扇を取つてやると、「さう暑くもないの、俥で來たから」と、女は私の側近く坐つて、「あの女中は私をよく覺えて丶よ。電話はあの女が取次ぐんでせう、聲がよく似てるの」

それには答へないで、私は「あれからどうした？　家へは歸らなかつたんかい」と訊いた。

「え丶、歸るものですか。あれからずうつと歸らないんだわ」

「ぢや、何處にゐるの？」

私は不思議でならなかつたが、お玉は明ら樣に打明けなかつた。曖昧に言濁らせた。「宿めて呉れる所ぐらゐ幾らでもあつてよ」と、問はれるのを煩さうにして云つた。

「しかし、何時までもさうしてちやゐられまい。困るだらう」

「え丶、そりや困らないことはないわ……だけど、私今お金にやさう不自由してもゐないの」と云ひかけて、ふと氣付いて取消すやうに、「一寸譯があつて、小使ぐらゐ融通がつくやうになつたの」

「ぢや、いゝさ」私は先夜の話と違ふのを怪みながらも、多少安心して、「工面がよくなつたら、僕に少し貸さないかね」と笑つた。
「さうね、貸して上げてもいゝわ。……だけど、證文が入つてよ。貴下私の云ふ通りに書けて？」
「あゝ書くよ。どう書くんだい。云つて御覧」と、私は面白がつて筆を執つてた。するとお玉は身體を乘出して机の上覗いて、只笑つてゐたが、やがて、
「貴下これから私の行く所へ一緒に來なくつて」と、一寸後を見てから聲を潜めて、「話は後にして、私の連れてく所へ默つて入らつしやらない？　決して貴下に迷惑を掛けるんぢやないの」
さう云ひながら目に力を入れて私を見据ゑた。私はその目の力を斥けられなかつた。かうして此處に長く坐つてゐられるよりも、何處へでも一緒に行つた方が氣樂であるやうにも思はれた。で、
「ぢや出て行かう。一緒に出られもしないから、お前は先へ行つて何處かで待つといて。僕は直ぐ後から行くよ」と、私は手易くその氣になつた。
あまり手易く同意したのを女は疑ふやうに、「屹度」々々と二三度確めてから、三丁目の角でと約束して出て行つた。
私は何も考へる餘裕はなかつた。只時計の針の進むのを見てゐて、十分間も過ぎた頃、脇目も觸らずに後を追うて行つた。そして、電車の停留所で見張つて待つてゐたお玉に随いて、切通しを下つた。何處へ行くつもりかと、心の中で面白かつたが、多少不安の感じもした。で、行先をも眞面目に訊いて見

たが、女はわざと打明けない。睨むやうな目付をして、「默つて隨いて來るつて、貴下承知したんてせう」と云ふ。

私は返す言葉もなかつた。變に思ひながら、默つて歩いてゐると、女は七軒町の方へ足早に歩いて、ある家の裏口の木戸を開けて入つた。軒端の細い竿に襁褓を幾つも垂れてゐるのが、先づ私の目についた。緣側から上ると、表の方に煙草の箱や卷紙などの並んでゐるのが、ちらと見えた。店に坐つてゐる主婦が振返つて、瓦斯の光でその大きな平たい顏を見せて。お玉は主婦の側へ行つて一寸耳打ちしてから、先に立つて二階へ上つて、マッチを擦つた。

「此處かい、先日云つてたのは」と、私は天井の低い六疊の部屋を見廻した。

「いゝえ、さうでもないの」と、女は曖昧に打消して、「此處はこの頃主婦と赤ん坊ばかりだから、私折々お手傳に來てるの」

東の窓からは上野の森が薄暗く見えた。私は窓に凭れて、涼しい風に吹かれながら、ぼんやり夕景色を見てゐた。すると、お玉は階下から敷島を一袋取つて來て、私に添うて立つて、自分で一本火を點け、私にも一本取出して渡した。

「いゝ所てせう、貴下移つて來ちやどう?」と、顏を向けて、煙を私の顏へ吹付けた。

「あゝ」と、私は生返事をして、尙外を眺めてゐた。

「さうすれば、私が來て、毎日御馳走して上げてよ。……でも今日此處までよく隨いて來たわね。此處

へ來た以上このまゝて逃げて歸らうたつて駄目よ。覺悟して入つしやい」

「怖いねえ」と、私は戯談らしく云つて、窓を離れて、部屋の眞中に座つたが、女の顔は凄いやうに見えた。淋しい哀れつぽい顔立の女だが、ふとすると、それが惛味を帶びて凄くなることがある。その凄い色は何時ものやうに私の心を尻込みさせた。

お玉は太い息を吐いて、私の前にぐつたり座つて、「でも此處へ貴下を連れて來たから豪いてせう。これからも來なけれや、何時だつて私迎へに行きますよ。貴下が幾ら厭がつて逃げたつて、私離れる氣がないんだから……だけど、何もそんなに心配しなくつてもいゝの。貴下の迷惑になるやうなこと死んだつてしないから。戀しい人の出世の邪魔をするやうな女ぢやないのよ」

さう云つて、目に媚を含ませて、馴々しい素振をしたが、私にはそれがます／＼底氣味惡く感ぜられた。以前からこんな女だつたか知らんと疑はれた。て、その神經に觸らぬやうにわざと顏色を和らげ、優しい口調て、

「お前どうするんだい。僕も此處まで來たんだから、極めることは早く極めようぢやないか」と云ふと、

「別に極めることとつてないわ。かうして貴下に會つてればいゝんだから」と、甘へた聲て、片手を私の膝に掛けた。私は其手を斥けかねたが、心は落付かせて、

「しかし、今のお前の境遇はどんなのかよく聞きたいね。話してお聞かせよ。話したつていゝぢやないか。その筈だつたのに」

と、またしても、それを知りたがつたが、お玉は險しい目付をして一言で跳付けた。何故そんなに煩く訊くのと、それつ切り私の聞きたいことは云はなかつた。そして、氷を持つて來た主婦に向つて、「この人だよ」と、顋で私を差して、「始終噂ばかりしてたわねえ」と云つて、二人で懷かしさうに私を褒めそやした。

私は囃立てられて惡い氣持はしなかつた。つい口を辷らせて、人目を忍んで僅かの逢瀨を樂んでゐた昔を話したりした。

「寒い晩に天神樣の鳥居の傍で待ちぼうけを喰はされた事もあつたぜ。僕の方ぢや一度も違約した事はなかつたけれど」

「そりや、貴下とは違つて、私の身は自由ぢやなかつたんですもの。貴下は何時だつて御自分の好きな時に出られるんでせう。……儘ならぬ身體で遭ふんだから、私の方はよく／＼の思ひだわ。ねえ、主婦さん、さうでせう。」

「さうだともさ」

主婦は相槌を打つて階下へ下りた。その足音の消えると、私は思切つて「もう歸らなくちや」と呟いて立上つたが、お玉は慌てゝ道を塞ぐやうにして、「逃げやうたつて、下駄がありませんよ」と、冷かすやうに云つた。私は頻りに言爭つて、果ては「用事があるから」と賴むやうに云つたが、何の甲斐もなかつた。女の目と口許には意地惡い覺悟が現はれてゐた。

私は虜にされた氣がした。そして、手荒く爭ふことも出來なくて、「今日は困るんだがねえ」と零しながら、再び腰を卸した。女は安心したらしく溜息を吐いて、
「このまゝ歸るなんて、貴下は隨分氣が强いわね。そんなに恩に着てまてゐて貰はなくつてもいゝけど、惚れた弱味だから仕方がない」と、口元で淋しく笑つた。
「なに、僕だつて好んで歸りたくはないさ。外に好きな女が一人もあるんぢやなし」
私はわざとから云ひながら、目に映つるお玉と目に見えぬお種さんとを心の中で鬪はせて、竊かに樂んでゐた。お種さんに濟まぬやうな氣もした。

（八）

翌朝お玉が二階の窓から首を出して、私の歸るのをぢつと見送つてゐたが、その顏付は下宿へ歸つてからも、私の心を去らなかつた。執念深く私を見入つてゐるやうに思はれた。命懸けても離れないと云つてゐるさうだ。昨夕の言葉や樣子を思出しても、このまゝて緣を切る望みはありさうぢやない。
「切る氣なら切つて見やがれ、二人の中は」と、首を振はせて小聲で唄つた。
「あの時試驗前だつたから、貴下の爲を思つて、一時別れるやうにしたのよ。それを貴下本當にさう思つてたの。隨分酷い人だわねえ」と、怨むやうにも云つた。
私はそれを全然信ずるのでもないが、自分に對して執着の火の燃えてゐることは疑はれなかつた。何故昨夕直ぐに歸らなかつたらう。怒らせても恨ませても何故突退けて歸らなかつたらうと、一夜を彼處

て明かしたことが後悔された。最早まさかの時分に手強く斥ける口實もなくなつたやうに思はれた。「自分にはお種さんのやうな女があるのに」と、私は見すく\幸福の邪魔を造りつゝあるやうに思つた。あんな性分のお玉のことだから、私が心變りして外の女に思ひを寄せてゐると知つたら、どんな端(はした)ない眞似をするかも知れない。若しも近藤の家にお玉との關係を知られても迷惑だ……

私は一日下宿でごろく\しながら、心を痛めてゐたが、しかし、この先お玉をどうしようとは考へもしなかつた。そして、夕方になると、其處等を散歩して、「若竹」へも寄つて歸つた。

何時ものやうに、電燈の下で夜の更けるのを見てゐたが、何となしに佗しかつた。お玉は今時分何處にゐるのか知らん。うつとりと沈んだ顏で私のことを思廻してゐるのだらうと、可哀相にもなつた。で、文庫の中から女の手紙や寫眞を出して見た。寫眞は實物よりも拙く撮つてゐる。目と口許とに男を迷すやうな力が現はれてゐない。氣取つて堅くなつてゐる。

手紙は一々消印や日付を見て、その時を追想しながら開けた。どれも折目正しく疊んであつて、少しも皺が出來てゐない。假名澤山の廻らぬ筆で書いてあるが、私の心にはその場合々々の有樣が懷かしく浮んだ。男を思ふ眞心の流れてゐる所もある。取繕はぬ馴々しい文句が殊に悅しかつた。

どうしても家が出られなかつたのです。本當に申譯がありません。どうぞかんにんして下され。待つてゐるあなたよりも、家でやきもきしてゐる私の方がどのくらゐ心配だか知れませんよ。立つても坐つても居られませんてした。さぞお腹をお立てなされたことゝ夜中ちつとも眠れなかつたのです。ど

うぞかんにんして下され。惚れた人の御きげんを惡くすると思ふと、心配で〳〵なりません。

これは待呆けを喰はされた後の手紙で、私はこの手紙を見るまでは、心が焦立つてぢつとしてはゐられなかつた。女に欺かれたといふやうな疑ひは更に起らなかつたが、女の身の上に變事があつたのではないかと氣遣はれたのだつた。

暫らくお目にかゝりませんね。この頃のやうきはおからだにはさはりませんか。案じて居ります。先日一寸お話し申しましたやうに、今日から廣小路の寄席の裏隣りの洋食屋へ奉公することになりましたから御安心して下され。おひまには何か召上りに來て下され。御馳走をいたしますよ。

私はその翌日其處へ行つて見た。階下が玉突場で、あまり廣くもない二階だけが食堂になつてゐた。白布をかけた粗末な食卓が並んでゐるばかりで、草花一つ見えなかつた。飯時を過ぎてゐて、外に客はなかつたので、ストーブの側へ椅子を寄せて、お玉とこそ〳〵話をしたが、その時お玉は此處へ來る客を罵つて、揶揄はれたり手を握られたりして煩くて仕樣がないと眉を顰めて訴へた。私は「辛抱して一つ所に長くゐる方がいゝ」と、妹にでも云つて聞かせるやうに云つて慰めたが、お玉は椅子に片手を掛けて、「貴下さへ時々來て下されば」それを力に辛抱すると云つた。其處へ玉突の客が三四人上つて來て、ビールやコーヒーを飲みながら、賑かに話を始めて、女中をも揶揄ひ出した。私はその騷ぎを見ながら、一人靜かに洋食を食べてゐたが、お玉が皆んなに持囃されてゐるのが悦しかつた。

その後三日目に一度ぐらゐは會ひに行つた。顏を見せに行つた。そして、人目の闘を破つて、二人が

互ひに心と心を通はせるのが面白かつた。小暗き所でこつそり會ふよりも、こんな所で何氣なく會つて、あたりに氣を兼ねて、目で物を云はせるのが興が深いこともあつた。だが、一度夜遲く微醉の客がお玉を小脇に挾んで、だらしない事をくど〳〵云つてゐるのを見た時は不快に堪へられなかつた。何故お玉はその男を突飛ばさないで、大人しく聞いてゐるのだらうと齒痒かつた。終ひには忌々しくなつて、「おい姉さん、勘定だ、早くして呉れ」と慳貪に叫んで、金を拂ふとお玉を睨付けて、荒々しく二階を下りた。そして外へ出てからも暫らく不愉快の思ひは去らなかつた。

——時々お目にかゝつても、しみ〴〵お話しも出來ず、もどかしくて仕方がありません。それにこの頃はからだが惡くて、立ちつゞけの商賣はとてもつとまりませんから、昨日ひまを貰つて來ました。ついては至急お目にかゝりたくて仕方ありません。六時ごろ△△へ來て下さい。あゝ早くお目に掛りたい。——妹より、戀しき兄上樣。

私は「兄より妹へ」として手紙を送つたことがあつたが、お玉もそれに倣つたのだ。「戀しき御許へ」よりも、「兄上樣へ」と書かれた方が悅しい氣がした。

毎度ながら優しいお言葉、くりかへしては思ひ出して、ひとりで泣いて居ります。あゝあなたに愛相をつかされぬ中に死にたい。男心と何とやらと云ひますから

これは三月二十日の日付であるが、その後の手紙は見つからない。まだ二三通は確かにあつた筈だが、間違へて反古にしたのだらうか。一番大事な最後の手紙の無くなつたのを、私は殘念がつた。「お互に厭

きも厭かれもせぬ中ですが、昨日のお話で別れることに決心しました。今日も涙のかはく間はありません」と書いてあつた文句は、今も明かに覺えてゐる。あの時私は不思議に厭な氣もしなかつた。女に思ひを殘させて別れるのが樂みだつた。菓物の甘い汁だけ啜つて、糟を吐出すやうな氣持もした。そして、その頃私は近藤の家へ足繁く出入してゐた。

（九）

三日ばかり東片町へは足を向けなかつた。お玉からも音信がなかつた。私は寢たり起きたり、取留めのない將來の方針を考へたりして日を暮した。その間に江川が一度訪ねて來た。「あの晩近藤の家へ行つたら、君の歸つた後だつた」と云つて、その家の噂をした。私は冷淡さうに返事しながら、その話には心を留めてゐた。

「母親はあれで中々娘自慢らしいから、婿撰びが六ケ敷さうだね。君なんか最も目星を付けられてる方だが、しかし、早く極めた方がいゝぜ。競爭者が現はれん中に」と、江川は眞顔で親切らしくも云つた。

「それには及ばんさ」と、私は冷然と構えて、「人間はかうして一人で下宿にゐる間が幸福なんだぜ、君は今の境遇が厭なんかい。女は幾らでもあるし、自由でいゝぢやないか」と、相手の皮肉に裏切りするやうに云つた。

「それはさうさ。殊に君はもう二三年は獨身でゐる方がいゝね。早く世帶苦勞すると、折角伸びる者が伸びなくなつてしまうよ。岸田でも丸山でも實例は幾らでもあるからね。君はもつと自愛して勉強した

ませう。結婚は三十になつてからでいゝ」

江川は私の前途に望みを寄せては、淳々と早婚の弊を説いて、忠告めいた口を利いた。私は變に思ひながら、いゝ加減な相槌を打つてゐた。そして江川が歸つてから、彼れの云つた事を幾度も思浮べて見たが、江川が東片町で何か自分の不爲のことを云つてゐやしないかと疑はれ出した。二三日つゞいて顔出しゝないのが不安心になつた。

て、四日目に晝飯後に出て行つた。長い間行かなかつたやうな氣がして、その間に家の樣子が變つてゐさうにも思はれたが、行つて見ると、先日と變つたこともなかつた。親爺がゐなくて、母と娘とが茶の間に差向ひで洗張りの仕末をしてゐる。庭には暑い日が照つてゐる。百日紅の葉陰に一莖の花魁草がひよろ〳〵して、紅の花をつけてゐる。母子は別に珍客が來たやうな風もしなかつた。目で迎へて仕事の手は休めなかつた。私は柱に凭れて大人しく二人の手の動くのを見てゐた。

「この頃笠原さんは大變大人しいわね」と、お種さんは先日のやうに云つた。

「本當にね、どうしたんです。暑さに弱つたんでせう」と、母親も私の顔を見詰めた。

「えゝ」私は輕く答へて、外のことを考へてゐたが、やがて「江川は何か云つてゐましたか」と出抜けに訊いた。

「貴下のこと？　いゝえ、別になんにも」と、母親は別に氣にも留めなかつた。

私はそれで安心して、また暫らく口を噤んでゐたが、次第に先日と同じやうな氣持になつた。お種さ

んの汗みどろの身體が執念く私の心を戰かした。

「私が此家へ始めて伺つたのは何時てしたかね、花時分てしたね」と、私は胸苦しい氣持から逃げて快い昔の記憶を浮べやうと分り切つたことを訊いた。

「上野へ夜櫻を見に行つたてせう、御一緒に」と、お種さんが答へた。「花は散つてたけど、いゝ月夜てしたわね。私覺えてゝよ。」

「つい此間のやうだが、あれから四五六七と、もう四月にもなりますね、早い者だ」と、私は四月の間も戀の匂ひをのみ嗅ぎに此處へ來てゐることを腑甲斐なく感じながら、「これて九月からは滅多に來られなくなるてせうが、こんなに頻く來てたものが、ばつたり足向けしなくなつたら變てせうね」

「おや、貴下九月から被入らないつもり？」

「笠原さんが被入らなくなつたら、淋しくつて仕方がないだらうよ」

親子の言葉も顔付も思ひの外冷淡だつた。私が來なくなると云つたことが、さして二人の心に影響を及ぼしたやうにも思はれなかつた。て、ふと私は疑ひを起した。欺かれたやうな氣がし出した。そして、そんな筈はないんだがと、強いて打消したが、心は落付かなかつた。

親子は一通り仕事が片付くと、麥酒の空罎に入れて、堀井戸て冷して置いた麥湯な取出して、三つのコツプへついだ。二人はそれを甘さうに飲みながら、眞夏の疲れを忘れてゐるやうだつた。冷え加減だの砂糖の分量だの下らない事を、さも興味あることのやうに話合つて、親子は苦勞の影もなく如何にも

睦じさうに見えた。そして、私はこれまでのやうに、その仲間に入れなかつた。二人の睦いのが厭はしくさへ思はれた。

「さあ、僕はもう歸らうかな」と、私は腰を浮せた。親子は私があまり口數を利かないで、早く歸らうとするのを怪んだ。

「寄席のお約束はどうなすつたの」と、母親は訊いた。

「今夜實行してもいゝてす、どうせ僕は圓喬だけは聞きに行くんですから。都合て私の家へ誘ひに來て下さい。そのつもりて待つてますから」と、私は玄關て云殘して歸つた。

て、一人行くよりはと、夕餐後に待設けてゐたが、七時頃になつて、お種さんが玄關まで來て、「用事が出來て行けないから」と、下女を通して知らせた。私は慌てゝ玄關まで驅出て、一寸でも部屋へ上らさうとしたが、お種さんはどうしても上らなかつた。

「お母さんか貴女(あなた)か、どちらか一人だけても行けないてすか。僕は當てにしてゐたんだから」と、私は失望したらしく云つたが、

「今夜は一寸差支えがあるんですの」と、云つて、お種さんは笑顔を見せただけて歸つた。

「私は一度待設けてゐたゞけに、折角の樂みを俄に奪はれたやうて、寄席行が詰らなくなつた。が、宿にもじつとしてゐられなくて、兎に角外へ出た。東片町の方へ曲つて、近藤の家の前の薄暗い片側を何氣なき風て通りながら、心を凝して物音に耳を留めた。座敷の明りが微(ほのか)見えて、笑ひ聲も聞える。家の

中は賑かさうだ。どんなお客が來てゐるのか分らないが、お種さんが今下宿へ來た時のやうな笑顔をして、客の前で動いてゐるのが目の前に描かれた。そして、自分は今其處へ行けないのだと思ふと、その座敷が戀しく、客が羨しくなつた。周圍を憚つて通越したが、若しやその客は江川ぢやないか知らんと、變な疑ひまで起つた。て、まさかと打消しながら、森川町の下宿へ行つて、外から二階を見上げたが、テーブルに寄つた江川の無意氣な横顔は光を受けて明かに見えた。

會ひたくもないので、私は引返して表通りへ出て、夜店を覘きながら自然に電車道の方へ足を向けた。「お玉から音信（たより）がないのも不思議だ……結句その方が幸ひだが」と、私はふとさう思つたが、何だかその後の樣子が見たくなつた。隱立してしてゐる女のこの頃の生活狀態をも知りたくなつた。て、フラフラ切通しを下りて、七軒町の家まで行つた。裏木戸の方から見上げると、二階には燈火が點いてゐない。表へ廻つて見ると、主婦（かみさん）は浴衣の袖をまくつて、閾の側に座つて團扇を動かしてゐた。私は煙草一つ買つて、「散歩の次手に寄つた」やうに言譯して、店先に腰を掛けた。

「お玉さんはこの二三日些（ちつ）とも顔を見せませんですよ、どうしたのか知ら」と、主婦（かみさん）は問はれぬ先に云つた。

「自分の家にゐるんでせうか」

「さうでせうよ、私よく知りませんですよ」

主婦（かみさん）は深入りして訊かれるのを好まぬらしいので、私は氣拙（きまづ）い思ひをして、「僕も事情が出來て、もう

あの女には會へないんですから、今度來たらさう云つといて下さい」と云つて、直ぐに店を出た。

そして、此間お玉に會つたのが、狐に撮まれたやうな氣がした。「人を馬鹿にしてやがる」と忌々しくなつた。

（十）

「埃だらけの東京で何をしてゐるんだい。新しい魚を食べて鹽風に吹かれてゐるこの幸福なる生活は、下宿で乾物ばかり食べてゐる君などには想像も出來まい。僕等は皆身體中銅色になつてゐる。君も來ないか。鹽風を恐れるやうぢや駄目だが……」三人連れて房州へ行つてゐる友人が、連名てこんな葉書を寄越した。

「毎日こんな下らん事を考へてゐるよりや、思切つて自分も行つて見ようか」と、私は一時その氣になりかけたが、とても實行は出來なかつた。友人の送つて來た海邊の繪葉書を見ながら、海水服を着て沙の上に横はつてゐる若い女を空想して一日を暮した。若い女はお種さんになつたり、お玉のやうになつたりした。果てのない海を前にして、夢のやうな事を言合つてゐる男女が、いろ〳〵の形をして心の中に浮んだ。

そして、そんな空想の果ては、堪らなく佗しい。じつとしてゐられなくなる。て、また晩の散歩の足を東片町へ向けやうとして、散髮して來て湯に入つて、いざ出掛けやうとしてゐると、其處へ江川がやつて來た。私は厭な氣がしたが、詮方なく愛相よく迎へて机の前に坐つた。

「散歩なら一緒に行かうか」と、彼れは坐らぬ先に云つた。
「いや、強いて散歩したくもない」私は一緒に行きたくはなかつた。
「今日は一寸眞面目な用事で來たんだ」と、江川はさも眞面目臭い顏をして、煙草に火を點けながら暫く口を噤んだ。
私は不思議でならない。相手の顏を見詰めて用向を探つてゐると、「實は何だよ」と重々しく口を開いた。
「僕も柄にないことを頼まれて來たんだがね」と、江川はまた一寸言淀んで、「近藤の母親が君に訊いて見て吳れと云ふんだが、どうだ、君はお種さんを貰ふ氣があるかい」
あまり意外なので、私は直ぐには返事が出來なかつた。相手が江川だけに多少極りも惡かつた。
「無論いやな筈はないだらうが、外の事とは違ふから、よく考へてから返事したまへ。別段至急を要することでもないから。」
かう江川は重ねて云つたが、上使の役目はこれだけだと云つた風で、顏を和げて外の話をし出した。この頃の教育界の問題や社會主義の問題などを論じかけた。私も緣談に話を觸れたくなくて、相手の議論に程のいゝ返事をしてゐたが、心の底は休まる暇はなかつた。この男にそんな大事件を傳へた母親の量見も分りかねるし、江川が仲を取持たうとするのも可笑しいが、近藤一家に對する自分の疑ひの晴れたのは悅しかつた。部屋の周圍も江川の顏さへも快く見え出した。

て、どうせ、今日は東片町へ行かれはしないので、腰を落付けて江川を相手に一夜を過ごすことに極めた。そして、「出來ても出來なくても吉報を齎らして呉れたのだから」と戯談らしく云つて、麥酒を奢つた。江川は外の話をしながら、時々あの話に觸れた。「君の方で決心がついたら、先方の家庭の内情なんかよく調べなくちやならんよ」と、分り切つたことを忠告したり、「僕には彼處の母親もよくいろんな事を打明けるが、財産はないらしいね、北海道にゐる息子が月々どの位送るんだか。娘の婿には多少面倒を見て貰ひたいらしい口吻があるね」と云つたりした。

「親爺が職を止めたら彼處も困るんだらう、息子の仕送りだけぢや六ヶ敷んだらう」と、私もわざと空々しく云つたり、「娘の婿も老人の世話をさゝれたりしちや困るね」と、笑ひながら人事でゞもあるやうに云つたりした。

二三時間して、江川は「兎に角熟考しときたまへ」と機嫌よく云つて歸つた。

私は机に凭れて酒臭い息を吐いてゐたが、心はそは〳〵した。煙草を挿んだ自分の白い細い指までも可愛く見えた。そして、「どうせかうなることは知れ切つてたのだから、別段悦しがるにや及ばない。かうなる前に二人で秘密の戀を樂みたかつたのに、取返しのつかん惜いことをした。江川を戀の取持ちにするなどゝ、年を經てから、幾ら思出ての興を殺ぐか知れない。何故自分はあんなに愚圖々々してたんだらう」と、不平らしく思つて見たりした。

が、もうかうなつたのなら仕方がない。せめて江川を經ないで、直接に母親やお種さんと話を極める。

結婚前までにお種さんと二人で自由な世界をつくることだ。せめて九月になるまでは、二人で遠慮のない遊びを續けたい。これまでのやうな只の世間噺でなくつて、話したいこともあるのに喜ばせたいこともあるのに…………

そんなことを思ひながら、私は机に向つて、故鄕への手紙、房州へ行つてゐる友人への葉書を認めた。そして、心の湧立つたあまりに、ふと思立つて、「近日多摩川へ遊びに行きませんか。若し御同意下さらば、あなた方の御都合のよい日を選んで下さい。私は何時でも差支えはありません」と、お種さん宛の葉書を書いた。

（十一）

その夜はいろ／＼と考へられて、珍らしく寢付が惡かつた。近所の豆腐屋で物音をさせ出した時分から、うと／＼寢入つて遲くまで寢床にゐた。「まあよく眠る人だよ」と、側へ來て下女の云つてゐるのが夢の中に聞えた。「電話ですよ、笠原さん」と、下女は大きな聲を出して私を搖起した。

いゝ夢を破られて、私は飛起きた。眠い目をこすり／＼電話口に立つと、不明瞭に女の聲が聞えた。お玉だと直ぐに察せられて、眉を顰めながら耳を澄ましてゐると、今日七軒町へ來て呉れぬかと云ふ。口實をつくつて斷らうと思ひながら、何だか後が怖いやうな氣もしたので、午後成るべく行くことにすると、漠然とした返事をした。

臺所では最早午餐の膳立てをしてゐた。干物か何かを燒つて厭な臭ひを洩らしてゐる。私は顏を洗つ

てから、やう〳〵眠が醒めたやうで頭が淸々した。蒸暑い日で生溫い風が埃混りに流れてゐて、外へ出るのは煩はしかつたが、お玉のことが案てゝも置かれぬので、正午過ぎに七軒町まで出掛けた。お玉は店先で主婦と話をしてゐた。主婦の態度は先日とは打つて變つて、愛嬌を顏に浮べてお世辭をも云つた。それが小憎らしい氣がして、私は一人ずん〳〵二階へ上つて、着物を脫いでシャツ一枚で風を入れた。疲れが顏に見えるお玉は、階子段を上るのも息苦しさうだつた。

「貴下よく弱らないわね、こんなに暑くつても」と、側へ來てだらしなく坐つて、「貴下此間お主婦に何か云つたでせう、私今朝來て聞いたの」

「……あの通りなんだよ。仕方がないさ」と、私はさも眞實らしく云つた。

「貴下よく澄してそんなことが云はれるわね。我が不承知だつたらどうして？」女は口許に底氣味の惡い笑ひを浮べた。

私は相手を甘く云ひまろめるやうな事は咄嗟に出來さうぢやなかつた。で、「僕も一先づ故鄕へ歸つて、秋から田舍へ勤めるかも知れんよ」と、相手に信じられさうもない曖昧なことを云つた。

「さう？　ぢやどうにでも御勝手になさい」女は案外冷淡に云ひながら、私の目顏に注意してゐるらしかつたが、やがて、「貴下は妙に用心深くなつたのね」と、目を凄く光らせて、「私あんまり用心深い人は嫌ひさ」と、投付けるやうに云つた

私は內兜を見透かされさうな氣がして、「さう嫌はれちや困るね」と苦笑した。そして、腹匐ひになつ

て、兩足をばた〳〵させながら、さも無邪氣らしくしてゐた。すると、お玉は私の肥つた白い足の上に手を掛けた。手には身體中の力が入つてゐた。私は蛇にでも纒付かれたやうに心が縮んで、目を閉ぢた。

「擽つたいね」と、笑ひながら、突退けるやうにして起上つて手早く衣服を着た。女の顏には感情が漲つてゐたが、ふと、その目に涙を含ませて、「私、かうして貴下に會ひたいばつかりに隨分苦勞してるのよ。本當の事云へば、私今或人の世話になつてるの。だけど、どうしても貴下に會はなくちやゐられないから、命懸けて此處へ來るんだわ。その人にしても、お母さんにしても、私の周圍にゐる人は皆んな性質のいゝ人ぢやないの……」と、哀れぽつく手頼りなげに云つた。

「世話になつてるつて、どんな人に」

「云はれないわ、それは」

女が執念く隱すので、「ぢや、聞かないさ」と、私はすねて見せたが、心の中では相手が怒らねばよいがと氣を兼ねてゐた。

日は西に廻つて窓に差込んだ。油汗が煮染み出て部屋の中は居づらかつた。お種さんと多摩川へ行つて、水にでも浸つてることを思ふと、目の前の女の顏が只管味氣なく見えた。潤んだ黑目も厭はしく見えた。これまでこんな女に眞底から懷かしい口を利いてゐた自分が愚かしくも思はれた。先夜此處で一時の感情に任せて、云はずともいゝ柔しいことを口走つたことまで後悔された。女に言質を取られてゐるやうな氣がした。

だが、お玉はそんな氣もなく、やがて、驟雨の霽れた後のやうに、和いだ可愛げの顏をして、「今日は私が御飯拵えするから、晩御飯食べて、涼しくなつてからお歸んなさい」と云つた。

「さう愚圖々々してもゐられんけど」と、私は幾度も立ちかけては坐つた。

女は私の歸りかねるのを、さも自分の力で引留めるやうにでも思つてゐるらしく、目に得意な笑ひを滔めてゐた。そして、私が詮方なく假寢をしかけてゐるのを見て、枕を出してそつと頭に當てがつて、足音靜かに階下へ下りた。

私は眠るともなく眠入つて、呼起された時は、日は窓から消えてゐた。階下へ下りて顏を洗つて身體を拭いて夕風の吹拔けてゐる茶の間の縁側近く坐つた。食卓の上には胡瓜揉みや刺身などが置かれてあつた。「冷しといたのよ」と、お玉は麥酒をも持つて來て、「主婦も入つしやい、一緒に食べませう」と呼立てた。が、「あいよ」と云つたきり、主婦は容易に來なかつた。

私は自分の好きな食物の話などしながら、何氣なく麥酒を飲んでゐたが、ふと、主婦がお玉の側へ來て耳打した。お玉は眉を顰めたが、つと立つて店先へ行つた。店先には誰れか來てゐる。譯がありさうなので、耳を澄まして聞くと、「さう。ぢや直ぐ歸るから……」と、お玉は云つてゐる。

「何だい」私はお玉が座に戻るのを待つて問ふと、

「うゝん、何でもないの」と、女は平氣で云つて、私に酌をさせて麥酒を飲んだが、やがて、

「私一寸家へ行つて來るから、貴下待つてゝ呉れて?」

「あゝ」

「待つてゝ呉れないのなら、私行かない」

「ぢや待つてるよ」

「屹度？」と、お玉は二三度念を押しながら、も一杯麥酒を飲んだ。そして、そつと食卓の蔭で握手してから立上つて、色つぽい目で見返つて出て行つた。

燈火のない茶の間は最早薄暗がつた。主婦は明るい店から幾度も此方を覗くやうに見てゐたが、暫くして側へ來て、「お怠屈様……燈火もつけませんで」と云つて、ランプを取り二階へ上りかけた。

「いゝてすよ、僕はもう歸りますから」と、私は急に立上つて、だらけた兵兒帶を締直しかけた。

「でも、それぢや玉ちやんに惡かありませんか。あんなに云つてたんてすから」主婦は階子段の側に立留つた。

「なに構ひませんよ……一體あの女は今何をしてるんてせう」

私は再び座つて相手を見上げたが、主婦もその問ひに引寄せられて、食卓の側に坐つて、「あの女もどうするつもりてすか。貴下御存じはないんてすか」

聲を忍ばせてさう云ふので私はビクリとした。「何をてす」と慌だしく訊いた。

「御存じなければそれていゝんてすがね」と、主婦は云ひたさうにしては止した。

だが、私は聞かないては氣が濟まない。「知らないていゝ譯はない。是非それを聞かせて下さい」と追

まつた。

「てすけど私が申上げては」と、主婦は暫らく躊躇して後、「實は度々此方でお會はせ申しちや、手前どもゝ少し都合が惡いんで御座いますよ。ほんの一度お目に掛るだけだからと、あの女が申しますから、此間承知したので御座いますがね」

「さうですか」と、私は稍々激昂して來たが、强いて心を靜めて、「なに、僕の方ぢや些とも會ひたかあないんですよ。一度ちやんと極りがついてるんですからね」と笑つて見せた。

「本當にあの女がよくないんですよ。我儘な女ですからね」と、主婦は私を宥めるやうにした。そして、私が以前からの事を手短かに隱立てなく話すのを、一心に聞いてゐたが、一通りそれが濟むのを待つて身體を乘出して、

「おや、貴下はもうこれつ切りになすつた方がよう御座いますよ。貴下はこれから御出世なさらうと云ふ大切なお身體だし、玉ちやんだつてネ……。私、決して若い方のお爲にならんことは申しませんですよ」

「ぢや、妾にてもなつてるんですか……」

「さア……」

主婦はそれつ切り默つて了つた。私は怖いやうな氣がして、其以上立入つて訊かなかつた。が、主婦は客の姿を見て店の方へ行つて來てから、「相手が地道の商賣をしてる男ぢやないんですからね」と云つた。

部屋の薄暗いのが私のためには仕合せだつた。顏の色が變つてゐたかも知れない。て、お玉の歸つて來ぬ間にと、暇乞ひして外へ飛び出した。一二町脇目も觸らずに歩いたが、ふと氣付いて、軒燈で蟇口の中を改めて札と銀貨と二圓取出して鼻紙に包んだ。そして後戻りしてそれを主婦の前に置いて、「何か買つて來る筈でしたが」と云つて、主婦の辭退の言葉を聞く間もなく店を出た。

醉ひは最早醒めてゐた。まだ宵の口で通りは賑はつてゐた。若い男女が氣樂さうに連立つて散歩してゐるのに絶えず出會つた。私は只足を急がせて、自分の六疊の部屋へ歸つた。

「お葉書拜見いたしました。私どもは成るべく日曜がよろしいのですが、あなた樣の御都合次第にて、何時でも繰合せてお伴いたしますから、どうぞ。樂みにして待つて居ります。末筆ながら今夜にもお遊びにお出下さるやう願上候」との、お種さんからの葉書が、机の上に置かれてあつた。私はじつとそれを見詰めながら、鬱陶しい思ひに鎖されてゐた。

（十二）

その夜は恐ろしい夢に襲はれた。手足を縛られて身動ぎもならなかつたり、髮の亂れて目の充血したお玉が、「牡丹燈籠」で聞いたやうな土手下を血に染んで駈けてゐたりした。て、夜中に幾度も目を醒ましたが、醒めても夢の恐ろしさは消えなかつた。お玉との關係がこの先穩かに終りさうには思はれなかつた。主婦がほのめかした言葉の端々や、その氣遣はしさうな顏色が、ともすれば目の前にちらついて、私の心を刧かした。そして、先夜七軒町で一夜を送つたことが、果しない悔ひとなつて、自分の愚かさ

淺間しさを感じさせた。

て、嘗て覺えのない苦しい夜を明して、翌朝は早く起きたが、頭の中が粘付いてゐるやうだ。起きると間もなくお玉からの手紙が來た。封を切る私の手は震へた。

「ずゐぶんひどい事をあなたはお神さんに云つたさうですね。私はあなたのお歸りの直後にいそいて歸つて來ましたが、あなたが約束をちがへたのが口惜しかつた。何と云つてもあのまゝ離れるのはいやです。七軒町の家がおいやなら、明晩八月一日の夜八時ごろ天神樣まで來て下さい。あなたが來なければ、私がお宿までまゐります」

ひどい事を主婦に云つた覺えはないんだが、主婦が勝手に何を云つたか知れないと私は案じた。そして昨夕自分の云つたことを思出して見た。

八月一日は今日である。何とか量見を極めなければならぬ。が、心は火花のやうに散つて確かりした考へは浮びさうでない。じつとしてもゐられない。夕方まで平氣で部屋の中に居られさうはない。刻々の時間を送りかねた。

ふと、目に映つた新聞の文字で、今日は日曜だと知れた。日曜が都合がいゝと云つて來たお種さんの葉書を取上げて見ながら、急に思立つて、心を紛らせに多摩川へでも行かうかと思つた。

て、慌しく身仕度して東片町へ行つて、玄關へ入るが早いか、快活さうにその企てを云つた。「思立つた日でなくちや行けませんからね」と、先方に躊躇する暇すら與へなかつた。江川の話のあつた後だけ

れど、家の者の態度は何時もと違つてゐない。
手早く仕度させて、親爺が留守番にして、三人連立つて出た。勝色の蝙蝠傘を差して、浴衣の袖をヒラ〳〵させて、悦しさうにお種さんは歩いた。私はつとめて陽氣に戯談など云つたが、ともすれば心が欝いて口を噤み勝ちになつた。電車の窓に頭を凭せて、暫らく苦しい考へに沈んだりした。終點で電車を下りて、風のない照返しの强い田舍道を喘ぎながら歩いて川端へ出た。澄んだ水に小舟が幾つも上下してゐる。お種さんは水を見ると、子供のやうに悦しがつて、一刻も早く乘出したがつた。玉川亭へ寄つて、舟の支度をさせる間にも、一人川近く出て水の流れを見てゐた。
私達の休んでゐる座敷の向ひには、色の黑いイナセな男が肌襦袢一枚で胡座を搔き、肥つた櫛卷の女を相手に面白さうに酒を飮んでゐる。私は女は何物だらうと母親と噂しながら、樣子を見てゐたが、次第に鼻のあたりがお玉に似てゐるやうに思はれ出した。と、その男までが今お玉の世話になつてゐる男に似てゐるやうに思はれてならなかつた。そして、その男の此方を見る目が、いやな連想を起させて薄氣味が惡かつた。
「素人ぢやありませんね、場末の藝者上りか何かでせう。髮の毛が大變薄い」と、母親は小聲で云つた。
「さうかも知れん」と、私は氣のない返事をした。髮の毛の豊かな銀杏返しのお種さんは、時々しい顔をむけて、「まだか」と問ひたさうな目付をした。
食物やサイダーを積んで、小舟を中流へ出した時は最早正午過ぎだつた。渦卷いた白い雲は眩しい光

に燃えてゐさうに見えた。川の上もさう涼しくはなかつた。船頭は手で舟を押進めたが、お種さんは淺瀨へ來ると、水の中へ足を浸して、「いゝ氣持よ」と、私を誘ふやうな風を見せた。が、私は寢不足や心配やてクラ〳〵する頭を舟緣に凭らせたきり、あまり身動きもしなかつた。

「廣々して氣がせい〳〵しますね」と、母親は愼深く座つて、行違ふ船の客を珍らしさうに見てゐた。

「これから每年來ることにしますか」私は微笑して意味ありげに云つたが、お玉の執念深い顏付が直ぐ前に浮んで、望みの湧きかゝる心を搔曇らせた。忌はしい連想が、忘れやうとするほどます〳〵繁く起つて、母親に向つてつとめて仕掛けてゐる話が、稍々もすれば止切れ勝ちになつた。

「御覽なさい、笠原さん、藝者がどつさり乘つてゐますよ」と、お種さんは不斷になく蓮葉な素振をして、私の背を叩いて振向かせた。見ると、派手な浴衣を着た五六人の女が男の中に混つて、賑かに騷ぎながら川を上つてゐる。

「私達もあの船の後を追つて行きませう。何處まで行けるか、この舟て行ける所まで行つて見たいわ」と、お種さんは頻りに船頭を促した。が、船頭は「この上の方は眺めがよくはありません」と、澄して一つ所を彼方此方と動かすばかりだつた。

「自分て漕いだら面白いてせうね」と、お種さんはもどかしがつて、「貴下（あなた）舟が漕げて？」と私に訊いた。

「少しぐらゐ漕げんことはないね。何時かお種さんをボートに乘せて、僕が漕いで見ようかね」

「晝間よりか月夜の方がいゝわね。湖水か何處かて……………」

お種さんが生々して見えるほど、私は生氣を失つた。鮎の鹽燒や魚田を拙さうに食つて、生溫いサイダーをがぶ呑みにしては、二人の興を害ねぬだけの話をしながら、時の立つのを待つてゐた。

「あら、貴下はハンケチには臙脂がついてゝよ」と、私が膝に垂れたサイダーの滴を拭つてゐるのを見て、お種さんは笑つた。

「臙脂ぢやないさ」と、私は怪んでハンケチを開いて見ると、血汐らしい者が紅く染込んでゐた。ハンケチはお玉のだつた。「何だらう？」と首を傾げて、不吉の徵でゞもあるやうに小氣味惡く思つた。

「臙脂でせう。誰れか綺麗な女からお貰ひなすたんぢやないの。江川さんが此間さう云つて入らつしやつた。笠原君は隨分方々で罪を造つてるんだなんて」と云つて、母親は笑つた。

「彼奴の云ふことは當てになりませんよ」と、私は憎々しく云つて、ハンケチを川に投げて、その流れて行くのを見えなくなるまで見送つた。

お種さんは偶の遊びだから、日の暮れるまでとねだつて、母親もそれに同意した。私は夜の八時が氣になつて居ても立つてもゐられぬやうだつたが、今更用事があるとは云兼ねた。あゝ驟雨でも降つたらばと願つても、空は意地惡く晴れ渡つて、黑い雲は何處からも湧いて來ない。

（十三）

東片町の家の前で別れて下宿へ歸つたのは、最早八時を過ぎてゐた。「電話は掛らなかつたか」と訊くと、「いゝえ」と下女は答へた。私は疲れた身體を橫たへたが、多摩川の遊びよりも天神の境內がさまざ

まに考へられて心が休まらなかつた。て、無用でもあり一層氣持が惡くなることゝ知りつゝ、又下宿を出て足早く天神の方へ向つた。鳥居を入つて境内を一巡りしてゐると、此處へ來て歸つたお玉の相恰が、今見るやうに想像された。

私は空いたベンチに足を休めた。幾度も此處で出會つたことが惡い思ひ出となつては浮んだ。手洗水で手を淨めて賽錢を投げて、「今二人の中を祈つたのよ」と云つたこともあつたが……開放した魚十の座敷の騷ぎを見て、「あんなにぎあ〳〵騷いてて何が面白いんだらう。私あんな陽氣なこと嫌ひよ」と、見てゝも厭だと云ひさうに眉を顰めて、「かうして人目を忍んで會つてるのが却つて情が深いわね」と云つたこともあつたが……あゝして一歩々々足の拔けない泥の中へ陷りつゝあつたのだ。都合のいゝ時にすつと巧みに離れて、それきりて無事に終れるものと思つてゐたのが、今となつて見ると自分の智惠が足らなかつたのだ。

私は一旦深く思ひ込んだら、容易に離れられない女の心を、今の今見透かしたやうて恐ろしく感じたが、それと共に自分が女に忘れられない素質を備へてゐるのに思ひ及んだ。惚れられるからかうなんだ。「牡丹燈籠」の萩原新三郎だつてかうだ……お露の亡靈に誑ひ殺されたその男も人事てはないやうに思はれた。

て、私の心には、自分の幸福な前途がこんな下らぬことのために破られる樣がまざ〳〵と見えた。河井のやうに新聞に叩かれて、折角得かゝつた榮達の緖を失つた例もあるが、それよりも法律上の罪でも

犯してゐさうな氣がして再び世に立てぬ身になりさうにも思はれた。

じつとして考へてゐると、考へは自から忌はしい方へのみ馳せた。て、勢ひをつけて切通しへ出たが、行くべき當てもない。雜誌屋の前に立つたり古本屋へ入つたりして、つひに勸工場へ入つた。氣を留めて見るでもなく狹い路を素通りしてゐたが、ふと切先鋭い刃物が目についた。鞘に入つてゐるのや露出しに白い刃を見せてゐるのや、いろ〳〵の刃物が並んでゐる。私は何となしに惹寄せられてその前に立留つた。と、店番が側へ來て、「これなどは新式です」と、捲込んだ小刀の刃を出して見せた。「よく切れさうだね」と云ひながら、私はじつと目を留めたが、ふと買ひたくなつて、外の小刀を取上げて鞘を拂つて見た。見てゐると神經が自から引立つて來た。て、二三本引拔いて比べて見てから、よさゝうなのを三十五錢で買つた。物を突くやうに上下に動かしながら、「よく切れるかね」と笑ひながら訊くと、「隨分切れますよ」と、店番は平氣で答へた。

刃物を懷に入れてからは、急に心持が變つたやうだつた。何に用ひると云ふのでもないが、その小さい刃物一つで、左右の敵に對して身構への出來たやうな氣がした。無形の恐怖に手向つて自分の身も心も守れさうな氣がした。心丈夫になつた。

て、下宿へ歸つて、それを守刀のやうにして机の引出しに收めて、眠に就いたが、夜中の夢では矢鱈に人を斬つたり突いたり、自分が斬られたりした。そして、醒めた目で暗い部屋の中を見渡しながら、お玉を人里離れた所へ連出して、命の根を絶つてしまつたらと思つたりした。瀧壺へ落し込むか、穴を

掘つて埋めるかすれば、正體の見出される心配はない………

（十四）

翌朝掛つて來た電話は、お玉からではなくつて江川からだつた。「昨日多摩川へ行つたさうだね、新婚旅行の瀨踏みかい。あまり手早や過ぎるね」と冷かして、「今日遊びに來ないか、一寸話があるから」と、命令するやうに云つた。私はその皮肉な調子が不快だつたが、自分がいろ〳〵の弱味を持つてゐるやうな氣がするので、相手の機嫌を害ねぬやうに「都合て行くかも知れん」と返事をした。

間もなく、「自働電話だからお早く出て下さいつて」と、階下から下女が叫んだ。急いて驅付けると、臺所口に立つてゐた二人の下女が笑顏て私を見ながら、「彼方からも電話、此方からも電話。笠原さん大持てだ」と冷かした。

「兎に角僕が行くよ、今夜は間違へなく」と、私がお玉が下宿へ來ると云ふのを遮つて、また八時頃湯島天神へと約束を決めた。

て、夕餐が濟むと、有るだけの金を紙入に入れて、刃物を懷に入れた。卒業後といふのを口實に、先月末に不斷の倍額も故鄕から金を送らせたのだが、多摩川の舟遊びや、七軒町の主婦への心付やて、大分無駄使ひをした。そして、まだ月始めだから殘つてゐる金は大切な金だつた。が、今の場合それを殘らずお玉の手に渡してもいゝ、只これまでの秘密を闇の中に葬つてしまひたかつた。この後指一本差さぬやうにして貰ひたかつた。

まだ時刻が早いので江川の下宿へ道寄りしたが、江川は何時ものやうにテーブルに向つてゐて、今日は靑い皮表紙の部の厚い洋書を讀んでゐた。讀書の外には耽るべき何の樂みもなさゝうに見えた。
「暑くても君はよく勉強するね」と、私は浮かり感心して、「僕は先月から書物なんか一頁も讀みやしない」
「書物を讀まんだつて、君にや日の經れる方法があるんだからいゝさ」
江川はこの夏中に讀破すべく企てた書物の題目を話しなどして、與に乘掛けたが、私が巧く調子を合はさぬので、拍子拔けしたやうだつた。そして、「君は昨日お種さんなんかと多摩川へ行つたさうだね、僕は丁度あの後へ行つて、半日親爺の碁のお相手をさゝれたよ」と不平らしく云つて「…多摩川で此間の話を極めたのかね」と目を光らせた。
「いや、そんな事に關係はないさ。前からの約束を實行したゞけさ」
「しかし母親からあのことについて、何か話があつたらう、隱さなくつてもいゝぢやないか。僕も間に立つてるんだから、一應聞いとく必要があると思ふ」
「無論君に知らせなければならんが、實際一口もあの事について話なんかしなかつたんだよ」
さう斷言したが、江川はまだ疑つてゐるらしかつた。極るまではあまり出入するのはよくないぞと、鹿爪らしく意見めいた口を利いて「で、君はどうする?」
「さあ」…「僕はその前に極める問題だあるんだ」と、私は溜息吐いた。そして、今の事情を打明けて

力を借りるやうな友人があつたらばと思つたが、江川は相應しい人ではなかつた。この人には、遠廻しにほのめかすことすら出來なかつた。

「そりや極める問題があるね、昨日彼處の親爺と話してると、親爺の考へは母親とは大分違ふやうだよ」

「さうかい」私の心はふと緣談の方に向いて、親爺の底意を知りたかつたが、江川は詳くは語りもしないて、「何も僕がケチをつけるんぢやないが、君も豫じめ知つとく方がいゝから云ふがね。親爺は君に對してあまり敬意を持つてゐないよ……將來のある人間が侮られてまで一婦人と結婚する必要はないさ」と、重々しく云つた。

「それはさうさ」

しかし、當人が此方を慕つてゐれば言分はないさと、私は思つてゐたが、江川は「あれほどの女は幾らでもあらあ、あんな女を自慢するのは親馬鹿だよ」と罵つたりした。あんまり罵られるのは私の耳に快くはなかつた。「大きなお世話だ」と云つてやりたくなつた。が、私は口を噤んで、相手に云ひたいことを云はせて置いた。そして、「この男この頃近藤の家のことばかり氣にしてやがる」と、終ひには可笑くなつた。

知らぬ間に時刻が近づいてゐたので、私は急に氣色ばんで外へ出た。同じ所を歩みながら、またも同じ思ひを繰返すのに堪へがたくて、大學前から俥に乘つた。鳥居前で下りて、ヅカヅカ境內へ入つて行くと、

「貴下何處へ入らつしやるの、そんなに慌てゝ」と、お玉は事もなげに笑ひながら聲を掛けた。私も直ぐ側に女の顏を見つけて思はず微笑した。
「今來たところよ」と、お玉は擦れ〳〵に私に寄添うて、後戻りして鳥居を出た。そして、私が七軒町を厭がるので、强いことは云はず、「ぢや、またお蕎麥屋？」と、その方へ歩いた。
　蕎麥屋の二階では今一組の客が下りて行くところだつた。その下りるを待つて、「何を食べて？」と、お玉は私の顏を見て訊いてから女中に誂えて、それから立つて外を覗いて見ながら、簪て頭を掻いてゐた。私は煙草を吸ひながら膝を抱いて、女の樣子をじつと見てゐたが、不斷と異つたところは少しもなかつた。前夜の違約を恨みさうな風もない。が、その呑氣さうなのが却つて忌々しくなつた。で、尖つた聲て、
「何を見てるんだい。ちやんと坐つたらいゝぢやないか」と云つた。
　女は可愛く微笑して、「今日は何故そんなに怒るの。目付が怖いわね」と、側へ來たが、私は直ぐ、
「此間七軒町の主婦(おかみさん)によく聞いたよ、僕までも侮辱された」と、さも不愉快さうに云つた。
「さう？」と女は鼻て笑ふやうにして、「あの婆さんも下らないことを云ふよ……あんな人が何を云つたつて構はないぢやありませんか。あの主婦(おかみ)さんも人情の分らない人だわ」
「さうでもないよ。よく物の分つた人らしいぢやないか」
「貴下(あなた)は妙に主婦(おかみ)さんの贔負をするわね」

「だつて、主婦さんの云ふことが本當だもの。お前にも爲を思つていろ〳〵云つて聞かせるんだらう」「大きなお世話さ。あんな人の云ふことと誰れが聞くものか。……私達のお腹の中はあんな人にや分りやしないんだわ。……だから、私と貴下との事は二人の間だけていゝぢやありませんか。外の人が餘計な口を利いたつて、聞く必要はないと私思つてよ」

二人は矢繼早にかう言合つてゐたが、其處へ女中が誂物を持つて來たので、話が切れた。

私は一寸箸を執つたばかりで、女の食べるのを見てゐたが、その食べてしまうのを待つて、「でも、お前はよく自由に出て來られるね、何處へ行くと云つて出て來るんだい」と、意味ありげに訊いた。

「七軒町へ手傳ひに行くと云つて出るの、どうせ日に一度は彼處へ行くんだから」

お玉は最早主婦さんが何もかも私に打明けてゐることゝ信じてゐるらしく、「貴下が見たけりや、私の家を見せて上げてもいゝの。松坂屋の少し先の方なの。御覽に入れるやうな立派なお屋敷ぢやないけど……其處を通つてから池の端へ涼みに行きませう」と、事もなげに云つた。

「だつて、お前の家の近所へ行つて、知つた人に見られてもしたら、お前が困るぢやないか。お前も案外思慮のない女だねえ」と、私は責めるやうに云つて、「一體何時から其處に居るんだい」

「何時からつて、此間此處で貴下に會つた時分からだわ。その前には都合があつて、とても貴下に御目に掛れさうぢやなかつたの。今の所にゐるやうにしたのも、些とも自分で好きてしたんぢやない、貴下に會ひたいばつかりなんだから、貴下惡く思はないて頂戴」

かう云つてゐる中に、お玉は目に涙を浮べた。聲も自から涙ぐんだ。「私、貴下に怒られちやほんとに困つてよ。隠立てしたのも貴下に愛相を盡かされまいと思つたからなの。……惡かつたら勘忍して頂戴、私し謝まるから」

「謝るつてどうするんだい、僕に對して惡意を持つてるとは些とも思つてやしないんだもの」私はつい心を動かされて、微笑しながら柔しく云つた。そして、女の哀れつぽい樣を見てゐると、自分もふと情ない遣瀬ない心持になつた。どうせかう云ふ運になつたんだから仕方がない、離れたくつても離れられぬやうになつてゐるんだ。自分の一生はこの女のために破滅されるやうに定められてゐるんだ。……

て、何の不足もない自分のかうなつて行くのが慘ましく思はれたが、今までのやうに恐ろしくも厭はしくもなかつた。女の顏さへ嘗て覺えないほど美しく可愛く見え出した。

「此處に愚圖々々してゝも變だから、其處等を散歩でもしようか」と、私は云つた。

「えゝ」と、女は低い聲で云つて、「この家ちや變に思つてるでせうね」と淋しい笑ひを見せた。

人目を眩しがつて其處を出たが、私は俄かに世を狹められてゐるやうな氣がした。二人互ひに相手賴る外には、心を明す人もないやうに思はれた。そして、天神の境内を拔けて、池の端の方へと賑かな道を辿りながら、寂しい思ひをして口數もあまり利かなかつた。

「あの寄席の裏の洋食屋は前の通りやつてるかい、あれから一度も行つて見ないんだが」と、女の顏を見たが、その顏は最早前のやうに塞つてはゐなかつた。屈托もなささうに見えた。

觀月橋の近くまで來ると、女は後からそつと私の手を握つて、「七軒町へはどうしても行かない？」と、首を傾げて力強く訊いた。

「いやだよ、あんな所」と、私は跳付けたが、懷の豐かなのに氣付いて、「知つた人に見られん所がいゝよ。おれも今日は些しの金は持つてるから。‥‥だけど、お前も長く家を空けちや惡いんだらう」と云ひながら、ふとこの女に家のあることが、今更のやうに思出されて、手痛く胸に響いた。

「いゝえまだ構はないの」と、女は私の心の中を見透かしたやうに、「そんな下らない心配しなくたつていゝのよ。どんな事があつたつて、貴下の身體に傷のつくやうなことはしないから‥‥隨分氣が弱いのね」と冷かすやうに云つた。

私は辱められたやうな氣がして口を噤んでゐたが、やがて「ぢや、何處へでもお前の好きな所へ連れてゝお吳れ。僕はもうどうなつたつていゝ」

さう云つて、向ひ側の燈火の薄闇にきらめくのを夢のやうに見てゐた。俥の音や下駄の音に混つて、何處からか幽かに三味線の音が聞えた。妙にそれが私の腸に染んだ。

一時間ほどして、私達は足を早めて天神下の電車通りへ出た。お玉は其處の下駄屋へ寄つて、私の紙入の金を出して、自分の下駄を買つた。私のをも見立てゝ買つて吳れた。そして、一二丁私を見送つて、紙入と下駄とを手渡して、「ぢや、二三日中にまた電話を掛けますよ‥‥乾度よ」と云つて、別れて行

つた。

私は氣拔けがしたやうになつて下宿へ歸つた。考へる力も悲む力も憤る力もなかつた。横になつて目を瞑つて、眠もやらず夜を更してゐた。會つてゐた間お玉の云つたことやしたことよりも、別れた後の今の女の樣子がぼうつと目の先にちらついて、疲れた心を苦めた。松坂屋の裏だと云つた女の家の中が何處かで嘗て見たことでもあるやうに頭の中に描かれたりした。

今時分どんな顏して何を云つてどうしてるだらう?。私は眞夜中過ぎにふと淺間しい思ひに惱まされた。自分の女を人手に奪はれてゐるやうに思はれてならない。あの涙ぐんだ柔しい目や纎細い白い、腕が、卑しい者の手で汚されてゐるやうに思はれてならない。……て、明日でも明後日でも一刻も早く會はないぢやゐられない氣がした。

(十五)

翌日は朝からの風が、正午過ぎから荒模樣となり雨をも誘つた。私は鬱陶しい部屋で、悄然長い日を送つた。お種さんの姿は影が薄くなつて、お玉の細そりした姿のみが鮮かに目の前に立つた。近藤の家の樣が無緣の家のやうになつて、まだ見もしないお玉の家の中の樣が意地惡く心に上つた。櫺子窓に繁吹がかゝつてゐる。お玉は派手な色の襷を掛けて、白い腕を出して夕餐の仕度をしてゐる。ふと男の顏が見えた。いろ〳〵の形をしてぼんやり見えた。お玉はその男に向つて笑顏を見せて戲談を云つてゐる……私の心は焦立つた。

そして、その次の日の暮方まで、一刻々々のろく時の立つのがもどかしかつた。今に電話がかゝるかと、音のするたびに耳を欹てた。郵便の聲にも注意した。が、六時過ぎまで何の音信もない。私は二日も會はぬ間に、どんな事件が女の身の上に起つてゐるかも知れぬと氣遣はれ出した。ついぞ疑つたこともない女の心をさへ疑はれた。

最早私はじつとして一夜を下宿で送られさうもなかつた。て、日が暮れるとアタフタと外へ出た。周圍に心を散らさず、一心に松坂屋のあたりの町の樣子を記臆から呼起しながら、その方へ道を急いだ。電車を横切つて、松坂屋の角を曲つて、其處等を當てもなく行きつ戻りつした。路次を入つて一つ一つ軒燈の文字を讀んだり、開放した家の中を覗いて見たりした。が、それも何の役にも立たなかつた。私はお玉の家の姓をさへ知らぬのである。

私は尋ねあぐんで落膽して、すごく廣小路へ出て、其處の氷屋で足を休めた。首筋は汗でべたくしてゐた。汗を拭つて氷水を飮んで、四つ辻から電車に乘つて、仕方なしに本郷まで歸つたが、さて自分の下宿へは心が向かなかつた。

て、寄るともなく江川の宿へ寄つた。江川は相變らず苦勞もなさゝうに青い皮表紙の洋書を讀んでゐた。

「今、散歩がてら君の下宿へ行つて來たんだよ。……あの一件も何とか先方へ返事をしなけりやならんからね。たとへ形式だけでも間に立つてる以上、一先づ僕に君の意向を聞かせて貰ひたいね」

當分私の觸りたくないことを、彼れは眞先に訊いた。

「僕はまだ考へてもゐないんだが」と、私は一寸口籠つて、「まあどうでもいゝ。斷つちまつても關はないよ」と、自棄らしく云つた。

「さうか、だけど厭でなけりや斷はるにも及ばんぢやないか。僕だつて斷はりに行くのはいゝ氣持はしないよ」と、江川はいやに眞面目な面をして云つたが、私が進んで意見を述べもせぬのを見て、「ぢや、さう返事するかね」と獨りて極めた。そして、私の冷淡なのが腑に落ちぬらしく見えた。

私は近藤の家の話は訊かれても成べくしないやうにして、諸方へ散つてゐる友人の噂などしてゐた。

「僕はあの下宿を引越さうかな。ずつと遠方へ移らうか知らん」と云つたりした。

「いつそ東片町を遠ざかつた方がいゝかも知れんね、君のために」と、江川は直ぐに話をその方へ持つて行つた。

表の戶の締められる頃まで其處にゐて、私は遲く宿へ歸つた。そして一人起きてゐた下女に向つて、電話が掛つたかと訊いたが、掛りもしなかつたらしい。机の上には房州からの繪葉書があるばかりだつた。

（十六）

翌日もその翌日もお玉から音沙汰はなかつた。あれつ切り會はないつもりかとも疑はれ出した。すると、此間の一擧一動が皆な自分を欺いてゐたやうにばかり解釋された。私の紙入を浚つて惜げもなく使

たことも惜々しくなつた。自分が弄ばれて馬鹿にされたやうにも思はれた。が、住所も知らず、外に消息を聞く所もないので、幾度も躊躇した後、七軒町の煙草屋へ行つた。お玉は來てもゐなかつた。

「どうなさいました。……あの女は些とも來ませんてすよ」と、主婦は愛相よく云ひながら、じつと私の目顔に注意してゐた。

「私も此家を逃げて歸つてから會はないんだが、何處にゐるんでせう。矢張松坂屋の裏に居るんですかね」と、私は何氣ない樣て云つたが、

「どうですか」と、主婦は首を捻つた。

私は押して尋ねられもしなかつた。そして、再び松坂屋の裏をぐる〳〵廻つて、同じ氷屋て氷を飲んて歸つた。

次の晩もまた同じ事を繰返したが、歸つて聞くと、近藤の母親が留守の間に訪ねて來たさうてある。

「彼處へも暫く行かなかつた」と、私は歎息して、明日にも行つて見ようかと思つたが、江川が何か云つてゐるかと思ふと、一寸氣輕には行きかねた。快活に親子の話相手になるのも懶いやうな氣がした。

「笠原さん、電話」翌朝寝耳に鋭く響いた。胸を轟かせながら受話器を耳に當てると、急に世間が陽氣になつたやうだつた。お玉の聲は幽かに聞えた。私は一語々々を充分に聞取るほど落付いてゐなかつた

が、「來て呉れ、會はう」と云ふことだけ分れば、それて充分だつた。

「晝間でも關はない‥‥ぢや二時頃」と、私は答へた。

そして、まさかの用意にと、二三冊古本を賣つて、紙入の中を豐かにした。髮を刈つて髯を剃つて、暑い日盛りに汗にまみれてテク／＼歩いて行つた。時間の遲速を氣遣ふ外に何も心には浮ばなかつた。



女帯

鈴木三重吉

自分はどうでも再び長いものに從事る事になッたので、これまでの口の方も止むなく辭さなければならなくなッた。自分は叔母と女とにそれを話した。

書く事だけは持ッてゐるのだけれども、まだ考へは纏まッてゐない。それを纏める間ても例によッて外の仕事は何んにも得しないのだから困る。書き出してからだッて、それが續いて物に出るやうになるまでには、いゝ加減にぐづ〳〵引ッかゝッてごろ〳〵してゐるのが癖である。――その長い間の事も考へなければならなかッた。

自分は二階で茫んやりと考へ込んでゐた。下では叔母が女と二人でこそ〳〵何をか相談をしてゐるらしかッた。獨になッてから自分へもいろ〳〵の點を圖ッた。

「ではさういふ事にしませうぞのい。その内に、出來たもの丶禮が來るやうになれば、またどうにでもなりますけのい。」と言ッて叔母はなほ續きもなげにぽつんと坐ッてゐた。自分が物を書く間は、これからまた長い間、はたのものも氣分の閉がるやうな毎日に壓へられなければならない。叔母はそれが何より厭に考へ設けられるのらしい。自分は叔母のさういふ容子が厭であッた。——自分たちは、かうして別々に生きてゐるのだ。祖母は何んにも解らない。たゞ自分に從順な一人の女だけが暗默の力になるだけである。——自分はまだ考へも纏まらない先から、何だかもうぐッたり疲れたやうな自分になッてゐる。いろんな事の續きで大分疲れかけてゐるのだと思はれた。

二三日して月は八月に這入ッた。自分たちは月が變ると共に、今度は二階もない、水道もない、物の乏しい××のはづれの小さい家に引ッ越す事になッた。置いて欲しがッてゐる小さい下女も、止むを得ず出す事にした。罪のない、子なのだから、自分の何物かのために、小黑い小鳥をでも飼ッて置くつもりで置いといてやればいゝのにと思ふけれど、叔母たちの極めた事に從はなければならない譯もあッた。

引ッ越しをするのには、物の何んにもないのも便利だッた。一臺の赤色の荷馬車が來ると、ふとんや行李の縛ッたのなぞがさッさと積み乘せられた。叔母たち二人と小さい下女とは、夥しい荷物をでも扱

ふやうに、氣配りな、忙がしさうな顏をしてごた〱ものを取り纒めたりしてゐる。自分は何んにもしたくないといふやうに、たゞ手紙やはがきなぞを土の上で灰にしたゞけて、ぶら〱と外へ出た。何だか雨にでもなりさうな、どんよりした午後であッた。何となくいら〱と底暑い。自分はどこへ何をしに行くといふのでもなく、たゞ何か氣になる事があるやうな、怠惰な、とりとめもない心持を見つゝ、のらり〱通りへ出た。さうしてあてもなく歩いてゐる内に今度書かうとする物の、飛び〱の一角が考へるともなく考へられるのだッた。何といふ譯ともなくせか〱しい、いつまでもじッとしてはゐられないやうな或物に突ッつかれる。表面では早く書き出したいやうでその實は容易に書き出せさうにもなかッた。

と自分はいつしかあゝして放ッといて出た荷物なぞの事が何とはなく氣になり出した。どうするといふのでもなくのそ〱引き歸して入口の門まで來た。人夫は外のガス燈を取りはづしたのを繩でからげて車の下へもぐッて心棒に括りつけてゐた。自分は物に紛れて今朝から女にろく〱口を聞いてもやらなかッた事に氣が附いた。門の内を覗くと小さい下女が塀の際にこゞんで、はいてゐる下駄の鼻緒の拔けたのを直してゐる。女は小物をバケツに入れたのを提げて馬車へ積みに來た。自分は裏にあるあの黃色い花を拔いて持ッてくのを忘れないやうに注意した。叔母は祖母をつれて車で先へ行ッて荷物を受け取るために着物を着換へて出かゝッてゐるといふ。女は少しぐら〱になりかけた髮を氣にして手で直しく〱しつゝ、

「叔母さんは面白い癖のある人ですわね。」と言ッて、素直にあきらめてゐるやうに、仕方なく笑ふ目もとをした。

「物が自分のしやうと思ふとほりに纏めてないとさッさと解き直して了ふのだろ？」

「何んですか一人でぶり〳〵して女中をつけ〳〵言ふんですわ。」

「お前はたゞ默ッて見てゐるさ。あれだッて人のいゝ人間なんだもの。」

「ですから何んにも言やしませんわ、わたし。」

かう言ッて向ふを見つゝ息休めのやうに立ッてゐる。自分はそれよりも此女の股に見出したほくろの事を考へかけた。

それから自分はまたぶら〳〵出かけて、用事もなく津村のところへ行ッて夕方までごろ〳〵してゐた。電車で××の終點へ降りた時はもう夜だッた。自分は自分の越した家へ歸るのに。間ちがへて損な道を取ッた。家へ這入ると小暗いランプが不景氣に點ッてゐた。

「まア方々に矢たらに釘が打ッてあるのですわ。」と言ひつゝ女は、爪立をして、右手の六疊の鴨居に打ちつけてあるのを、手拭のはしで握ッてがく〳〵搖すぶり拔かうとしてゐた。

「駄目ですは女の力では。」と言ッて、

「あなたお湯がまだでしやう？　ついそこのとこにありますから浴して入らッしやいましな。叔母さんはホヤが二つとも壞れたものですから、お湯から廻つて買ひに入らッしやいました。」

祖母を覗いて見ると、もう三疊に蚊帳を釣ッて寢てゐた。小さい下女は頭が痛いと言つて次の三疊の障子や唐紙をはづし集めた隅ッこに、伏つぶしてゐる。そんな苦くるしさうな處にゐないで、こちらへ出よといへど、たゞ力なげにはいと言つてるだけであッた。六疊二た間と三疊が二つと上り口の二疊とだけの家だけれど、思ひやうては小さくもないと女は言ッた。すべて片附けるものだけはそれ〴〵の處を得て、掃除もすッくり出來てゐた。女はたゞランプのホヤが買はれて來るのを待つてゐるらしく言ッた。外は暗い夜だッた。一寸した店などのある通りへ出るまでには、灯りのない、木立の黒ずんだやうな處を行かなければならなかッた。湯から歸ると叔母はちがッた道からもう先刻歸ッてゐた。床と押入との附いた方の六疊に、女は臺ランプをあか〳〵とつけて食事の臺に布を被せて待ッてゐた。夜見るためか、明るい火で見ると、空家の時に見た程ひどい感じもしない。持ッて來た竹の簾の揃ッたのを、女は並んだ六疊の堺や、縁側に面した兩はしなぞへ小綺麗にかけた。その代り床の上に一枚の石膏板と、黒い小形の花瓶がある外には何一つ裝飾もない。自分たちの食事の間叔母は女の鏡臺の置場などを考へてゐた。

「先にゐた人は、こゝへ簞笥を置いてゐたのですぞのい。こゝのところにかう跡が附いてゐますい。」と言ふ。

「己の家の簞笥もそこへ置けばいゝてしやう？」と自分は團扇を使ひながら叔母に言ッた。

「さうしましやうかのい。」と叔母も眞顏でいふ。これは冗談である。自分たちには簞笥といふものはま

だないのだッた。

風のない夜であッた。自分は食事が濟むと緣先へ皮蒲團を持ち出して、する事もなく柱にもたれて黒い小庭を見てゐた。そこには一間ばかりを置いて古けた板塀が劃されてゐた。立木と言ッては手水鉢の根にある南天の一株と板塀の中程に小さい無花果の木が一本あるくらゐのものだッた。それだけが灯りの廣がりの中に見えた。

何かする事があるやうだけれど何をするのも面倒であッた。壁の根に自分の始末すべき書物などが積み寄せてあるのも氣になッたけれど、それは目に見ないやうにしてゐた。女は下女を促して湯へ出かけた。叔母は三疊でこつ〱釘を打ッて通ひ帳のやうなものを釣るしてゐた。自分は一人ぽつんとして、來るべき作の事を考へた。

此夜はみんな草臥れてゐて早く寢ると言ひ出した。もとの住居とちがッて、今度は二つの並んだ間に蚊帳を並べて釣らなければならなかつた。小さい間へ釣れる蚊帳は祖母のが一つだから、下女は仕方なく叔母の蚊帳へ入れられた。自分はまだ格別寢たくもない目をまんじり開けていろんな事を考へてゐた。女は上り口の二疊で小使帳をつけて、それから、假名ばかりで心配して日記をつけながら半帶を結んだ浴衣の背中を斜かひて見せてゐた。

女が來てから今日で二十日だと自分は何からの續きともなく日を繰ッた。かうして手のかゝる祖母と、膨れ易い叔母とのゐる中へ來て、何事にも逆ふといふ事もなく、かひ〲しく辛棒してゐる女の、素直

な、女らしい心も考へられた。まだ自分はこれを一生伴れ添ふかどうかは別らない。いつかは捨てるのだとは思はないけれど、何んだか自分が此女に飽きる日が來はしまいかといふ事は氣づかはれた。自分は女房にするのだといふ事はそれとはなしにでもまだ女に對して口にした事はない。たゞ何事でも自分のいふ儘に、かうして女が自分に投じて來てゐる。女の性質と素行をこれまで、これといふ程崩したらしい點は見えない事だけは確である。その外には女の外形と、自分がこれまで目に見たゞけの事としか何物も別つてはゐない。△△の生れて此世にたつた一人ものだといふ以外に、どうしたものゝ子の、どうして生ひ立つた今日までかといふ事は何んにも別つてはゐない。もしあゝしてゐて、自分が引き出して來なかつたらだれに投ずる一生の約束だつたらう。もし自分が捨てたら、その先はどうなるものと考へて來たのだらう、——自分はかういふ女と男とが茫んやりと一つになつてゐるといふのが、自分自身の事でもないかのやうにも考へられた。祖母も叔母も此女の事を三四年來自分から聞いてゐるといふだけのためて、此女を容易に受け取つてゐる。女房にしたものだとも考へまいけれど、自分が久しい戀の女を失つて了つた事に對して、何事をも許さなければならないとしてゐてもするやうに、此女を入れる事を一つも拒みはしなかつた。祖母はもう自分の同じ孫のやうに女にたよつてゐる。——何だか自分はこれなりで、ぐづ〳〵て此女を去り得ずに一生つらつてゐるのではないかとも思はれた。それにしては後に悔いる事はないだらうか。今のうちにならどのやうにでもなるのだがといふ氣がする。——自分は久しい以前に讀んだブラウニングのバスト、エンド、スタティユーといふのを考へ出した。女の名は忘

れたけれど、人の妻となるために引き取られて、此夕方その妻となるべき式を見るといふその晝に、二階の窓から、馬に跨ッて通り過ぎた、長き劒を帯びたる若人に戀をする。生れてはじめて一人の女としての目を開かれて戀をする。二人の待女は左右の耳にその誇りある若人の名を囁く。女はまだ此夕方の式を見ぬ前に、遁れてその初戀ひの人に投じたくなつた。それはたゞ譯もない業であつた。下僕が着る着物一つを取り上げて、男のなりを以て、取り込んでゐる多くの人々の間を紛れて裏の小門を出るだけにて事は就げられる。たゞ下僕の着ものを着るだけの一事にして戀は就げられる。――女は惑うた。

「けれども此一と日のみは。」と躊躇した。自分を伴うて來た父に――何事をも知らずして別室に夕方の式をまつ老ひたる父に來る愕きを考へれば、せめて父が去りたる明日まではと押へた。馬上の人もたゞ一と目見て過ぎたるばかりの女の、その長き髪と目差とを忘れかねて、翌る日も女の窓を求めて通る。も早妻となッて後の今日の女も、戀しき人のまた通りかゝりもやするとのはかなき願をたよりに昨日の窓に佇みて戀ひつゝ待つ。――二人の目と目が見合はされる。女は今日こそはと考へてまた惑ふ。わがする事より引き出ださるゝさまぐの事を考へ廻らせば心も後くれて打ち惑ふ。女は夜の床に一人泣きつゝ、窃かなる人を戀ひれど、戀ふるに疲れては眠りに入る。明日はどうしても遁れ出たいと念じて眠れど朝となればまた一と日戀は後れた。――かうして或一と夜、多くの人の集ッた夜會の席に、その長劒の人に巡り合ふて、額にキッスを盗まれて膝づきたる妾を、自分の夫に見られてより、女は永久に表

を見下ろす戀の窓の一と間に鎖される。永久に一足もその一と間を出る事を許されない、囚はれの女となッて了ふ。夜は一本の蠟燭の蠟が盡されば、自からの影さへ見えぬ闇の中に一人泣きつゝ鎖される。戀しくとのみ煩える一日くは、そのキッスに詛はれし額に一日は一日の空しき老を刻むのだ。何ぜせめて一と日はと惑うたらう。まだ妻てない日に、なぜ遁れなかッた。その後の夜々も、なぜ明日に延ばしくしては眠ッたらう。——女は最早どうする事も出來なくて、久しき閉居の命を果てる。——女はその老の來かゝりしに愕いて、匠工を呼びて作らせて、辛うじて自からの若き影をとゞめ置くべく一つの半身像を作らせる。それをも通りかゝりはせぬ昔の人の——最早昔の古き人の、通らない姿を待つべく、窓に飾られたのをいたましい形見をとゞめて死んで了ふ。——

自分はこんな話を思ひ出した。話中の女が遁れやうくと思ひつゝもぐずくに一と日づゝを送ッて、遂に永久にその一室を出る事が出來なかッたやうに、自分も遂に此女から遁れる事が出來なくなッて、返らぬ悔を見はしないか。——今ならどうでもなるのだけれど、——

女は何をしてゐるのだらうと見ると、いつしか縫物箱を出して、大柄な一枚の浴衣を縫うてゐた。自分にも相談したやうに、これを仕立てゝ着せて、小さい下女を實家へ歸すつもりなのだッた。次の間の蚊帳では叔母がばさくと團扇を使ッた。少らくして、

「もッとこちらへからなッて寢な。足が蚊帳へ附いてゐるのに。」と小さく一人言のやうにいふ。

「そ、もッとから。」

下女は前後もなく寢てゐるのらしかッた。

自分はうと〳〵してゐた目を開ける。女は蚊帳へ這入ッてゐる。もう夜も遲いらしかッた。

「まだお寢みなさらなかッたのですか。」と疲れたやうに言ひつゝ何事をか待つやうに坐ッてゐた。

「もう火を消してもいゝんですか。」といふ。

「だッてあちらの蚊帳から見えるのですもの。何だか極りが惡いわ。」

女は再び蚊帳を出てランプの位置を考へるらしく、それとなくわざ〳〵向ふへ行ッて、こちらを透かして見たりするやうだつた。外てはぽつり〳〵雨が落ちてゐる。——女は火を小さくして這入ッた。

「とうと雨になッたね。」

「もうさッきからてすわ。——わたしは櫛をどこへ落したてしやう?」といひつゝ頭にさわッてゐる。

女はさッきから、何をか考へ滅入ッてゐた續きのやうなたよりなげな目もとをしてゐるのだッた。自分は女が何を考へてゐたかがちやんと解るやうな氣がして、何となくそれが飽き足らなかッた。

自分は一人朝寢をしてゐた。次の間にはじり〳〵した暑い日足が深くさし込んでゐた。自分の寢てる方は板戸が繰り殘してあッた。その隙間〳〵からも黃色い暑い影が流れ込んでゐた。

自分は不愉快な心持に蚊帳をはづした。また今日の一ん日を、いら〳〵暑くくらすのかと思ふとうんざりする。入口の側て叔母はばさ〳〵洗濯をしてゐる。三疊では女が目の見えない祖母に何をか食べさせてゐた。ぼろ〳〵と膝にこぼれるものを、女は小鳥が啄むやうに指先て拾ッては、心安さうに食べてゐた。

自分は楊子を使ひながら小庭を見ると、折角何んにもくさ〳〵したものがなくてさッぱりして居るのに、叔母が先の家から引き拔いて持ッて來たらしい鷄頭を三本程、子供が遊び事に植ゑでもしたやうに飛んでもない處へ、ぐざ〳〵と土を掘ッて、不格好に並べて植ゑてゐた。雨のあとの土の上には汚ならしく下駄の齒の型が附いてゐる。仕方のない叔母てある。

と、自分は昨日女に言ひつけて置ひた黄色い花の事を思ひ出して尋ねると、つい浮ッかりしてゐて、今朝になッて氣が附いたので下女を取りにやッたといふ。――そんなにしてまても欲しいとは思はない。たゞ鹿の子の模樣のやうな、粒々の黄色い花が小さく開いた小草だからなつかしいと思ッたゞけてあッた。――

自分は下駄を突ッかけて表の木戸の內なぞを見に下りた。青桐のへな〳〵に覗ひた木戸の內に同じやうな家が二軒並んでゐるのだッた。となりはどん人がゐるのか、たゞひッそりしてゐる。入口の横におしろい花が咲いてゐる。その花の色も、あたりに小さい貝の食殼が黒ずんだ土に埋まつてゐるのも、周圍の、剝げた板塀の容子などもいかにも場末の乏しい住居らしく見えた。となりの家との塀から、から

だがやッとくゞれるだけの通り口が附いて、兩方の小庭の方へ出られるのだッた。そこへ這入ッて見ると隣りの家の座敷が覗かれた。自分はその方は見ないやうに務めた。裏の板圍ひの向ひは、栗の木の多い、家主のうちの裏手になッてゐる。板塀の下から見ると、そッちの方は地面が一尺ばかり低くなッてゐるのだッた。家主はそこに菜園を作ッてゐると見えて、夏草の延び〳〵に生へた中に、隱元豆の蔓や葉の暑さうに蟲ばみかゝッたやうなのがへな〳〵の竹に纏はッてゐた。久しぶりに見るほたる草の、水色の花もちらほら見えた。

引ッ越したばかりだから今朝は牛乳がなかッた。何も附けないパンだけに、だゝの茶を飮んで拙い朝飯を食ッた。味噌汁の嫌ひな女は、たゞ胡瓜の漬物をそえて約ましげに食事をした。

自分はのそり〳〵書物を整理して戸棚に入れた。もう日足の引いた跡へ机を出して、原稿紙と、此間から讀みさしてゐた一冊の本だけを上に載せた、女は行李て少し皺になりかけた夏冬の洋服を始末してゐた。もう、これから作が出來上ッて。また勤めの口を探し當てるまでは、あゝいふものも着る事はない。自分はまた口を探す日の事や、作が原稿料になるまでの長い間隔なぞを考へるともなく考へながら、もう朝から暑さに負けたやうに、けたるく横になッて、女の火熨斗を使ッてゐる手元を見詰めてゐた。

午近くになッて小さな下女は汗だらけになッて歸ッて來た。

「お前今時分まで何をしてゐたの？」と叔母は責める程でもなく言ッた。

「こッちへ花を持ッて來て御覽。」と自分は寢轉びながら言ッた。下女は何だかおど〳〵して二疊に小さ

くなッてゐた。聞いて見ると、花を拔き取らうとして引ッぱッたらぶすりと根が切れて了ッたから、どうしやうかと思ッて、空き家の庭で泣き迷うてゐたといふのだッた。小女は涙をこぼして俯つ向いてゐる。

「おやァあちらへ言ッてよく謝罪ッて恢へて貰ひな。泣いたッて仕方がないぢやないか。それよかお前の足を見な。そんなほこりまぶれの足をして上り込んでゐるぞの。」と言ひつゝ叔母は解いた蒲團の綿を一と抱へづゝ緣側の日向へ運んだ。午過ぎになッてから、自分は作の結構について考へかけた事を書きつけて見た。家主の栗の木へ蟬が來てじん〳〵と鳴くのだッた。祖母は叔母と何か話してゐる。自分がものを書くのに憚ッて、ひそ〳〵話しのやうに囁いてゐる。

「てものい、綿があれては重たいけ、あれては寢られませんけ。」と祖母は例の癖で思ふ儘を言ひ惡さうに言ッてゐる。

「それでも、冬には寒い〳〵とお言ひたてしやうがの、そいぢやけ業と厚くして置いたのですのに。——解いて拵らへ直せとお言ひのですか。」叔母は不平らしく言ふのだ。拵へ直したッてざうさはないぢやないか。ひそ〳〵話をすると餘計に耳に附く。自分は浮ッかり二階のある家を去るのではないのにと考へつゝ、二人の話の區切りがつくのをもどかしく待ッてゐた。

自分は暑さに萎へたやうにへと〳〵になッて、六疊へ斜めにごろんとなッたまゝ、作のことを茫んやりと考へてゐる間に、一人て寢入ッて了ッたのだッた。目をさまして見るともう日影はどんよりしたたそがれになッてゐた。自分は寢飽きた不愉快な心持をして、一ん日にじり〳〵しい暑さの中から救ひ上げられたやうな、屋外の影を見た。叔母の植ゑた鷄頭は力なげにしなびてゐた。緣側には手水鉢が下ろされて、中の水に赤く塗ッた、龜の子のやうな陶器の金魚が四つばかり泳ぐのにも飽きたやうに固まッて浮いてゐる。叔母のする事だ。こんなものを買ッて來ては。安いてしやう、いくら〳〵てすよといふのが癖だ。僅かだから無駄づかひてもないと言ひわけのやうにいふのである。子供のやうな事をして喜んでゐる。それはいゝが家(うち)のものたちは、自分が自分て起きるといはない間はいつまて放(ほ)ッたらかして寢させるのかと思ふと、いづれも自身は自身の事ばかりを考へてゐればいゝとしてゐるかのやうに、何んでもない事が小淋しい。自分は家の中をぐる〳〵見廻はした。女が一人つくねんと次の間の片隅に坐ッて、する事もなげに指の先を見つめて茫んやりしてゐる。夕方の蔭は見る〳〵家の内にも催ほして來るやうな氣がした。自分は目さめたばかりの心持には自分と共に女のゐるといふ事は忘れてゐた。

「おい、なぜいつまても放(ほ)ッといて寢させるんだ。」と女の智慧のないのを物足りないとするやうにかう言ッた。

「いく度も起してもお目さめてないんてすもの。」とたッた一人てたそがれに漬ッてゐたやうな悄んぼり

した顔をしてゐる。自分は外の井戸ばたへ顔を洗ひに出た。叔母も下女もそこらにゐないのだッた。戸口の外に女足駄を洗ッて裏返して干したのが二足その儘に並んでゐた。

「叔母たちはどこかへ行ッたのか。」と言ひつゝ上ッて、やつぱりつくねんとしてゐる女の前に立ッた。

叔母は下女と二人てさッさと先に夕飯をすまして遠い××の通りへ活動寫眞を見に出たといふ。

「下女が歸るんだからお別れに見せてやるんだッて仰ッしやるのはいゝけれど、自分が矢ッぱり見たいのですわ。此間から活動寫眞〳〵て言ッてらッしやるのですから……子供のやうな叔母さんですわね。」

と女は淋しさうに笑ッた。

「何かを叔母に言はれたのかお前？」

「なぜです？」

「頻りに浮かない顔をしてるぢやないか。」

「わたしには何も仰ッしやらないのですけどお祖母アさんに蒲團の事てひどい事を言ふのですもの。上品ないゝ方ですのに何うしてお祖母アさんにあんなにつけ〳〵言ひたいのでせうね。」

「それぎりの話か。」

「外にもありますけれど……それよりかわたし夏蒲團を一枚拵へましたわ。いゝてしやう？」といふ。

指さす處に疊んで片寄せてある。

「叔母さんの方のと、こちらとてはお蒲團の拵へ方がすッくり違ひますわね。」

といふ。

「ふゝん、お前が縫ひ上げたのを叔母がぐづ〳〵言ッて解いて了ッたのだらう？」

「マアそんな事てすわ。」と女は素直な笑ひをした。

「あれは癖だもの。そんな時には默ッて見てゐるんさ。」

「だからすみませんてしたとあやまッたきり叔母さんのなさるのを神妙に見てゐましたわ。」

「下女を返すと言ふ事はもう當人に話したのか。」

「叔母さんが言ッて下すッたやうてすわ。何だか、しく〳〵泣いてゐましたから。」

「いよ〳〵歸して了ッて見るとこッちも困るだらうね。」

「それの方は大丈夫てすけれども……むたしが何んてもすればいゝのですわ。」

かう言ひつゝ女は小早にランプを附けた。叔母が下女を歸すのも半はそんなあてもあるのだと思ふと。自分の女を半分下女にするといふのも自分自身のために厭てもあッた。——自分は湯へ出て行つた。

「今夜は何んにもないのてすけれど我慢して下さいましな。拙らないものばかり。」

女は膳立をして待ッてゐた。自分は子供のやうに足を投げ出してランプの火を見守りつゝ、小さい下女の事を考へた。小さい女が一年もゐた毎日の事を振りかへると、何んだかいつまでも置いてやりたいやうな氣もした。

「一寸とこれを御覽なさい。何だか可愛想てすわね。」と女は三疊にある下女の荷物の一つを持つて來て

見せた。それは自分が使ひすてた筆だのインキの涸ッて殘ッたのだの、入らない雜誌や毎日の新聞の讀み殼から、毎晩寢がけに切り拔いた景色の寫眞や駒繪を集めたのや、それから自分の使ふハミガキの硝子箱を取ッて置ひたのなぞを、大事さうに菓子箱の蓋に入れて紐で縛ッてゐるのだッた。

自分は何をか別れに買ッてくれたいやうな氣がした。

「てすけれども浴衣も拵へてやッたのてすしね……それからお祖母アさんにもいろ〳〵何かと戴きましたわ。」と女は言ッた。

寢過ぎて胃の具合が惡いから食事はそこ〳〵に濟ましたが、女が湯へ行ッて來てから、ろくに飮めもしない癖に久しぶりて混布のつくだ煮て一杯つけさして、椽側へ出てちびり〳〵飮んだ。

「さッきはよく見もしなかッたけれどあの蒲團はさうなんだね。入らない贅澤ぢやないか。」と疊んてあるのに目をつけた。

「さうてしたか？　わたしはつい入らない帶があッたものてすから。――中の綿はお祖母アさんが毎晩肩を揉んて上げた褒美だッてわたしに二圓下さッたので買ッたんてすのよ。」と笑ッてゐる。

「てッちへ引ッぱッて來て見せて見ろ。」

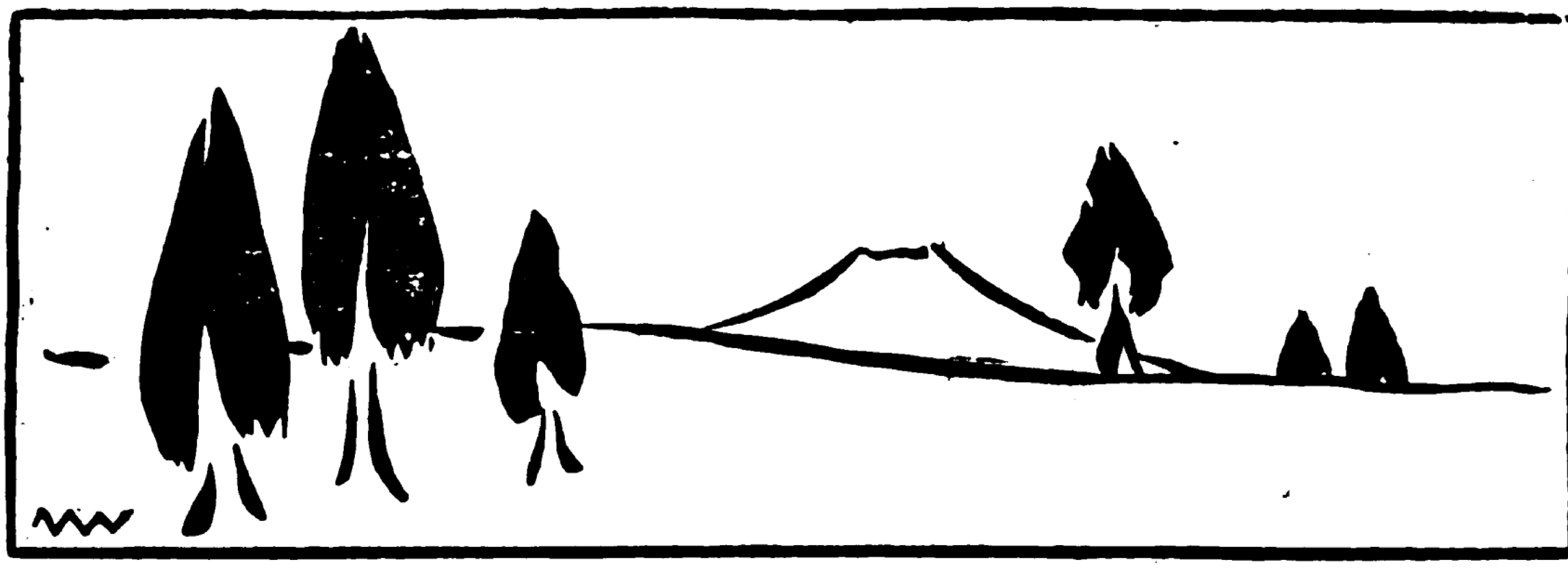
「見覺えがおありてしやう此の帶には。」

「どうだッたかね。」

それは白地に薄を染めた絽の帶を解くしたのだッた。

「余計な事をして帶が一本なくなるぢやないか、そんなお前……」

「でもかういふ處を御覽なさい、丁度後ろへ出るところにこんな汚點がついてゐるんですもの。もう結ばれはしないわ。」と濟ましてゐる。自分は何だかふいと、これが此女のやがて自分の處から隔ッた跡の形見となりはしないだらうかといふ氣がして來た。何の譯ともなくそんな氣がふいとした。それが自分がいつかは女に飽きる日が來る事を暗示されるやうな心持を誘ふのだッた。さッきから敷金の受取を帶から出して珍らしさうに見てゐた女は、そんな事は何んにも知らないで燗をつけに立ッて行ッた。もうさういふ日が來た時に女が子でも姙んでゐたら何うなるのだらうと思ふ。子といへばいつ出來るかも解りはしない。自分は考へもなく、見す〳〵要らない厄介の中に入ッて行くやうな氣もして來た。——自分が此女を飽きる日が來るか來ないかといふ事が、女の外貌一つに係ッてゐてもするやうに、燗をして來て坐ッた女の顏を、盗むやうにまじ〳〵と見守ッた。來いと言へば素直に來たやうに、歸れと言ッても、さまで反抗もし得ないで悄々と歸ッて行くのだらうと思ふと、女よりも自分の方がもの淋しい心持がするのであッた。(終)



げんげ

田山花袋

郊外に住んで居るかれは、辨當を抱えて、電車に乘つて、いつも濠の中にある大きな役所に勤めに行つた。大抵は洋服て、新しい帽子を冠つて、手にはステッキをついて居た。六疊、八疊、四疊半、二疊の借家住ひて、出かける時には、子供を生んでもうすつかり色の褪めた細君と二人の子供とがいつも上り端まで送つて出て來て、『行つて入らつしやいまし』と丁寧に後から聲を懸けた。

毎日五時になると、かれはきまつて役所から歸つて來た。常に父親の靴の音に聞き馴れてゐる七歳になる總領の女の兒は、五六間先から、そらお父さんのお歸りと飛んで出て來るのが例になつて居た。其頃には、細君は

棒がけになつて、勝手て、夕飯の準備に忙しがつて居た。牛肉を煮る匂ひなどがいつも餓え労れたかれの食慾を刺戟した。

雇ひから段々立身して、今ては四十圓ほどの月給取になつて居た。屋賃が六圓、米代が五圓、主人の飲む牛乳が二圓足らず、薪炭、醤油、其他の雜費を合せて七八圓、毎月二十三日頃に月給が下つて、それから來月の十日頃までは、主人の財布にも細君の財布にも一二圓の剩つた金が入つて居て、時にはそれを出し合つて、子供を伴れて、賑かな町の方に出かけて行つた。

かれの扮装はそれてゝ綺麗にしてあつた。月賦て買つた洋服、それをかれは自分て丁寧に刷毛て拂つた。靴も自分て上り端の處にある下駄箱から出して、クリームをつけて、絹布て拭つた。それに、かれは頭や顔に常に心を用ゐてゐた。道樂と謂つては他にないが、こればかりは他から見て可笑しいと思はれるほどて、髪はきまつた理髪肆て刈り、上等な香水を身分不相應な高い錢を出して買ひ、西洋剃刀を傍に置いて、毎日のやうに顔を剃つた。

ネクタイとカラー、それにもかれは浮身をやつした。流行の色や好みや、さういふものが西洋小間物屋の店頭に並べてあると、かれはいつも財布を倒にしてそれを買つた。「本當に、それが貴郎の道樂ねえ、まだあのネクタイなど綺麗ぢやありませんか」細君は其まゝに捨てゝあるネクタイを見て、いつもこんなことを言つた。しかし綺麗な顔や、キチンとした扮装を見るのは氣持が惡くもないと見えて、細君も別に深く咎め立てをしやうともしなかつた。それに自分の夫に對する近所ての評判もられしかつた。「好

い方ね、好い旦那さまねえ」近所の細君達はかう言つていつも話し合つた。『奥さんとは、うつりがわるいわねえ。旦那さまが可哀相ねえ』『あれて月給さへ餘計に取ると、それこそ大したものてすけれどねえ……仕方がないものねえ」こんな話がいつも近所の細君や娘達の口に上つた。

かれの朝に夕に通つて行く電車までの路には、西洋草花の見事に咲いてゐる大きな邸の花園があつたり、春は美しく咲揃ふ櫻の並木があつたり、毛氈を敷いたやうな綺麗な芝草の庭があつたりした。新たに開けた郊外には、新建の家が多く、中には大工がせつせつと家を建てゝ居る處などもあつた。此方の丘から向ふの丘に行く處には、植木屋が角に一軒あつて、其向ふは空地になつて居た。細い川には板橋が架つて居た。

その少し先は町の通りになつて居た。靴屋だの、菓子屋だの、豆腐屋だの、下駄屋だのが續いた。其處等の上さん達は、いつもかれの通つて行くのを見送つた。高いところにある電車の停留所でも、かれの妻はいつも女達の目を惹いた。

かれ等の生活は、平和に穩かに靜かに經つて行つた。事といふ事は一つもなかつた。夫婦の間柄も至極圓滿て、子供達も可愛く溫和しかつた。世の中にいろいろな事件や活劇のあるのは不思議に思はれる位てあつた。新聞を透して見る種々の悲慘な事件や、恐ろしい罪惡や、思ひもかけない秘密や、さうしたものはかれ等には全く沒交渉てあつた。平凡を平凡とも思はずにかれ等は暮した。

細君は三番目の子を妊娠して、やがて男の兒を產んだ。それは稗弱な發達の十分でない瘦せた兒であつた。細君はまた細君で、產前に病つた脚氣が治らないので、長い間、醫師にかゝつた。乳は生れた兒に飮ませられなかつた。止むなく牛乳やミルク罐を買つて哺育した。四十圓取りの安官吏に取つては、それ等の費用は小さい打擊ではなかつた。かれは何うかしてその費用を得なければならなかつた。かれは鄕里の先輩が大學の敎授をして居るのに賴んで、寫字の口をさがした。かれは幸ひにも國語に就いての素養があつた。更に幸ひにも、その大學の敎授は、神田あたりの大きな書肆の依賴を受けて、片手間に國語の大辭典の編纂をして居た。かれは每週金曜日の夜だけそこに詰めることにして、每月十圓の手當を貰ふ身となつた。

金曜日には、「今日はお父さんは遲いのねえ」かう言つて子供達は早くから寢た。かれは大學の敎授連や助手や書肆の編輯員などの居る洋館の二階で、明るい電燈に照されながら、夜遲くまで一隅に小さくなつて仕事をして居た。十時半が退出時間になつて居るが、仕かけた用事があつたり、敎授連が雜談に身を入れて容易に歸らうと言ひ出さなかつたりして、時には十一時を過ぐることなどもあつた。郊外に歸る電車は、最終が十一時半で、其處から停留場まで十分を要する身には、時計が十一時の處を指すと、もう間に合はないかと氣が氣でなかつた。かれは走つて行つて、辛うじてその赤の電車に間に合つた事も一度や二度ではなかつた。

春先や夏は眠くもなつた。それを眠るまいと思つて辛抱するのは大抵な辛さではなかつた。一日役所の仕事に齷齪した體は、夜まで縛られて、歸ると、つかれ切つて綿のやうになつて居た。

かうして一年ほど經つた。

ある夜のことてあつた。かれは十一時過ぎに編輯所の門を出た。其夜も教授連はくだらぬ話に笑ひ興じて居た。郷里の先輩は、『君の方は電車が間に合はないと好けないから失敬したまへ』と言つて吳れたが、さうかと言つて先に歸る譯にも行かなかつた。かれは門を出る時、時計を出して入口の電燈に照して見た。もう時間はいくらもなかつた。夏の初めの蒸暑い漆のやうな闇の中を衝いてかれは走つた。

電車はまだ來なかつた。かれは暗い停留場に立つて待つて居た。疲勞に伴つて起つて來る慾望がいつものやうに萌して來た。かれは家に寢て待つて居る細君を想像した。

轟と音して電車は遣つて來た。赤い電燈は佗しさうにあたりを照して、疲れ切つた車掌の顔をぼんやりと見せた。かれを載せると、電車はすぐ出た。

電車には客が二人乘つて居た。一人は法被を着た勞働者らしい男てあつた。一人は二十三四位の、髪を庇髪に結つた、色の白い、何方かと言へば綺麗な女てあつた。銘仙の派手な着物を着て居た。

かれは女の前に腰をかけて居た。氣が附くと、かれの眼と女の眼とは、時々宙に會つて居た。女は見ないやうにして、飽かずに男の顔を見た。

電車は全速力を出して走つて居た。勞働者は隅の方に寄りかゝつて目をつぶつてゐたが、とある停留

場に着くと、慌てゝ下りて行つて了つた。其處からは、誰も乘るものはなかつた。
車掌は終日の勞働に勞れ切つたといふやうに、車内に入つて來て、今まで勞働者の居た一隅に腰をかけたが、襲つて來る睡魔に抵抗することが出來ないやうに、コックリコックリやり始めた。
女は猶頻りにかれの方を見て居たが、俄かに、
「代々木はまだて御座いませうか」
かうかれに向つて訊ねた。やさしい艶のある聲てあつた。
「私も代々木て下りますから」
「あら、ま、さうて御座いますか」よろこばしさうに、「私はこちらの方は始めてて御座いますものてすから。…」かう言つて莞爾と笑つて見せた。
女は絶えず笑を顏に湛えて居た。女の眼には、意氣なネクタイと綺麗な房々した髮とやさしさうな單純な色の白い顏とが映つた。女の顏にも疲れ切つて眠むさうな表情がそれとなく見えて居た。肉附の好い、膝のあたりの肥へた、好い艶の顏をした女てあつた。
停留場をいくつ乘越しても、客は遂に一人も乘らなかつた。かれはかう夜遲く一人て電車に乘つて居る女のことなどは餘り深く考へなかつた。先程言葉を交した後は默つて只相對して居た。かれは自分の顏の上にをりをり注がれて來る女の眼の意味を解し得るやうな男てもなかつた。
電車は千駄ヶ谷を通り越して、やがて代々木に着いた。

女も後からつづいて下りた。切符を受取る男は、電燈の明るいテーブルの上に突伏して、グウグウ鼾を立てゝ居た。

夜は暗かつた。空には星の光もなかつた。闇はあらゆる人間の秘密を深く包みかくして居るやうであつた。停留場から下りる階段には、電燈の餘光が微かに照つて、せんだんの細かい葉の夜風にそよぐのがそれと見えた。下の雜貨店の雨戸はすつかり閉つて、よろづ荒物と書いた軒燈がさびしさうに闇に點つて居た。

女は後を追ふやうにして跟いて來た。艶かしい聲は再びかれの耳に入つた。

「代々木に山谷といふ處が御座いませうか」

「え、……私も山谷に行きますから」

「まあ、左樣で御座いますか。」最初の時の會話と同じやうな調子で女は喜ばしさうに言つた。すぐ言葉を續いて、『御迷惑で御座いますけれど、御一緒に願へますまいか』

「よう御座んすとも、　どうせ歸るんですから」

かれは歩調を緩くした。女は引添うやうにして、小刻に早く歩いた。靴の音とゴム草履の音とが絡み合つて、靜かな夜の空氣に響いた。

女の胸の鼓動の高いのが男にも知れた。かれは成たけ靜かに歩いた。角の交番の前を通る時には、巡査は怪しむやうにして二人の方を見た。

『山谷はどちらにお出でゝす?』

かれは暫くしてからかう尋ねた。

『二百十五番地だそうで御座いますが……中田と申すんですが』

『二百十五番地――中田』かれは考へて、『私の居ます處が百二十番地ですが、……何の邊になりますかな……何でも御料地の方でせう』

『本當に遲くなつて、困つて了ふんで御座いますよ』

今通つて居る處は、靴屋だの豆腐屋だののある町の通りであつた。大抵はもう戶を閉めて居る中に、一軒電燈がぱつと闇に照つて居る家があつた。それは菓子屋で、丸い硝子の罎やビスケットの大きな錻などが並んで居た。

靴屋の角から曲ると、路はさびしく暗くなつた。女はいよ〳〵男に寄添うやうにして步いた。微かな夜風が通る度に、紅粉の匂ひや香水の匂ひが男の鼻を撲つた。女は矢張スウスウと呼吸を高くして居た。坂を下りやうとする處で、女は何物に躓いたやうにアッと言つて轉んだ。一步先に行つた男は、『危い?』と思はず言つて引返したが、打伏になつたまゝ女は容易に起きやうともしないので、

『何うかしましたか?』

かう言つて、顏を傍に寄せて見せた。女は呼吸をはづませて居た。

『何うかしましたか?』

かれは覗くやうにして、今一度かう言つて見た。

「いゝえ、別に……」

女の聲は微かてそゝるやうな聲てあつた。かれも流石に胸を躍した。兎に角起してやらうと思つて、女の肩の處に手をやると、女は右の手て、しつかと絡みつくやうに男の體に寄りかゝつた。暖い柔かな血が二人の體に動搖させた。

起き上りさまに、女は男の手を堅く握つた。其時女の艶に笑つた顔が闇にもそれとあざやかに見えた。……火と水とが俄かに一緒に襲つて來たやうな氣がした。二つの黑い影が縺れ合つて、だらだら坂を下へと並んで下りて行つた。水の音が微かに靜かにやさしい夜の音樂を奏てゝ居た。橋を渡ると、其處に毛氈を敷いたやうな草場があつた。

「送つて行つて上げやうか」

「いゝえ、大丈夫てすよ」

「てもかう遲くつては、訊く人がないと困るてせうから」

「いゝえ、本當に大丈夫よ。」

女はそはそはして居た。男から何か聞かれるのを恐れるやうにも見えた。其處から十間ほど行くと、路は二つに岐れて居た。

「では、私は此方に參りますから」

一刻も早く別れるのを女は望んでゐた。男は新しい驚きを重ねたやうに、かう忽卒に別れて行く女を見送つて居た。

「では、左樣なら」

「左樣なら」

女は足早にスタスタと向ふの方に歩いて行つた。かれは喪心した人のやうに、じつと其處に立盡して居た。女の足音も遠くなつて、遂には聞えなくなつて了つた。ふと氣が附くと、かれも家の方へ無意識に歩いて居た。

惡夢に襲はれたやうな氣分て、かれは家の門の戶を明けて入つた。細君は眠むさうな顏をして、ランプを手にして迎へに出て、かれの脫いで上つた靴を下駄箱の中にしまつた。

長火鉢の前に不思議な顏をして、默つてかれは坐つて居た。細君はいつものやうに、其處て夫の脫いだ洋服を疊みにかゝつた。不意に、「何うしたの？貴方、大變泥がついてゐるのね。何處かて轉んだんですか」

「うむ」

かれは生返事をして、「まあ、疊まないて、其處等にかけて置く方が好い」

「さうしませう。大變に泥がついてゐる。ほらズボンにも上着にも」細君はかう言つて、それを衣紋か

けにかけた。

其夜はかれは容易に眠られなかつた。二時を聞くまで床の上に輾轉反側してゐた。

朝、目が覺めると、昨夜のは、あれは夢ではないかと思つた。しかし夢ではなかつた。洋服が其處に懸つて居た。

かれは起きて、上着やズボンを調べて見た。泥は其處此處について居た。かれは思ひ出して、不思議な笑みを顏に湛へた。

自分の體が何うかなつて居やしないかとも思はれた。何處の誰だか知れない女……………自分の肉は腐れて行きはしないかと言ふやうないやな氣分にもなつた。一方では、またそれが非常にめづらしくなつかしかつた。自己の今まで夢にも知らなかつた世界が其前に展けたやうな氣もした。二百十五番地の中田、今朝はまだ屹度其處に居るに違ひない、行つて尋ねて見やうかとも思つた。別れ際の女の冷淡な態度も、かれには不思議に思はれてならなかつた。

いつもの樣子と違つて居るので、細君は三度まで、『貴郎何うかなすッて?』と訊ねた。其度毎に、かれはゾッとした。われとわが身を振返つて見た。

其女と細君との關係を併せて考へて見たりなどした。今までには、かれと細君との間には秘密といふものはなかつた。細君一人を守つて他に女などを知らなかつた身には、何だか昨夜のことが非常な罪惡

てあるやうにも考へられた。かういふ風に、男が細君以外の女に關係を持つといふことは、かれには少くとも一問題として考へなければならない事實であつた。

別れた路の角から、停留場に至るまでの間は、鮮かにかれの前に現はれて見えた。かれは朝飯をも沈默の間に濟した。やがて出勤の時間が來た。

かれは刷毛で洋服を拂つた。ズボンに附着した泥は容易に除れなかつた。

朝は美しく晴れて居た。植木屋の松が蒼い空に見事に聳えて居た。やがて女に別れた路の角に來て、かれは鳥渡立留つてあたりを見廻した。

『まだ其處に居るに相違ない』

かれはこんなことを思つた。

草場には露が朝日にキラキラと光つて居た。夜の秘密が此處に潜まうとは何うして思はれるやうな明るい日影があたりを照した。川は依然としてさゝやかな音を立てゝ流れた。

昨夜女の轉んだ跡を探すやうにして、かれは上を見ながら、坂を昇つて行つた。何も落ちては居なかつた。其の箇處も分明とはわからなかつた。靴の跡もゴム草履の跡もなかつた。

何時も見知り越しの此處等に住んで居る人達は、洋服を着たり、羽織袴をつけたりして、彼方此方の巷路から其姿を現はして、停留場の方へと出て行つた。角の門構の家からは、相變らず綺麗な女學生が紫のメリンスの風呂敷包をかゝえて學校に出かけた。

通りては、靴屋の亭主はいつものやうにせつせと靴を拵へて居た。交番の前には巡査が立つて居た。これが此のまゝて終らうとは、かれには何うしても思はれなかつた。かれは再び逢ふ時を豫期した。何處かて屹度逢ふに相違ない。愛嬌に富んだ黒い眼、房々した髮、それをかれは常に明らかに眼の前に描き出した。役所の忙しい仕事の中ても、時々それを描いて見た。……ゆくりなく途中て逢ふ、オヤと言うて聲をかける、それから戀人か夫婦のやうにして一緒に歩く、別れてからの話をする、何處かに行く……氣が附くと、いつもこんなことを際限なく想像して居た。

代々木にその知つてゐる人の住んて居るといふことが、殊に有力な豫期をかれに與へた。東京の何處かに住んて居る女は、屹度また此處に遣つて來るに相違ない。林の角、路の角、町の角、垣の角、何處かて再びその笑顏を見るに相違ない。かれはかう思つて毎日その路を通つて役所に出かけた。

金曜日の夜は、殊にさうてあつた。電車に乘る時には、屹度、其女がその一隅に腰をかけて、自分の乘つて來るのを待つて居るやうに思はれた。しかし其希望はいつも徒に過ぎて行つた。

二百十五番地の中田といふ家を訪ねて、それとなく其女の消息を探らうと思ひ立つたのは、それから二月ほど經つてからのことてあつた。これまてにもかれはそれを思はぬてはなかつた。時々はそれとなく家を探つて見やうとも思つた。しかし、いつもそれを實行する氣分にはなれなかつた。

夕飯を濟してから、細君には内所て散歩をすると言つて、獨りて出かけた。夏はもう暑くなつて居た。

浴衣を着た人がぞろ〳〵と街頭を通つた。

かれは其番地を彼方此方に探した。其處は丁度丘の陰になつて居るやうなところで、要垣やら、芝草の塲やら、冠木門やらが長く續いた。中田――成程其處にその名の記された軒燈の出て居る家があつた。かなり大きい門構の邸で、栽込の高野槇や、椎や、八つ手や、寒山竹などが外からも見えた。二階には硝子戸がはまつて、籐椅子が置いてあるのが眼に入つた。

玄關から入つて、それを訊くやうな心持には容易になれなかつた。かれは其前を行つたり來たりした。最後に、思ひ切つて、かれは門のくゞりを明けた。

鈴の音がけたゝましく鳴つた。

書生が出て來た。かれは顔を赧くして、二月ほど前に夜遲く此處をたづねて來た女のことを聞いた。『あまりに雲をつかんだやうな話で御座いますけれど――』かう言つたかれは幾度かどもつた。

書生は一度奥に入つて行つたが、暫くして出て來て、『何うも解りませんさうです。……二月ほど前に夜遲く來た女などないさうです。名前でもわかりますと、見當がつきませうけれど……何うも解りかねます』かう言つて、怪しい男でもあるやうに、じろじろ〳〵とかれの顔を見た。かれは要領を得ずに歸つて來た。

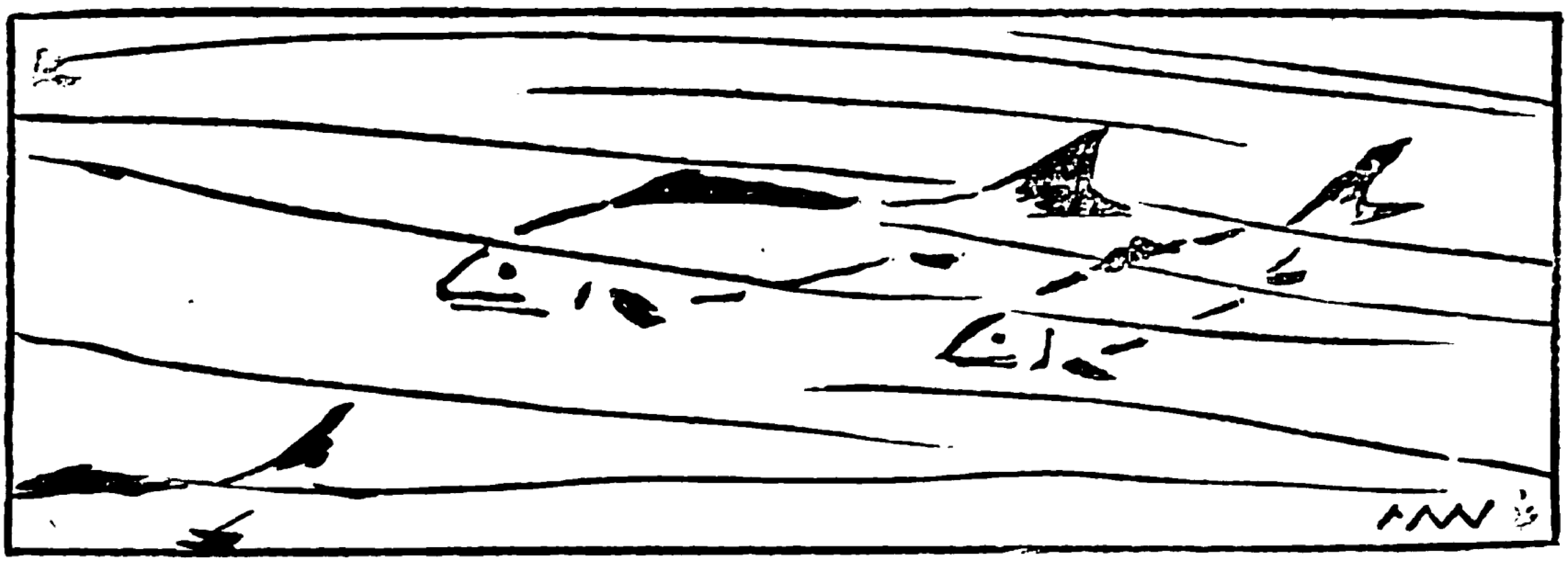
女は果して眞實を言つたか何うか、それもやがては疑問の一つになつた。――時は段々經つて行つた。

雨の降る日にも、風の吹く日にも、かれは其草場に添つた路を通つて、停留場の方へと歩いて行つた。かれはもう以前のやうな快活な氣分を失つて了つた。かれには世の中が一種の謎のやうに思はれ出して來た。解すべからざる神秘――意味のない神秘が、突如としてかれを襲つて、平和と平凡とに安んじて居たかれの生活を粉微塵に砕いて行つて了つた。

秋はやがて來た。さびしい雨が郊外の大きな櫟の林から涙のやうにバラバラとこぼれて落ちた。霧が一面に野をこめて、朝日が灰色に曇つて見えた。蟲の音も絶え絶えに、やがては野分が凄しい勢て、野の草を薙ぎ倒した。

細君や子供を伴れて賑かな町に出懸けて行くやうなことはもう稀になつて了つた。かれは默つて物を考へるやうな人になつた。

草場には草が枯れたり萠えたりした。雪が一面に白く埋み盡して居る朝もあつた。春はけんげが綺麗に咲いた。



椿

眞山青果

一

荷車は三臺で間に合つた。最後(あと)の一臺が行つてからも一時間の上になる。それでも未だ、小日向からの荷物は來なかつた。おとめはその間に、隣家(となり)の印判屋と合羽屋、ランプ屋、井戸附合のある所だけへは顏を出した。足端の惡るい溝板(みぞいた)を歩いて、裏に逼塞して居る茶筅屋の年寄とも、立ちながら戸口(とのくち)で話して來た。

日があたる臺所の閾に、ガツ草履の裏を乾かしてあつた。それを直して、おとめは、今一度家の中に入つて來た。そして、念の爲めに、開ける所は殘らず開けて見た。火鉢の跡が固く捺れてある縁無し疊(へりなし)は、梯子段の下と

店へ出る半間にだけ、疊表がヒドク擦切れて白い心が出て居た。ツイこの頃まで炬燵して居た平吉の肩が、壁の腰にも殘つて居た。坐つて居ると、斯うまで窮屈とも思はずに暮した。

砂壁のこぼれてる急な梯子段を、二階へも上つて見た。おとめはその低い櫺子窓に腰掛けて、坂下の方から來る荷車に氣を付けた。そこから江戸川の縁までは、塵埃を被つた瓦屋根が眞直に續いて居た。それが五月の澱んだ日光の下に、遠い田舍町のやうに乾いて、寂れた道路が凸面に盛つて見えた。

目白臺から高臺の方は、風に搖らぐほど、青葉が濃くなつて居た。少しは明るい土に上氣せたおとめは、唇の皮を剝きつゝ、あの頭の低い兄に騙されて、金を渡してしまつた事を、今になつて悔んで居た。然う云へば、探るやうに人を見る彼の小さな目に、初つから胡散が見えて居た。引越す家の番地を云はなかつたから、預けた家から彼方へ直ぐ搬んだものとは思はれなかつた。

「到頭、又。」

斯う呟いたおとめには、強い決心が來て居た。何よりも眞先に、あの決斷のない兄にこの大膽を爲るやうにした、兄嫁のシブトイ――血の張つた顏が目の前にあつた。

隣家の印判屋の娘に、今朝猫兒を預けたまゝ、そのまゝに忘れて居た。おとめはそれを思出して、目の暗い梯子段を降りると、男の兒を負つた田舍風の女が臺所の前に立つて居た。下げて居るバケツの中には、雜巾掛けの用意をして來た。この女は、この店を引取るといふ職工長の女房であつた。

「最うスッカリお片付なさいましたね。」

汗に赤くなつて來た女は、斯う馴々しい言方しながら、板間へ上つて來た。紺の足袋を穿いて居た。おとめはそれを待たせて置いて、女の持つて來た箒で、ザッと其邊を掃出した。高い明窓の雨戸を戸袋へ押込むと、隣との狹い廂合に漂ふて居た疲れた光線が、この鬱陶しい部屋を幾らか明るくした。それから改つて、初めての挨拶をした。

女は稀らしさうに店へ立つた。二間口のガラス障子を、廣告の張幕で閉下した店には、戸棚、飾り臺、帳場格子、蓋箱、動かない建付の造作まで總て封印の認印が捺してあつた。それは、昨日受渡しを濟したこの亭主が小工面に貼付けて行つたのだ。女にはその帳場格子も、飾り臺も、蚊遣香の廣告繪も、初めて見るやうに稀らしかつた。厚ぼッたい切櫃縮の袢纒を捲り上げて、負つた小兒の顏を肩の上から、空な戸棚のガラス板に映して見たりした。

この夫婦が上總の村を出て來て何年、兎に角これでも一軒の店を張るまでに漕付けた長い間の辛勞と悕惧、それはおとめにも幾分か汲取る事が出來た。小憎らしいほど人見知する兒に些い〳〵愛措しながら、おとめは二年この方の自分の經驗など話して聞かせた。汗臭さい女は田舍人の熱心をもつて、おとめの好く動く口許を見詰めて居た。

「賣の方の符丁は、ジ、フ、ヤ、ノ、ヒトツ、ホリ、――皆それて記いて居ますから。それても初めは間違へますよ。却つてお客樣から敎えられたりするんてす。終にはこッちも考へて、あゝして貼出して置いて、ハイ〳〵か何んかて、品物を出す前にチャンと賣値を見て置くんてすよ。一々附丁に指を折るや

うぢや第一氣が利きませんからね。」

おとめの指示した、客の方からは見えない鴨居裏の壁に、ほうたん、ゐさん、きみやうえん、すみれ、けいば、ゐげた、と賣値を書付けた女手の貼紙がしてあつた。

「ジ、フ、ヤ、ノ――。」女は口の裏て云つて見た。

「ジフヤノ、ヒトヾホリ。あの、紙治にある文句なんでせう。ヲンて、これからして賣藥店の符丁ぢやありませんやね。」

斯う云つて笑つて居る所へ、タオルを腰に下げたこの女の亭主が、息を切らしながら荷車の後押して移つて來た。

一歩郊外へ出ると、そこには最う春が濃く熱れて居た。穗先の畠、若葉、雨後の澄んだ空の青。肌に透み入るやうな香しい風が、雜木林の上を吹いて來た。引窓の綱と一緒にくるんで兒猫を抱いたおとめは、早稻田裏の新開町を曲つて、荷馬車の轍跡の固く乾上つた郊外の新道の方へ入つた。その途中、同じやうに鬱つた蒼い生垣の間の細道から、草履を穿いて出て行く大學生に幾人も遇つた。

「此所だよ、おい、おい。」

斯う聲掛けられて氣が附くと、竹垣の窓に腰を掛けてる平吉の前を、最少して通り過ぎやうとして居

た。その癖、紅い涎掛の石地藏も、牀几を道路に出してある理髪店も見て通つて來たのだ。

「曲り角に、何んても大きな欅の木があると思つた。」

おとめは笑ひながら立停つて、周圍を見廻した。二十日前にこゝを見に來た時とは、スッカリ樣子が違つて居た。門の柱も青葉に暗らくなつた。門は別々になつても、それは草葺の大きな植木屋の地內に並んだ、障子窓の多い新築の貸家の一軒であつた。

新しい爲めに軌む低い潛り門を入ると、明外した玄關の黃色い壁の前に積んであつた樫木の重ね書棚があつた。それを見て、ホッと息が出た。

「あ、來ましたね。簞笥も。」

「簞笥は最う來る。兄さん一人の力だから二度に搬ぶと云つて居た。だが、酷いんだよ、これ、こんな塵埃だ。キッと物置へでも抛り込まれたんだよ。」

平吉は緩い兵古帶の端を挿みながら、疊に取擴げた書籍の中から、鼠に緣を嚙まれた一冊を持つて來て見せた。この鼠色の書籍は三冊かて纏つて居た。これが丸善に來て居るのを見て來て、それが無ければ他に後れるやうに云ふ故、隨分無理な算段をして來て平吉に買はせた、それておとめには忘れられなかつた。

おとめは猫の頭を包んで來た、前掛の紐を解いてやつた。お禁厭に二三度廻して、鼻の先を擦つて、それから疊の上に放した。小猫は尻尾を高くして、白い頸の毛を音立てゝ顫つた。

「まア、これだ。何所ッから手を付けるんだらう。」

帯をほどきながら臺所の方を覗いて見て、おとめは呆れながらそこへ戻つて來た。マッチの軸木から忙しく四五服して、手桶を下げて出て行つた。手傳に來た甥の名を其邊から呼んで見たが、返事は聞えなかつた。

箒目もなく隅々まで掃除の行到いた植木屋の庭は、濕つた土から春の新鮮な香を搖はして居た。そして、原野であつたそのまゝ殘つて居ると思はれる、胡桃の木や榛の木の青葉が、平な土の所々に日陰を落して居た。

井戸の直ぐ傍にも、楢の木立があつた。その鬱茂を搖つて、若かい青年の笑聲が破れた。午後の軟かな日が青葉を透して落ちる芝草の上に、甥の安さんと原口とが腹這ひして、巻煙草を喫しながら居るのを見た。

「誰が驚かされるもんか。」とおとめは黄い前齒を出して笑つた。

「なア、今少しだッた、なア。」

飄輕な甥は、小倉袴を穿いた原口の肩を突いて笑つた。ムックリした原口は、何時からか銀縁の眼鏡など掛けて居た。

おとめはその晩、柱に塗つた砥粉の香を嗅いで睡つた。

二

平吉の仕事を引取る出版社は、九段坂下の近傍にあつた。この頃の渠は、二三年前の渠のやうに、無考な「おッと來い。」て仕事すると云ふ氣には、何うも爲れなくなつた。何か、底に衝突る所なければ張合ないやうな心持が強くなつて居た。それがおとめの云ふ、疲勞の所以ばかりとも思はれなかつた。讀む書籍の種類もこれまでとは違つて、端的に這の靈性を攫まうとする人々の方へ一日〳〵傾いて行つた。おとめの反對に背いて、渠が、仕事としては割の惡い斯かる翻譯物を引受けたのも、詰りはその心からであつた。

「では、御緩り。後で留次にタンと奢らせなさいよ。」

縁側の日が、額裏の壁に明るくゆらいで居る座敷に足袋のコハゼを掛けて居た平吉は、茶の間の年寄の方へ斯う挨拶して立上つた。そして、緒の少し固い、木目の洗下駄を穿いて家を出た。羅紗の帽子では最う鬱陶しかつた。何所か夏らしい日が、青草の上に落ちて居た。

おとめは臺所に抛出してあつた朝の膳を片付けて、濡れた前掛を外じて入つて來ても、母親は未だそこに坐つて居た。雁首が燒けるほど熱くなつても、眞鍮の煙管を手から離さなかつた。

「ホンとに困らせるねえ、何うしろと云ふんだよ。」

おとめは顏を顰めて、そのノロ臭い手付を暫く見詰めて居た後、斯う初めて口を切つた。年寄は默つて俯向いて、皮の弛んだ手の甲を撫てゝ居た。五人の兒を育てゝ、その何の家にも居られないやうな身持の母親は、子の中でも特にこの娘の前を憚つて居た。

「お今姉は何うしたのさ、平常一番大口を利いてる人だよ。斯う云ふ時ぢやないかね。」
「でも、あれも二番娘の病氣て、大部使つた後だから。然う〳〵は云つて行かれないし。」
「久しい話だ。あの始末屋が、ドレだけ使ふもんか。使つた〳〵と云や、大層大業に聞えるよ。」
意地弱い母親は、終に涙含んで了つた。激昂は自然に鎮つた。そして、母親が歸つて行くと間も無く午砲てあつた。

午後には植木屋のシーンとした藁家の下から、念佛信者のそこの隱居が稱ふる和讃文章が、窓を覆いだ青木の間を聞えて居た。
「死するは死するにまかせ、か。生ずるは生ずるにまかせ、御あてがひの所作、か。家々の業を好くつとめ、か。飢來らば飯を食ひ……。」
先の裏の家て、洒落な茶筅屋の老人が好く詠んだ「作州御消息。」を思ひ出して、おとめはそれに歌のやうに節を付けながら、仕事の箱を窓の下へ持出した。この北側の窓からは、冷しい風が好く入つて來た。柱に凭掛つて足の蹠を板の間へ投出すと、快い疲勞が身體を繞つて流れた。
何か襟の間に落ちた。ビックリして顔を上げた。その、「何が。」と目を擦つた姿が可笑しいと云つて窓に寄かゝつて居た安衞は、腹を抑へて笑つて居た。
「學校は。」と、おとめは赤い目をして一緒に笑つた。

「何うて、ヅルさ。こんな日に講堂に居られるかい。」

安衞はシャツも着ない袷に、麥藁の光る夏帽子を被つて居た。

「生意氣な、——泳ぎ出す錢もない癖にして。」

「本當だ。何かウンと儲かることはないかな。」

安衞は斯う云ひながら、手のとゞく椿の若葉を笛に卷いて、唇に力を入れて、「都の西北。」と云ふ早稻田の校歌を吹き初めた。

「喧しッたら、馬鹿だね、大きい身體をして。」

然うは云ふものゝ、若かい人の生々した笑聲は、不思議におとめの心を引いた。耳から頸に殘つて居る小兒〳〵した血色、疲勞を知らないやうな黑い胸元の肉付、妙にそれ等に心付かずには居られなかつた。安衞は平吉の歸りを待つて、夕方まで遊んで居た。

「安さん、お前さん東京へ來て何年だつけね。」

膝を伸して坐つて居たおとめは、香ばしい新茶の香をユックリ嗅ぎながら、偶と思出したやうに斯う聞いた。

「何故よ、五年さ。」

腹這して婦人雜誌の口繪から、美しい繪を探がして居た靑年は、叔母の方を振向きもしなかつた。

「あの時ァ、田舍書生だッたよ。それが最うこれだものね。それ、初めて家へ來た時さ、脇の明いた袷

を着て居て、餘り見ッともないから私が皆縫直して遣つたんだよ。本當に、惜らしいやうだ。」

「あの時ア、兄さん(平吉の事)だつて書生だつたぜ。丁度學校を出た年さ。何しろあの戸石さんが、これて月給が十圓違ふなんて、鼻の下へ毛生藥を塗つたりした時代なんだからな。」

斯う云ふ話が、おとめにもツイ舊るい事を思出させた。

世間の變遷も變遷だが、些いと一口では云はれないやうな推移が、平吉などの周圍にも來て居た。元祿の近松を復興させやうとして、輪番朗讀會にあの涙を誘出するやうな文句を暗誦し合つた人々や、文壇の或る舊るい黨派を敵國のやうに見做して、その棟梁の大家の死を聞いた晩などは、戸石や塚本の若かい連中が跳り上つて祝宴の會を開いた事や、最う昔の事になつて了つた。西洋の誰とかを眞似するとて、その頃の平吉は長髪の端を縮らせて、バラ緒の雪駄より穿いた事はなかつた。今考へると可笑しいやうな事もあるが、要するに、覺醒――斯う云ふ叫喚が總ての間に漲つて居て、世間にの憧憬も從つて強かつた。

「何うだつた、あの伊左衛門は。」

安衞は今思出しても耐らないやうにクス〳〵笑ひながら、足を投出しておとめの長煙管を吹付けた。

「さう〳〵。あの窃つと鼻緒を摘んだ恰好ッたらね。」

おとめも思出して一緒に噴出した。何時か仲間ばかり一所に集つて、その近松の演奏會を開いた時、伊左衛門に扮した塚本が吉田屋の座敷まで長刀草履のまゝ入つて來て、見物して居たおとめをハラ〳〵

さしたなぞと云ふ事もあつた。あの頃、平吉と一緒におとめも三味線など稽古をした。

三

植木屋では又野菜の畠もつくつた。その節々の青物と毎朝澤庵漬を一樽づゝ、麻布の兵營へ納めて來るのが、次男息子の仕事になつて居た。無愛想な長男夫婦は、盲目な女の兒を母隱居に任せて、大抵は終日畠へ出て居た。又、この家では假令手間を損しても、買つた味噌は喰べないと云つて居た。二番茶もソロ〳〵初まる頃、麥の苅入。肌の張つた嫁なぞは、額に濡鉢卷しつゝ、日和の土を裸足て歩いて居た。

平吉が襟に白い歯磨粉をこぼして顔を洗ひに出る頃には、善さん(次男息子)はもう朝の仕事から歸つて來て、これから一寝して晩の縁日に出す植木のせッちにかゝらうと云ふ時であつた。

「塚本さんは未だ夜が明けませんか。好い身の上だなア、俺等も一日然うなつて見たい。」

善吉の賑かな聲が、何うかすると、都新聞のつや種を讀んで居る、おとめの窓の外から聞かれた。

周圍に斯う云ふ人々を見るに付けても、おとめは時々平吉の身體を考へさせられた。

世の中の際涯を見て來たやうな事を云つて、何事にも興奮のない、疲れた目付が始終おとめの邪魔になつた。過度の喫烟、過度の睡眠、過度の怠惰、見て居ても氣が疲れるやうだ。それに就けても、この弱つた身體になほ下劑と銀劑とを持續せなければならぬやうにした、彼の女の事が胸から離れなかつた。

――あの女では隨分出來ない辛抱をした。おとめはこの病氣のみてなくとも、なるべく平吉から離れて

居るやうに氣を付けてさへ居た。

あの女の事は、好く／＼平吉の心にも染込んだと見える。

「ボンとに、好く我慢したね。お前の氣性だ。今破裂するか破裂するかと思つて、あゝ云ふ事を爲ながらもヒヤ／＼、ヒヤ／＼して、私はお前の目ばかり見て居た。」と、時々はおとめの頰を撫でゝ、然う云出す事もあつた。

「大層また、私を野暮にしたもんだ。」

今は斯う云つて笑つてるものゝ、その時あの女に付入られまいと躍鬼となつた自分の心が、今寢てゝ考へると馬鹿／＼しかつた。年から見ると娘のやうなあの女の肌付から男の臭を嗅出さうとした時さへあつた。然し、女を出した後のおとめは、平吉よりもガッカリして居た。自分を唯一人に思つて慰めてくれるだけ、餘計元氣なく平吉の衰にも氣が付くやうになる。相互に氣の張が頽れて居た。

井戸の傍、——丁度植木屋の北窓の前に、太い桐の木があつた。その木の下が、洗濯物に持つて來いの日影をつくつて居た。周圍の濕つた土には、來る梅雨時を待たせるやうな紫蘇の葉が萌き出した。

薄い紫の桐の花が盥に落ちる靜かな晝、おとめが洗濯ものをこゝへ持つて來ると、遊び相手の無い盲目の女の兒が竹窓から兩手など出して、聲掛けられるのを待つて居た。

「初ッちやん、唄ひませうか。」

聲に節つけておとめが斯う聲掛けると、小兒はキャッ〳〵と悦んで、手と一緒に聲を蹈鳴らした。可愛いよりは可傷しくなつて、おとめは時々は家へも連れて來て、氣長く唄を歌つてやつた。この兒は目光をヒドク眩しがるばかりでなく、ミヨウ（兒猫）の尖つた啼聲を故と耳の傍へ持つて行くと、痛いと云つて蒼白い顏を抑えたりした。

「初ちやん、伯父さんは好い兒？馬鹿？。」

おとめが面白がつて聞くと、小兒は病身さうな顏を他へ向けて、暫くは聞付けないやうな風に紛して居る。それから、窃つとおとめの耳に口を寄せて、

「窃つと、〳〵。」と、小さい聲て云ふ。

斯うして、大人二人の憂鬱な口を、この兒の爲めに笑はせられる事が多かつた。平吉も茶の間が少し賑かになると、凝つとして居られないと云ふやうに、ペンを置いて机の傍から出て來た。

あれ程氣込んで、あれほど望んで着手した今の仕事も、矢張り豫定の半分にも撥ばなかつた。五日目ごとにと云ふ初めの約束も、急になるとその日まで仕事を貯めて置けなくなつた。その爲めに、出版屋の方からも隨分氣不味い話を聞いて來なければならなかつた。結局、あれだけでも店を賣つた金か、役に立つて來たのだ。

或る晩、暫くぶりで原口が訪ねて來た。平吉は築土の醫者へ注射に出掛けて居なかつた。郷里から保證人の禮に寄來したと云ふ、乾椎茸など障子の隅へ置いた。

「あら、髮など伸して。」

斯う氣付かれて、原口は少し赤くなつた。家は請負業などとして居るだけに、着物なども横縞の通つた、田舍としては何所か土氣をはなれた袷であつた。

「火を取りませんから、さア、ズッと。この邊は最う蚊の騷ぎなんですよ。」

蚊遣線香を立てた火鉢の傍をすゝめても、原口は吊ランプの横に固く坐つて、臂を伸して一々煙草の灰を落して居た。おとめが親しく語りかけても、指を見ながら短かく返事して居る。妙に捌けない田舍青年であつた。

「何う、下宿は。食物が困るでせう。」

「えゝ、何うか斯うかして居ます。」

「最う、大抵は見物しましたか。」

「えゝ、日比谷と、芝の泉岳寺だけは見て參りました。」

おとめはこの青年が、早く來て居る友人に騙されて、吉原へ連出されたと云ふ話を安衛から聞いて居た。ホンの冗談に笑ふつもりでそれを云出すと、原口は顏の色を變へて憤つた。

「僕は、あんな穢れた所へは行きません。安衛さん、餘計な事を云ふ人だ。」

口数の少ない原口は、それ限り默つて了つた。

水蒸氣の多い闇の中に、薄い月光が時々庭へ落ちた。開放した植木屋の臺所から、裸かなランプがなつかしく植込の間を透して來た。それが、性急な平吉の足音を聞いて、おとめが二疊に出迎える頃には、ネルを着た平吉の肩に、雨のやうな月光が蒼く注いて居た。

「オイ、お客様だ。」

一緒に立つた原口へ頭を下げながら、急がしく先に入つて來た平吉は少しは酒氣を帶びて居た。

「誰。」

「戸石さ、珍らしい人だらう。」

「私、厭てす。」と、小さな目に平吉を睨めて立つた。その中に、門の先て暇取つて居た戸石の帽子が潛り門にチラリと見えた。おとめは疊の上へランプを置いて、暗らい三疊へ引込んだ。坐敷の事は袴を穿いた原口がして居た。

おとめは自分の名が出るかと、それても耳を聳てゝ居たが、話は然う云ふ方へは行かなかつた。あれからもこれからもと云ふ具合に、急がしく自分の動搖と煩悶とを訴へる平吉の話を、戸石は頓着のない皮肉な調子て冷かすやうに聞いて居た。平吉が机の上から飜譯中のアンナ、カレニアを取つて、その思想、その技工、その行違いた苦心とを話し立てゝも、それが何れほども戸石の心を動かしたとも見えなかつた。

「然し、君——。」

「トルストイは金持だからな、勝手なことも言へるのさ。」と、戸石は斯う投出すやうに話へ蓋して、蒲團を縁側の方へ持出したやうに聞えた。

平吉を初めて、あの女の方へ連出したのもこの戸石であつた。最後にあの女を同じ家に入れた時、「あのお婆さんのおとめと、あのお勝と、塚本は何方を取るだらう。」と、面白さうに嘲笑して居たのもこの戸石であつた。おとめは暗い中で顫えて居た。

「戸石さん、暫くでしたね。」

耐えかねて斯う云つてそこへ出たおとめは蒼褪めて居た。

「やア、居たんですか。」

肱枕して寢轉んで居た戸石は、それでも起上つた。

「大尉、御評判が好いぢやありませんか。些と家のグツ〳〵さんも見てやつて下さいまし。」と云つて。コクリと咽喉を鳴らした。平吉は心配さうに目をおとめに見詰めて居たが、戸石は庭の方へ卷煙草の火を吹いて居た。

「私は、最うお目にかゝれないと思つて居ましたよ。」

「何故です。」

「だつて、貴方でも些たアお考なさらうぢやありませんか。」と云つて、そこを立ち上つた。そして、

それ限り何んと云つても出なかつた。

四

降るだけ降らなければ止まないと云ふやうに、入梅の雨は家を取繞く、重たい青葉に降り注いだ。その濕りを吸つて、障子紙が蒼く映つた。

今年初めて氣が付いたおとめの身體は、明方に少しでも肩を裸にすると、そこから直ぐ煩さい鼻感冒(はなかぜ)に取付かれるやうになつて居た。昨日小日向の兄が來ての話に、眞逆と思つた母親の病氣がホンとに好くないと云ふ。今日こそ早く行つて見る積りで居たが、朝の事を濟して、斯う横になつて見ると、起上るのが臆劫てあつた。

「降るなア。」

次の間でも平吉が机から手を伸して、障子を開ける音がした。寢轉んでゝも居るのか、それッ限り聲が無つた。

何所を何うとも云はれないが、何を考へても懶るい事は總て馬鹿〳〵しいやうな氣がした。斯う云ふ時には植木屋の次男でも來て、賑かな笑聲でも漂はしてくれゝば好いのだが、丁度家内中麥打に忙しくて、兵營の納物さへ他を頼む位であつた。雨の降る物置場の方からは、拍子好い搗棒の地響に合はせて、時々は鄙びた節の麥歌が聞えて居た。何んとなく、世の中が急に大人ばかりになつたやうだ。

「ねえ、貴方。」

おとめは寝て居ながら、襖越しに聲を掛けた。

「お勝が、四谷あたりに居るッて本當ですか。」

「居るかも知れないよ。」

「手紙も來ませんね。偶には會つて見たいと思ふ事があるでせうね。」

「馬鹿だね、お前も。」

平吉は長い頭髮を雨手て掻上げながら、絣筒袖の仕事着の裾をバサ〳〵さして、茶の間の火鉢へかゞみに來た。長い羅宇煙管を取上げて、そこの窓も明けた。外の雨を眺めて居た。

「ホンとの話で、斯う月の好い晩なぞは思出すでせう。」と、思入つたやうに云つて、見る平吉を見上げつゝ、

「私、一度お勝に會つて見やうかしら。」

「お前を恨んで居るかも知れないぜ。」

「恨まれたッて好いさ、何うてあんな者に好くなんぞ思はれッこは無いんだもの。――誰に聞かれたッて、私些つとも恥しくない。」

「だけど、會つて何うするのさ。」と平吉は煙管を廻して笑つて居た。

「私會つて、姉妹にでもならうか。」と、眞面目で居た。

おとめの目には何時でも、あの伯母と云ふ小さな丸髷の女が來て、連れて歸る時のお勝が見えて居た。

お勝が意地になつて飯を喰はないと云ふので、自分も根競べに絶食して三日目になつて居た。それても、シャンと立つて働いて居た。

「何れお前さんも、身體ても癒つたらこのお禮に上るのさ。」とその伯母が云ふと、寢間着に細帯一つの姿で俥に抱き乗せられたお勝は、口惜しさうに勝氣の強い目を突固めて居た。

「えゝえ、上りますとも、上りますよ。」

おとめは丁寧に店頭まで送り出して、「私の方は關ひませんから、何時ても。」と、斯う蒼い顔して笑つて居た。

――然し、それは直ぐ消えた。頭の中まで入つて來るやうな雨の音を聞きつゝ、金具の多い昔風な塗簞笥の方を見詰めて居ると、何時の間にか平吉と二人を、遣瀬ない美しい戀中として考へて居た。おとめがある爲め、二人は死ぬより外はないと云ふ所まで行く。それを、悲しい心て自分が言葉少く許して居る。

「姉さん。」と、お勝の濃い髮がこの膝に頽れて泣き伏す。男も俯向いて泣く。自分も泣く。――考へるだけても、絹のやうな悲哀の中に、自分を漂はせる事が出來た。おとめは又、良人を棄てゝ、この執着を捨てゝ、サツパリした男のやうな心になつて、一生を涼しく送つた昔の女達の心持を深かく考へても見た。その一人として、小兒の時築土下に寺小屋師匠をして居た、お津賀様の痩せた後姿が目に見えた。

斯うして何時か、雨の日は夕方になつて居た。おとめは臺所口から泥水の撥ねた步板を渡つて、植木屋の方へ出て行つた。植木屋の人達は緣側に膈を投出して、可笑しさうに笑つたり語つたり、煙草休みして居た。

「さア、奥さん。」と男隱居はリヨウマチで顫える手で、輕燒を挾れてくれた。聲を掛けても偏屈な兒は、母親の垂下つた乳房に縋り付いて、現金に見向きもしなかつた。

おとめは小兒にも腹が立つて、雨に肩を濡らしつゝ、家へ歸つて來た。

原口と安衞が同じ地内の家に自炊生活を初めたので、おとめは母の病氣を見に行くにしても、誠に都合が好かつた。そちらに泊つて來るやうな晩には、氣輕な安衞が來て好く世話をしてくれた。唯、傍からヤイ〳〵云ふ人が無いので、平吉の仕事は些つとも捗取らなかつた。

「本當に何うすると云ふ人なんだらう。これぢや、前と變つた所は無いぢやありませんか。戶石さんを御覧なさいよ、何の月の廣告を見ても、あの人の名の大きくない事はない。私アもうこの頃、新刊雜誌の廣告を見ないやうにして居るんですよ。」

と、斯う云つて勵して見る事もあるが、日に〳〵不眠勝ちになつて行く平吉を見ると、又氣の毒にもなつた。長く續いた睡眠前の惡い癖、それさへ奪はれるやうになつた、衰弱した身體が氣の毒になつた。

これがあの、空想の多い、世間に憧憬の多い好く巽んだ人の綴りやうとは思はれなかつた。今までとは全るで違つた、難かしい名の本に耽讀して、話ても興味でもソックリ最うおとめの相手では無つた。おとめは今でも好く炬燵に寢轉びながら、一葉を讀んで近松を讀んで、又紅葉を讀んで、世間の義理と人情を話し合つた頃の若かい素直な平吉を思出した。

「だが、然う世間を追窮めて行つて何うするの。」

おとめは時々齒痒ゆさうに斯う聞いた。然し平吉は煩さゝうにして居て、前のやうに親切に話すことが無くなつた。假令話して聞かせられても、何うしてこんな事を云出すやうになつたか、考へて見ても判らなかつた。

「私ア、世間て彼此云ふが、戸石さんの小説なんか、些つとも面白くない。まるて、世間を見てないんだもの。世間はあんな物ぢやありませんよ。あゝいふ人には、少し世間を見た、物の判つた奥様を持たして見たい。あんな繼ッ兒見たいな事ばかりも書けなくなりますよ。」と、斯う云つても居たし、又然う思つても居た。

五

母の病氣はおとめを、思掛けもない舊るい人達に會はせた。白河の麩屋へ嫁いて居る上の姉とは十幾年かて會つた。高田の叔母、宮比町の叔母、越前堀の旦那、神田に唐物屋をして居る清六、寺小屋朋輩のお安さん、その他、何所から出て來たらうと思ふ人達まて、大ドブ端のこの穢ない兒の家に見舞つて

來た。そして遇ふ人の皆に、おとめの顔が段々母親に似て來ると云はれた。

母親は蚊帳を枕にして、壁の隅へ向つて、默つて寢て居た。激しい燥痛を他に訴ふると云ふ事もなく、誰の顔を見ても然う懐しがりもしなかつた。舊るい話に氣を取られて居て氣が付くと、水腫のある臉から汗を流して、固く手足を握縮めて居るのに慌てると云ふやうな事が時々あつた。病症は惡性の心臟瓣膜病であつた。

それでも、役所の閒暇(あひま)〳〵などに、小倉の使丁服を着た老人が菓物など下げて來ると病人は氣を綏めつゝ小聲で話などして居た。骨まで日に焦げた手に心窩を抑えられて、スヤ〳〵と快く眠る事もあつた。母は今度こゝへ連れられて來るまでは、生國もハッキリしないこの吝嗇な老爺と一緒に、七八年芝區に家を持つて居た。

「爺(ぢい)や。」

おとめは薄い眉毛を顰めて、次の三疊から引離すやうに、好く斯う呼付けた。窄(つぼ)つたヅボンの膝々膨らませて、老人はノッソリと出て來た。兄はこの老爺の貯金まで取次いで動かして居た爲めに、來ると暑氣凌ぎの燒酎などを小さな盃で遣取りして居た。それも見ては居られなかつた。

高田の大叔母は八十六で達者で居た。紅い頭巾を被つて、車にも乘らず日盛りを木陰で休み〳〵雜司ケ谷から歩いて來た。若い時からの癇で顔を顫はせながら、感心しておとめの起居を眺めて居た。

「あのお留が斯うなるんだからねえ、ホンとにさ。越劫の男女ッて、近所に遊び相手が無いくらゐな人

だつたよ。」
「いやですよ、叔母さん。私だつて最う三十一ですよ。」
「ホンとにさ、年は難有い。最う然うなりますかね。」
「でも心持は、未だ十六七。」
おとめは前歯の脱けた、寂しい唇に手を當てゝ笑つた。
この家の竹窓に立つと、高い銀杏が空に見えた。梅雨晴れの眩しい日光が、カッとその青葉にあたつた。この銀杏は越掛の榎木と呼ばれて、舊るくから人に知られて居た。おとめの父が肌切襦袢一枚で貯めた金で、越掛の家號共にあの米店を買つたのは、おとめにも幽かな覺えがあつた。その銀杏が題になつて、忘れて居る舊るい話が、皆の口から思出された。
「何しろ、この人のドラ盛りに、あの銀杏の木を切つて蒲鉾屋へ賣ると云ふ騒ぎさ。幾らとか云つたゞけね、四圓かね、何んでもそんな事だつたよ。」
父親に似て頸の短かい田舍の姉は、襦袢一つの足を縁側へ投出しながら、兄の方を振向いた。
「何んぼだつたかな、俺も忘れた。」
兄は臺所の板の間に立膝して、ユッタリさうに煙管を吸つて居た。
「兄さんは絣縮緬の長襦袢を着たんだよ。このブキッチョな身體へだよ。あの時ァ本當に、この妹と云はれるかと思つて涙が出た。」と、おとめが云出すと、その頃を思出して皆笑つた。兄も一緒に面白さ

うに笑つて居た。

「ドレ、何時まで笑つても居られまい。兎に角、一廻りして來るかな。」

斯う云つて兄は、煤けた麥藁帽子に折鞄を持つて、西日の射す露地を出て行つた。自分の苗字もロクに書けない兄が、あゝして印形を捺し證書を遣取りする仕事を職業して居るのが、誰にも不思議に思はれた。

「矢張り米搗の娘だ。」

六つか七つの時、あの組紐屋の主人に嘲けられた言葉が、不思議に生涯を支配する力となつた。それが烙印のやうに心の前額に殘つて、何彼に就けて思出された。胸から毛の生へた父はカラ無頓着の人。

「馬鹿だなシ。米搗だから米搗だ。本當のこんだ。」

それでも踏臼から下りて來て、泣いてるおとめの涕をかんでくれた。男蓉しの娘は、お津賀樣へ手習に行つても、揃はない物の爲めに、何度恥しい目を見たか知れなかつた。餘程大きくなるまでは、あの糠まみれの大きな手で髮を結つてもらつて、赤い巾など結んでくれられた。今に忘れられないのは、卯月八日の花献上の時、おとめだけは有合せの竹筒に樒の花を一攫み投込んで、それを持たせられて寺小屋へ行つた。ションボリ夕飯も食はずに寢て、激しく引付けた。その時、髮の毛が生きて動いたとて、

寢て居る間に、未練氣もない坊主に剃下された事があつた。

姉二人は東京の方へ奉公して居た。おとめは十一二から一人前に取扱はれて、釜の下を焚き付ける事を知つた。そして山田の文ちやん、鼻の作ちやん、幸次、大抵は隣町内の亂暴な舊士族の男兒の中にばかり交つて遊んで居た。それでも母親は三月半年目に、何所からか歸つて來た。遊び惚けて心配しながら歸つて來ると、母親が店の糠桶に腰掛けて、長い箸て粗擇りして居るやうな事が好くあつた。父親は厚い唇して、手を引張つてもおとめを、その母親に懷(なつ)けやうとした。母はその頃からゴロ／＼咳喇を爲い／＼煙草好きて、何所へ行つて來たとも、娘に話して聞かせた事がない。おとめも亦、人中で母を呼んだ事は無つた。

おとめは狹い家の中に、兩親の寢姿を見るのを小兒心にも恥ぢた。

六

「待つてらッしやいよ、何しろ暑くて、暑くて。」

おとめは黑い繻子の帶を外して、團扇を持つて、風の通る緣側の方へ立つた。

「や、何うした濡髮おしん、とまア斯う云ふ譯さね。」

未だ少し酒の殘つて居る顏に、おとめは今日途中で圖らず邂逅(めぐりあ)つた友達の事をば思出しても可笑しいと云ふやうに、笑ひ／＼平吉へ話すのてあつた。

「そりや肥つてね、腭(あご)なんぞ重たいやうに括(くび)れて居るの。身分が違ふからさと云つてやつたら、言草が

好いぢやないか、お茶漬をうまく頂くやうになつちや、人もおしまいだつて。何んとか云つたね、ドロ〱して金箔の浮いてる酒を飲んでましたよ、甘いやうな――。」

平吉は好くこの女の噂をおとめから聞いて居た。相應な旗本の家に生れて、立派な夫も持ち子もあつた人が、自分から家を棄てゝ他の厭がる西洋人の妾と身を墮すまでには、當人になればそこに一口に云はれぬ複雜な心理があらうと、何時も考へて居た。

「そして何かね、今ぢやその西洋人と別れて居るのかね。」

「何うだか。笑つてばかり居て、聞いても話さないから。」

「面白いな、一度會つて見たいやうな氣がする。」

「向ふでもそんな事云つてましたよ。會つて御覽なさいとも、傍で見てるにやそりや面白い人だ。」

「それて自分は愚痴らしい事ても云つてやしないか。云はなくたッて、斯う何か態度にでも。」

「いゝえ。些つとも。」

おとめは汗の乾いた肌を入れて、腹這になつて煙管を弄くり廻して居る平吉の手付を見て居た。そして、平吉へと云つて友達が籐編の煙草箱から分けてくれた、葉卷煙草が風呂敷に入つて居るのを思出した。急に蓋を明けたやうに、蟬の聲が周圍の木立をゆるがして來た。

「何んだか妙だよ。人の爲ない經驗を經て來た人なら誰でも好い、その人にブッカつて行つて心持を聞きたいやうな氣がして來た。何んだか、世の中に急に判らない黒斑が出來たやうな氣がする。本を讀ん

ても、然う云ふ方へばかり氣が向くね。」

暫く經つてから、平吉は仰向いてグッと長く背伸しながら斯う云つた。

「外を探さなくッたつて、經驗だけなら、こゝにも先生が一人居ますよ。」

おとめは斯う云つて、笑ひながら自分の鼻の先を指示した。

「然うさな、お前も隨分種々のところを通つて來たね。芝居の出方の女房にもなつたし——。」

「小說家の奧樣にもなつて見たし。」と、おとめは可笑しくなつて笑つた。

「本當だね。」

平吉の目は憫れむやうにおとめを見て居た。

暑い日の夕方は一時、シーンと耳が鳴るほど靜かになつた、——綠色(みどりいろ)の眠りとでも云ひたい靜けさ。夏の成育を充分に遂げ終つた黑い靑葉は、ソヨとも動かない凝つた空氣の中に、疲れた葉を垂れて居た。

「あゝあ、この頃は餘り思掛けない人ばかりに會ふんで、頭がグラ〳〵して來た。ドレ、此方(こつち)もユックリ寢て考へませうかね。」

おとめは斯う平吉の生欠伸を眞似ながら立上つた。ハッシャリ乾いて居る輕るい浴衣に着換えた。そして、生温るくなつた鐵瓶の湯を幾度も湯呑に注いて飮んで居る所へ、黑木綿の帯をした安衞と原口が知らずに臺所から入つて來た。

「あ、お歸りてしたね。」

「種々お世話樣。原口さん、大變でしたらう。」
「御病人は如何てした。」それても、原口は坐つて聞いた。
「え丶、何うてあんなてせうよ。――助かりやしませんとも。」
「一體、何うなすつたんてす。」
晩飯の後を片付けると、おとめの白い姿は團扇を使ひながら、植木屋の縁側から上つて行つた。
おはつの小さい母衣蚊帳は、廣々とした農家の座敷に横へてあつた。涼しく取拂つた縁側からは蒼い月の光が、軒にゆれる盆提灯の火を疊へ射込んて居た。その下に卷線香の煙草盆を燻らして、暗らい中に隱居がちゞくまつて居た。
「え丶え、年甲斐もない、私の疎忽てすよ。何う云ふものかあの日に限つて、餘りグヂ〳〵云ひますからね、家には誰も居ず、爲方がないから向のお湯へ三度も連れて行つたんてすよ。――丁度私のリヨマチも催して來てるし、貴方、湯へさへ入れると不思議に機嫌が直りますからね、――その時何んても流板をチヨコマカ歩いてましたよ。タメ桶へ躓いて頭を打つたと見えます、さア大騷ぎしましてね、――まだ改めて、お禮も申しませんが、お宅の書生さん達にア大變お世話になりました。」
「危ない事ツてしたね。然うてしたか。私も今歸つて來てお初さんがこれ〳〵だツてから、書生に聞い

てビックリしたんですよ。それだから、小兒はウッカリ目が離せませんねえ。」

「私も、これでも萬一の事があると、一考しなきアなりませんよ。」

隱居は斯う云ひつゝ、悄れて煙管を口に咬へて居た。

「初ッちやん、伯母ちやんですよ、唄ひませうか。」

それでも小兒は聞付けて、力の無い手を出した。おとめが唄つてやると、悧るさうに手を拍子取つて居た。スヤ〱と眠つてしまつた。

「本當に御心配ですねえ。」

おとめは拔足してソッと緣側へ出て來た。隱居は急に煙管を措いて、花茣蓙の皺など引張つた。

前の楢林の上まで上つた夏の月は、降るやうに地に落ちて霧のやうな煙を立てた。足の下でチロ〱と蟲が鳴いて居た。

七

負け嫌ひなおとめでは、病氣中の世話も然うだが、特に死んだ後の事では、二人の姉どもに意地を張りたかつた。隨分、無理もした。葬式を送る唯一日の着物の爲めに、一時とは云ひながら、休暇中預つて居た原口の縛つた行李を明けるやうな事もした。何んだ、誰に見せるんだ、と斯う自分を侮蔑みながら、矢張り然う爲ずには居られなかつた。貧困して居るとは云ひ、卑劣な兄は斯の忙がしい間にも妹どもの小錢を騙し借りして、それをソッと自分の女房へ手渡した。

葬式の翌日、初七日の事を濟して家へ歸ると、おとめは頽れるほど疲れて居た。誰が何うと云ふ事も無い舞に銘々が競り上げて、心にもないお祭り騷ぎした馬鹿〳〵しさも考へられた。

「新富座の粂平が來てたッてぢやないか。」

平吉は香奠返しの菓子箱を押遣りながら、何氣ない樣子でおとめの先の亭主を尋ねた。

「えゝ來て居たやうでした。」

「報知(しら)せたんだね、此方から。」

「來るッて云ふから、勝手にさして置いたの。兎に角、一度でも親と云ふ名が付いたんだからと、大方そんな所でせうよ。」

「然うか。」

話はそれ限りになつた。疑深かい平吉の心を考へ付かぬてはないが、強いてそれを云解く氣にもなれなかつた。それよりは、自分の直ぐ前を通り過ぎて、振向きもせずに燒香して行つた姿が憎かつた。三年も一緒に居た夫婦、おとめには思出す事も多くあつた。

「旅だ。」

或る暑い朝、寢轉んで高僧實傳を讀んで居た平吉は、跳起きるやうに緣側へ出て、白く光かる夏の雲を見た。渠の疲れた頭は、旅行てゞもなければ纏りさうもない程、混濁して居た。病氣とても思はしくはなかつた。

一度然う思立つと、仕事も手に付かなくなる渠は、二三日ブラ〳〵考へた後、その相談を持つて俥を出版屋に走らせた。出版屋は躊躇して、思ふやうな返事を爲なかつたが、偶々遊びに寄つた戸石の所で、お勝の珍らしい消息を聞いて來た。

戸石はッイ近頃、もと居た家でお勝に會つて來た。光る指環など二ッも嵌めて、前よりも若くなつて居た。

「あの時、四ッ谷にも居られないので、救世軍とかへ行つたんだとさ。そこにも居られなくッて、又もとの所へ歸つて行つたんだ。でも面白い事を知つたとさ、——何んとかて、私はこれまで斯うしやうと思つた事て好く行つた例が無い。奥様があるのを承知て塚本さんへ行つたのも、種々の事を考へて考への揚句だ。それだつて、あの通り。何うだつて好いと諦めれば、斯所ほど樂な所は無い。面倒だ、何うても好い、と云ふんださうだ。だから戸石が然う云つたさうだ。苦しんてそんな所に居るより、然う考へてこゝに居る方が、人間としてどの位氣が利いてるか知れないッて。悦んて居たさうだ。」

平吉は食後の楊枝を使ひながら、痩せた脊中を後の柱に凭せて斯う話した。

「驚いたね、戸石さんは今でもあんな所へ出入りするんてすかね。あの身分になつて。何故柳橋あたりて意氣な遊びが出來ないだらう。ヘッ、濱町、眞ッ平だね。」

「だから、僕ア本當だッて笑つたのさ。僕なんぞも矢張その斯うしやうて失策ッてる。傍、藥屋でもして氣樂に活きやうなンて、考が間違つてた。結局、考へるだけ深味へ嵌り込んて行くのだよ。」

「てすけど、何う云ふ氣の女てせうね。あの前にも救世軍に居て、傳道なぞして居たんてせう。許物だッて、讀めますよ。」

「あの女も、然うさね、あゝして救世軍と濟町の間を往復して終るんだらうよ。」

「厭だ〳〵。皆、何うしてるんだか判らない人達ばかりだ。」

投出すやうに云つて、おとめはサッサと飯臺を下げて行つた。臺所の障子を明けると冷しい風がサッと流れて來て、吊ランプの灯に瞬いた。

お初は時々正氣に復つた。然う云ふ時には唯向に日光を恐れて、「シキが……、シキが。」と、目の前から掃除けるやうな手付をした。お初の云ふシキは、日光の名てあつた。

「これ何んだッて、聞くから、窓の鬩を開くんだとばかり思つて居た。無理はないな。生れてお日様を拜んだ事がないのだから。」

隱居は蒼白い寢顏を遠くから覗いて見て、シホ〳〵として居た。

「奇體てすねえ、見た事も無い日光をこんなに畏がるとは、何う云ふもんてせう。」

「さア、何れ前の世て何んとか、聞いて見たら何かある事ても御座いませうよ。」

長男夫婦には日に〳〵伸びる島の方も棄てゝは置けなかつた。何う云つても、多く傍に居てやるのは

おとめだ。おとめが居ないと探すやうになつた。快く靜かな唄を唄つてやると、小さな掌を撥いて、手につかまりながらスヤ〳〵と寢付いた。

「奥さん、又てすが、私ては何うも聞きませんから。」

隱居は云ひ憎くさうに來て、裏の木戸から賴んだ。

「好う御座んすとも。ハイ〳〵。」

おとめは寢て居ても快く承知して、手早く締めた腹合せ帶の結目を叩いた。

八

朝露の落ちる楢林の間から、冷しい蟬の聲が染々と聞かれるやうな朝々が來た。午後の一ッ時、薄すい丸屋根を通して來る殘暑を過すと、風が急に涼しくなつた。

平吉は晝間一日ゴロ〳〵して居て、夜遲くから蚊遣香を燻さつゝ、仕事の机を緣側へ持出した。旅、旅、と始終心を急ぎながらも、その旅の用意が、段々後れに後れて行つた。

「寧そ、そんなにしてグズ〳〵してるやうなら、寧そ其の妙義なら妙義へ行つて了つて、あちらて仕事したら好いぢやありませんか。私そんな、イヂ〳〵して居るのが大嫌ひさ。最う夏が無くなりますよ。」

おとめは唯一口に云ふけれど、又然うも出來なかつた。渠がそちらて讀うとする書籍を集めるばかりても全く一骨てあつた。考へるだけに先づ疲れた。

毎日毎晩の事、自分ながら好く續くと思ふほど、おとめは植木屋の病人を看に行つた。何うかすると

縁日を終つて歸つて來る善吉の話に連れられて居て、鷄の聲を聞くやうな事もあつた。善吉は直ぐその足て兵營へ車を引出す、到頭夜明しするやうな事もある。それには又、馬鹿〳〵しい意地もあつた。如何に草臥れて居るとは云へ、行水をして坐ると直ぐ居眠りを初める病兒の母親を見ると、おとめの氣性はそれを見るだけてもカッと上氣せた。

「何うするんだよ、お初ちやん。伯母さんだつて身體が續かないぢやないか。お前さんぢやホンとに病氣するよ。」

おとめの薄い唇はそこに、居る夫婦に當て付けて、隨分ツケ〳〵しい事を云つた。夫婦は餘り病人の傍へ來ないやうになつた。

「お爺さん、ては貴方お休みなさいよ。直ぐ私も代つて頂くから。」

「ハイ、いゝえ。」

「そんなにしちや駄目てすよ。サア〳〵、この間に一時間ても寢て置かなくちや、その代り直ぐ起しますよ。」

おとめは自分の家のやうに勝手に納戶から寢道具なぞ搬んて來た。白い寢間着を着た隱居はそれても眠られないと見えて、蚊帳の裾から緣側の方へ出て來た。煙管をユックリ吸ひながら、蒼白い空を見て、夜の明けるのを待つて居た。

初めは日に一度か二度の痙攣てあつたが、この頃ては昏醉してる方が多かつた。目が覺めると日光を

恐れ、物音を恐れて、透明るやうに弛んだ顔から夥しく發汗した。然う、痩せはしなかつた。隱居は方々の靈符を壁や天井に挾んで、日の入る縁側へ昔風の青毛布など出して張つた。

「ぢや行つて來ますがね、ホンとに確かなんですね。」

堅い折目の付いた着物に着換えて、おとめは今一度平吉の机の傍へ坐つた。

「私だつて全くは厭ですよ、久振りて逢つた友達に、こんな事を頼みに行くんだもの。一度て腹を見られる。あれが口惜しいからね。」と、未だ不安さうに念を押して居た。平吉は唯一圖に山を考へて居た。自分も毎日それを考へ、他にもその計畫を話して居る中に、何時の間にか、そこへ行かないうちは何事も出來ないやうに思はれて來た。

「あ、頼む山へ入りやチャンと仕事が決つてる。必ずだ。」と、痩せて細い腕を突出して見せた。

「宛にならないけどねえ。これまで何遍それに欺されたんだか。」

おとめは斯う笑ひながら格子に釘を差して家を出た。

それは町に出ると、季節の別れがハッキリ目に立つやうな日であつた。店の屋根〳〵は一夏の塵埃と日光とに疲れ穢れて、底の冷々する風が町の中を吹通つて居た。

おとめは新開町の赤土に滲入る日を見ながら、考へるともなく種々の事を考へて歩いた。平吉と知つ

たのは新富町の芝居茶屋を出た當座、同じ家に奉公して居た朋輩の出した小料理屋に手傳して居た時であつた。何う云ふ緣故かして、戶石や平吉が好くそこへ飯を喰べに來た。その人達が話合ふ、夢深かい、涙深かい、そして世擦れない話が妙におとめの耳に止つた。その頃からの事が、出して見たら一杯胸に貯つて居るやうに思つた。

「居るね、下駄があるよ。」

おとめは山伏町に近い、或る磨格子の前に立つて斯う聲を掛けた。些いと耳を澄して居るやうだッたが、あはあは笑ひながら櫛巻にしたおきちが、障子を明けて立つた。

「お客樣?」

「なアに、又一つ遣つてる所なんだよ。ある所から鯨の蕪骨を貰つたから、少しアクドいけれど酒煮にして見たのさ。」

脊ぎつた白い腕を捲り上げたおきちは、裾の端を持つて日近い緣側の敷物に坐つた。相手をして日本酒を手酌で飮んで居た小林は、自分の膳を持つて立たうとした。

「好いんですよ、小林さん、私ぢやありませんか。」

斯う云はれて眼鏡を掛けた書生風の小林は又坐つた。

「いゝえね、今小林の油取つてる所なの。何所かへ何か出來たッてね、私に生意氣な事を聞くからね、頭でお前なんぞッて、然う云つてる所なんですよ。」

「然うぢやないんです、奥さんは變に邪推して、あんな事を云ふんです。」と、書生は辯解しながら、その色白な顔に蔑侮むやうな冷笑を浮べて居た。

「生意氣いふな、何んだ。」

斯う云ふおきちの聲は笑つて居なかつた。若かい女には見られない、或る抑え難い性急な憤りが小林を見る目の底に沈んで居た。

「何を云つたッて駄目なんです。斯う云出してからは。」

小林は不味さうに冷たい酒を二三杯獨酌して居たが、戸を鳴らしてプイと外へ出て行つた。おきちはその足音をゝ聞くと云ふ風に、目をその方に引寄せられて居た。

「全體、何なのあの人は、親類?」

「あれ? 別に。」と頭を振つて、「あれてそりや憤りッぽいんだからね、小兒なんだよ、だから故と時々憤らして遣るの。」

「人が惡るいね、可哀さうに。」

「あれでもう二日ぐらゐは口も利かないんだね。それが面白いの。そんな事でもなくちや退屈て爲様がありやしない。」

おきちは金歯の光かる大きな口で、最うサッパリしたやうに笑つて居た。そして重さうに立つて鏡の付いた西洋簞笥の戸を明けて、その中から變つた形の瓶詰なぞ出して來た。ドレも皆おとめの口に合は

ない、西洋臭いものばかりであつた。天井から釣下げたガラスの花挿、壁に一面貼り付けた濃い繪具の繪、西洋簞笥、緋色のカーテン、ランプの飾蓋、見廻はす家の中の總てが、この女の前の生活と習慣とを思はせるやうに飾付けられて居た。

そこに半日、弱い夕日が土に掠れるまで話して居た。舊るい事は嫌ひと云ひながらも、おきちも思出しては小兒の時の話をした。おとめの今の生活などに就いても話が出た。一度好い都合とは思つたけれど、おとめは矢張り今日來た用向を話出すことが出來なかつた。話を折角そこ迄導いて行つては止した。

おとめは何がなし自分に不滿を覺えて、段々暗らくなつて行く道を家の方へ歸つた。譯もなく氣が昂つて、待つて居た平吉の話に返事もしたくなかつた。

その晩、お初が二度も痙攣けたとて、植木屋の座敷には二ツのランプが動いて居た。親戚の者どもゝ集つて居る樣子。迎が來ても斷はるつもりで寢たのだが、迎えも來ないが眠られも爲なかつた。

「些いと門口から樣子だけ聞いて來ますよ。」

斯う云つておとめが、寢間着の姿で出て行つたのは最う十二時近かつた。それでも、行つて見ると知らぬ顏も出來ない。袢纏を取りに一度歸つて來て、徹夜の用意して行つた。

九

「伯母さんッヽを取つて。」

目を瞑す一時間ほど前であつた。小兒は斯う云つて、キシリとおとめの手に縋り付いた。それを云出

しておとめは泣いた。母親に別れた時些つとも覺えなかつた悲味を、何んと云ふ事もないこの小兒に裏付けされた。あの小さな手あの頭の重さに耐えないやうな細い頸、あの唄に合せて身體まで搖れて來る姿、何を思出しても泣けた。生れての一生に覺えないほど泣けた。

おとめは自分の家へも置く爲めに、小さな位牌など買つて來た。七日〳〵の事に呼ばれても、大抵は斷つて行かなかつた。行けば決つて、自分一人の事のやうに泣き悲しんで居るお初の父母を憤つて歸つて來た。その餘りに大業な悲しみ振りが、平吉には飲込まれかねた。

「私、最一度世の中へ出て見やうと思ふ。」

或る時、おとめはこんな事も云出した。

「何うして。お初ちやんに死なれた爲めにか。」平吉は笑つて話相手になつた。

「誰が、そんな事。」と、地の薄い髮の毛を搔上げて、

「ね、好いぢやありませんか。貴方は妙義なり何處なり、氣に入つた所へ行つて勉强するしさ。私は私て、今一働きして見る。何うせ短かい一生だもの。」と云ふ調子が、滿更らの冗談とばかりも思はれなかつた。

「然うかな、俺は又、人間の五十年は長過ぎると染々考へて來たね。」

平吉は仰向いた髮の毛を兩手で搔上げながら、ホンとに倦き果てたやうな生欠伸をして居た。それを見ておとめは茶の間の方へ立つて行つた。

おとめは又、思出したやうに本箱の底から一度嫌つた戀愛小説など出して讀み初めた。痩せた目頭に涙など溜めて讀んでる事もあつた。然しそのうちには幾らか氣も紛れるやうな日が來た。月が九月に入ると、安衞や原口の賑かな笑聲が、又この家に聞かれるやうになつたのである。

物に頓着の無い、安衞の快濶な調子も氣活かしだけれど、又、心持を深く沈めた原口の男らしく動かない態度が餘計氣になつた。細かに氣を付けて見ると、漸く世間に目が明出して來る青年期への代り目の強い感情が内に溢れて居るのが知れた。おとめは種々の問を出して、この青年をマゴ付かせたり、含羞ませたり、その心持の奥を探り出して悦ぶ好奇心を持つて居た。齒が病んで寢て居る自分をも、お初を憐む自分の心持をも、原口は眞實の無口をもつて對してるやうに見えた。

「原口さん、聞きませうか、あの話。」

おとめは裏庭の方から行つて、そこの障子を明けた。その窓の下の竹垣には、薬種にした朝顔の瑠璃色の花が小さく咲いて、それに秋らしい午前の日がウッスリ落ちて居た。

「聞きませうよ、お若さんの話。」

「えゝ。」

一人居た原口は机に固く坐り直して、當感さうに手の掌を見て居た。何かの機會からフトロを辷らし

た初戀とも云ふべき原口の村の娘の話を、おとめは何かと云ふと原口をひやかす種にした。おとめは中へ入つて、机の傍の窓に腰掛けた。

「聞かせませんね、それ二人で菱を取りに行つた話。」

「最う止して下さい。困ります。」

「何故、些つとも困る事はないぢやありませんか。それを——可笑しな原口さん。」

　青年は默つてしまつた。

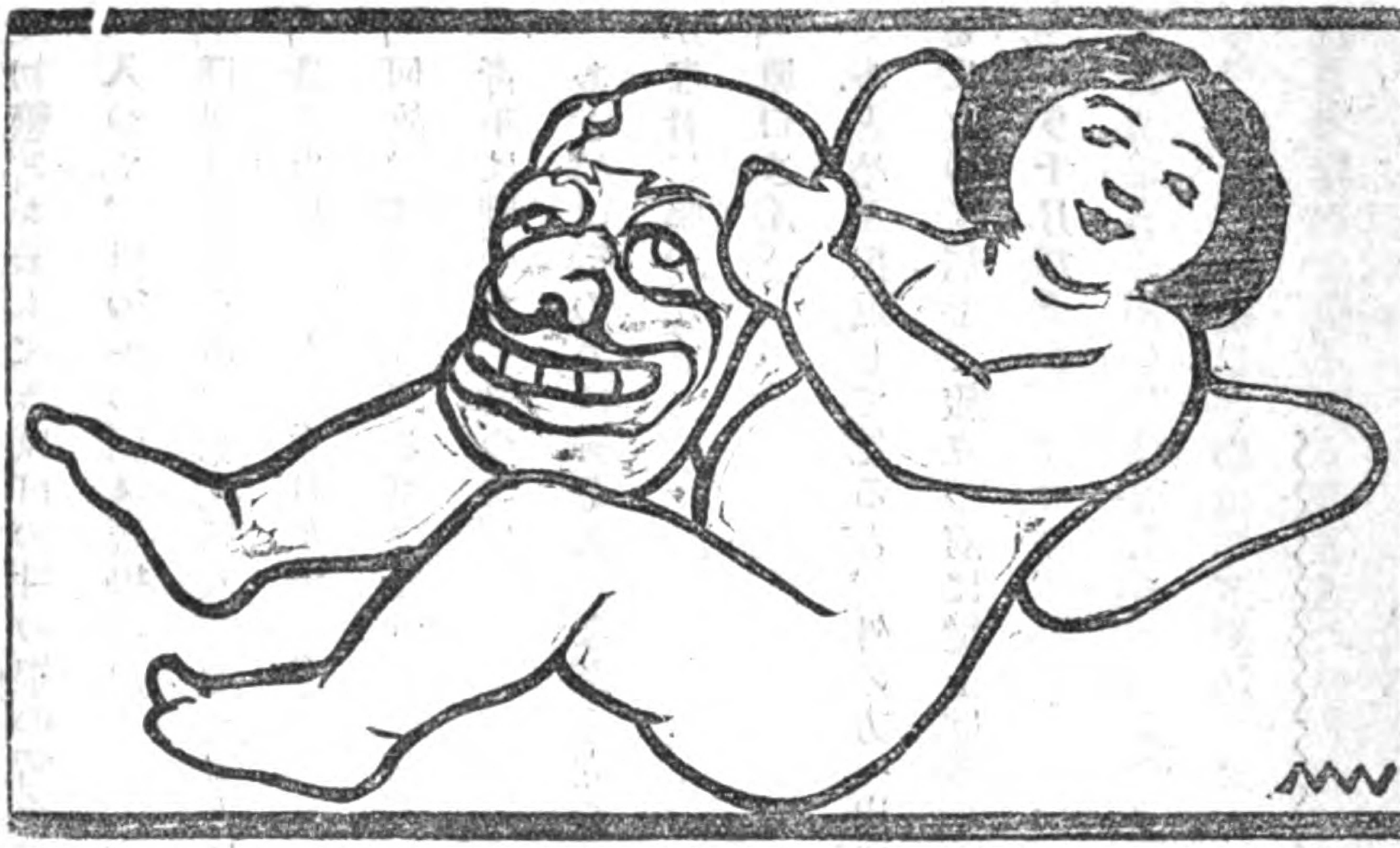
　おとめは髮の毛に櫛を入れながら立つた。重り合つた木の葉の白い裏を翻して、秋風はカサ〱と幽かな音に鳴つた。

「原口さん。」

　おとめが振返して見ると、外の方へ出掛けて居た。青年は立つて外の方へ出掛けて居た。おとめはそこに立つて居て、旅立つ前に縫上げる平吉の袷羽織の裏地などを考へて居た。

　最う十月だ。

（完）



孤獨

島崎藤村

「八年も、俺は自分の細君を凝視めて居た……」

石井博士は庭に出て、斯樣な、平素思つたことも無いやうな事を胸に浮べ乍ら歩いた。彼は剃りたての腮から、頰へかけて、兩手で強く自分の顏を撫で廻した。頰のあたりは紅く血の氣の潮すほど擦つた。毎時、顏だけは自分で剃るのが博士の習慣であつた。

冷しい雨が通過ぎた後であつた。博士は庭下駄を石の上に脫ぎ捨てゝ、素足に成つた。浴衣の裾をまくりながら歩き廻つた。紫陽花が密集つて花束のやうに咲いたと

ころへ出ると、その邊の黑ずんだ樹の幹は根元までも濡れて居た。冷々とした、濕つた庭土を踏みしめる度に、彼は言ふに言はれぬ快感を覺えた。

丁度、夫人は臺所の窓のところに立つて、そこから見える日の光や、風に落ちる木の葉の雫などを眺めて居た。博士が流許の方へ廻つて泥を洗ひ落さうとすると、夫人は女中に言付けて、夫の足へ水を掛けさせた。乾いた足拭は自分で持つて行つて勸めた。斯ういふ場合でも、博士は極く冷やかにして居るのが癖だつた。彼は何時でも同じやうな調子で、同じやうに親切で、同じやうに冷やかであつた。

斯ういふ博士が、めづらしく長く流許に居て、深い音量のある聲で、得意の節を沈吟して聞かせた。

「追分が出ましたネ。」

と夫人が微笑みながら言つた。斯の鼻歌が出る時は、必と夫の機嫌の好い時であつたから。

石井夫人は、襟足の隱れるほど房々とした髮の束ね方まで、時の流行に後れまいとするやうな婦人であつた。青い翡翠の珠は彼女の髮の飾りに好く調和するやうなものであつたが、その光澤のある毛の色を見ただけでも、女のさかりを思はせる。堅く肥つた方で、薄い紺色の透綾の涼しさうなのを着て居た。その色の重なり合つて濃いところや、薄く透けて見える色合などは、肥つても柔軟な姿を失はない彼女の體格に適はしい。夫人が女らしく好く發達して居ることは、强壯な博士に劣らなかつた。

書飯には、博士は腕まくりで、夫人と一緒に膳に對つた。博士は箸も執らないで、手づかみで飯をやり始めた。

『まあ……今日は奈何なすつたんですか。』と夫人は呆れた。
『奈何もしないサ。毎日々々同じことを繰返して居ても、ツマラナイぢやないか。箸が無ければ飯が食へないといふ法も無からう。』
斯う博士は活氣づいた調子で答へて、まるで風俗の違つたところから來た黑奴かなんぞのやうに、香の物でも何でも手づかみでバリ〳〵やつた。
博士の戲れは夫人を笑はせた。しかし彼が平素の冷やかな調子よりも、反つて夫人を悅ばせた。博士が夫人を驚かしたことは、斯樣な冗談ばかりでは無かつた。八年の間、夫人は機嫌の取りにくい夫に仕へて、物足りない月日をのみ送つたもので、其日のやうに怩怩しく夫の書齋に居られたことも、今迄に無いことだつた。
『眞實に、今日は奈何なすつたといふんですか……』
と夫人は夢のやうに言つた。
其日から、夫人は博士の書齋を恐れなかつた。博士が獨りで部屋に閉籠つて、熱心に机に對つて居るやうな時でも、どうかすると夫人は博士の背後に來て、夫を羽翅で締めるやうにして、親しげに顏を寄せることが有つた。博士が夫人に向つて怩怩しく仕向けたことは、必とその同じ仕向けてもつて、夫人はそれを博士に酬ひた。時には、夫人は博士の大きな身體を自分の背中に乘せて、美しく飾つた百科全書の書架の前をヨロ〳〵しながら步き廻ることもあつた。

奈何いふ情熱の昂まつて行つた時でも、しかし博士は決して自己の支配を忘れては居なかつた。八年も夫人を凝視めて居たといふ彼は、その時に成つて、始めて、何が夫人の心を悦ばせるかを知つた。彼は自分の妻も亦、下手に禮義深く尊敬されるよりは、荒く抱愛されることを願ふ女の一人であることを知つた。どうかすると夫人は、昔の貴婦人が書いた話の中にある美しい翁丸のやうに、博士の書齋の内を這ひ戲れた。女らしい顏色をすこし紅めながら。

次第に博士の身體は眼が覺めて行つた。眼、耳、髮、皮膚、其他の部分を通して、彼は今迄知らなかつたやうな夫人の傍に居ることを知るやうに成つた。其夏は殊に暑苦しかつた。ある時は夫人の懷に啜泣しても足りないほどの遣瀨ない心を持ち、ある時は一緒に死にたいと思ふほどのあはれさを考へて、熱の爲に蒸されるやうな、光の多い、多くの夏の夜を送つた。

夢のやうに白々と明けて來たある朝のことてあつた。毎朝博士は早く起きて、一枚ばかり雨戸を開けて置いて、それからまた橫に成るのが癖のやうに成つて居た。ふと眼が覺めて見ると、雨戸の間隙は最早明るかつた。例のやうに、博士は起きて、開けた。

靑白い朝の光線が流れるやうに部屋の內へ入つて來た。夫人は未だ眠つて居た。その傍て、博士は一層悲しい孤獨を見つけた。(終)

半途

小栗風葉

一

向島の奥に鳥安といふ料理屋があつた。連れ込みの客など泊まれるやうにも出來た。田圃を見曠した廣い庭に秋草など植込んで、蓮や水草の涼しさうな池もあつた。座敷も一棟づゝ離れ建てになつて、夏向きなど居心地が好かつた。然かし市中の客を呼ぶには土地が片寄り過ぎた。田圃を眺めて蛙を聞くのでは鳥料理の客は呼べなかつた。一夏は苦しがつて人造瀧など設けて見たが、矢張り大森や芝浦の鹽湯や海水浴ほどに受けなかつた。今年は最う夏だと云つても何にも夏らしい計畫もしなかつた。秋草も去年の宿根が芽を出

すましにして、手入れもせずに唯蔓らせた。毎年新規に抱へ入れた女中も此夏は見合はせた。貰ひ娘のお光と云ふのと、此頃修善寺から來た増代と云ふ娘と、此二人で座敷を受持つた。

増代の家は修善寺でも相當な宿屋で、増代は其所の長女であつた。繼母の手に育つて、實の父にも餘り可愛がられなかつた。小さい時からムッツリした可愛げの無い子でもあつた。此春親身の父親も死んだ。一層家が面白くない所から默つて家出をした。鳥安のお上はリヨウマチスが持病で、毎年冬になると修善寺へ湯治に行つた。而して増代の家が定宿であつた。そんな縁故から増代は鳥安を賴つて上京した。鳥安から増代の家へ交渉すると、其方らで宜しいやうにと云ふ簡短な、而して冷淡な返事であつた。其處で客分とも付かず奉公人とも付かず、鳥安の手傳ひ見たやうに増代はズル〳〵と今日まで送つた。

二

帝國大學のポートレースの撰手で黑田と云ふ法科の生徒があつた。能く鳥安へ鳥を食ひに來た。家娘のお光は名刺など貰つて喜んでゐた。其の黑田の友人に山本と云つて、是は早稻田の專門學校の政治科の生徒であつた。一度黑田に連れられて來てから鳥安の定得意になつて、一週に一度は缺かさず牛込から來た。每も取卷きめいた書生を多勢連れた。何でも名古屋邊の豪商の息子で、學校へは唯籍を置いてゐるに過ぎないらしかつた。此夏は歸省も見合せた。夏中何所か靜かな所で勉强がしたいと云ふ話をした。鳥安のお上は、手前どもでお宜しければと如才無く言つた。山本の方でも其れが望む所であるらし

かつた。

「鳥安も下宿を置くやうになつちやお終ひだあね。」然うお上は笑談のやうにお光や増代に言つた。

「書生なんか煩いわ。」とお光は養母の居らぬ所で増代に言つた。

「貴方、書生さん嫌ひ?」と増代が聞いた。

「だつて、早稻田なんだもの。」とお光は蔑むやうに言つた。

お光の騷いだ大學生の黒田は増代が來た頃には、最う卒業して東京には居なかつた。

山本は八疊に六疊二間の離屋に寢起きをした。何の座敷からも見通されぬやうな建て方をした、庭の隅の靜かな離れ座敷であつた。縁側へ出ると、低い疎な生垣の上から直ぐ青々とした稻田が見曠された。山本は朝が早かつた。朝飯の前後、涼しい間の二三時間ノートや參考書を引繰り返した。後は新刊の雜誌や新聞を讀むくらゐが仕事で、永い一日をゴロ〳〵と臥そべり暮らした。夕方風呂へ入つて、それから十一時頃まで決つて酒を飮んだ。お光か増代か一人は必ず酌に附いて居なければならなかつた。山本はお光と差向ひになると妙に改まつて、全て身分あるお孃樣か何かのお對手でもするやうな丁寧な口の利き方をした。女に對すると一體に然ういふ辭使ひをするのが山本の癖であつた。増代に對しても彌張り然うであつた。然しお光に對するとは違つて何所か打解けて見えた。時々笑談口も利いて笑つた。

「山本さんは感心な方で御座いますねえ。」と増代がお上に言つた。「山本さんに限つてついぞ私たちに諢つたり巫山戯たりなさいませんよ。第一ね、女の話なんて噯にもなさいませんの。お友達が來らしつて

爲すつても、御自身はニヤ〳〵笑つて聞いて居らつしやるばかりて。」

「默り者の何とやらかも知れないわ。あんな氣詰りな人、私大嫌ひ。」とお光が傍から貶した。

増代は顏色を變へてズイと立つた。お上からしてお客の蔭口を聞くぐらゐは當前の事てあつた。それにも拘らす、お上もお光も今の蔭口を山本に告口しはせぬかと危ぶんだほど、増代の氣色は變つてゐた。

増代は山本の座敷へ來ると、怺情も無く涙が零れた。

「おや、何うしたんだね、増代さん、貴方泣いてるぢや無いか。」と山本は訝つた。

「濟みません……」

「濟むも濟まんも無いが、何うしたんだね。お光さんと喧嘩でもした？」

「いゝえ、充らん事てす。」と増代は目を拭つた。

山本は的きりお光と喧嘩したものと獨りて決めた。仲直りをさせる意りてお光を呼んだ。お光の方ては増代が告げ口をして、それて山本が自分を呼び付けるのだと勘潜つた。場合に由つては増代と山本を向うへ廻して一喧嘩する意氣込みて座敷へ來た。色の白い顏がカッと上氣して、目に險を持つた。増代が赤い泣いた目をして眩しさうに横を向くのをジロリと見遣つた。

「何か御用で御座いますか。」と突懸かるやうに山本に言つた。

「まあ〳〵、何ういふ事件か知らんが今夜は一つ僕に免じて、お二人が機嫌よく仲直りをして下さい。何うせ何有、お薩と唐茄子と何ちが旨いつてな喧嘩なんてせう。さあ仲直りの印に……と、恁うしよう、

明日三人で芝居へ行きませう。」と山本が言つた。

お光は芝居と聞くと最う顔を崩して乘氣になつた。增代は見ても分らないからと斷つた。一體に然ういふ人の出盛る所へ行く事を增代は好まなかつた。自分の身裝の無いのが引込め思案にもさせた。容色自慢のお光が飾り立てゝ行く、それと一處に自分の肩身の狹い事も思つた。而してあんな陰口を聞きながらと、お光の現金なのを苦々しくも思つた。

芝居行きは增代の辭退で其れきりになつた。お光は增代を恨んだ。

「名古屋者は口先きばかり上手で、本當に吝だよ。」お光はこんな事を言つては增代に當つた。

何といふ理由は無しに、山本の惡口を言ふのが增代に當付ける事のやうになつた。增代も理由は無しに然う取つた。

增代は惡口を言はれながら金を使つてゐる山本が、如何にも氣の毒に思はれた。自分が其れを埋合せてもするやうに、蔭になり日向になり一人で實意を盡くした。銚子の代りを帳場へ通さずに默つて運ぶ事なぞもあつた。

三

山本の取卷きの書生達は大方暑中休暇で歸省して、飮み倒しに來る者も一人二人しか無かつた。而して牛込の下宿の上さんと云ふのが些い〳〵訪ねて來た。體の小肥りに肥つた、氣になるほど髮の毛の濃

い大年増であつた。古風に眉毛を剃つて、毎も丸髷に結つた。黒い大きな二皮眼が年輩の女の目らしく無かつた。「厭味たらしい女ぢや無いか、山本さんと何んな話してるの？」と帳場のお上が胡散がつた。

お上に然う言はれてから、増代は其女が來ると氣にして、二人の間を見張るやうな風であつた。時ならぬ時に用を聞きに來たり、茶を入れ代へに來て次の間で聞耳立てるやうな事もあつた。ソツと廊下の外で立聞きもした。然かしお上の疑ふやうな様子も増代には見えなかつた。

其女は後家だと後に分つた。自分よりも年の若い亭主を去年の暮先立たせたのであつた。「それ御覧。」お上は帳場で増代に言つた。

増代は人事ながら腹立たしかつた。あんな年食ひの、下宿屋の後家風情にと思ふと、男の卑しいのが淺ましかつた。何だか自分が山本に欺かれたやうな氣もした。山本に限つて然ういふ淫らな事は決して無い、固い男だと信じてゐた。鳥安へ來る若い客――ばかりでは無く、此人がと思ふやうな可い年輩の男でも――と云ふ客は、十人が九人まで内娘のお光に氣があるらしく思へた。お光は全く此所の看板娘であつた。所が山本だけは一人違つてゐた。恁うして永い間一つ棟に寝泊りしてゐても、狎々しい辭一つお光に懸けるでは無かつた。お光の方でも始終氣詰りがつてゐるくらゐ山本は生眞面目であつた。増代は其れを頼もしく見上げてゐた。

「ねえ貴方、お光さんでも呼びませうか、私のやうな不調法者のお酌ではお酒が旨しくは御座いませんでせう。」恁う言つて、増代は山本の氣を引いて見た事もある。

「お酌をして貰ふだけなら、故々何も呼ぶにも當らん。」と山本は笑つた。
「あら、お酌だけぢや可けませんの。」と増代も笑つて、「ぢや私、お取持ちしませうか。」
「有難いね。だが色戀なんて事は僕の格に無いから、當分まあ此奴て我慢しよう、此奴が僕の情人さ。」
と盃を干して注がせた。

女の情人よりは男の飲み友達が戀しいと山本は言つた。飲み友達で思出して、近い中に訪ねて來る筈の舊友の話が出た。それはお光が一時騒いだ大學生の黒田――今は法學士になつて京都大學に居る――の叔父に當る白井と云ふ男で、最う久しい間滿洲から蒙古邊をブラ付いてゐた。久振りに日本へ歸つて、近い中に東京へ行くと云ふ通知が京都から來た。元は陸軍の出身であるが、今は軍人では無い。好んで政事を談ずるが政事家でも無い、外交にも委しいが外交家でも無い。滿洲では行商もし、蒙古では敎師のやうな事もしたが、無論商人でも敎育家でも無い。
「まあ言ふと浪人さね。立派な男で、此男なんか男から見て本當の好い男と云ふんだらう。お光さんなんかにはや駄目だが、増代さんは屹度惚れて了ふよ。」
「厭よ山本さん、私惚れるのハレるのなんて大嫌ひ。」

四

それから四五日經つて噂の白井が來た。白リンネルの詰襟の洋服を着て、ダブ／＼のズボンを穿いて、

大きな旅行鞄を車夫に擔ぎ込ませた。増代は胸を躍らせて迎へた。脊の高い髭の濃い厳めしい男で、成程軍人揚りらしく見えた。洋服を脱いで浴衣に着更へると、赤く焼けた廣い强い胸に柔かな胸毛が縮れた。山本は人並みより小男の方であつた。二人が並ぶと一層小さく見窄らしかつた。

「黒田から聞いたが、此所の家には美人が居ると云ふぢや無いか。」酒の時に白井は恁う山本に言つた。傍には毎もの通り増代が酌に附いてゐた。増代も同じ年頃の女であつて見れば、それはお光であるとは山本も答へかねた。

「居ますわ。お光さんと云ふんで御座いませう。」と増代が引手繰るやうに早口に言つた。

「然う〳〵、其お光さんと云ふんだつた。些いとでも拜ませないか。」

増代は山本の顔を見てニヤリと笑つて立つた。其の無理に笑つた顔が如何にも山本には氣の毒に見えた。

京都の黒田の話が出たと聞いて、お光も昔懐しさに座敷へ來た。海納戸に白の雨絣の明石を細い躰に涼しく着熟したお光の姿は、誰の目にも水際立つて見えた。増代の肥つた體と、而して伊勢崎銘仙の紺絣の暑苦しさうに見劣りせられた。

「黒田さんは奥様をお持ちなすたつて？然うですか。」とお光は鎌を懸けて見た。

「いゝや、そんな事は無い。」と白井は正直に首を掉つた。

「安心しましたね、お光さん」と山本が笑つた。

「存じませんよ。てすが此の方、叔父さんていらしつても些とも黒田さんにはお似なさいませんわね。」

「己れの方が些と男振りが好からう。」と白井は大きな聲で笑つたが、「何有、叔父甥と云つたつて血は些とも續いてないんだからね。黒田に遠慮は要らん、己れも口説くよ。」

「然う、それなら私も遠慮無しに口説かれてよ。」

「是は怪しからん、ぢやお光さん、先口の僕は何うなるんだね。」と山本も口を狹んだ。

増代は厭な顔をして一人除けもの丶やうに默つて聞いてゐた。白井が一枚加はつた爲めに、毎もの山本とは變つた人のやうに調子が輕かつた。而してお光に言ふ其の輕口が笑談ばかりては無いらしくも取れた。増代は腹立しくてならなかつた。人々の氣付かぬ間にソッと座敷を脱け出て了つた。

夜露の降りた濕ぽい草の間を分けて、増代は裏庭に出た。其所には立ち腐れの阿屋めいたものがあつた。低い生垣の上から月夜の青田が霧の懸つた海のやうに見えた。涼しい秋のやうな晩てある。馬鹿囃子の稽古らしい太皷の遠音が聞えた。増代は阿屋の腰掛に寄つてウッカリ耳を澄してゐると、不意に山本の座敷て賑かな笑聲が起つた。それは座敷の三人が腹を合せて自分に當付けたやうにも増代には聞き取れた。つい紛れてゐた腹立しさがムラ／＼と又込み上げた。木立の間から明るい座敷の方を睨んて唇を嚙んだ。座敷はそれきり鎭まつた。増代は田舍にゐる頃、毎も繼母や繼母の連子に疎外されて獨り心寂しく送つた、丁度それと同じやうな心持になつて涙ぐんだ。邊には最う蟲が鳴いてゐた。

「増代さんか。こんな所て何をしてるね。」それは山本てあつた。

「えゝ、餘り月が好いものですから……」と增代は言ひ紛らして、「お客樣は？」と聞いた。

「お客樣はお光さんが附いてるから管はんさ。だが增代さん何う思ふね、毎もあんなに濟してるお光さんが今夜は變じや無いか。」

「さ、まあお座敷へ參りませうよ。」と增代は急に促した。

其夜寢床へ入つてから、お光は枕を並べた增代に京都の黑田の話をした。增代も些い〳〵お光から噂を聞いてゐたが、此の夜は一時間餘りも沁々聞かされた。お光は昂奮して增代の體に縋りなどもした。それでも昂奮狀態が鎭まると直ぐ最うスヤ〳〵と寢付た。却て增代の方が何時までも寢苦しさうにエゴ〳〵してゐた。

五

白井は毎日用有りげに俥て出懸けた。朝から出て、午飯は大抵餘所て濟して、夕方に歸つて來る。時には老壯士老書生と云つた風體の男を連れて來る事もある。誰も皆能く飮んて能く語つた。山本は氣人らずに飮ませては、醉つて取留めも無い氣焰を皆から聞かされた。時は日淸戰爭から二三年前てあつた。東亞の風雲と云つたやうな問題が皆の話題に上つた。口々に政府の外交を罵つたり。國威の失墜を憤つたりした。而して山本を引張り出して翌朝睡い顏をして歸る徒もあつた。言ふまでも無く、それ等の浪費は總て山本一人の負擔てあつた。白井が來てから山本は悉皆り學課の勉强も廢して了つた。ノートや

參考書を引繰り返してゐるのが間怠るしかつた。

　其間にもお光は皆の注目の焦點となつた。白井は是非自分の手に陷落させねば支那へも發たれぬと笑談を言つた。歇むなくんば强行手段を取らう、それには信用ある山本の圖らひて巧い機會を拵へてくれとも言つた。山本は毎も苦笑ひをして好い加減に合觸つてゐた。

「大低にしないと君、黑田君に報告しますよ、叔父さんの不都合を。」と幾らか耻しめるやうに言つても見た。

「ありや君なんか解する女ぢやありませんよ。増代の方が未だ増しだ。」と妙な方へ牽制しようともした。

　山本は又増代に向つては、白井が普通の女に對するよりも意味ある、敬愛と云つた風な好情を持つてるやうに繰返し告げた。而して白井と増代とを並べて置いて、

「増代さんは白井君のやうな人が理想でせう。一體ね白井君、此人はこんな客商賣の家なぞに居るのは好まないんですよ。浮いた事が大嫌いで、そりや意志の確りした女丈夫的の婦人なんですからね。増代さん何うてす、白井君に支那へても連れて行つて貰つたら。」とこんな事も言つた。

「可からう、増代さんが行く氣なら連れて行くよ。」白井も然うでも言はなければ成らなかつた。

　それから、白井や白井の友人達は増代を捉まへて、「おい女丈夫」と呼んだり、「増代孃」と呼んだりするやうになつた。増代も始めの中は諢はれるやうで返事もしなかつたが、何時かそれも慣れた。

「女丈夫つて何だい？増代孃だなんて壯士芝居見たいだね」とお光は嗤つた。

其時は増代は怫れて半日も口を利かなかつた。

「私、白井さんに支那語でも教へて頂かうか知ら?」とそんな事を言つてポッと赤くなつたりした。それを見聞くと、山本も始めは幞つたいやうな氣がした。然かし増代の然ういふ言動も聞き慣れ見慣れて來ると後にはそれが事實でもあるやうに山本にさへ思はれた。然うなると白井も妙に氣が射して、増代と差向ひになると毎ものやうに豪放らしい口も利けなかつた。傍から見ると片付けるやうにも見えた。山本やお光に「増代さん〳〵」と譃はれて、白井は髭の濃い大きな顔を照れ臭さゝうに唯ニヤ〳〵させた。辯解するのも馬鹿〳〵しかつた。

「増代さんに言付けてよ。」白井が何か言ふと、直ぐ恁う大きな聲でお光は言つた。

何所からか電報が入つて、白井は急に東京を引拂ふ事になつた。例の老壯士老書生のやうな連中が一處に落合つて、出發の其日は朝から酒であつた。増代もお光も目が眩るほど忙しかつた。

白井は午後六時の汽車で新橋を發つ事になつた。五時前には此所を出なければ成らなかつた。増代は有繫に波殘りが惜しまれた。那も恁うもと色々言ひたい事が胸にはあつても、多勢人目があつて言ふ事が出來なかつた。白井の方は皆を對手に例の東亞問題一點張りで、意氣も酒量も常より昂つて見えた。増代なぞは天て念頭に無いらしかつた。途中で買物もせねば成らないからと、四時半には最う俥を呼んだ。山本と外に四五人一處に新橋まで見送る事になつた。

鳥安ではお上を始め、お光も増代も家中が門の外まで送つた出た。

「光代さんも増代さんも、御機嫌好う。」と俥の上から白井が言つた。

「光代さんだつて、私の事を。」一同の俥を見送りながらお光が笑つて言つた。「増代さんてのが口に付いてゐるものだから最好かない！」

増代には其れが切めてもの心ゆかしてあつた。

新橋まで見送つて歸つて來た山本が、

「増代さんに宜しくつて、ね、特別に宜しくつて言つてましたよ。」と増代に然う言つた。

それが白井の名を人から増代が言はれた最後てあつた。あれほど意地になつて諍つたお光も、翌日からは忘れたやうに白井のシの字も言はなかつた。時折り山本が白井の噂をする事があつても、それは全然増代と無交渉の噂てあつた。

増代はガツカリしたやうな風て二三日は元氣が無く沈み込んだ。一體が口重な女であるだけに、傍の者は氣にも留めずに默らせて置いた。

六

白井の發つた後は、大風の凪いだやうに静かになつた。烏安の廣い家が急にシンとした。山本も暫く藏ひ込んてあつたノートや参考書を取出して見たが、手に付かぬかして直き投り出した。而して何か考事てもあるやうに難しい顔をしてブラ〱庭なぞ歩いた。秋草もボツ〱闌れ懸つて、蓮も最う實にな

つた。裏木戸を出て田圃へ出ると、雨曇りの温氣に熱されて稲の花がムッと匂つた。天は時々日光を洩らして、厄日の近い事を思はしめるやうな雲行きてあつた。

白井の連中に押懸けられてから、山本の頭は動揺した。元々學校と云ふものに重きを置かなかつたのが、近頃一層それが充らなく思へた。學校など歇めて了つて、何か一身を賭するやうな男子らしい事實に打突かつて見たい。自分の意志と能力を實行の上に試驗して見たい、恁ういふ念が始終山本の頭を苛立たせた。白い煙のやうな雲が雲天の下を低く南から北へ走つた。それが折々天の雲間を洩れる夕日に輝いて銅色の焔が飛ぶやうに見えた。其眩しいカッとした光線に直射されて郵便脚夫の姿が赤くなつて土堤の方から降りて來た。雲が影つて暗くなつた時には、山本は鳥安の表門の前て郵便を受取つてゐた。それは京都から寄來した白井の手紙てあつた。山本へ宛てたのは封書て、安着の通知と滞在中の禮とを白井にしては鄭重に認めた。別にお光と増代へ宛てゝ、差出人も白井と黒田と連名の葉書が添つた。其頃は未だ繪葉書は無かつた。器用な黒田が自分と叔父との恍けた肖像を描いて、白井がそれに簡單な文句を記した。

「増代さん、白井君から葉書が來ましたよ。」恁う言つて山本が手渡した。

増代はドギマギして受取つた。それはお光と連名てあつた。而してお光の騒いてゐる——増代は一面識も無い——黒田といふ人と二人て寄來したのてあつた。増代は自尊心を傷けられぬ譯には行かなかつた。引裂いて棄てたいほど其の葉書が悔しかつた。故とお光にも見せずに打遣つて置いた。二三日經つ

てからお光が葉書の來た事を山本から聞いて增代に質すと、增代は忘れて居た振りをして漸く見せた。自分へ宛てゝ一本なりとも白井から手紙を貰はぬ事には、お光にも山本にも顏が立たないやうに增代は思つた。其處で皆には內密で白井へ手紙を出した。葉書を貰つた禮と、それに書き添へて、白井の發つた後に遺してあつた夏シャツを洗濯して置いたから、お送りしませうかと聞いてやつた。故々送るほどの物では無いのだが、增代は返事を貰ひたいばかりにそんな事でも聞いてやつたのである。而して翌日から郵便の配達時間每に門先へ出て見た。三日目に白井からの返事は來た。矢張り葉書で、屑屋にでも與れてやつてくれと簡短な文句であつた。唯然かし、小生も愈よ何日出帆の〇〇丸にて渡淸するから、皆さんに宜しくと附記してあつた。

「白井さんは最う支那へお發ちなさるんですつてね。」と增代は得意さうにお光に言つた。

「然うあの人は支那向きだわ。」

「お光さんにも宜しくつて。」

「人が違ひませう。」とお光は取合はなかつた。

今度は山本の所へ行つて增代は言つた。

「ねえ、白井さんは支那へ最うお發ちなさるんですつてね。」

「此の〇日に愈よ發つさうだ。御心配かね。」

「〇〇丸つて何噸ぐらゐの船ですの？」

「ぢや、増代さんの所へも頼りがあつた？」山本は始めて氣が付いて聞いた。

「いゝえ。」と言ひながらも、増代はニッと笑つて見せた。

それから増代と白井とは、内々手紙の遣り取りをしてゐるものと皆から思はれた。

七

夏季休暇も最う後僅かになつた。歸省してゐた書生も追々出京して、山本の所へは例の取卷き連が朝晩飲み倒しに來た。取卷きの其取卷きと云つた風に新顔の者も少なくは無かつた。山本は誰にも快く飲ませたり食はせたりした。

「僕は洋行なんて差當り未だ氣も無いが、それよりも先づ自分の祖國と云ふものを充分に研究したいと思ふから、一度は日本全國を周遊して見る意りだ。そんな時に何所へ行つても行く先き〲に知人があるつては愉快ぢや無いか。交りを天下に求めると言ふと大きいが、左に右く僕は交遊の廣いと云ふ事を心懸けてもゐるし、誇りともしてゐる。」山本は初對面の者に向ふと決つて恁う言つた。

飲み食ひするだけなら未だしも、そのまゝ居浸りに山本の處に泊つてゐる者も出來た。鳥安のお上も餘りに金嵩の上るのを心配して、それと無く山本に注意もした。牛込の下宿のお上と云ふのも、例の濃い髮を大圓髷に結つては時折り訪ねて來た。年輩も似寄つて女同士だけに、何時か此所のお上とも近付きになつた。而して山本の費用の夥しい事を聞いて、

「多勢寄つて聚つて――好い食ひものにされてるんてさ。」と歯痒さうに言つて、「ですが、お國が何しろ好いんですからね、那してお置きなさりや御損は行きませんよ。」

鳥安も山本を食ひものにしてゐる其仲間らしく取れば取られる。鳥安のお上は厭な顔をした。下宿のお上は取卷きの連中の身性を洗立てして罵つた。下宿屋の拂ひが溜つて歸れぬ者や、學資が來なくなつて遊んでゐる者や、眞面目な學生らしい者は一人も無かつた。

「何時までもこんな不經濟な所に居らしつて充らないぢや御座いませんか、好い加減にお引擧げなさいましよ。貴方お一人なら未だ何ですけど、入替り立替り――溜まつたもんぢや御座いませんわ。私此間からお勸めしようと思つてゐましたんですが、貴方、婆やでも使つて家を一軒お持ちなすつたら。私の所なんか最う、行らしつて下すつても何うせお氣に召しやしませんから、こんな所に居らしつた擧句ぢや御座いますし――ねえ、然うなさいましよ。それには丁度恰格な家が近所に御座いますから、一度見に來らつしやいましな。臺所道具など家の物でお間に合せて、御飯さへ焚く者があつたら、お數ぐらゐは二度〳〵運ばせますから。」と下宿のお上は深切に山本に勸めた。

「清進館の後家め、何とかして山本君を傍へ引寄せようと思つて、巧い事を言やがる。」面と向つて山本に然う言つた者もあつた。

それは須藤と云つて、近頃山本の所に泊つてゐる一人であつた。山本とは其清進館で知合ひになつて、それから此方ズッと山本の補助を受けた。補助は受けながら對等に交つて、自分といふものを低くめな

いだけの用意を忘れなかつた。卑しいお世辭や御機嫌取りをしないで、對手を喜ばせるだけの如才ない所があつた。山本よりは二つ三つ年下である。伊勢の神主の子で、色の白い貴族的の容貌をした。澤の好い髮毛を長く伸ばして、縷々と鬣のやうに肩へ垂らしたのも此男に似はしかつた。

去年までは須藤も彌張り早稻田の專門學校の政治科の生徒であつた。始めは級中でも勉强家の方であつたが、圖書館へ通ふやうになつてから急に敎師の講義を充らながつて、出席も怠り勝ちになつた。學期試驗も是までに無い不成績で、惡る遊びは覺える。月謝は滯納する、そんなこんなが大業に鄕里へ傳はつて學資も來なくなつた。其頃から思想も一變した。而して髮も其頃から伸し出した。それは歐化主義に反對した日本新聞だの、雜誌日本人だのが一部の靑年を動かした時代である。須藤も山本も、支那へ行つた白井も、究りは其時代の一部の風潮に育まれたのであつた。而して山本は漢學塾の出身であるし、須藤は神官の國學者の家格だし、慷慨悲歌と云つた風な東洋的な議論が自然と能く合つた。

山本が誰に向つても祖國の研究を說くと同じやうに、須藤にも一つの決り文句があつた。それは西南戰爭以來日本人間の宿題となつてゐる朝鮮問題である。優柔なる日本政府をして戰ふべく餘義なくせしめるには、國際問題の紛擾を引發すより早道はない。國家百年の榮辱の爲め須らく其の犧牲となつて、長白山下に屍を曝すのも男子の本懷ではないか。かう低い聲で緩りと喋るのが癖であつた。其の粘り强いやうな大人しい調子が、怒ひ聲色を勵して壯語するよりも力强く聞えた。然かし酒を飮むとガラリと人が變つた。白い顏が靑くなつて、辭も荒い、調子も激しい、能く掴り合ひの喧嘩をした。見懸けの大

人しさうなにも似ず、存外氣早な慍りつぽい質であつた。

「須藤さんは、屹度白井さんとお話がお合ひなさるわ。」と增代が言つた。

「白井なんかと一つにされて耐るものか。あれなんかは志士を賣りものにして、あれて金を引出してるんだから。」と須藤は一口に貶した。

「君然う言ふなよ、增代さんが慍るぞ。」と山本が笑つた。「何うだね增代さんは、白井君なんか何時支那から歸るか分りやせんから、寧その事お手近て須藤君と見立替へをしたら。幾ら女丈夫ても男振の好い男は好いてせう。」

「須藤さんだつて何時朝鮮へ行らつしやるか分りませんわ、ねえ須藤さん。」

「然うさね、此所のお光ても言ふ事を聞きや、當分朝鮮行きは見合しても可い。」須藤はニヤリと皮肉な笑ひ方をした。

增代は顏色が變つた。何とか調子を合せやうと思つても口が利けなかつた。

八

須藤の意見で山本は鳥安を引拂ふ事になつた。勘定は半分近くも殘つたが、それ等の談判は須藤が總て衝に當つた。愈々引拂ふ其前晚、帳場から故々土地の藝者をお酌に出したくらゐお上を快く承諾させた。山本の鄉里を信用してゐるからてある。

須藤の外に今一人村上と云ふ書生があつた。淸進館のお上と同鄉の緣故から、食料も拂はずに轉げ込

まれて、お上も困つて山本へ頼んで寄來したのであつた。未だ二十にもならぬのに、最う女も酒も解した。須藤に皮肉な譁ひ方をされながら、好い氣になつて其晩も藝者に惡媟けをしたりした。何所か子ども〳〵した眞圓い顔をして、體も小さかつた。增代でもお光でも始終小僧子扱ひにしてゐた。

藝者を對手に、須藤も村上もポツ〳〵醉態を現した頃、山本は胸苦しいと言つて別の座敷へ行つて横になつた。丁度居合せたお光が枕と明りを持つて來た。

「最うお別れだね、お光さん。」と云つて、山本は枕をさせやうとするお光の手を握つた。

お光は驚いて引放さうとする其の手へ、山本は紙に包んだものを握らせて、

「芝居でも見て下さい。皆に內密ですよ。」と囁いた。

翌朝山本の連中が引拂つた後て、人の惡いお光は昨夜山本に手を握られた事を大袈裟に話した。

「山本さんだけは固いつて、あんなに增代さんは褒めてたけれど、彌張りそれなんだもの。だから默り者の何とかやらだわ。」と增代に當付けて言つた。

其癖內密て金を貰つた事だけは喋らなかつた。

九

牛込の神樂坂に近い靜かな裏通りに山本は家を借りた。同じ區內でも、早稻田の淸進館とは可なり離れた。それは須藤が故と然うした離れた所に見立てたのであつた。山本も强ひては反對しなかつた。炊事の女を桂庵に賴んだが、若い男ばかりの所へは來者が無かつた。偶にあつても其れは渡り者の自墮落

な女であつた。癇癖の須藤と衝突して三日とは居着かなかつた。所帯崩しの小汚い年増も來た。我勢に能く動いたが、それは米や醤油を持ち出すのが分つて直きに出した。それきり最う桂庵からも代りが出なかつた。餘義無く須藤が村上を對手に、米を炊いたり菜を拵へたりした。仕出し屋の辨當や、蕎麥だの丼飯だので濟す事も多かつた。家中擧つて外へ食ひに出る事もあつた。經濟な筈の自炊が案外經濟では無かつた。

月の末間近に、鳥安のお上は娘のお光を連れて訪ねて來た。四谷まで用足しに來た次手のやうには言つたが、無論勘定の催促らしかつた。須藤は內金の十圓もやつて歸さうとしたが、山本は金て見えを落したくは無かつた。村上を俥て清進館まて走らせて、其所のお上に幾らかの金を工面させた。而して自分の持合せと合せて半金だけ鳥安のお上に渡した。其上近所の料理屋へ連れて行つて土産まて持たせて歸した。

「お女中が無くては御不自由てすね、私心當りを聞き合せて上げませう。」と立ち際にお上は言つたが、「何なら、是を置いて行きませうか。」とお光と見て笑つた。

「私よりも增代さんが可いわ。」お光はニコリともせずに然う言つた。

「笑談は措いて、早速心當りを搜して見ますから、御座いましたら直ぐお端書てもお知らせ申しませう。何うも色々御馳走樣てした。些と又お遊びに來らしつて。」

鳥安のお上からは、それきり何とも沙汰は無かつた。思はしい女も見當らないのだらう。男ばかりの

不自由を氣の毒がつて、當分お光を手傳ひに寄來してくれるやうな事もあるまいか。山本はそんな事も思つて、其當座心待ちに待つても見た。

それから十日ばかり經つた。突然增代から明日お邪魔に伺ひたいといふ端書が來た。山本は其れがお光て無いのを遺憾にも思つた。

翌朝山本の家ては皆が漸と起きたばかりの所へ增代が來た。米琉の縞絣の袷を着て、厚織物の全帶をシヤンと太皷に結んだ。容色と云ひ風付きと云ひ、暫く東京に居馴染んだ田舍出の女學生と云つた風に見えた。車夫が大きな柳行李を玄關へ擔ぎ込んだ。山本を始め須藤も村上も異樣に思つた。

增代は鳥安の家が面白くなくて暇を取つたのてあつた。秋先きに向つて鳥安の方ても用のない人間てもあつた。それて增代は一先づ田舍へ歸ると言つた。

「歸つたつて、田舍のお家も何だか面白く無いやうな話ぢや無かつたてすか。」と山本は訝かつた。

「面白くは御座いませんけれど、此方らには知合ひは無し、差當り行く所が御座いませんもの。」と訴へるやうに言つて、增代は家の中をジロ／＼見廻しながら、「お女中は未だ見付かりませんの？」

「增代さん、些つと。」と臺所の方から須藤が呼んだ。「今飯を爲懸けるんだが、每も巧く焚けんから、君一つ水加減を見てくれ給へ。」

「須藤さんがお焚きなさるの？まあ。」と笑ひながら氣輕に立つて行つた。「水加減は此のくらゐて可いんてすよ。每もそれは火の焚き方が可けないんてすわ、乾度。燃料は何所？」

それなり増代は山本の家に居着いて了つた。鳥安に居たと同じやうに、矢張り女中とも付かず、臺所を受持つた女書生とでも云つた風であつた。出入りの商人が呼ぶのに困つてお孃さんと言つた。奥さんと呼ぶのもあつた。増代は何ちらを呼ばれても惡い顏はしなかつた。須藤はそれを苦々しがつて、「ありや下女だ。」と或時御用聞きに言つた。

其の御用聞きが正直に翌日は女中さんと呼んだ。増代は返事をしなかつた。其後出入商人たちも名を呼ぶ事にした。

十

山本の家には又一人男が殖えた。それは田邊と云つて近江の生れてある。山本と中學からの同窓て、學資の續かぬ爲に暫く郷里へ歸つてゐた。今度月謝に小使ぐらゐは國元の兄から爲送られる事になつて上京した。學校は早稻田の專門學校の理財科の三年てあつた。此男だけは眞面目に毎日學校へ通つた。口數の少ない小工面らしい男て、須藤とは正反對の氣質てあつた。

山本は相變らず學校へは行かなかつた。此節はノートや參考書も其所らには見えなかつた。而して色々な人間が入り込んだ。山本は然ういふ連中と毎日のやうに酒ばかり飮んだ。須藤も田邊も、村上までも決して相伴を外づさなかつた。増代は脊拵へに一人忙しかつた。月々百圓以上の金を國元から取寄せて、それても足らなかつた。酒屋米屋伸屋などの諸拂ひが毎月殘つては溜つた。何うかすると湯錢煙草錢にも差支へて、山本は羽織を脫いだり兵兒帶を解いたりして質草にした。然ういふ時の使ひは村上と

決つてゐた。村上は決つて二十錢なり三十錢なり棒先きを切つて、それを自分の小使錢にした。山本はそのまゝ二日も三日も羽織無しで、細紐姿で、外へも出られぬ事が珍らしくは無かつた。

増代も數も無い着更へや帶なぞ又一枚又一筋と徴發されて、後には着のみ着のまゝとなつた。それでも決して厭な顏はしなかつた。何所までも山本を信じ切つてゐるからでもあるが、着物なぞ餘り欲しがらない方でもあつた。此年頃の若い女にしては幾らか其れは風變りであつた。例の白井が來た頃からそんな風になつて、それから又男ばかりの筈はない中へ立交つて、殊に須藤なぞに揉まれて一層女らしく無くなつた。一つは男の注意を引くやうな女の誇りの生來缺けたのを知つて、娘心には悲しい諦めからでもあつた。

須藤や村上は始めから着のみ着のまゝて、脫ぐ物も解く物も無かつた。田邊だけは夏冬の不自由しないぐらゐの物は用意もしたが、自分からは決して其のヅック張り、支那鞄を開かうとはしなかつた。外出する時にはチヤンと鍵まで懸けた。而して小使錢ぐらゐは毎もチヤラ〳〵云はせてゐた。

「江州者はあれだ！」と須藤は忌々しがつて罵つた。

田邊は何と言はれても通じない振りをして、卒業までの辛抱だと云つた風にセッセと學校へ通つた。嚴しい借金取りの斷りに家中が手こずつてゐるやうな時にも、田邊は机に嚙ぢり着いてコッ〳〵復習なぞしてゐた。

「本當に田邊さんは憎らしいよ！」と増代までが憎くがつた。

然かし田邊は何所か手觸りの軟かいやうな男であつた。須藤が陰柔と評した、然ういふ點もある。色の淺黑い男らしい顏をして、目に特有の黠しげな愛嬌があつた。それは見る者に由つては卑しくも狡猾さうにも取れた。一度増代が風邪を齀いて寢てゐた時、田邊は藥を買つて來て默つて枕元に置いて行つた。無口で素氣無いやうに見えて、案外そんな風の些つとした細かい事に氣が利いた。増代も須藤と一處になつて口ではツケ〳〵田邊に當つたが、內々洗濯物など誰のよりも氣を付けてやつた。一週に二日は辨當持ちて登校せねばならなかつたが、増代は皆に隱して菜拵へもしてやつた。其後須藤が上野の圖書館へ通ひ出した時には、辨當も當人の望みて握飯ではあつたが、有合せの煮物か漬物より増代は添へなかつた。

無成算に生活を膨脹させて、山本も何か收入の道を考へなければ成らなかつた。然ういふ事には特別の智識を持つた周旋屋才取屋染みた者も出入した。山本は鄕里へ歸つて纒つた金を調達して來た。而して貸長家の賣物を買つた。行き付けの席貸茶屋へ普請の金も融通した。淸進館のお上にも無論幾らか渡された。確實な地方の定讀者があると云ふので、或る政治雜誌も引受けて見た。雜誌は半分も集金が寄らなくて三號とは續かなかつた。貸家も碌な借人は入らなかつた。席貸へ融通した金は固定して了つて、僅に月々の利子だけ入つた。貸家も直きに他へ抵當に入つた。

村上は自分も學校へやつて貰ひたいと度び〳〵山本に强請んだ。那して置いては前途が可哀さうだと須藤も口を添へて、漸と專門學校の文學科の豫科へ行く事になつた。周圍が周圍だけに村上も新聞記者

を志望した。學校から歸ると古雜誌を引繰り返して、綴ぎ接ぎの文章を作つて見たり、裏の空地へ出ては、黄色い聲で演說の稽古をして見たりした。

須藤は上野の圖書館へ通つて、近頃は古典を研究し出した。而して須藤の議論は段々保守的に傾いた極端な國粹主義、頑固な丁髷說を好んで吐いた。長髮を浪打たせては天津日子の大稜威など論じた。山本の同級生などが、代議政體だの國際法だのと、講師から受次ぎの議論を得意になつてするのが須藤は苦々しくて成らなかつた。故と反抗的に然ういふ非時流的の議論をする氣味もあつた。此節は一層酒癖が惡くなつて、議論の擧句は能く手出しをした。

然ういふ各自ワヤ〳〵の不統一な亂雜な生活の中に、增代が唯一人調節者であつた。內端の切廻しから隣付合ひ、經費を約める爲めに自分だけ粗食もした。而して喧嘩をすれば蔭へ廻つて諫める、不平を言ふ者は慰めもし、慍る者は宥めもする。深切な小母さんと云つた風であつた。然かも誰からも小使錢一文貰ふては無かつた。

十一

山本も田邊も卒業試驗が來た。而して二人とも及第であつた。山本は駄目と諦めて試驗の準備もしなかつたが、須藤に勸められて一月ばかり前から急に復習に取懸つた。例の普請金を融通した席貸茶屋の離れの二階に行つては、飯を食ふ間も惜んで有らゆる科目を片端から暗記した。記憶力は人一倍に勝れた方でもあつた。而して科は違ふが、日頃勉强家の田邊よりは及第點が多かつた。

不斷出入してゐる同級の連中五六人が、卒業式を濟ますと山本の家に集まつた。何れも新調の紋附やフロックコートで見違へるやうに取濟した。卒業後の就職を目當に、高利を借りて身扮を調へたものもあつた。烏の子一枚の卒業證書が皆を逆上させた氣味であつた。何か言つては妄みに萬歳を喚鳴り合つた。祝ひを述べに増代が出ると、それにも萬歳を浴びせた。學校なぞ充まらぬと口癖に言つてゐた山本も、まんざら嬉しさうでない事も無かつた。祝ひに一杯飮まうと言つて酒を命ずると、

「それよりも出掛けやう、神樂坂！神樂坂！」と一人が叫んだ。

贊成〱と衆口一致して、又萬歳を唱へた。今日は山本の負んぶて無く遊ぶぐらゐの用意は、皆にもあつた。

「須藤居るか、おい、君も付合へ。」と襖越しに一人が呼んだ。

「僕は祝ふ事なんか無い、舍さう。」と素氣無く答へた。

「可いぢや無いか、來給へな。」と田邊も勸めて見た。

「皆も言ふんだから、何うだね。」と山本は次の間へ勸めに行つた。

「僕の代りに村上を連れてつてやつてくれ給へ。村上、君行つて來い。」と須藤が目授せした。

村上はイソ〱身支度をした。山本は自分の絹物の不斷羽織と、縮緬の兵兒帶とを貸してやつた。山本も小男の方であるが、それでも村上には裄丈が長かつた。山本が出際に袴を取ると、田邊も其れを機に自分の見窄らしい嘉平次平を脫いだ。外の者は何れもゴワ〱した仙臺平など穿め着けた。而して羽

織袴やフロックコートや、白晝の町を葬ひ歸りのやうにゾロ〳〵團り歩いた。
「高が私立學校の反古免狀一枚貰つて、何が萬歳だい。」須藤は増代を對手に毒々しく罵つた。
「だつて三年四年も苦しんだ擧句ですもの、皆さんの身にしたらそりや嬉しいわ。」と増代は然う言つて、「妬かむんだよ。」と心に思つた。
夕方山本は須藤と増代へ土産の折詰めを持つて一人歸つて來た。田邊や村上はと聞くと、皆に附いて二次會へ廻つた。今夜は歸るまいと言つた。
「村上め、舍せば可いのに、皆に玩りものにされながら彌張り附いて行きやがる。毎もの〇〇樓だが、須藤君も行つて見んか。」
「君は？」
「僕は駄目だ、皆が勸めるのを無理に歸つて來たくらゐだもの。實際此間中睡りが足りんものだから、體が疲れ切つてる。」
「ぢや二兩貸し給へ、僕は一人で遊んで來る。」と須藤は云つた。
山本は笑つて金を出した。須藤は臺所で冷酒を呷つてブラリと出た。須藤が一人で遊びに行くなぞと云ふ事は是まで無かつた。晝間の皆の得意さうな樣子が、餘程癪に觸つたものらしいと増代は思つた。山本も其れと同じ風に解したらしい口振であつた。
「増代さん一人充らないね、寄席へでも行かないかね。」

増代は寄席など餘り好まなかつた。それに今夜は出たくなかつた。

鳥安に居る頃と違つて、此所へ來てからは増代も、山本とオチ〳〵話をする事も出來なかつた。今夜のやうに山本と二人きりの事は珍らしかつた。鳥安に居た頃のやうに、打解けて沁り山本と話がしたかつた。單に口先きだけの嬉しがらせでも可い、増代は然ういふ事に近頃餓えてゐた。男ばかりの中へ交つて、誰も親身になつて話對手になつてくれる者も無かつた。鳥安に居た頃は打解けて深切にも言つてくれた山本さへ、此節は段々疎々しくなるやうに思へた。全で主人と奉公人との隔てらしいものでも出來たやうで、妙に氣が置けた。

山本は寄席行きを勸めて錢まで下れた。増代も何時か、皆が騷ぐ女義太夫の何とか云ふのを、自分も見て見たいと言つた事がある。折角勸められるので餘儀なく出掛けた。寄席は神樂坂を登つて直きであつた。然ういふ場所に入り付けぬ増代は、明るい木戸先へ立つのが氣が射した。木戸錢を拂つて狹い入口を入ると、小女が蓙の當つた座布團を持つて案內した。廣い場内がギッシリ人の頭で詰つたやうにも見えて、それが皆自分の方を振向くやうに思へて、増代はカッと面熱りがしながら慌てゝ坐つた。而して小さくなつて周圍を見廻した。誰も彼も高座の方に氣を取られて振返る者も無かつた。増代はホッとして漸く正面へ目を注ぐ事が出來た。

眩しい電燈の下に小紋の肩衣を着けて、引詰めの銀杏返しに結つた四十近くの女が、三味線を抱へて見臺に向つた。増代には能くは分らぬが、彌次郎と喜多八との問答で膝栗毛とだけは知つた。太夫は小

皺の寄つた醜い顔に無理な可笑みの表情をして、男同士の下司な臺詞や笑ひ聲を眞似た。暗い二階の隅から三四人の男の聲で、聞き愁い冷評を浴せたり、節に合せて下足札を鳴らしたりした。太夫はそれが邪魔になつて語り憎さうに見えた。生際の薄くなつた額に汗が滲んで、それが電氣の影にタラ〳〵光つた。増代は藝人も樂なものてはないと熟々思つた。義理一遍の寂しい拍手に送られて、御簾の陰に其の不見目な太夫の姿は隠れた。

次は若い二十ばかりの娘であつた。而して三味線彈きが別に附いた。二人とも涼しさうな薄色の揃ひの肩衣を着けて、着物は若い太夫の方が派出だつた。出し物も若い女に應はしい艶物の「酒屋」てあつた。前の太夫を送つたとは反對に、賑かな拍手を以て滿場が迎へた。藝人も藝ばかりでは無い、年や容色が人氣に關する事を今更のやうに増代は感じた。其の若い太夫も強ち勝れたといふほどの容色では無かつた。然うした派出な裝束をして、體の形を作つてチンと高座に上つた所を迎へ見ると、二割も三割も女振りが上つて見えるのてあつた。大きな島田に結つて、濃い白粉も暑さうてあつた。體の態にも目口の動きにも習熟した媚が巧みに閃いた。例の二階の連中などは奇聲を發して喜んだ。段々聞き且つ見てゐる中に、増代は其の煩さい態が目に付いて來て厭氣が潮した。出た時よりも一層盛んな拍手に送られながら、高座の女が最後の一瞥を聽衆に下れた時、増代は其の誇りと媚とに輝いた目を寧ろ憎くも感じた。嫉妬のやうな忌々しさも覺えた。

増代が見たいと思ふ評判の女は眞打の太夫てあつた。然かし最う後を聞く氣も無かつた。喧嘩てもし

た後のやうにムシヤクシヤした心持て寄席を出て了つた。

未だ家に歸るには早かつた。折角深切に勸めてくれた山本の手前も、最う少し時間を經たせて歸らうと增代は思つた。神樂坂を降りて、人氣の少ない濠端の土手に沿つてブラ〳〵歩いた。燈火の明るい人込みの賑かな中から、月も無い眞暗な濠端へ出て來て、增代は急に心寂しさを感じた。華かな絲聲や肉聲の旋律が耳の底に殘つた。それは自分だけ疎外された餘所の快樂を想像するやうな遣瀨無い心持がした。不見目な年增の太夫の姿も心に浮んだ。

增代は偶と自分の行末が考へられた。親戚一人無い他人ばかりの中て、浮か〳〵とこんな境遇を送つてゐて究りは何うなるだらう。賴りにも相談對手にも成らぬ若い男ばかりの間に交つて、忙しい賑やかな、然かし自分だけは矢張り獨法師て送つてゐるのてある。今こそ一つ家に暮らして、世話もし面倒も見てやつてゐるものゝ、何れは自分〳〵の行く方へ放れ〳〵に行つて了ふ連中てある。獨り歩きの出來ない女の自分は、其時獨り置去られねば成らぬ。增代は恁う考へると急に味氣無く心細かつた。

歸つて此の不安を山本にても訴へなければ、ジッとして居られないやうな心持がした。途中て店の時計を覗いて見ると、未だ九時前てあつた。家へ歸つて見ると門が鎖つてゐる。夏の夜は未だ宵てあるが、山本も試驗の疲れて最う寢たのかと思つた。增代は裏へ廻つたが、其所の木戸も鐶が卸りた。二三度聲を懸けて待つて見ると、旋て表の門の開く音がした。

增代は表へ引返して、

「何うも憚り樣。」と玄關へ入つた。
山本は跣て土間に立つた。
「早いぢや無いかね。」然う言ふと、其の足で急いて座敷へ入つて行つた。
毎もの山本とは違つてゐた。増代も變に思はぬでも無かつた。臺所へ行つて埃になつた足袋を脱いで、それから座敷へ來て挨拶をした。山本は押入を開けて、此方らへ脊中を見せたまゝ、
「早かつたね。」と又然う言つた。
「有難う御座いました、お蔭樣て……」
暫く増代は閾際に坐つてゐたが、山本は向うを向いたまゝ默つて押入を掻捌いてゐる。増代も手持無沙汰さうに茶の間へ歸つた。
稍暫くしてから、襖越しに山本が言つた。
「今夜は皆歸らんから、最う門を閉めて。僕も床を取つて貰はう。」
増代が返事をして立つと、
「曩何うも、假寐をしたら蚊に食はれて……」と然う獨言ちながら山本は便所へ行つた。
増代は聞いて貰はうと思つた事も、こんな風て其夜は言出す機會が無かつた。
翌朝未だ薄暗い中に須藤は歸つて來た。増代は裏口を開けに起きた。何とか冷かしてやらうと思ふ中に、默つて自分の部屋へ入つて寢て了つた。増代も最う少し睡らうと思つて、木戸を懸けて臺所の水口

を入ると、其所の土間に見慣れぬ新らしい女下駄が目に付いた。須藤が間違へて來たのかと思ふと然うでも無い。須藤の薩摩下駄はある。女下駄は無地の後歯に利休鼠の鼻緒が加がつた。増代は偶と昨夜の事が胸に浮んだ。裏口から聲を懸けたのに、手間取つて故ら表口を開けた、山本の其前後の樣子に始めて思當るやうな氣がした。而して鼻緒の色合ひと型の好みとで、下駄の主の年恰好も想像された。

「島安のお上さんは、矢張り目が高かつた。」と然う思つた。

増代は何とも云へぬ惡感が胸を突いた。山本が起きてもお早うと言つたきりであつた。手水を取るにも寢床を揚げるにも、飯の給仕をするにも始終啞のやうに默りこくつた。

何事かあつたら此下駄を突付けてやらうと然う思つた。増代は丁寧に新聞紙に裹んで、人目に觸れぬやうに行李の底へ隱した。然かし自分の胸一つには何うにも藏めかねた。須藤だけに些つと話すと、須藤は故々下駄を出させて領いた。

「今でも然うかなあ。」と眉を蹙めて「あの襤褸買ひだけは舍すと可いに。然かし田邊や村上には言はんが可いよ。」

田邊も村上も、其他の連中も赤い顏をして午頃歸つて來た。而して明けすけに「昨夜の話」をしながら疲れて睡つた。四間きりの家の何の間にも、ゴロ〱と海鹿の上つたやうに臥そべつた。夕方目を覺ますと、ゾロ〱と一處に錢湯へ行つた。歸ると又酒である。「昨夜の話」が繰返れた。増代は苦々しくもあり淺ましくもあつた。誰も彼も男といふ者は愛想の盡きたものだと思つた。自分一人忙がしいのも惱

れた。一處になつて飮んでゐる村上を呼んで、激しい事を言つて手傳はせなぞもした。然かし又素直に手傳はれて見ると、村上一人氣の毒にも思へて酒の座へ行かせた。增代は全く夕飯を食ふ間さへ無かつた。

十三

皆が卒業の祝ひ酒から醒めた。就職口を搜し廻る者、一先づ國へ歸る者、自分〳〵の身の振方に忙がしかつた。學生時代の華かな望みを脆くも思切つて、遠い田舍の充らぬ口を爭ふやうにして東京を發つ者もあつた。田邊も就職口を搜し廻る一人であつた。山本に食はせて貰つて差當り其の方に困らぬ所から、未だ東京を思切るまでには至らなかつた。氣長に搜す氣である。

山本も此上最う國から金を取寄せてばかりは居られなかつた。と云つて他の卒業生並に、月二十や三十の給料取りにもなれなかつた。山本の希望は新聞雜誌の經營であつた。

須藤と同鄕で山本とも同じ淸進館で知合ひであつた倉橋と云ふ男がある。早稻田の理財科を一昨年卒業して、當時は山本の鄕里の名古屋でブラ〳〵遊んでゐる。相場もやる、周旋屋のやうな事もする、何やら特許品の專賣も受けた。弄花の罪で一月ばかり懲役に行つた事もある。話の面白い男で、山本は歸鄕する度び一處に飮んだ。倉橋の話は噓と法螺とで固めた、あの男の言ふ事ぐらゐ信じられぬ事は無い、山本は常に然う言つてゐて、矢張り倉橋の口先きに乘つては是までにも些い〳〵充らぬ損をした。一體山本ぐらゐ人の言ふ事を信じたり當にしたりする者も無い。其癖自分は空受合ひをしたり、違約をした

りする事は始終平氣である。

其倉橋から近々上京すると云ふ通知があつた。倉橋め、何を又駄法りに來やがるだらうと、山本も須藤も笑つてゐた。然かし藝人で道樂者で、あの男の話を聞いてゐたら一日でも飽かないと二人が言つた。田邊も村上も、殊に增代は女だけに、何んな男だらうと好奇心を嗾られて心待ちした。

噂の倉橋は想像したほどの男でも無かつた。色は白いが薄痘痕もある。髮の毛を長目に分けて拔け上つた額を隱すやうにした。其の頃行やつた平阿召の單衣の下に薄物の長襦袢など着た。而して辭に名古屋訛が入つた。增代も始めて見た時は、氣障な男だと思つた。噂の通り話は巧い、面白さうに能く喋つた。輕い調子で愛想の好い事を言はれて見ると、增代もつい釣込まれずには居られなかつた。下女同様に臺所ばかり働かされてゐる增代は、然うして御世辭でも言つて管つて貰ふのが嬉しかつた。倉橋が來てから目に立つて燥ぎもした。邪推深い田邊は最う可怪しく取つた。

「增代さん、可いかね。」恁う人の居ない所でソッと耳打して、增代の顏色を探つて見たりした。

倉橋が上京の用向きは、活版事業の經營を山本に勸めに來たのであつた。名古屋に活版の合資會社の潰れ懸つたのがある。山本が資本さへ調達したら、自分が經營して必ず好成績を擧げて見せる。經營の方針は是々、資本の運轉は恁う、利益は何程と精密に調べ上げた。それが話上手の倉橋が熱心に說くのであるから、何う聞いても有利であらねば成らないらしく思へた。冷評好きの須藤でも、是だけは全ざら毎もの法螺でも無からうと眞面目に聞いた。況して山本の氣質から云つても、且つは丁度金儲けに腐

心してゐる際ではあり、乘氣にならずには居られなかつた。然かし須藤は、從來の倉橋を誰よりも能く知つてゐるだけに未だ危ぶんだ。穿鑿するだけ穿鑿して、飽くまで大事を取るやうに內々山本に注意した。

山本も確實な事業であれば、それに要する資金だけは、是を最後として國元から引出せない事も無いと思つた。然かし金額も多い。須藤の注意がなくとも有繫に大事を踏んで、每ものやうに輕々しくは內兜を見せなかつた。倉橋の言ふ事を聞くだけ聞いて、好いとも惡いとも口へは出さなかつた。倉橋の方では又、設ひ確答は得ないまでも、山本に氣があるか無いか其れだけでも探つてから歸りたかつた。永の一日無駄口を叩いて、面白さうに笑つたり騷いだりしてゐるものゝ、心は其處どころでは無かつた。何うかすると恐ろしく無愛想な顏をして、獨り屈托してゐるやうな事もあつた。

倉橋が來てから、每晩のやうに家中が集つて飮んだり騷いだりした。賑かな倉橋が然うさせずには措かなかつた。山本と二人差向ひで晚酌を始める。出版事業の話なぞが出てゐる中は可いが、三杯上戶の倉橋は直き面白くなつて唄ひ出す。咽自慢でもある。けれど自分一人騷ぐのは皆の手前も氣が尤める所から、增代までも引張り出される。酒は賑かになつて、須藤の詩吟や田邊のサワリや、村上が寄席で聞き覺えた都々一なぞも出る。山本には然ういふ藝は無かつた。其代り酒は何時までとも亂れずに付合つた。恁うして十二時一時頃まで每晚のやうに騷ぎ更かした。

「僕は何うも足の毒が無うちや寐れん癖で、旅へでも出ると本當に困るよ。增代さん、人助けだと思つ

て足の裏を貸して頂だへんか、本の睡付くまで――馬鹿な、そんな事を僕がするやうな人間か見ても分りさうなものだに。唯足の臺だぎやあ。ねえ、臺に貸りるくらゐ管はんねえ山本君。笑談で無しに是非増代さん頼むよ、今夜のやうにこんなに醉つた時は、仍更ら蒙無しで寢るのは僕の體に一番毒だて。」とこんな事を言つて、倉橋は寢床を取つて貰ひながら毎晩のやうに増代に譚かつた。後には口で譚ふだけでは無くなつた。増代は倉橋の惡燥けを妨ぐ爲めに、蚊も出ないのに蚊帳を釣つて寢た。

「蚊張とは考へたね、こりや外から見えんで有難い。」と然う言つて、山本は睡つた振りをしてゐる増代の顏へ酒臭い息を吹き懸けたりした。

増代も慣れては大膽になつた。對手にならずにジッと目を塞いでゐる中に、何時の間にか本當に睡つて了つた。

「足の臺」と言ふ辭が家中に行やつた。蚊張を釣つて寢るのを面白がつて、次の夜に須藤も倉橋と一處になつて増代を困らせた。田邊までが醉つた振りをして仲間になつた。増代は默つて思ふさま田邊を抓つてやつた。

田邊は夜中に口が渇いて起きた。醉醒めの水を臺所へ飲みに行つた。隣に寢てゐた須藤も、起きて行つたのは現に知つたが、直ぐ又睡入つて何時歸つたかは知らなかつた。

田邊は翌朝飯を濟すと外出して、午にも歸らなかつた。家の者は例の就職口の運動だらうと思つた。夜になつて漸う歸つて來て、明りも無い茶の間の長火鉢の前に默つて坐つた。座敷では毎ものやうに酒

が始まつてゐる。山本が普請をさせた貸席のお上さんの聲も交つて、話が彈んだ。増代は臺所で一人忙しさうにしてゐる。

「あゝ腹が空つた。」と小さい聲で増代にだけ聞えるやうに田邊は言つた。

「あら、田邊さん歸つて？些とも知らなかつた。」と明るい臺所から増代は此方らを覗いた。

「飯を食はしてくれ給へ。」

「座敷へは行かない？」

田邊は默つて頷いた。

増代も呑込顔に頷いて、直きに膳と飯櫃とを持つて來た。而して鼠入らずから盃を出して默つて田邊に渡した。田邊の坐つた長火鉢の銅壺には燗徳利が入れてあつた。

「外にもつと何か無いかね、こんな物ぢや飯が食へやせん。」と田邊は箸で膳の上を突ついた。其の大風な言ひ方までが、昨夜までの田邊とは違つたやうに取れて増代は憎かつた。それでも山本の夜食にだけ用意して置いたのを分けてやつた。

十四

名古屋の山本の老父は久しい前から胃病で弱つてゐた。外の病氣と違つて山本も苦にしなかつたが、それが今度入院したと云ふ知らせが來た。病院へ入るくらゐては可くないのだらう。丁度倉橋の話もあるし、山本は老親を見舞ひながら一處に名古屋へ歸省する事になつた。然う決つた時、其晩の倉橋の燥

ぎ方は無かつた。名古屋まで引張り出せば、何うにても口說き落せるぐらゐに思つたてあらう。翌朝出發する前に、須藤は倉橋の不信を繰返して山本に警戒した。而して諸拂ひの滯りも溜り溜つて、此月末は素手ては最う追拂ひやうも無い。それまでに出て來て貰へれば何よりだが、然う行かない場合には百ても五十ても送金して貰ひたい。少しづゝても內金を入れてやれば後も利くし、然うすれば又一箇月の籠城は自分が支へると言つた。山本は堅く引受けた。月末までは待たせない自分が行けば何うにても融通は付く、歸り次第多少纏めて送金すると約した。それは當に成らないまでも、月末までには幾らか送つて寄來すだらうと須藤は思つた。

人一倍賑かな倉橋も歸つた。それに左に右く一家の主たる山本の居なくなつた後は、急に火の消えたやうに寂しかつた。留守中は酒も取らぬやうに須藤が命じた。飮みたい時には現金て小買ひをした。魚屋、肉屋、八百屋物までも儉約させた。

月末の迫らぬ前に、須藤は豫め約束の送金を山本へ促してやつた。端書て簡單な返事が來た。歸鄕次第直ぐにも送る筈てあつたが、病人に取紛れて得果さなかつた。老父の病氣は胃癌の疑ひさへあつて。案外に重體てある。然かし其方らの窮境も承知してゐるから、月末までには多少なりとも必ず送金すると言つて來た。然かし月末まで待つても終に來なかつた。借金取りは强硬に迫つた。俥屋なぞは酒の勢ひを借りて臺所に寢込みもした。

十五

翌月からは懸買ひは悉かり留つた。主人の居なくなつたのが一層商人たちの不安であつた。大家からは店立ても迫られた。日々の米も現金買ひをしなければ成らなかつた。須藤は知人と云ふ知人から一圓二圓と時借して凌いだ。山本の歸るまでと云ふ約束で、村上も清進館のお上から二三度借りて來た。增代までが例の貸席のお上に賴んで米など融通して貰つた。田邊も時々一圓ぐらゐづゝ工面をして來て入れるには入れたが、自分の小使錢だけは每も別に心懸けて持つてゐた。米の一升買ひも出來なくて、家中が蕎麥て凌ぐやうな時もある。そんな時にも田邊は其小使錢だけは決して出さうとはしなかつた。蕎麥も食へぬやうな時には、田邊は外へ出て何所てか自分だけ食つた。

「豈かあんな人ぢや無いと思つたが、本當に呆れた人だ！」と增代も心から愛想を盡かした。

「おい增代さん、僕の寢衣は何時洗濯してくれるんだね。」人の居らぬ所ては、田邊はこんな風な物言ひをした。

「知るものか、洗濯屋なり何所てなり、錢を出して洗つて貰ふが可い。」と增代もツケ〳〵言つた。

「此節は增代さん氣が强いね、須藤が然う言へと言つたかね。」

「知らない！貴方も立派に學校も卒業したんだし、こんな貧乏暮らしを食ひ倒してゐないて、男なら早く何所へか行つたら可いぢやないか。」

「何だお多福め！自分こそ行き所が無くて、皆の共同玩弄見たいな眞似してやがる癖に。」と田邊は憎々しく言つた。

「まあ失敬な、誰が共同玩弄てすつて？」

「誰だか。山本君は言ふまでも無いだらうし、倉橋が來れば倉橋に、今度は須藤が家を預かつてると思つて早速又須藤に、ね。」

「何を言やがる！手前こそ人を……」と増代は悔しさうに體を顫はせて、泣き伏して了つた。

田邊は其のまゝプイと出て行つた。

日暮方須藤が外から歸つて見ると、家の中は未だ明りも點けずにあつた。而して茶の間の眞暗な中で増代の啜り泣きが聞えた。須藤は點す油が無いのだらうと思つた。

「何だ、泣くほど愁けりや何所へなりと出て行くんだ、居てくれなくつても何い！」と癇癪持ちの須藤は行きなり呶鳴つた。

増代は始めて須藤の歸つたのに氣が付いた。急いでランプを點けて、それから田邊の言つた事を殘らず話した。

「私、慾得放れて皆さんの爲めに働いてるのに、行く所が無いからだなんて餘り甚い！」

「それも然うだが、皆が共同て玩弄にしてるなんて怪しからん事を言やがる、畜生ぢやあるまいし――聞き捨てにならん！」と須藤は其の事を憤慨した。

田邊なぞが何と言つても氣に懸ける事は無い、山本でも自分でも能く増代さんの心持は知つてゐると須藤は慰めた。實際増代の埋まらない境遇を同情もした。

村上も出て居らず、是から米を買つて來て焚くと云ふのも億刧てある。久振りに増代さんの好きな鰻丼と云ふ所だが、儉約して天丼でも取らうと須藤が言つた。金策して來た一圓紙幣を増代に渡して、次手に酒を三合だけ賴んだ。

「だが増代さん、君は何か、田邊にそんな事を言はれるやうな覺えてもあるんぢや無いのかね。」と須藤は殘り少なになつた三合の酒を、チビ〳〵嘗めながら聞いた。

「言はれるやうな覺えつて?」

「山本君だの倉橋君だのに、そんな田邊に言はれるやうな。」

「いゝえ、根も葉も無い事です!」と増代はキッパリ言つた。

「それだのに、外の事と違つて、田邊がそんな事を平氣て君に言たりするつてのは……倉橋が居た時分、あれは皆て増代さんを困らしたあの夜だつた、夜中に田邊が又増代さんの所へ行きやしなかつたかね。」

増代はカッと眞赤になつて俛いて了つた。

「然うだらう、何うも然うぢや無いかと僕も內々思つて居た。何だ!それぢや田邊に何と言はれたつて悔しがる事があるもんか。」と吐き出すやうに言つて、須藤は暴々しく自分の部屋へ行つた。

後に増代は、突伏したまゝ顏も擧げ得なかつた。

須藤は明りも點けずにゴロリと横になつて居たが、「畜生!」と獨言ちてムックリ起き直つた。

「床を取つてくれないか、おい、増代さん。」と呼んだ。

返事は無かつた。須藤は暫し耳を濟まして居たが、

「おい聞えんのか、增代さん!」と今度は大きな聲で呶鳴つた。

漸つと增代の返事が微かにした。それを聞くと須藤は又コロリと横になつた。

田邊は十時過ぎに歸つて來た。須藤は村上を對手に腕角力を取つてゐた。增代は茶の間に寢床を取つて一人先きに臥せつてゐた……。

(終)

專修學校學生募集

學則申込次第送附す

大學部經濟科

（中學校卒業者及之と同等資格者甲種商業學校卒業者は試驗の上入學を許す●入學試驗は九月三日に施行す●入學期は九月十一日より十月十日迄

專門部經濟科

（中學校卒業者及之と同等資格者甲種商業學校卒業者無試驗入學を許す●入學期九月十一日より十月十日迄●普通生は學歷に依り入學隨意

大學部高等豫科

中學校卒業者又は之れと同等の資格ある者甲種商業學校卒業者は無試驗入學を許す

講師

帝國大學文科大學長　坪井九馬三
專任講師　長澤龜之助
高等商業學校教授　木村惠吉郎
第一高等學校教授　畔柳都太郎
高等師範學校教授　岡本忠之丞
學習院教授理學士　佐々政一
學習院教授文學士　貝原良介
有馬祐政

高等商業學校教授　小谷野敬三
高等商業學校教授　長谷川方文
高等商業學校教授　山口鑑太
理學士　根津千治
宮田耀之助　ウイリヤムハリス
佐川春水　榊原彌　廣井辰太郎
笹川種郎
專任講師　八代規

東京神田今川小路二丁目八番地

私立 專修學校

高等豫備科

高等商業學校、各高等學校、高等工業學校、其他各專門學校、入學希望者の爲準備の學科を教授す

專修學校內

私立 高等豫備校

●右各部科とも詳細は學則を見るべし●募集人員豫定に達するときは入學を謝絶す志望者は速に入學の申込を爲すべし

（後付の一）

新刊豫告

島崎藤村著（緑蔭叢書第三篇）

小說 家　全二册

中澤臨川君序◎有島壬生馬君挿畫
總紙數約九百頁◎四六版本新裁
上下二卷總振假名附◎定價各金七十五錢

緑蔭叢書は『破戒』、『春』を出せしが、今回其三篇として『家』二卷を上梓す。斯書はさきに公にせし『家』の前半、及び其續稿『犧牲』、『犧牲續篇』等一切を含み、新たに起稿せる終篇を添ふ。これを完成するには多くの月日を要したり。事は二大家族の運命に關し、時は十三年の間に亙る。すべて家内生活の光景にあらざるはなし。親と子、夫と妻、兄と弟、叔父甥、叔父姪、從兄妹同志、義理ある姉弟、其他親戚の間に隱れたる男女の關係は讀者の眼に映ずるものあらん。

發賣元　神田裏神保町一番地　上田屋

●本號に限り　金五拾錢　郵稅へ貳錢五厘

（後付の四）

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋尾張町	東海堂
仝　京橋元數寄屋町	北隆館
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋西紺屋町	良明堂
仝　日本橋本石町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

○壹冊定價　金貳拾錢外に郵稅金壹錢五厘（海外郵稅拾錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	國外
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割増に送らるべし

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十四年八月廿八日印刷納本
明治四十四年九月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.